

ANNUAL RESEARCH REPORT  
OF  
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA  
2017

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成29(2017)年度

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成29(2017)年度



奈良市教育委員会

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION, 2020

奈良市教育委員会

2020

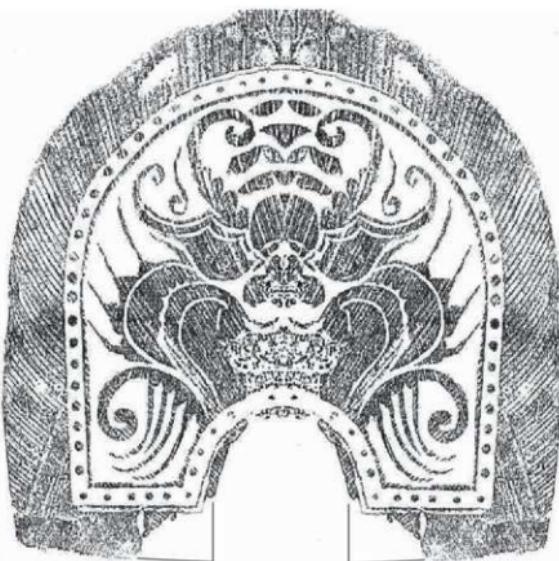
# 奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 29 (2017) 年度

奈良市教育委員会

2020





図版1 播磨産鬼瓦(上:写真、下:復元拓本 高さ約32cm)  
平城京跡(左京五条四坊八坪)の調査(第649次)出土 (本文46~70頁)



図絵2 播磨産軒瓦の組み合わせ 軒丸瓦：平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査（第649次）出土（本文46～70頁）  
軒平瓦：平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査（第459-2次）出土



図絵3 播磨産丸瓦・平瓦・熨斗瓦 平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査（第701次）出土（本文46～70頁）

## 例 言

1. 本書は平成 29（2017）年度に奈良市教育委員会が主として埋蔵文化財調査センターで実施した埋蔵文化財の発掘調査・保存活用・学習推進事業の概要と研究成果を、その後の遺物整理等の成果を加え、収録したものである。

2. 平成 29（2017）年度～平成 31・令和元（2019）年度の埋蔵文化財に係る事業は、下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育部（平成 29・30 年度は教育総務部）

文化財課

課 長 松浦五輪美（平成 29・30 年度は課長補佐）

立石堅志（平成 29・30 年度）

記念物係

係 長 池田裕英（平成 29 年度は埋蔵文化財調査センター主任）

主 任 久保邦江

主 務 原田香織

再任用職員 篠原豊一（平成 29 年度は埋蔵文化財調査センター所長）

埋蔵文化財調査センター

所 長 三好美穂（平成 29 年度は所長補佐）

所長補佐 鐘方正樹（平成 30 年度は管理係長兼務）

管 理 係（平成 29 年度は企画総務グループ）

係 長 奥和田佳邦（平成 31・令和元年度）

主 任 松村健次

主 務 山前智敬 新井信介

調 査 係（平成 29 年度は調査グループ）

係 長 中島和彦（平成 29 年度は主任）

主 任 秋山成人 安井宣也 森下浩行（平成 29 年度は文化財課記念物係長）

主 務 吉田朋史

主 事 村瀬 陸（平成 29 年度は技術員）

技 術 員 高岡桃子（平成 30 年度・平成 31・令和元年度） 桑原一徳（平成 30 年度）

活 用 係（平成 29 年度は保存活用グループ）

係 長 原田憲二郎（平成 29 年度は主任）

主 務 大庭淳司 永野智子（平成 29 年度は主事）

技 術 員 加藤梨津子（平成 29 年度）

3. 事業を実施するにあたっては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4. 奈良市教育委員会が実施する発掘調査は、本調査では、遺跡ごとの略記号と通算番号（調査次数）を、小規模調査・試掘調査では、年度ごとに番号を付して整理している。本書で報告する遺跡は、平城京跡（略記号 HJ）、史跡大安寺旧境内（同 DA）、西大寺旧境内（同 SD）、新薬師寺旧境内（同 SY）、南紀寺遺跡（同 MK）、奈良町遺跡であるが、奈良町遺跡は、前記の遺跡と重複するため、略記号は付していない。

5. 平成 29 (2017) 年度に実施した発掘調査は 21 件、測量調査 1 件、小規模調査・試掘調査は 4 件である。それぞれ一覧表と位置図に示したとおりである。

6. 富雄丸山古墳第 1 次調査（測量調査）については、継続調査を実施しており、別途報告する予定であるため、本書には収録していない。また、西大寺旧境内第 40 次調査と合わせて、平成 30 (2018) 年度に実施した同第 41 次調査を本書にて報告する。

JR 奈良駅南特定土地区画整理事業、西大寺駅南地区土地区画整理事業については、計画的に発掘調査及び概要報告の作成を実施している。JR 奈良駅南特定土地区画整理事業では、平成 23 (2011) 年度に実施した平城京跡第 649 次調査、平成 28 (2016) 年度に実施した平城京跡第 701 次調査を本書にて報告する。また、西大寺駅南地区土地区画整理事業では、西大寺旧境内第 38 次調査、同第 38 次調査と合わせて、平成 27 (2015) 年度に実施した同第 35 次調査、平成 28 (2016) 年度に実施した同第 36 次調査、同第 37 次調査を本書にて報告する。

7. 本書に掲載した調査地位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を、発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500) を使用している。

8. 奈良市内では、奈良市教育委員会以外の他機関も発掘調査を実施しており、これを区別するため、本書では下記の機関が実施した調査について、機関の略記号と調査次数・番号または調査年を組み合わせて表記している。

奈良市教育委員会	— 市 次数
独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所）	— 国 次数
奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所	— 県 番号または調査年

5. 本書で使用した遺構番号は、特に示さない限り、調査ごとに付した仮番号である。遺構の種別を示す以下の記号と番号を組み合わせて表記している。

SA (柱列・列) SB (建物) SD (溝・濠・溝状遺構・暗渠) SE (井戸)  
SF (道路) SK (土坑) SX (その他)

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7. 本書で使用する遺物名・形式・型式は、特に示さない限り、下記の刊行物に準拠している。

奈良時代 軒 瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996

土 器：『平城宮発掘調査報告書VII』奈良国立文化財研究所 1976

『平城宮発掘調査報告書XI』国立文化財研究所 1982

古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

弥生時代 土 器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003

9. 本書では、遺構等の位置を平面直角座標系第 VI 系（世界測地系）の数値で示した。表・図では、単位 (m) を省略している。

10. 調査に関する記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 本書の作成は、令和元 (2019) 年度に埋蔵文化財調査センター所長 三好美穂の指導のもとで行い、埋蔵文化財調査センター職員全員が分担した。文責は各文末に記した。所長補佐 鐘方正樹の校閲のもと、編集は、中島和彦・森下浩行が担当した。

平成 29 (2017) 年度実施 墓藏文化財発掘調査一覧表

調査記号・番号	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査担当者	調査原因・事業内容／届出者申請者等	事業区分	届出等受理事業年度・番号
1 HJ708	平城京跡(左-2-4-10)	法蓮町363番1、364番1、365番1	2016.12.26～2017.06.14	2,923	繩方池田・吉田・永野	共同住宅新築／パナホーム株式会社	原因者	H28:3336
2 HJ710	平城京跡(左-6-2-05)	八条五丁目335-1の一部、ほか	2017.04.27	36	安井宣也	宅地造成／株式会社 吉川商事	原因者	H28:3518
3 HJ711	平城京跡(左-6-4-14)	大安寺一丁目1177番5、1181番1	2017.06.01～2017.7.21	640	安井・吉田	工場・事務所新築／奈交自動車整備株式会社	原因者	H28:3296
4 HJ712	平城京跡(左-3-3-12)	大宮町西丁目259番1、259番4	2017.06.20～2017.07.28	320	永野智子	共同住宅新築／合資会社 新大宮開発	原因者	H29:3046
5 HJ713	平城京跡(左-5-4-02)	大安寺七丁目653-1、ほか	2017.08.03～2017.10.31	577.4	吉田朋史	JR奈良駅南特定土地地区画整理事業／奈良市長	公共	H12:3145
6 HJ714	平城京跡(左-9-4-08)	東九条町282-4番地、ほか	2017.09.04～2017.09.15	112	永野智子	宅地造成／オーエヌハウジング株式会社	原因者	H29:3117
7 HJ715	平城京跡(左-8-2-03)	杏町414番4、ほか8筆	2017.09.11～2018.01.11	990	安井宣也	(仮称)辰市こども園建設事業／奈良市長	公共	H29:3129
8 HJ716	平城京跡(左-2-5-16)	法蓮町985-7、986-8の一部、986-136の一部	2017.10.10～2017.10.13	52	永野智子	二ノ毛園改築・社会福祉法人 奈良愛の園福祉会	原因者	H29:3080
9 HJ717	平城京跡(左-4-2-05)	尼庄町1028-1、457-1	2017.10.30～2017.11.11	114	中島和彦	宅地造成／個人	原因者	H29:3240
10 HJ718	平城京跡(左-4-4-10)	三条宮前町285-1	2017.11.08～2017.11.13	50	吉田朋史	共同住宅新築／個人	原因者	H29:3188
11 HJ719	平城京跡(左-3-4-13)	大宮町二丁目82番11	2017.11.27～2017.12.19	137.4	吉田朋史	賃貸住宅新築／個人	原因者	H29:3245
12 HJ720	平城京跡(左-3-5-05、-06)の一部	大宮町一丁目45番、44番	2018.01.17～2018.01.31	307.2	吉田朋史	店舗新築／正起土地合資会社	原因者	H29:3222
13 HJ721	平城京跡(左-4-5-14)	杉ヶ町52-2、52-3	2018.03.06～2018.03.28	193	繩方・安井・池田	共同住宅新築／日本エスリード株式会社	原因者	H29:3441
14 DA143	史跡大安寺旧境内	東九条町1308-1、ほか	2017.05.19～2017.11.22	200	村瀬 隆	範囲確認調査／奈良市教育委員会 教育長	緊急	H29:1004
15 DA144	史跡大安寺旧境内	東九条町1316番地	2017.11.06～2017.11.17	17	永野智子	奈良市伝統文化財八幡神社中門と翼廊2棟の解体修理工事／八幡神社	原因者	H28:1153
16 DA145	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目1310番5	2018.01.11～2018.01.12	21	中島和彦	住宅の除去、地盤調査、住宅の新築／個人	緊急	H29:1082
17 SD038	西大寺旧境内・平城京跡(右-1-3-04)	西大寺南町11-4、10-6の一部	2017.08.01～2017.11.06	354	池田裕美	近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業／奈良市長	公共	S63:3056
18 SD039	西大寺旧境内・平城京跡(右-1-3-03)	西大寺南町1-3、4-5、6、-7	2017.12.04～2018.03.09	1136.5	池田・永野	近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業／奈良市長	公共	S63:3056
19 SD040	西大寺旧境内・平城京跡(右-1-3-02)	西大寺本町228-1の一部、229-1、-4	2018.01.23～2018.01.25	36	池田裕美	宅地・青空駐車場造成／セイタホールーム	原因者	H29:3169
20 SY011	新薬師寺旧境内・奈良町部	高畠町1350番1、3、4の一帯	2018.02.26～2018.03.02	92	中島和彦	店舗付き住宅新築／個人	緊急	H28:3505
21 MK007	南紀寺跡	南紀寺町三丁目818番の一部	2017.07.24～2017.07.28	150	安井宣也	宅地造成／リアルアセット株式会社	原因者	H29:3134
22 TOM001	富雄丸山古墳	丸山1丁目1079番地の239	2017.05.22～2017.08.31	20,267	繩方正樹	富雄丸山古墳前段前面調査／奈良市長(事業者)	緊急	—

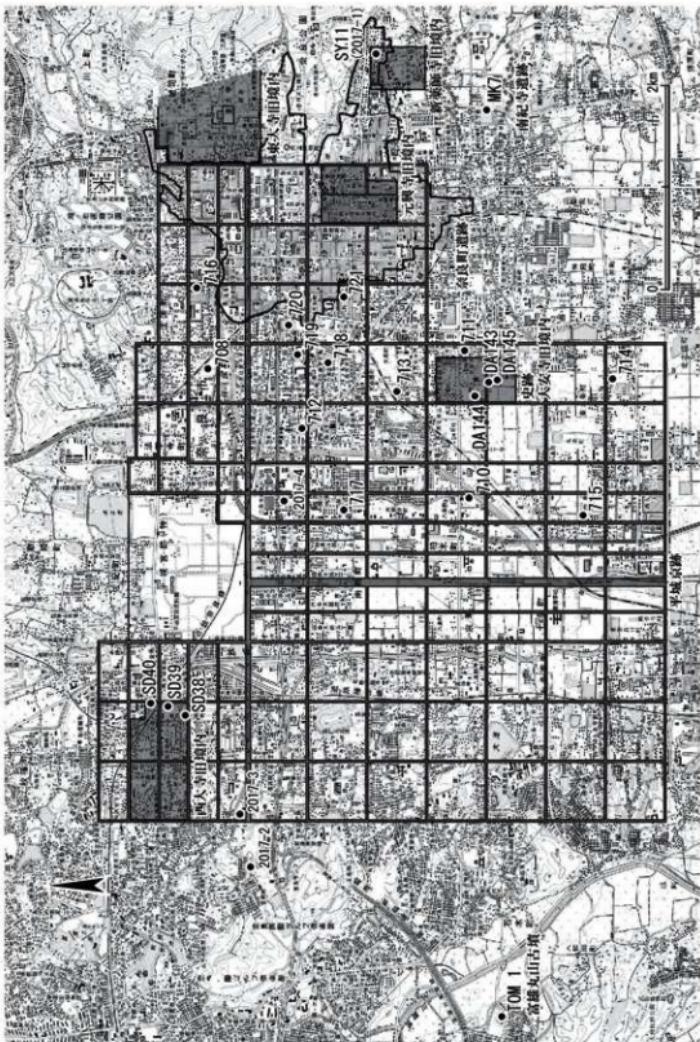
※平城京跡に付している(○-○-○-○)は、○京○条○坊○坪の略である。

平成 29 (2017) 年度実施 小規模調査・試掘調査一覧表

調査番号	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査担当者	調査原因・事業内容／届出者申請者等	事業区分	届出等受理事業年度・番号
2017-1	新薬師寺旧境内・奈良町遺跡	高畠町1350番1 他	2017.05.10～2017.05.16	16	安井宣也	店舗対応住宅新築／大城宏之	緊急	H29:3505
調査結果:室町・江戸時代の土坑、構を検出。本調査(SY011次)を実施。報告は、本書に収録。								
2017-2	菅原遺跡	宝来町1103番3他	2017.09.04～09.07.09.13、09.14	557	繩方・中島・安井	共同住宅新築／三都住建株式会社	原因者	H29:3175
調査結果:焼土坑1基のみ確認。「奈良市埋蔵文化財調査年報 平成28(2016)年度」に収録済。								
2017-3	平城京跡(右-2-4-13)	菅原町674-1他	2017.10.18	30	繩方・中島・永野	保育園新築／社会福祉法人 健仁会	原因者	H29:3166
調査結果:中世の墨書きを検出。								
2017-4	特別史跡・特別名勝 平城京左京三条二坊宮跡庭園	三条大路一丁目5-37	2018.02.13～2018.02.15	0.6	池田裕美	特別史跡・特別名勝 平城京左京三条二坊宮跡庭園保存整備事業／奈良市長	公共	H29:1134
調査結果:池底石下の堆積状況を確認。整備報告に収録予定。								

※平城京跡に付している(○-○-○-○)は、○京○条○坊○坪の略である。

平成 29 年度 調査地位置図



# 目 次

## 第1章 平成29（2017）年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告

1. 西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊）の調査	3
(1) 西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊四坪）の調査 SD 第35・36・38次	4
(2) 西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊三坪）の調査 SD 第36・37・39次	19
(3) 西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊二坪）の調査 SD 第40・41次	24
2. 史跡大安寺旧境内の調査	29
(1) 塔院・六条大路の調査 DA 第143次	30
(2) 塔院の調査 DA 第144次	35
(3) 西小子房推定地の調査 DA 第145次	40
3. 新薬師寺旧境内・奈良町遺跡の調査 SY 第11次	41
4. 平城京跡（左京五条四坊）の調査	45
(1) 平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査 第649・701次	46
(2) 平城京跡（左京五条四坊二坪）の調査 第713次	71
5. 平城京跡（左京八条二坊三坪）の調査 第715次	79
6. 平城京跡（左京九条四坊八坪）の調査 第714次	92
7. 平城京跡（左京六条四坊十四坪）の調査 第711次	94
8. 平城京跡（左京六条二坊五坪）の調査 第710次	101
9. 平城京跡（左京四条五坊十四坪）の調査 第721次	102
10. 平城京跡（左京四条二坊五坪）の調査 第717次	105
11. 平城京跡（左京四条四坊十坪）の調査 第718次	106
12. 平城京跡（左京二条五坊十六坪）の調査 第716次	107
13. 平城京跡（左京三条四坊十三坪）の調査 第719次	108
14. 平城京跡（左京三条五坊五・六坪）の調査 第720次	110
15. 平城京跡（左京三条三坊十二坪）の調査 第712次	114
16. 南紀寺遺跡の調査 MK 第7次	119
17. 平成29年度実施 工事立会一覧	120
18. 平成29年度実施 遺跡有無確認踏査一覧	128
第2章 平成29（2017）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告	129
第3章 〈資料報告〉平城紀寺・葛木寺・海龍王寺前身寺院・済恩院の瓦	139



---

## 第1章 平成29(2017)年度埋蔵文化財発掘調査概要報告

---



## 1. 西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊）の調査

奈良市では、近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業（総面積約30万m<sup>2</sup>）を実施している。当事業地は、平城京の条坊復元では、右京一・二・三条三坊及び西大寺旧境内に相当し、奈良市教育委員会では、事業地内での発掘調査を昭和63年度から順次進め、平成29年度にすべて終了した。総発掘面積は、115,696.5m<sup>2</sup>となった。

本報告には、事業地内で平成27～29年度に実施した

西大寺旧境内・右京一条三坊三・四坪の調査5件（SD第35～39次）に加え、平成29・30年度に実施した同二坪の調査2件（SD第40・41次）を掲載する。

なお、土地区画整理事業地内では、各坪ごとに通し番号を構成に付しているが、今回、SD第35・36次の発掘区と既報告の第30次発掘区の西端が重複するため、その一部を変更し、再掲した。

西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊） 発掘調査一覧表（本書掲載分）

道跡名	調査次数	事業名等	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
西大寺旧境内・平城京跡（右京一・二・三条三坊四坪）	SD第35次	社会資本整備総合交付金事業	西大寺南町3-1～5他	H27.6.8～8.19	406m <sup>2</sup>	鍛方 正樹 村瀬 隆
西大寺旧境内・平城京跡（右京一・二・三条三坊・四坪）	SD第36次	社会資本整備総合交付金事業（縦越）	西大寺南町3-7、3-8、3-11	H28.6.15～8.9	494m <sup>2</sup>	安井 宜也
西大寺旧境内・平城京跡（右京一・二・三条三坊三坪）	SD第37次	社会資本整備総合交付金事業	西大寺南町2-8	H28.9.5～10.7	170m <sup>2</sup>	安井 宜也
西大寺旧境内・平城京跡（右京一・二・三条三坊四坪）	SD第38次	社会資本整備総合交付金事業（縦越）	西大寺南町11-4、10-6の一部	H29.8.1～11.6	354m <sup>2</sup>	池田 裕英
西大寺旧境内・平城京跡（右京一・二・三条三坊三坪）	SD第39次	社会資本整備総合交付金事業	西大寺南町1-3他	H29.12.4～H30.3.9	1,136.5m <sup>2</sup>	池田 裕英 水野 晃子
西大寺旧境内・平城京跡（右京一・二・三条三坊二坪）	SD第40次	宅地・青空駐車場造成	西大寺本町228番1の一部、229番1、229番4	H30.4.23～1.25	36m <sup>2</sup>	池田 裕英
西大寺旧境内・平城京跡（右京一・二・三条三坊二坪）	SD第41次	店舗新築	西大寺本町229番1他	H31.1.15～2.8	240m <sup>2</sup>	高岡 桃子



西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊） 発掘区位置図（1/4,000）

（本書掲載発掘区：黒塗表示・太文字、その他発掘区（抜粋）：灰色表示、数字は調査次数、太線枠が事業地内）

## (1) 西大寺旧境内・平城京跡(右京一条三坊四坪)の調査 SD第35・36・38次

### I はじめに

調査地は、西大寺の伽藍復元によると主要伽藍地区の東の寺地に位置する。平城京の条坊復元では、右京一条三坊四坪に相当し、西端は西三坊坊間東小路に接する。四坪内では、西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う発掘調査を平成27～29年度にかけて継続し、SD第35・36・38次調査を実施した。

SD第35・36次調査は四坪内北東隅周辺の隣接地で実施した。同じ隣接地では、これまでにSD第30・33次調査を実施しており、8～9世紀の建物・溝・井戸、13世紀の土坑が調査されている。また、調査地の西半部は江戸時代以降の水田造成に伴って一段低く切り下げられており、その南半部では遺構が削平されて残存しないことがSD第33次調査で確認された。しかし、調査地西隣が西三坊坊間東小路の位置を踏襲した道路として現在も機能しており、その北半部で関連遺構の残存する可能性も想定できた。

SD第38次調査は四坪内南側の西端で実施した。ここでも西三坊坊間東小路の関連遺構確認を目的とした。

### II SD第35・36次調査

SD第35・36次調査は、中央の水田段差に沿って流れる水路を挟んで東区と西区に分けて調査した。

#### 1. 基本層序

東区 上から造成土(厚さ0.5m)、耕土(厚さ0.2m)、床土(厚さ0.1m・明灰色土)と続き、現地表下約0.8mで黄褐色土の地山となる。その上面が遺構面で、標高は約71.3mである。一方、SD第36次東区の南半は南面する現在の東西道路に沿って切土されているため、一段低くなり地山の標高は71.0mとなる。

西区 東側より一段低く地下げされ、SD第35次西区

では耕土直下約0.2mで黄褐色土の地山となる。その標高は約70.9mで、東区と約0.6mの比高差があり、遺構はほとんど残っていないかった。一方、北側隣接地のSD第36次西区は宅地となっていて、上から造成土(厚さ0.5m)、旧耕土(厚さ0.2m)と続き、現地表下約0.7mで黄褐色土の地山となる。その標高は71.0mで、SD第35次西区よりわずかに0.1m高くなるが、遺構はほとんど認められなかった。

#### 2. 検出遺構

掘立柱建物・塀(SA-SB201～216)、井戸(SE501～508)、土坑(SK601～604)、溝(SD105・106)がある。各遺構の規模等は一覧表(表1～3)にまとめた。奈良～平安時代前半の遺構と平安時代末～室町時代の遺構に大きく分けることができる。

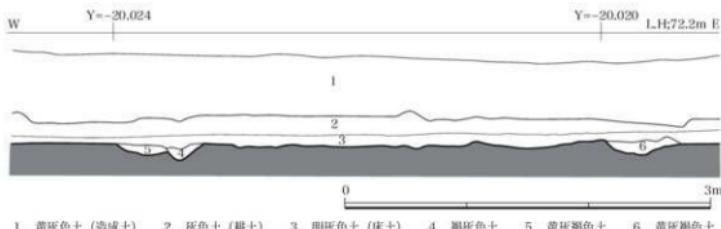
#### (A) 奈良～平安時代前半の遺構

掘立柱塀 SA207～209がある。

SA207は、SD第24次調査(平成20年度)で検出した四坪内の東西二分割線付近にある坪内道路の路面心から約29m東にあり、坪内を東西四分割する位置に近いため、宅地を区画するための塀である可能性が高い。

東西方向のSA208・209は、切土による段差に沿うことを考慮すれば、建物の北側柱列の可能性がある。

掘立柱建物 SB201～206(北群)とSB210～216(南群)がまとまって分布する。北群の建物主軸はSB203のみ北で西に振れるが、その他は世界測地系方眼方位とほぼ合致する。重複関係から、SB205→SB206、SB206→SB201、SB203→SB202の前後関係が認められる。方位が振れるSB203は、位置的にみて、どの建物とも組み合わない。したがって、SB205→SB206→SB201そしてSB203の少なくとも4時期にわたる建物変遷を想定

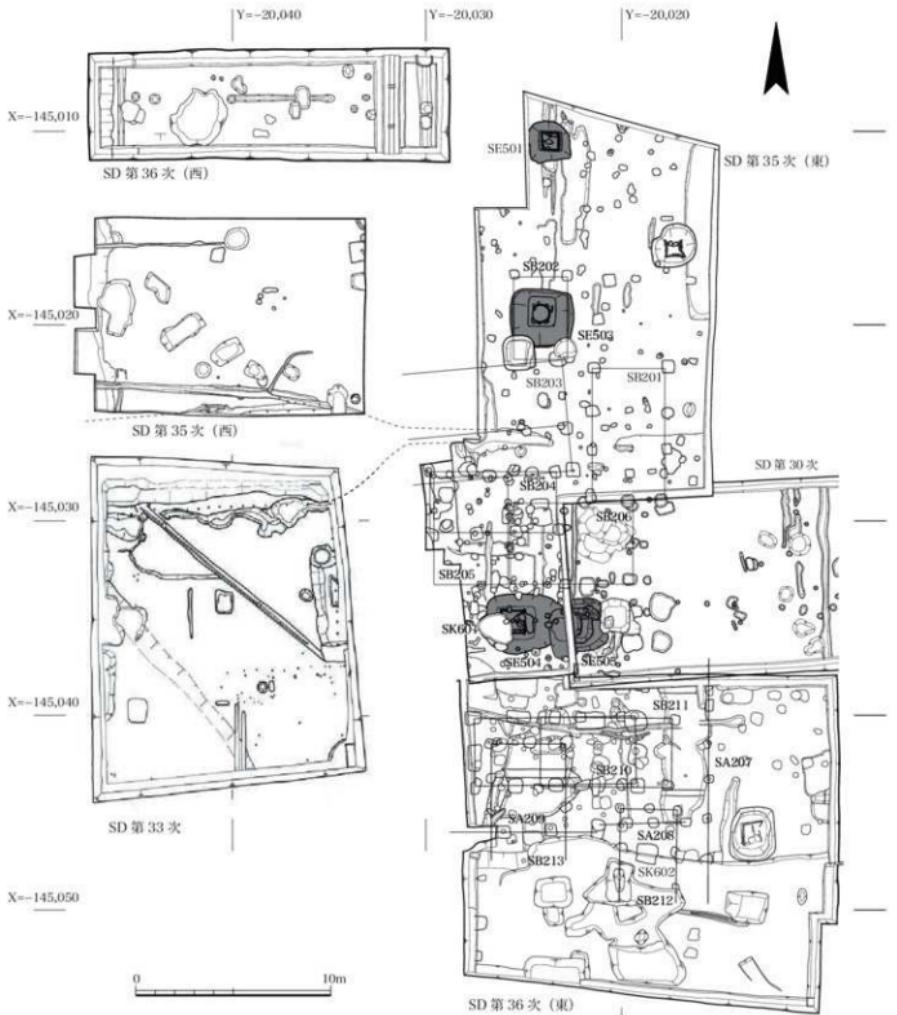


SD第35次調査 中央区北壁土層図(1/40)

できる。SB202は建物内部にSE503が取まるので、井戸屋形と考えられる。これを除く他の建物はSE503からSE504の間に收まり、その位置はおおよそ南北1/8の範囲と重なる。

南群の建物は、SA207の西側に位置する。SB210・

211・213は、位置が重複することから同時併存はあり得ない。SB211は棟や側柱の柱筋の位置がSB210とほぼ同じであることから、SB210の後身建物の可能性も考えられる。北群の建物と分布範囲の東端が揃い、同様におおよそ南北1/8の範囲と分布が重なる。



SD第35・36次調査 奈良～平安時代前半の遺構平面図 (1/250)

井戸 SE503～505は奈良時代、SE501は平安時代前半の井戸である。

SE503は井戸枠を抜き取られていたが、一辺1.5mの方形木枠痕跡を確認できた。そして、その中央に据えた集水施設の曲物だけが残っていた。曲物と木枠痕跡の間に小礫（青チャート）を敷く。曲物は径0.9m・高さ0.33mで、板の内面に縦・斜め方向の切れ込みを入れて

丸く曲げ、縦板を挟みながら2条のタガを巻き付けて桿皮で留めている。使用時に生じた亀裂を桿皮で留めて補修した箇所があり、再利用品とみられる。

SE504・505は東西に重複しており、SE505はSE504の造り替えと考えられる。SE504は方形横板組相欠き仕口型の構造で、最下段の井戸枠だけを残して抜き取られていた。埋め立て時に、板を組み合わせた中空の四角柱を枠内に差し込んで息抜きをつくっている。井戸枠には、縦板を太納留めてつくられた扉材が転用されていた。

SE501は方形横板組井籠型の構造で、太納留めは認められない。下から4段分の井戸枠が残存した。底に入頭大の石が散在的に敷かれ、井戸枠はこの上に組まれている。9～10世紀の土器・瓦が出土した。

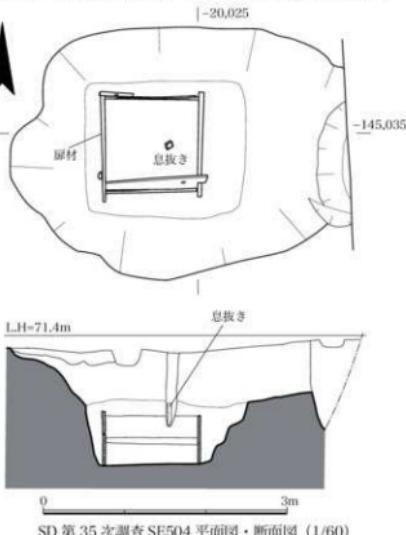
土坑 SK601は、井戸SE504を埋め立てた後に掘削された不整形の土坑で、8世紀後半の遺物が出土した。

SK602は地山のシルト・粘土のブロック上で埋まり、下位はグラウシ化する。掘方が地山のシルト・粘土層内に収まることから、水溜めの可能性がある。埋土から8世紀の須恵器小片が出土した。

#### (B) 平安時代後半～室町時代の遺構

掘立柱建物 SB214～216はすべて総柱建物で、建物位置の重複関係から3時期の変遷が想定できる。いずれの柱穴からも瓦器碗等が出土するため、12～13世紀頃の建物と考えられる。

井戸 SE502は11世紀の井戸である。方形縦板組隅柱横棟留の構造で、集水用に枠内底を0.2mほど一段掘



SD 第35次調査 SE504 平面図・断面図 (1/60)

SD 第35・36次調査 建物一覧表

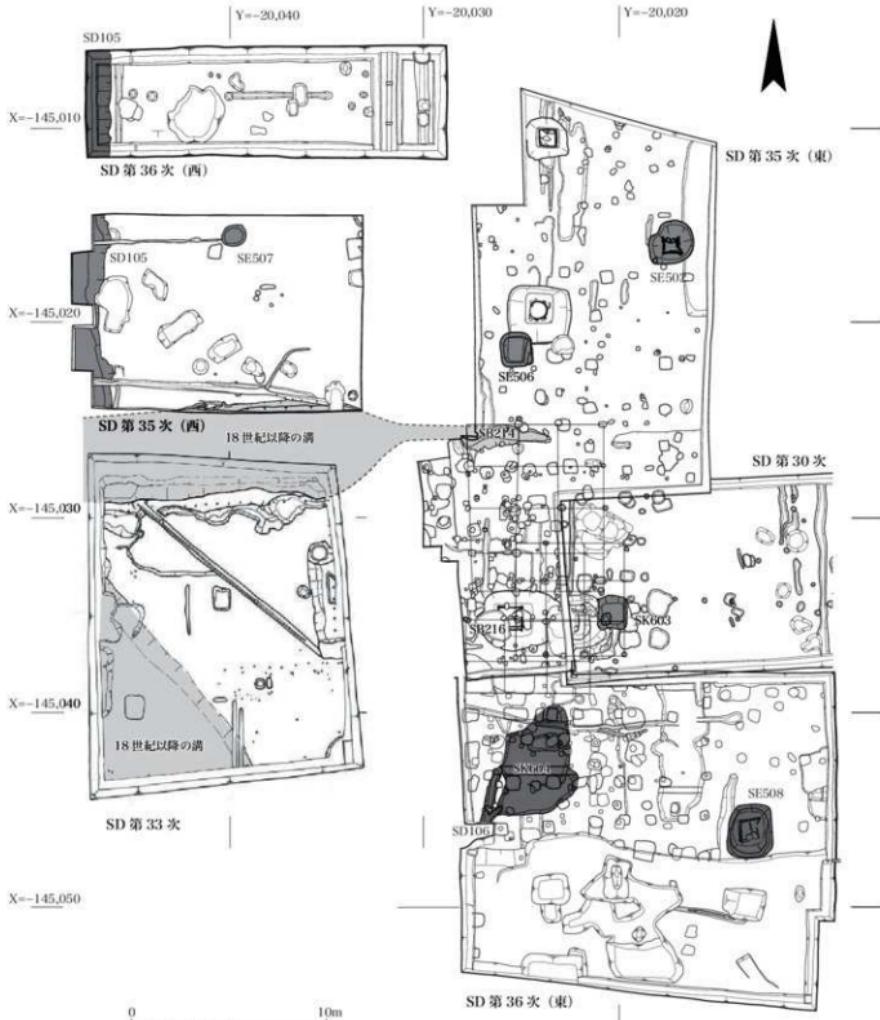
遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法(m)		柱穴の深さ (m)	備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行		
SB201	南北	3×2	6.7	3.7	2.1～2.3	1.65	0.2	SB206より古い。
SB202	南北	1×1	4.2	2.7	4.2	2.7	0.1	SB203より新しい。SE503の井戸屋形。
SB203	東西	3以上×3	6.5以上	5.6	2.1～2.2	1.7～2.3	0.1	SB202より古い。
SB204	東西	3×2	6.5	3.1	2.0～2.2	1.4～1.7	0.3	SB203より古い。
SB205	南北	3×2	5.5	3.8	1.6～1.9	1.9	0.3	SB206より古い。
SB206	東西	3×2	6.3	4.1	2.0～2.2	2.0～2.1	0.3	SB205より新しい。
SA207	南北	4以上	5.7以上	—	北から1.8～1.8×2.1	0.1～0.3	坪内のおよそ1/4を区画する斯。	
SA208	東西	3	4.5	—	1.5等間	0.2～0.3	建物北側柱列の可能性あり。	
SA209	東西	2以上	4.8以上	—	2.4等間	0.4	建物北側柱列の可能性あり。	
SB210	東西	4×2	8.4	3.6	2.1等間	1.8等間	0.2～0.5	
SB211	東西	3×1	6.6	3.6	東から 2.4-2.1-2.1	3.6	0.2～0.5	妻柱穴を欠くが、梁行2間の可能性あり。 SB210より新しい。
SB212	南北	1以上×2	2.1以上	3	2.1	1.5等間	0.2～0.5	SA208と位置が重複。
SB213	南北	2以上×2	3.6以上	3.9	1.8等間	1.96等間	0.3～0.4	SB210・211と位置が重複。
SB214	南北	4×3	8.6	6.9	2.0～2.3	2.3	0.2	龜柱建物。
SB215	東西	4×3	6.6	6	1.0～2.0	1.8～2.3	0.2	龜柱建物。
SB216	不明	3×1以上	6.4	2.0以上	2.0～2.2	2.1	0.2	龜柱建物。

りくぼめている。掘形から黒色土器B類、枠内から黒色土器B類と瓦器碗が共存して出土した。

SE506は13世紀前半（鎌倉時代）、SE507は14世紀（室町時代）の井戸で、いずれも井戸枠が抜き取られている。なお、SE507の掘方側面の一部に円形縦板組構造の

井戸枠痕跡が残るのを確認した。

SE508は13世紀前半の井戸で、井戸枠の構造は方形縦板組支柱横桟留である。東側の上・中位の横桟が破損して縦板材材が内側に傾く。枠内の埋土は主に黒色の砂質シルトで、腐植を含む。廃絶後に生じた窟みに大きな礫



SD 35・36次調査 平安時代末～室町時代の遺構平面図 (1/250)

が複数投棄されていた。

溝・土坑 SD105は、西三坊間東小路東側溝推定位置で検出した南北溝である。溝幅2m以上で、溝底の座標値はX=-145,019.00m、Y=-20,047.50m前後である。埋土中から8~15世紀頃の土器類や瓦類が多く出土しており、平城京の道路側溝が室町時代まで機能していたことが推定できる。西三坊間東小路の痕跡の一部は現在も道路として使用されており、長期間補修を繰り返しながら存続したことを物語っている。

SK604は埋土が黒泥で、不整形な水溜りか小さな池と考えられる。その西肩に接続するSD106はSK604と同じ埋土で、両者が一連で機能した可能性が高い。両造構の

埋土から12世紀後半~13世紀前半の土器類が出土している。(鐘方 正樹・安井 宣也・村瀬 陸)

### III SD第38次調査

除却した個人住宅の浄化槽と調査地東側の水路によつて発掘箇所が制約を受けるとともに、厚い造成土と堆積層から掘削深度が深くなり、堆土置場を確保するために南北2回に分けて調査をおこなった。

#### 1. 基本層序

発掘区内の土層は、東端で造成土(厚さ1.4m)の下に暗灰黑色土(旧耕土・厚さ0.2m)があり、その直下で灰綠色粘質土の地山にいたる。地山上面の標高は69.4mである。SD第20次調査地の地山上面が概ね70.8~

SD第35・36次調査 井戸一覧表

造構番号	掘方等			井戸枠		時期	主な出土遺物	備考
	平面形	平面規格(m)	深さ(m)	構造	内法(m)			
SE501	隅丸方形	東西2.1×南北2.1	1.1	方形横板組	一辺0.9	—	9~10世紀	掘方: 土師器(杯・皿・甕)、須恵器(杯・皿・甕)、灰釉陶器、黒色土器A類、丸瓦(6139A)、丸瓦、平瓦。枠内: 土師器(杯・皿・甕)、須恵器(杯・皿・甕)、灰釉陶器、黒色土器A類、丸瓦、平瓦。
SE502	不整円形	東西2.2×南北2.2	1.1	方形縦板組 隅柱横残留	一辺0.7	—	11世紀	掘方: 土師器(杯・皿・甕)、黒色土器B類、丸瓦、平瓦。枠内: 土師器(杯・皿・甕)、黒色土器B類、瓦器類、丸瓦、平瓦、埴、石棹。
SE503	隅丸方形	東西3.2×南北2.9	1.4	不明 (最下層に曲物)	一辺1.5 (木棒痕跡) 内法0.9(曲物)	枠底と曲物間に小 縫あり	~8世紀後半	抜き取り穴: 土師器(杯・皿・甕)、須恵器(杯・皿・甕)
SE504	不整梢円形	東西3.9以上×南北3.1	1.5	方形横板組	一辺1.1	—	~8世紀後半	抜き取り穴: 土師器(杯・皿・甕)、須恵器(杯・皿・甕)
SE505	隅丸方形	東西2.9×南北3.2	1.1 以上	—	—	—	8世紀後半~	土師器(杯・皿・甕)
SE506	隅丸方形	東西1.6×南北1.7	0.7	—	—	—	13世紀前半	土師器(杯・皿・甕)、瓦器類、丸瓦、平瓦、曲物
SE507	円形	東西1.2×南北1.1	1.8	円形縦板組の 軌跡あり	不明	—	14世紀	土師器(杯・皿・甕)、瓦質土器、丸瓦、平瓦、軒平瓦
SE508	隅丸方形	東西4.5×南北6.0	2.1	方形縦板組 支柱横残留	一辺1.1	—	13世紀前半	土師器皿、羽釜、須恵器類(束 縛系)、瓦器類、皿、丸瓦3点(6236I+6271C・型式不明)、軒平瓦2点(6732R・西 大寺285A)・丸瓦、平瓦

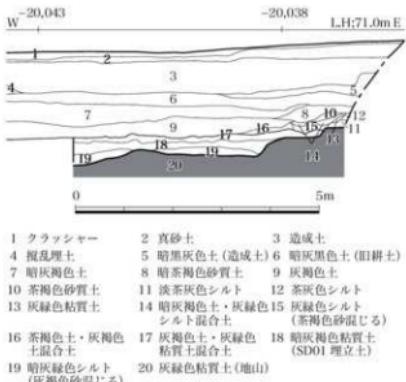
SD第35・36次調査 土坑・溝一覧表

造構番号	平面形等	平面規格(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
SK601	不整形	東西1.7×南北1.5	0.3	8世紀後半	土師器(杯・皿・甕)、須恵器(杯・甕)	SE504より新しい。
SK602	方形	東西1.0×南北1.0	1.3	8世紀	須恵器甕・杯蓋	地山のシルト・粘土ブロックで埋まる。
SK603	隅丸方形	東西1.5×南北1.7	0.55	13世紀中~後半	土師器羽釜、瓦器類、皿、丸瓦、平瓦	H24年報SD第30次報告のSK15と同じ。
SK604	不整形	東西3.8×南北5.5	0.1~0.2	13世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦器類、丸瓦、平瓦	
SD105	南北方向	幅1.6以上×長さ9.8以上	0.7	14~15世紀	土師器(杯・皿・甕)、瓦器類、瓦質土器、丸瓦、平瓦	西三坊間東小路東側溝の位置を踏襲。
SD106	南北方向	幅0.5×長さ2.8以上	0.1	13世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦器類	SK604と接続。

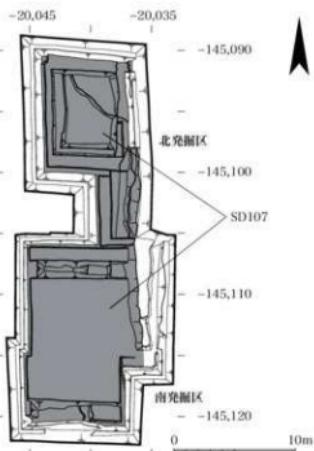
71.0m、SD 第23 次調査地の地山上面が70.5 ~ 70.8m であるので、今回の調査地は少なくとも1.1 m 程度地下げされていることになる。この地山を検出した部分は発掘区東辺に沿って幅約1m程度しかなく、ここから地山は西に向かって下り、埋土の状態から流路や水田であつたと考えられる。

## 2. 検出遺構

検出した遺構には南北方向の流路SD107がある。西肩は発掘区外で、東西幅は12 m以上となる。深さは発



SD 第38次調査 発掘区北壁土層図 (1/100)



SD 第38次調査 遺構平面図 (1/400)

掘区西端で1.6m である。埋土は上から暗灰褐色土(北発掘区北壁土層図7)、灰褐色土(9)、灰褐色土・地山ブロック(灰緑色粘質土)混合土(17)、暗灰褐色粘質土(18)、暗灰緑色シルト(19)と続き、この下が灰緑色粘質土の地山となる。発掘区北半部ではこの地山上面で北西-南東方向から逆「く」字形に抉られたような形状となつていることから、ある時期に北西方向から鉄砲水のような急な流れがあったことが窺える。

17 層は埋土中に地山ブロックが混じり、人為的に河川を埋立てた土層と判断できる。17 層より上位の7・9層は旧耕土と判断され、流路を埋め立てて水田化したとみられる。17 層からは8世紀の土師器・須恵器・瓦、13世紀の瓦器の他、16世紀の土師器や瓦質土器が出土しており、16世紀に埋められたと考えられる。

(池田 裕英)

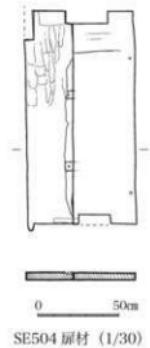
## IV 出土遺物

SD 第35次調査出土遺物 遺物整理箱で49箱分が出土した。8 ~ 9世紀の土師器・須恵器(杯・皿・甕)、軒丸瓦(6139型式A)、軒平瓦(型式不明)、丸瓦、平瓦、埠、9 ~ 10世紀の灰釉陶器、黒色土器A類、II世紀以降の黒色土器B類、瓦器楕、丸瓦、平瓦、軒平瓦、時期不明の石棒、井戸棒等に転用された8世紀の扉材・曲物がある。SE504 井戸棒に転用されていた扉材は2枚の板を太枠留めしてつくられており、奈良文化財研究所所蔵文化財センター年代学研究室による年輪年代調査の結果、1枚は600年+ $\alpha$ 、もう1枚は622年+ $\alpha$ の年代がでている。

以下にSE505・501・506出土土器の概要について述べる。

(鐘方 正樹)

SE505出土土器 遺物整理箱2箱分が出土した。土師器は皿A(1~3)、高杯(4)、甕(5~6)がある。1は底部外面をケズリ調整、内面にはやや粗い1段斜放射状暗文を施す。口縁端部は肥厚するもの(1)と外反するもの(2)がある。3は外面中位までケズリ調整し、口縁端部を丸くおさめる。1は内面が摩滅していないか暗文が見えにくく、赤色に塗られたように見えることから2次的に着色した可能性がある。法量は1が復元口径20.7cm、器高4.0cm、2が復元口径17.9cm、器高2.7cm、3が復元口径17.9cm、器高2.7cmである。





SD 第35次調査 井戸 SE505 出土土器 (1~11) 井戸 SE501 出土土器 (12~20) (1/4)

径17.8cm、残高3.3cmである。4は脚高7.2cmで外面を9面に面取りし、内面は下部にハケ調整を施す。脚端部は屈曲し肥厚する。杯の見込みには暗文がわずかに観察できる。甕は復元口径が5で28.8cm、6で28.2cmである。5に比べ6は長胴になりそうである。いずれも外面ハケ調整、内面ナデ調整であり、口縁端部が肥厚する。

須恵器は、杯蓋（7・8）、杯B（9）、甕（10）、鉢（11）がある。蓋は復元口径が7で15.3cm、8で17.7cmであり、いずれも比較的器壁が厚い。9は復元口径17.0cmで口縁部は外反せず器壁はやや厚い。10は復元口径19.0cmで外面に格子状のタタキ痕跡が残る。11は復元口径30.8cmで、ゆるやかに外反し、内外面をロクロナデ調整する。外面はとくに下半部が被熱により脆くなっている。内面は上半部が摩滅している。

（村瀬 陸）

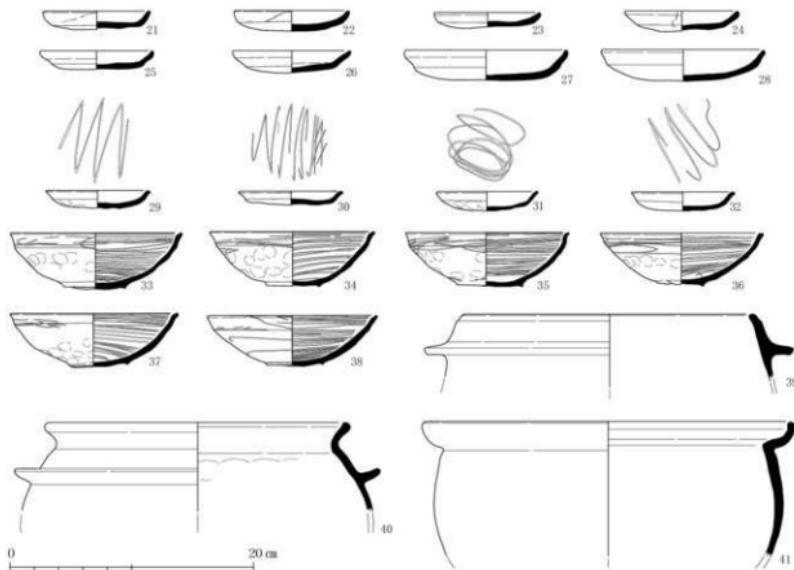
SE501出土土器 遺物整理箱1箱分が出土した。土師器杯（12・13）、鉢（14）、耳皿（15）、鉗釜（16）、鍋（17）、黒色土器A類（18～20）がある。土師器杯はいずれもオサエとナデのみで調整するe手法が用いられている。法量は12が口径15.2cm、器高3.0cm、13が口径12.4cm、器高2.3cmである。14は復元口径7.2cmで、口縁部を強

くナデ調整する。15は口縁端部から内面をナデ調整で仕上げる。耳部外面に煤が付着している。16の口縁端部は内側に巻き込んで肥厚する。復元口径は20.4cmであり、胎土は径3mm程度の砂粒をやや多く含む。17は体部の内面および外面全体に煤が付着する。口縁端部は内側に肥厚する。復元口径は34.4cmである。

18～20はいずれも内面にミガキを施す。18・19の内面のミガキは丁寧に施しているが、20はやや粗い。口縁端部内側は18・19についてはわずかに段が付くが、20には段は見られない。法量は18が口径15.5cm、器高5.4cm、19が口径15.6cm、器高5.4cm、20が口径15.3cm、器高5.2cmである。

（高岡 桃子）

SE506出土遺物 遺物整理箱2箱分が出土した。土師器皿（21～28）、瓦器皿（29～32）、瓦器椀（33～38）、土師器羽釜（39・40）・鍋（41）がある。土師器皿には大小があり、大型品は口径13.5cm前後、小型品は口径8.8～9.7cmである。小型品にはぶい橙色で胎土に砂粒を多く含むものと、灰白色で比較的精良な胎土をもつものがある。24～28は口縁端部を上方へつまみ上げる。



SD第35次調査 井戸SE506出土土器（21～41）（1/4）

瓦器皿は口径8.5cm程度で、内面にはジグザグ状の暗文をもつもの（29・30・32）と、螺旋状の暗文をもつもの（31）がある。瓦器椀はいずれも口径14cm程度、器高4.5cm程度で、12世紀末～13世紀初頭のものである。土師器羽釜は大和B型（40）とH型（39）のものがある。41の鍋は外面に厚く煤が付着する。（水野智子）

SD第36次調査出土遺物 遺物整理箱で32箱分出土した。主なものは、奈良～鎌倉時代の土器類と瓦類である。

土器類 8～9世紀の土師器（甕・杯・高杯）、須恵器（壺・甕・杯蓋・高杯）、11世紀頃の黒色土器A・B類（ともに椀）、11世紀末～12世紀前半の土師器（皿）、12世紀後半～13世紀前半の土師器（皿・羽釜）、須恵器（鉢・束縛系）、瓦器（椀・皿）がある。12世紀後半～13世紀前半の土器類が最も多く、その大半が井戸SE508・土坑SK604から出土した。瓦器椀は主に12世紀後半～13世紀前半のものである。

瓦類 大半が奈良時代以降の丸・平瓦で、軒丸瓦5点（62361・6271C・西大寺181A・型式不明2点）、軒平瓦3点（6721C・6732R・西大寺285A）がある。

（安井宣也）

SD第38次調査出土遺物 遺物整理箱にして12箱の遺物が出土した。出土した遺物には8～9世紀の土師器・須恵器・瓦、13世紀の土師器・瓦器、16世紀の土師器・瓦器・瓦質土器・瓦類などがある。この他、中世のものと思われる木製下駄、錢貨（元豊通宝1点・至和通宝1点）がある。

#### V 調査所見

これまでの調査成果によって、右京一条三坊四坪（西大寺寺地）内における宅地利用の実態の一部が判明した。

##### (1) 右京一条三坊四坪（西大寺寺地）内の宅地割と井戸

西大寺は天平神護元（765）年から造営が始まり、「西大寺資財流記帳」が勘録された宝亀十一（780）年には概ね完成したと推定されている。この間に右京一条三坊四坪は寺地になったとみられるが、発掘調査で確認できた宅地の利用状況は平城京内的一般的な様相と変わらない。

右京一条三坊四坪は、南が一条南大路、東が西二坊大路に面している。近年の調査成果によって、一条南大路は70大尺（約24.8m）、西二坊大路は45大尺（約16m）でつくられていたことが判明した。浸水被害に備えて宅地部分を道路面より高く設定するために、一条南大路と西二坊大路は周辺よりも一段低く掘削して切り通し状につくられている。これを基に坪内の宅地割りを復原すると、遺構配置図のようになる。坪内を東西に二分する位置

に南北方向の通路があり、東半部をさらに二分する位置にも南北方向の区画溝がある。西半部を二分する位置では、SD第30・35・36次調査区内で遺構が途切れ、SD第20・23・36次調査区で南北方向の区画溝が確認できる。したがって、坪内は東西に4分割されて宅地利用されていたことがわかる。一方、坪内を南北に区画する明確な遺構はほとんどないが、8分割する位置で線をひくと概ねその区画内で遺構がまとまる傾向を看取できる。SD第30・35・36次調査区内では、北から2つ目と3つ目の1/8区画内に建物遺構が収まる。

次に井戸の分布をみてみると、東西に4分割した各区画内の東側に沿って井戸が概ね南北に並んでつくられる傾向を看取できる。そして、南北8分割の区画内にさらにみると、概ね1～2基が東側にあるは東南側に配置されている場合が多いことに気づく。

以上の点から、坪内は東西4分割、南北8分割の1/32区画を基本単位として宅地利用された可能性が高く、井戸はその区画内の東あるいは東南側に配置される傾向が強いと推察できる。そして、坪内中央に南北方向の通路を設けて明確に坪を東西2分割する宅地割り方法は、左京二条四坊十坪・左京九条三坊五坪で近年確認されており、それとの関連性も注目できる。平安京の四行八門制の成立過程を考えるうえでも、一つの調査成果が得られた。

また、奈良時代の井戸SE504では井戸枠を最下段だけ残して抜き取り、埋め立てる時に板を組み合わせた中空の四角柱を枠内に差し込んで息抜きをつくっていたことが判明した。息抜きとは、井戸を埋める際に行なわれる儀礼の一つである。井戸は人々を祟る鬼魄の出入口と信心されたため、出入口の一部を残して埋めるために設けられた。息抜きがつくられ始めた奈良時代での確認例は少なく、今回が5例目である。板の利用が3例、丸瓦の利用が2例となり、古代の息抜きに竹を利用した例はない。

##### (2) 西三坊坊間東小路沿いに分布する中世遺構

西三坊坊間東小路東側溝推定位置で検出した南北溝SD105から8～15世紀の遺物が出土し、9～11世紀（平安時代）・13世紀前半（鎌倉時代）・14～15世紀（室町時代）の井戸を確認した。西三坊坊間東小路の痕跡は現在も道路として残っており、古代から中世にかけての遺構はそれと関連する可能性が考えられる。そこで、今まで実施してきた西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で確認された平安後期～室町時代の井戸の分布をみてみると、現在の西大寺から南へ約700m続く西

三坊坊間東小路の痕跡道路に沿って分布していることがわかる。その南端には室町時代の居館跡も存在する。この道路は首原神社のある村落内に向かって一度西に曲がり、西三坊坊間路の痕跡道路へ出ると、再びまっすぐ南下して三条通りへ至る。ここでも平安後期～室町時代の井戸が見つかっている。この道路は明治18年測量の地図にも描かれており、西大寺から三条通りへ至る主要な南北道路として使用されていた。江戸時代以降の明確な遺構が見つからないのは、近世の新田開発によって周辺一帯が水田化したためと考えられる。

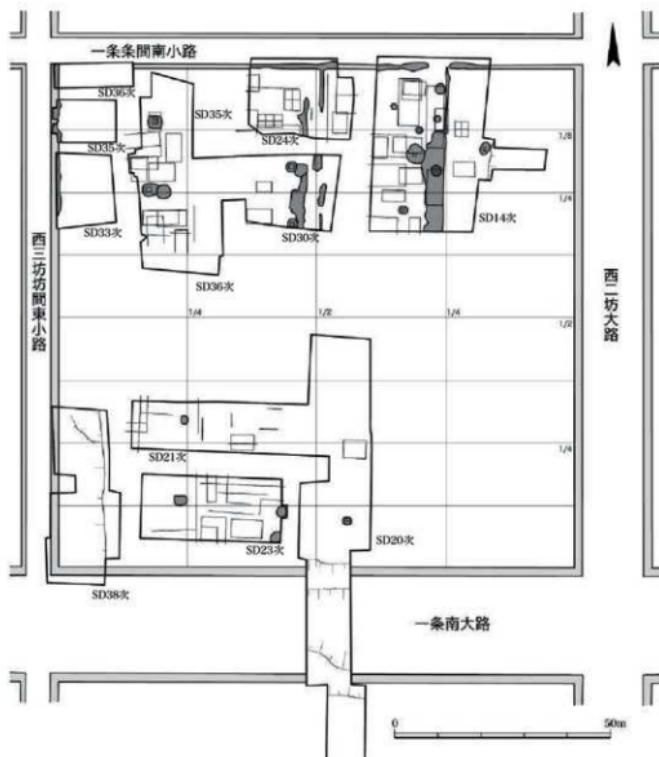
### (3) 流路 SD107と西三坊坊間東小路

一条南大路は、宅地よりも一段低く切り通し状につぐられており、それに接続する西三坊坊間東小路は南に

向かって路面が当然下がっていくと想定できる。そのため、南半は周囲が切り下げられていた可能性が高い。SD107は東肩の形状からみて南北方向の流路跡であり、西三坊坊間東小路推定位置はその中に収まる。埋土の出土遺物から16世紀に埋め立てられて水田化している。また、一条南大路の位置を踏襲する旧流路（SD第21次調査SD49）からも16世紀以前の遺物が出土するので、SD107はそれと接続した一体の流路であり、同時期に埋まり水田化したと考えられる。

このような状況からみて、SD107は西三坊坊間東小路南半の切り通し状に一段下がる部分が後に流路化したものと推察できる。

（鍾方 正樹）



平城京右京一条三坊四坪の遺構配置図



SD 第35次調査 発掘区全景(南東から)



SD 第35次調査 溝 SD105 (南から)



SD 第36次調査 溝SD105 (南から)



SD 第36次調査 西発掘区全景 (南東から)



SD 第36次調査 東発掘区全景 (北西から)

西大寺旧境内・平城宮跡（右京一条三坊北畔）の調査



SD 第35次調査 SE504 全景（南から）



SD 第35次調査 SE504 息抜き（南から）



SD 第35次調査 SE504 井戸枠（南東から）



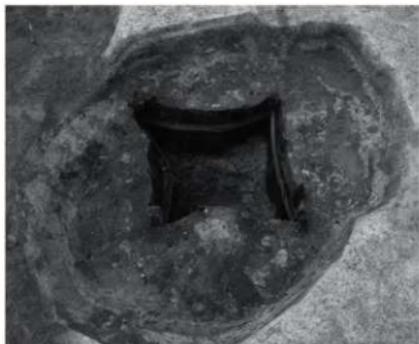
SD 第35次調査 SE501 井戸枠（南東から）



SD 第35次調査 SE504 井戸枠に転用された扉材



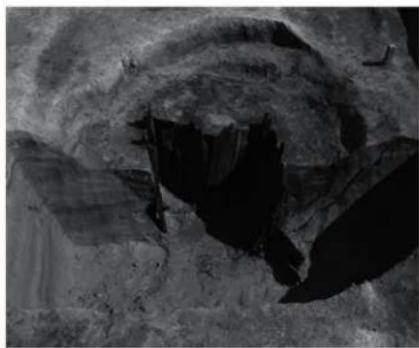
SD 第35次調査 SE503 全景（北から）



SD 第35次調査 SE502 全景（南から）



SD 第35次調査 SE507 堆積土層（南から）



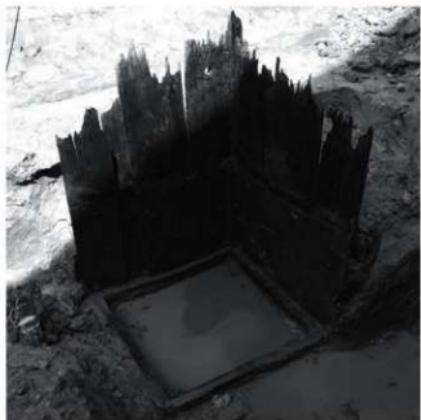
SD 第35次調査 SE502 断面（南から）



SD 第35次調査 SE506 堆積土層（南から）



SD 第36次調査 SE508 井戸枠上部（南から）



SD 第36次調査 SE508 井戸枠下部（南東から）



SD 第38次調査 南発掘区全景（西南から）



SD 第38次調査 北発掘区全景（南から）

## (2) 西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊三坪）の調査 SD 第 36・37・39 次

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京一条三坊三坪の中央部および南西にあたり、奈良時代後半には西大寺旧境内（寺地）となる。三坪内では、これまで国第112-1次（昭和53年度）、市SD第16-1・2次（平成15年度）、市SD第18・19次（平成16年度）、市SD第28-2次（平成22年度）の5件の調査が行われ、奈良時代～平安時代前半の掘立柱建物や掘立柱塀・井戸、室町時代の井戸や土坑、江戸時代の掘立柱塀や土坑などを検出している。その結果、西大寺寺地としての利用状況は明らかではないものの、奈良時代から中世まで居住地としての利用が継続して行われていたことが判明している。

今回の調査は、西大寺造営前の三坪内の宅地利用状況の確認や、造営後の土地利用の様相確認を主な目的として実施した。なお、遺構番号は右京一条三坊三坪の既往の調査報告からの通し番号で付した。

### II 基本層序

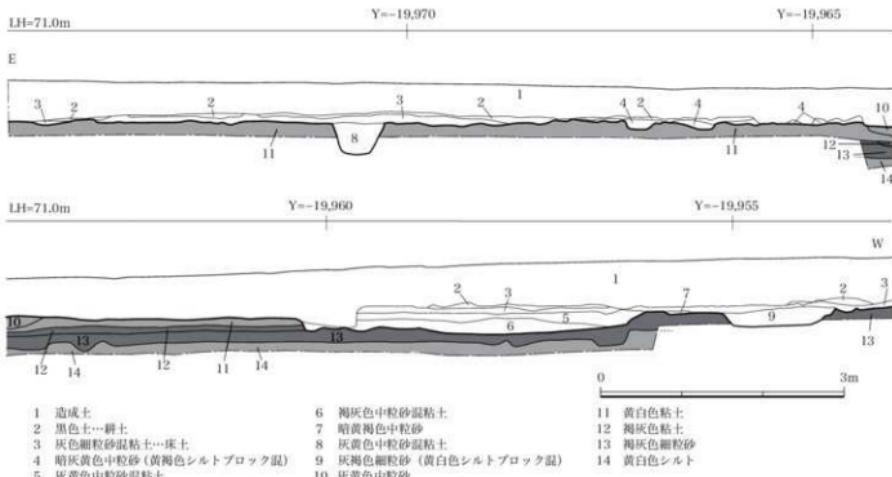
発掘区の基本層序は、上から造成土（厚さ約0.4～0.5m）、耕土（厚さ約0.1m）、床土（厚さ約0.1m）の順に堆積し、西側では地表下約0.6mで、灰黄色粘土および灰黄色中粒砂に至る。SD第39次調査の東側では駐車場

造成に伴う掘削により耕土・床土が削平されており、造成土直下、地表下約0.3mで灰黄色中粒砂に至る。奈良時代の遺構はこの上面、標高約71.7mで検出した。

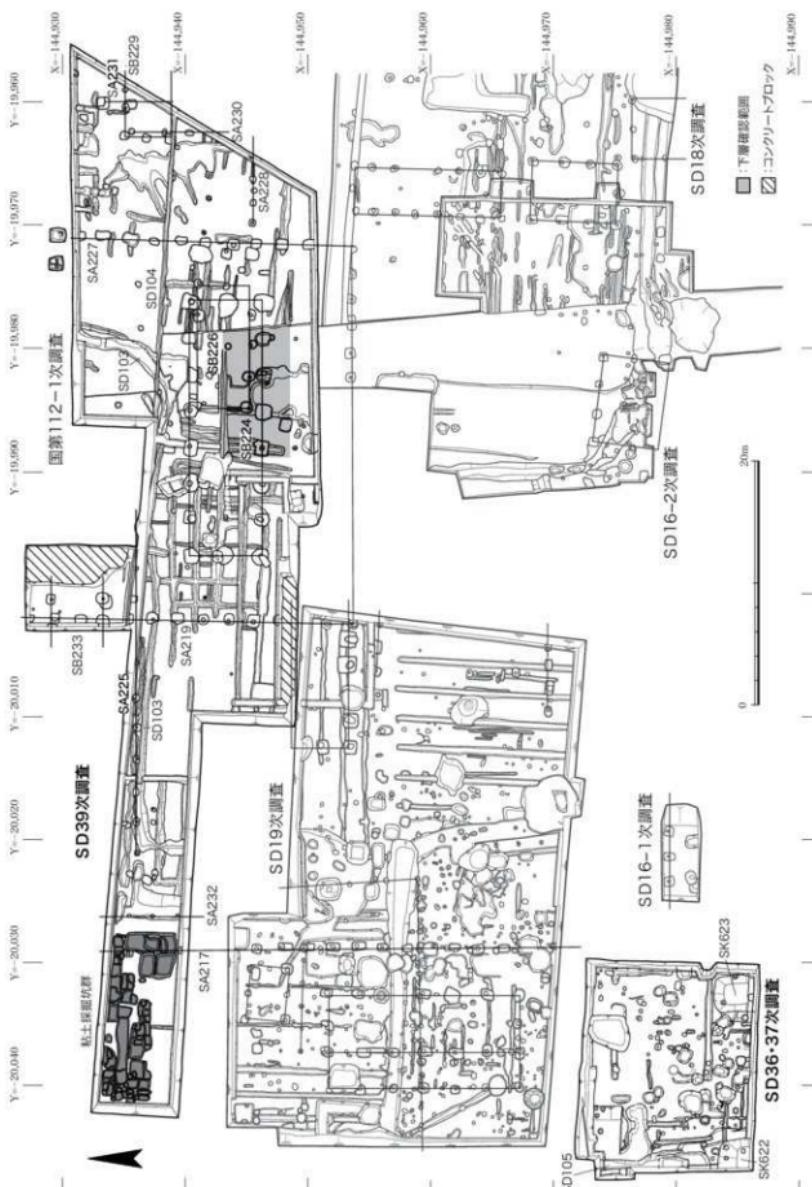
SD第39次調査発掘区中央部では、奈良時代の遺構面の基盤となる灰黄色粘土および灰黄色中粒砂の下部に、上から褐灰色粘土（厚さ約0.05m）、褐灰色細粒砂（厚さ0.15m）、黄白色シルトが堆積する。周辺の調査（市293次・市HJ386次等）ではこの褐灰色粘土および細粒砂対応層から纏文時代の石器が出土しており、今回の発掘区でも遺構がさらに下層に存在する可能性が想定された。そのため、発掘区中央南端に東西約15m×南北約8mの発掘区を新たに設定し、下層確認調査を行った。褐灰色粘土層上面および細粒砂層下面で遺構検出作業を行った結果、遺構は検出されなかったが、褐灰色細粒砂と黄白色シルトの層界で纏文時代の石鐵1点が出土した。

### III 検出遺構

検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物3棟（SB224・SB226・SB233）、掘立柱塀4条（SA217・SA219・SA225・SA227）、時期不明の掘立柱建物1棟（SB229）、掘立柱塀4条（SA228・SA230・SA231・232）、西三坊間東小路東側溝を踏襲する中世の溝1条



SD 第39次調査 発掘区南壁土層図 (1/60)



(SD105)・溝1条(SD103)・土坑2基(SK622・623)・素掘溝、近世の粘土採掘坑群・溝1条(SD104)である。遺構の規模等の詳細は一覧表に示した。以下、主要なものを記す。

### 1. 奈良時代の遺構

SA217 南北方向の掘立柱跡で、柱間寸法は2.1mである。市SD第19次調査で延長を確認しており、復元すると17間(35.7m)以上となる。柱穴の深さは約0.5mである。

SA219 坪東西3/8分割ラインにある南北方向の掘立柱跡で10間(21.0m)分を検出した。南側で行った市SD第19次調査で延長を確認しており、復元すると13間(27.3m)以上となる。北端は発掘区外北へ続く。柱間寸法は2.1m等間。柱穴の深さは0.2~0.4mである。重複関係からSB233より古い。

SB224 梁行7間(21.0m)、梁行2間(6.0m)の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行・梁行ともに3.0m等間である。柱穴の深さは0.5~0.7mである。北側柱列の西から4つ目および5つ目の柱穴には径0.25mの柱根が残っていた。また、南側柱列の西から5つ目の柱穴底部には、長さ0.45m、幅0.29m、厚さ0.1mの方形の礎板が据えられていた。重複関係からSB226より新しい。

SA225 坪南北1/2分割ラインにある東西方向の掘立柱跡で、9間分(23.0m)を検出した。柱間寸法は2.7m等間である。柱穴の深さは約0.2mである。

SB226 桁行4間(9.6m)、梁行2間(4.8m)の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は2.4m等間。柱穴の深さは0.3~0.6mである。重複関係からSB224より古い。

SA227 坪東西5/8分割ラインにある南北方向の掘立柱跡で9間(18.9m)分を検出した。南側で行った市SD第18次調査で延長を検出しており、復元すると11間(23.1m)以上となる。柱間寸法は2.1m等間。柱穴の深さは0.2~0.4mである。

なお、SD第36・37次調査の発掘区では奈良時代の遺構は検出されていない。

### 2. 中世の遺構

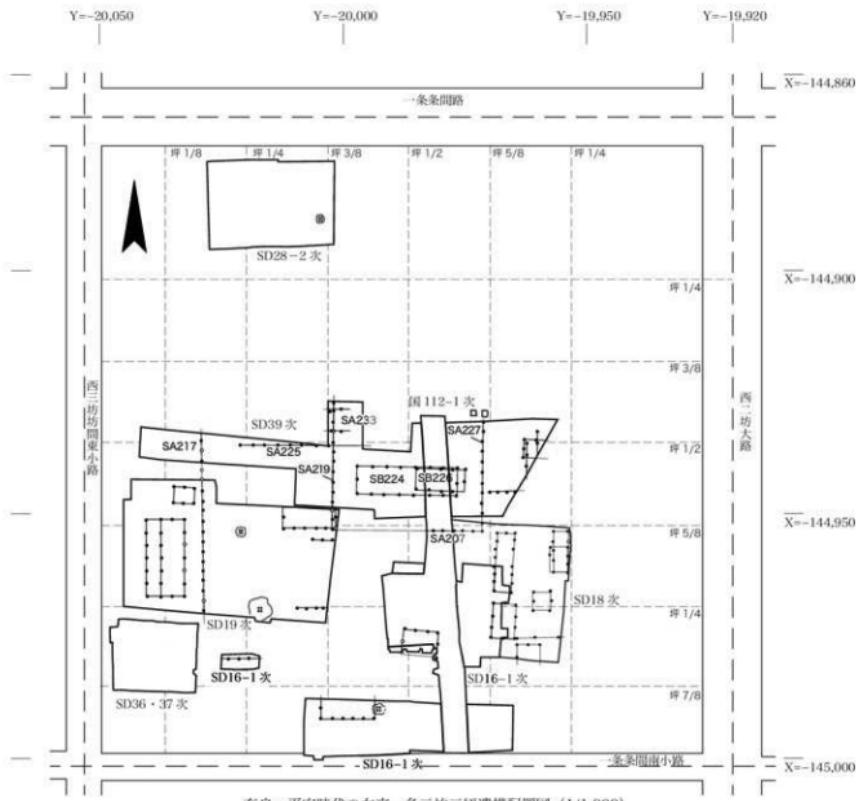
SD105 西三坊間東小路の東側溝を踏襲した南北溝である。幅0.8~2.5m以上、深さは0.3~0.4mである。12世紀後半の土器が出土した。

SD103 東西方向に蛇行しながら延びる溝で、Y= -19,985m付近でゆるやかに北に折れる。幅約0.5m、深さ約0.4m、埋土は灰黄色粗粒砂混粘土である。14世紀

SD第39次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規格	桁行×梁行	桁行全長(m)	梁行全長(m)	柱間寸法(m)		柱穴の深さ(m)	備考
		桁行				桁行	梁行		
SA217	南北	2以上	4.2以上	—	—	2.1等間	—	0.5	市SD第19次で延長を検出
SA219	南北	10以上	21.0以上	—	—	2.1等間	—	0.2~0.4	SB233より古い。市SD第19次で延長を検出
SB224	東西	7×2	21.0	6.0	3.0等間	3.0等間	0.5~0.7	SB226より新しい	
SA225	東西	9以上	23.0以上	—	—	2.7等間	—	0.2	
SB226	東西	4×2	9.6~4.8	—	—	2.4等間	—	0.3~0.6	SB224より古い
SA227	南北	9以上	18.9以上	—	—	2.1等間	—	0.1~0.2	市SD第18次で延長を検出
SA228	東西	3以上	5.4以上	—	—	1.8等間	—	0.2~0.3	
SB229	東西	1以上×2	2.1	3.6	1.8等間	—	0.1~0.2	SA231より新しい	
SA230	東西	2以上	4.2以上	—	—	2.1等間	—	0.2~0.4	
SA231	南北	1以上	2.4以上	—	—	2.4	—	0.3	SB229より古い
SA232	南北	2以上	4.2以上	—	—	2.1等間	—	0.5	
SB233	東西	1以上	2.4以上	4.8以上	2.4以上	2.4?	0.3	SA219より新しい	

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
SD103	東西方向	幅0.5、長さ42以上	0.4	14世紀	土師器皿・羽釜、瓦質土器、常滑焼甕、輪入陶器、丸瓦、平瓦	SA219・225より新しい
SD104	東西方向	幅0.2、長さ23	0.3	18世紀	施釉陶器、模瓦・丸瓦・平瓦	溝内に瓦片を敷き詰めた暗渠
SD105	南北方向	幅0.8~2.5以上	0.3~0.4	12世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質陶器・盤鉢、白磁皿、軒丸瓦・雁振瓦・丸瓦・平瓦	西三坊間東小路東側溝を踏襲する。SK623より古い
SK622	隅丸方形	東西2.5以上×南北2.7以上	0.5	15世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器・盤鉢、白磁皿、軒丸瓦・雁振瓦・丸瓦・平瓦・鉢型・石碑	SD105より新しい
SK623	隅丸方形	東西3.0×南北3.6以上	0.3	14世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦器陶・瓦質土器・盤鉢・丸瓦・平瓦	



奈良～平安時代の右京一条三坊三坪遺構配置図 (1/1,000)

の土師器・瓦質土器・常滑焼片等が出土した。

粘土探査坑群 一辺0.5～1.0mの平面長方形の坑が密集しており、深さは0.1～0.65mである。発掘区西端に堆積する黄白色粘土を探査しているものと考えられ、黄灰色中粒砂層が堆積する部分には掘削が及んでいない。また、底部も砂層との層界まで掘削されている。埋土から18世紀の陶磁器・瓦片等が出土した。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱116箱分が出土した。縄文時代の石鏃1点、8世紀の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦、12～13世紀の土師器・瓦器・輸入陶磁器、14世紀の土師器・瓦質土器・輸入陶磁器・常滑焼・丸瓦・平瓦・雁振瓦・石硯、18～19世紀の土師器・陶磁器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦・

棟瓦がある。遺物の大半はSD104から出土した江戸時代の瓦である。

#### V 調査所見

今回の調査で得られた成果は以下のとおりである。右京一条三坊三坪の中心やや南寄りの位置で桁行7間、梁行2間の大型建物SB224を検出した。建物の規模や位置関係からSB224は三坪の中心建物であると考えられる。このSB224の東西には4.8mの間隔をあけて掘立柱脚SA219・SA227がそれぞれあり、SA219は坪東西3/8分割ラインに、SA227は坪東西5/8分割ラインに位置する。掘立柱脚SA219とSA227の間隔は30.6mである。東側の掘立柱脚SA227の南端は、市SD第18次および国第112-1次の調査成果から、坪南北5/8分割ライ

ンで東西方向の掘立柱塀SA207に接続することがわかつてゐる。以上のことから、三坪では中心建物SB224の東西南側を掘立柱塀SA227・SA219・SA207で区画し、坪内が一体で利用された時期があると考える。

SA219・SA227は坪南北1/2分割ラインを超えてさらに北へ延びるので、SB224は区画内南よりに位置していることがわかる。したがって、SB224の北側にもこの時期の遺構が存在する可能性が考慮されたが、地盤改良や複雑な影響でこの部分の掘削はできず、坪中心部分北側の様相は明らかにできなかつた。

SB224・SA219・SA227は重複関係からSB226より新

しく、SB233より古い。したがつて、SA224が坪の中心に建つ時期をはさんで、少なくとも3時期の変遷があつたことがわかる。しかし、今回の調査では検出したいずれの柱穴からも詳細な時期のわかる遺物は出土しなかつた。三坪内で行われている既往の調査でも奈良～平安時代の建物の詳細な時期はわかっておらず、検出された遺構が西大寺造営以前の宅地に関するものか、西大寺に付属するものかは、今回の調査を経てもなお明確にできなかつた。

SD第36・37・39次調査発掘区では奈良～平安時代の遺構がなく、坪内南西側に空閑地があった可能性が想定できる。

(永野 智子)



SD第39次調査 西側発掘区全景（東から）



SD第39次調査 東側発掘区全景（南西から）



SD第39次調査 西側発掘区全景（東から）



SD第39次調査 東側発掘区全景（西から）



SD第39次調査 SB224・SA219（西から）



SD第37次調査 全景（北から）

### (3) 西大寺旧境内・平城京跡（右京一条三坊二坪）の調査 SD 第40・41次

#### I はじめに

調査地は平城京の条坊復元では右京一条三坊二坪の北東部で、西大寺寺地にあたる。二坪内では市SD第27次調査がおこなわれ土坑1基を検出したが、近代の搅乱坑が広範囲に広がっており遺構は失われている。

周辺では一条条間北小路と西三坊間路との交差点で奈良県が調査をおこない、河道とみられる堆積層を確認している（県 1986年度）。また、東に接する右京一条二坊十五・十六坪は西隆寺跡で、奈良市の都市計画道路西大寺一条線街路整備事業等に伴い発掘調査が重ねられている。

今回の調査は西大寺建立後の二坪における土地利用の様相と西大寺建立以前の遺構の確認を目的として、発掘調査をおこなった。第40次調査は平成30年1月23日から25日まで36m<sup>2</sup>を、第41次調査は平成31年1月15日から2月8日まで240m<sup>2</sup>を調査した。

#### II 基本層序

造成土が約0.6m、旧表土が約0.15m、旧耕土が約0.1m堆積し、地山（黄灰色粘土質シルト）に至る。第41次調査の調査区東側では、旧耕作土下に茶褐色砂質土が約0.2m堆積する。遺構検出は地山上面でおこなった。地山上面の標高は第40次調査では約72.3m、第41次調査では約71.3mであり、南から北にかけて低くなっている。

#### III 検出遺構

検出した遺構には古墳時代の土坑、奈良時代の素掘溝、掘立柱跡2条、掘立柱建物8棟、井戸1基、土坑、江戸時代以降のL字状の溝1条がある。各遺構の詳細については一覧表にまとめた。

#### 古墳時代の遺構

SX01 調査区北東部で検出した方形遺構である。地山を掘り込んでつくられており、埋土上層には古墳時代前期の土師器片が含まれている。

SD02～07 SX01西端からは東西方向にSD02、南端からは南北方向にSD03～SD07が延びる。いずれも幅約0.2～0.5m、深さは約0.1～0.2mの素掘溝である。

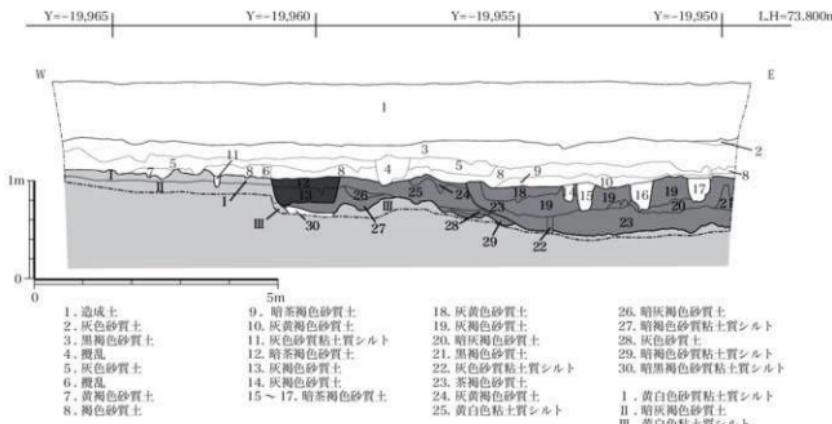
SX08 東西3.0m以上、南北1.1m以上、深さ約0.6mの溝状遺構である。埋土がSX01、SD02～SD07と一緒にあり、かつSX01とSD06・SD07によって接続していることから、SX01とSX08は一連の遺構であると考えられる。

SK09 SX01掘削後に検出した径約0.6m、深さ0.1mの土坑で、土師器高杯が1点出土した。SX01の底面では合計12基の土坑を検出している。

#### 奈良時代の遺構

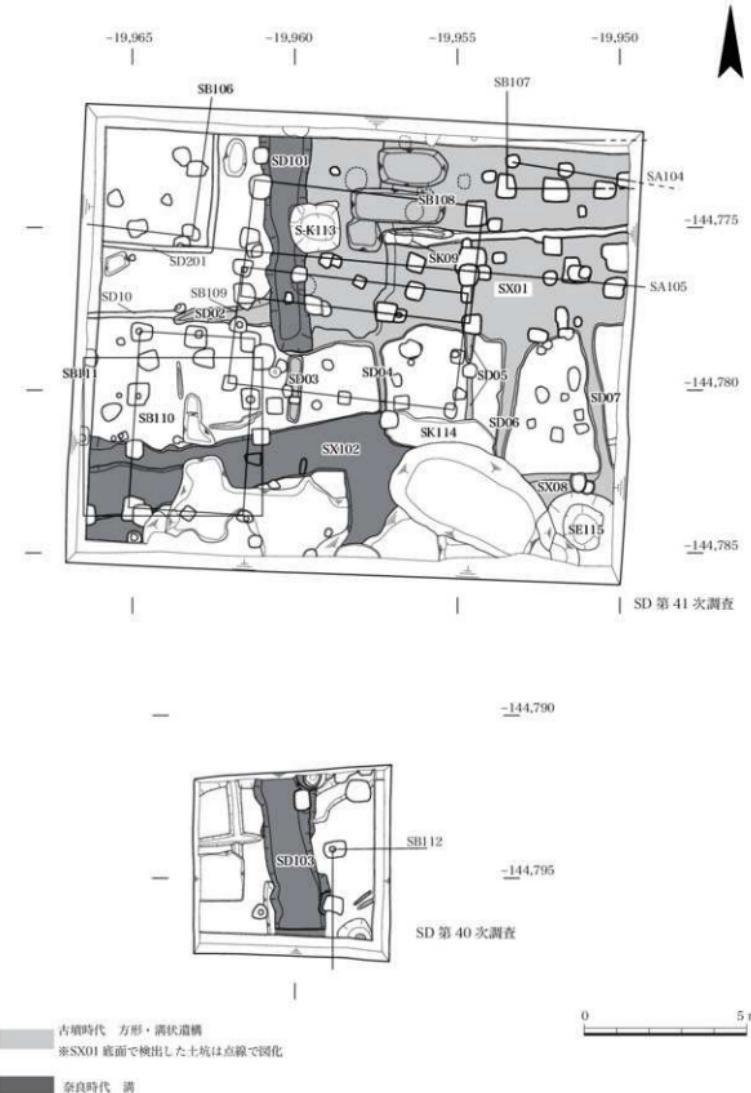
SD101 長さ7m以上、幅1.3m、深さ約0.25mの南北溝。調査区外北側に続くとみられる。調査区中央で途切れる。

SX102 調査区南側で検出した、長さ10m以上、南



\* 11 = SD201 埋土、12・13 = SD101 埋土、15～17 = 柱穴埋土、18～29 = SX01 埋土、30 = 土坑埋土

SD 第41次調査 発掘区北壁土層図（横：1/120、縦1/50）



SD 第 40・41 次調査 遺構平面図 (1/150)

SD第40・41次調査 遺構一覧表

遺構番号	極方向	規模(間)		柱行全長	梁行全長	柱間寸法(m)		廊の出	柱穴の深さ	備考
		柱行×梁行	(m)			柱行	梁行			
SA104	東西	2	3.6			1.8等間		—	0.2	調査区外東側に続く。
SA105	東西	6	13.5			(西から) 2.4-2.4-2.4-2.1 2.1-2.1		—	0.2～0.3	調査区外東側に続く。SB106、SB108より新しい。
SB106	不明	1以上×1以上	1.8以上	2.1以上	1.8等間	2.1等間	—	—	0.3～0.4	調査区外北側・西側に続く。SA105より古い。
SB107	不明	2以上×1以上	3.0以上	1.5以上	1.5等間	1.5等間	—	—	0.2～0.3	鰐柱建物あるいは南面廻付東西棟の一部。
SB108	東西	3×2	7.2	3.6	2.4等間	1.8等間	—	—	0.2～0.3	SA105より新しい。
SB109	東西	4×2	7	3.6	1.5～1.8	1.8等間	—	—	0.3～0.4	
SB110	南北	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	—	—	0.3～0.4	SB111より古い。
SB111	南北	3×2	5.4	4.8	1.8等間	2.4等間	—	—	0.3	SB110より新しい。
SB112	南北	1	1.8			1.8等間	—	—	0.1～0.2	
遺構番号	平面形等	平面規模(m)			深さ(m)	時期	主要出土遺物			備考
SX01	方形	東西幅10以上、南北幅6以上			0.5	古墳前期	土師器片(杯・高杯)			
SD02	東西方向	幅0.5～0.7、長さ2.5			0.3	古墳前期	—			
SD03	南北方向	幅0.5、長さ2			0.1	古墳前期	円筒埴輪片			
SD04	南北方向	幅0.3、長さ1.6			0.1	古墳前期	—			
SD05	南北方向	幅0.2、長さ4.5			0.1	古墳前期	—			
SD06	南北方向	幅0.5、長さ6			0.1～0.2	古墳前期	—			
SD07	南北方向	幅0.5、長さ8			0.1～0.2	古墳前期	—			
SX08	不明	東西幅3以上、南北幅1.1以上			0.6	古墳前期	土師器片(器種不明)			
SK09	円形	径0.6			0.1	古墳前期	土師器(高杯)			
SD10	東西方向	幅0.2、長さ3以上			0.2	不明	—			SD02より古い。 SX01・SD02より新しく、SK113より古い。
SD101	南北方向	幅1.3、長さ7以上			0.25	—	—			
SX102	L字形	南北幅1.4～2.6、長さ10以上			0.1	8世紀	須恵器(杯B底部)1点			SK114より古い。
SD103	南北方向	幅1.5、長さ6以上			0.25	—	土師器片			
SK113	圓丸方形	東西1.6～南北1.5			0.5	～8世紀後半	土師器(杯・皿)、須恵器(杯・甌)			
SK114	不整形	東西3.4×南北1.1			0.1	8世紀後半	土師器(杯・甌)、須恵器(杯・甌)、平瓦			
SD201	L字形	幅0.2、南北長4以上、東西長3.5以上			0.3	江戸時代以降	陶磁器、瓦(軒平瓦、軒丸瓦、棟瓦)			



SD第40次調査 発掘区全景(東から)

北幅4m以上、深さ約0.1～0.2mの遺構である。調査区中央付近でL字形に屈曲するが、擾乱のため全体の規模は不明である。埋土から須恵器杯B底部が1点出土した。

SD103 東西幅1.5m、南北長6m以上、深さ0.25mの素掘溝である。

SD101、SX102、SD103はいずれも埋土が類似しており、遺物をほとんど含まないという点でも共通している。また、SD101とSD103の主軸は国土方眼方位北でやや西に振れ、ほぼ直線上に並ぶことから、これらは一連の遺構

である可能性が高い。

#### 掘立柱塀・建物

塀・建物の前後関係については、柱穴の重複関係からSB110→SB111、SB106・SB108→SA105となり、少なくとも4時期の変遷が想定される。SB106、SB108についてはいずれもSA105より古い遺構であること、建物間距離が5尺(約1.5m)となり計画的に施工されたとみられる事から、同時期の建物と考えられる。また、SB108と109については、建物規模がほぼ同じであることから建替の関係にあると考えられるが、前後関係は不明である。

#### 江戸時代以降の遺構

SD201 L字形に屈曲する溝である。瓦(軒平瓦・軒丸瓦・棟瓦)、陶磁器を溝内に詰めており、暗渠として機能したものと考えられる。

#### IV 出土遺物

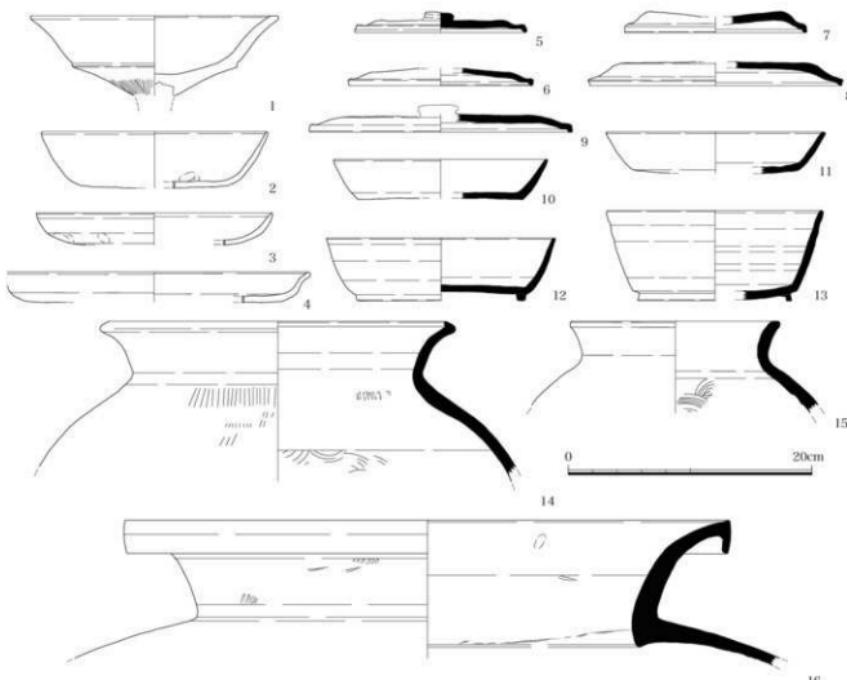
遺物整理箱で27箱分が出土した。主な出土遺物は、古墳時代前期の土師器(高杯ほか)、8世紀～9世紀の土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦(丸瓦・平瓦・鬼瓦)・磚・平安時代



SD 第41次調査 北側発掘区全景（南東から）



SD 第41次調査 南側発掘区全景（北東から）



SD第41次調査 SE115出土土器実測図(1/4)

末頃の巴文軒丸瓦(型式不明)、軒平瓦(西大寺362型式)、丸瓦、平瓦、江戸時代以降の陶磁器・瓦(棟瓦)である。以下、SK09出土土器とSE115出土土器について記述する。

SK09出土土器 土師器高杯杯部1点(1)が出土した。剥離が激しいが、杯部底面の外面をハケで調整している。復元口径19.9cm、残存高は6.5cmである。

SE115出土土器 遺物整理箱で計4箱分が出土した。ほとんどは抜取穴上層出土のものである。土師器杯A(2)、皿A(3・4)、須恵器杯蓋(5~9)、杯A(10~11)、杯B(12)、椀B(13)、甕(14~16)が出土した。

5~7はいずれも復元口径が14.2~14.8cm、残存高1.4~1.7cmと近似する。8は復元口径が20.6cm、9は口径21.0cmであり、5~7と比べやや大型であることから、皿B蓋の可能性もある。11の底部外面はヘラ切りのままで調整していない。12は13と比べ部はやや丸みを帯びる。

14は頭部に粘土の接合痕が残る。体部内面に同心円当て具痕が残る。15も同様に体部内面に同心円当て具痕が

残る。16は垂下口縁の甕であり、体部外面には格子目当て具、内面には同心円当て具痕が残る。西大寺旧境内の食堂院推定地からも口縁部が垂下する大型の須恵器甕が甕据付穴から出土している。甕据付穴については酒造りとの関連が指摘されている<sup>1)</sup>。

これらのSE115出土の土器は、器形や調整から8世紀末から9世紀初頭に位置付けられる。

#### V 調査所見

本調査では古墳時代前期の遺構および奈良時代の掘立柱塀・建物、井戸を検出した。奈良時代の遺構については、遺構の重複関係から4時期以上の遺構の変遷が想定される。また、掘立柱塀・建物は主軸が正方位を向くもの(SB107、SB111、SB112)と国土方眼方位北でやや東に振れるもの(SA104、SA105、SB106、SB108、SB109、SB110)に分けられ、時期差を示すものと考えられる。二坪内が長期にわたって宅地利用されていたと推測される。(高岡 桃子)  
1) 玉田芳英2002年「平城宮の酒造り」『文化財論叢』III

## 2. 史跡大安寺旧境内の調査

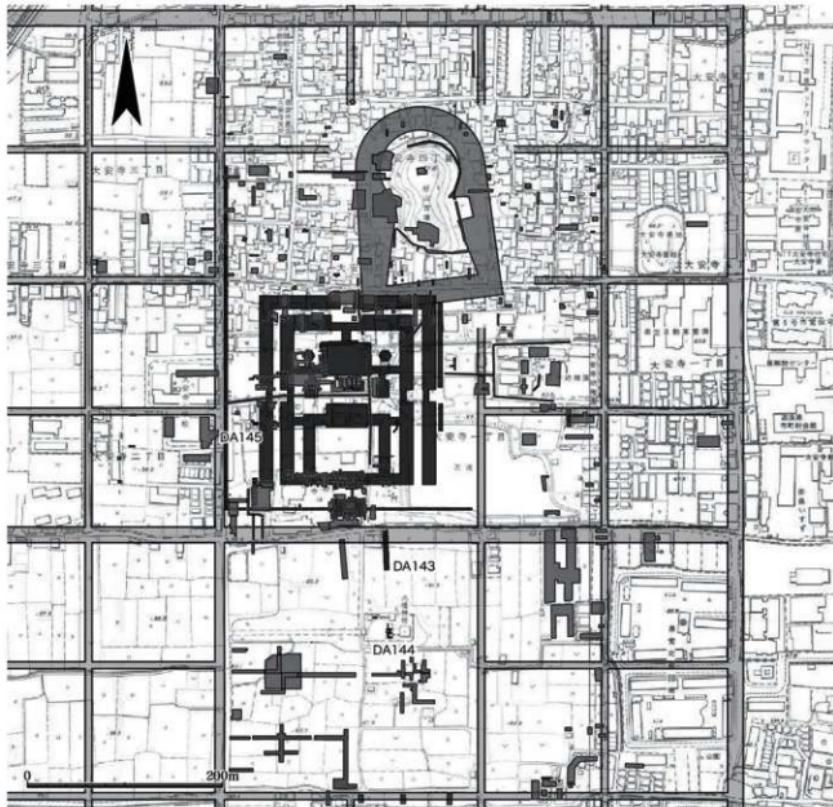
奈良市教育委員会では、平成29年度に史跡大安寺旧境内において3件の発掘調査を実施した。

第143次調査は、塔院の北辺を確認する調査で、第144

次調査は、解体修理に伴って最小限の発掘調査を実施した。第145次調査は、西小子房の推定位置にあたるが、建築前とみられる造成盛土の検出のみにとどまった。

史跡大安寺旧境内 平成29年度発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA 第143次調査	範囲確認調査	東九条町1308-1、ほか	2017.5.19～11.22	200m <sup>2</sup>	村瀬 陸
DA 第144次調査	奈良市指定文化財八幡神社中門附翼廊2棟の解体修理工事	東九条町1316番地	2017.11.6～11.17	17m <sup>2</sup>	永野 智子
DA 第145次調査	住宅の除去、地盤調査、住宅の新築	大安寺二丁目1310番5	2018.1.11～1.12	21m <sup>2</sup>	中島 和彦



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

## (1) 塔院・六条大路の調査 DA 第 143 次

### I はじめに

調査地は、史跡大安寺旧境内塔院北辺にあたり、事業地北端には平城京六条大路が推定される。調査地西約 50m で実施した DA 第 139 次調査では、六条大路の南側溝と推定できる東西溝を検出し、その 2m 南側で平行する東西溝を検出した。ほかに、奈良時代前半～中頃の井戸 1 基と、これ以後の掘立柱建物 1 棟を検出した。また、南半は 9 世紀初頭以降に整地がなされており、塔院の整備に伴うものであるとした。

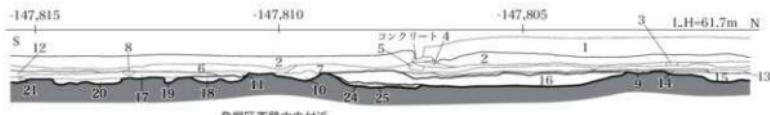
本調査は、六条大路の確認と、塔院北辺の様相を把握することを目的に実施した。

### II 基本層序

層序は発掘区内の南北で異なる。北側は、上から現代の造成土（厚さ約 0.30m）、黒褐色耕土（約 0.20m）、灰色床土（約 0.05m）、灰褐色土（約 0.15m）、褐色土（約 0.05m）と続き、現地表下約 0.75m で黄褐色土の地山となる。南側は、上から黒褐色耕作土（約 0.20m）、灰色床土（約 0.05m）、褐色土・灰色土混合土の上層整地土（約 0.30m）、茶褐色土の下層整地土（約 0.25m）と続き、現地表下約 0.80m で黄褐色土の地山となる。奈良～平安時代の遺構面の標高は概ね北側で 60.9m（地山上面）、南側で 60.6m（下層整地土上面）である。なお、上層整地土は出土遺物から 12 世紀以降であり、下層整地土はその上面で 9 世紀の遺構を検出したことからそれ以前の整地土である。



DA 第 143 次調査 発掘区全景（南東から）



発掘区西壁中央付近

発掘区西壁南側

1. 造成土（現代）	7. 灰色土・褐色ブロック土含む（床土）	13. 灰色粘質土	19. 黄褐色土
2. 黒褐色土（耕土）	8. 灰褐色土	14. 褐色土	20. 褐色土
3. 灰褐色土	9. 灰褐色土・褐色ブロック土含む	15. 灰色砂質土（SD04）	21. 褐色土
4. 褐褐色土・褐色ブロック土含む	10. 褐色土・瓦礫含む	16. 褐色土・瓦礫大量に含む（SK08）	22. 褐色土
5. 灰褐色土	11. 灰色土	17. 褐色土	23. 茶褐色土（下層整地土）
6. 灰色土（床土）	12. 褐色土・灰色土混合土（上層整地土）	18. 灰褐色土	24. 灰色土（SD02 上層）
			25. 黄褐色土（SD02 下層）

DA 第 143 次調査 発掘区西壁土層図 (1/100)

### III 検出遺構

主な遺構は、溝5条（SD01～05）、土坑4（SK06～09）、井戸1基（SE10）、掘立柱建物2棟（SB11・12）である。

**SD01～05** 調査地西約50mで実施したDA第139次調査では、六条大路南側溝が推定される位置で東西溝を検出し、この溝から南へ2mの位置で並行する東西溝を確認した。本調査では、この延長上で東西溝SD02・03を検出したことから、2条の溝は直線的に続くと考えられる。

また、SD02から北へ約15mの位置で東西溝SD01を確認した。本地点が六条大路推定地にあたるため、SD01（溝心X=-147,792.95m, Y=-17,066.50m）を北側溝、SD02（溝心X=-147,807.95m, Y=-17,066.50m）を南側溝、SD03を築地塀の雨落溝と考えることもできる。この想定については調査所見で検討する。

また、SD01は重複する南北溝SD04と交差する。SD04は出土遺物から12世紀以降であり、重複関係と合わせてSD01より新しい。SD01はSD04の掘削によって

壊されているため、発掘区内で確認したSD01は長さ約3m分に過ぎず、SD02・03のように東西に続く溝であるかは今後確認する必要がある。

SD01を北側溝とみた場合に想定される雨落溝の確認のため、発掘区の北東隅を拡張し、SD05を検出した。埋土は16世紀の備前焼甕を含む河川堆積であり、奈良時代の遺構は残存しないことがわかった。

**SK06・07** 埋土は1層からなる。砂砾層の地山部分には及ばないことから、粘土を探掘するために掘削され、すぐに埋められたと考えられる。

**SK08** 遺物整理箱100箱以上の土器・瓦類が出土した。SD02はこの遺物廃棄土坑埋土（12世紀）で埋められており、これが溝の廃絶時期を示す。

**SK09・SE10** SK09は方形を呈し深さ約0.1mの土坑である。機能は不明であるが、これを埋めた後、その上面から井戸SE10が構築される。SE10は遺跡保存のため上面を検出しただけで、方形縦板構造であるが、詳細な構造や深さ等は不明である。

**SB11・12** いずれも掘立柱建物であり、建物配置か



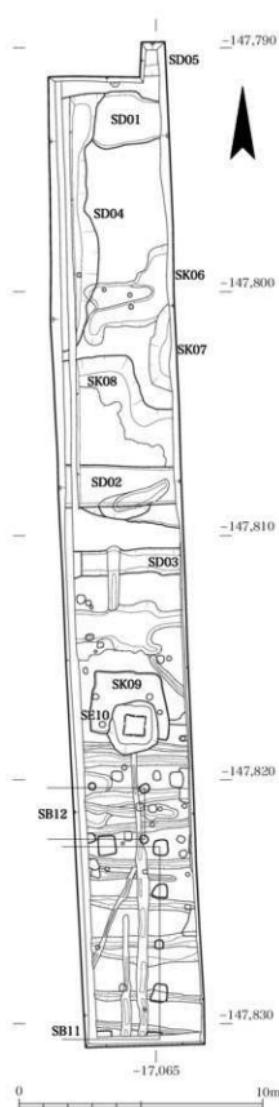
DA第143次調査 発掘区南半部 (北から)



DA第143次調査 発掘区南半部 (南東から)



DA第143次調査 土坑 SK09・井戸 SE10 (東から)

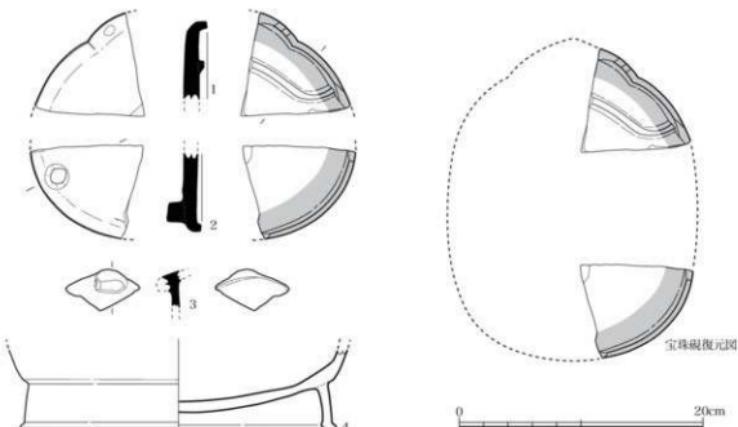


## DA第143次 遺構一覧

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ(m)	時期	出土遺物	備考
S D 01	東西	長さ 2.6 以上 × 幅 1.5 ~ 2.2	0.1	8世紀?	土師器(杯皿小片)、須恵器(壺M)、丸瓦	六条大路北側溝か。出土遺物は小片で少量。
S D 02	東西	長さ 4.4 以上 × 幅 1.5 ~ 2.2	0.3	8~12世紀	土師器(杯皿小片、壺)、須恵器(杯皿小片、壺)、黒色土器A類陶、丸瓦、平瓦	六条大路南側溝か。下層から9世紀の土器が出土し、その時期以降の掘り直しを確認。
S D 03	東西	長さ 4.4 以上 × 幅 1.0	0.1	8世紀?	土師器・須恵器小片	築地盤の雨落溝か。出土遺物は小片で少量。
S D 04	南北	長さ 10.4 以上 × 幅 1.4 以上	0.3	12世紀以降	土師器(杯皿小片、壺)、須恵器(杯皿小片、壺)、瓦器類、丸瓦、平瓦、鉄釘	
S D 05	東西	長さ 0.5 以上 × 幅 1.0 以上	0.4	16世紀以降	備前焼(壺)、平瓦	河川か

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ(m)	時期	出土遺物	備考
S K 06	不整形	3以上×3.4以上	0.3	8世紀後半~9世紀	土師器(杯皿小片)、須恵器(杯B、杯皿小片)、丸瓦、平瓦	粘土探掘土坑か
S K 07	不整形	0.8以上×3.4以上	0.4	8世紀後半~9世紀	土師器(杯皿小片、壺)、須恵器(杯皿小片、壺、甕、淨瓶)、丸瓦、平瓦	粘土探掘土坑か
S K 08	不整形	長さ 4.4 以上 × 幅 7	0.3	9~12世紀	土師器(杯皿小片、壺、高杯)、須恵器(杯A、杯B、皿、壺M、甕、淨瓶)、奈良三彩小片、宝珠碗、黒色土器A類陶、疑釉陶器(壺、火舍)、灰釉陶器碗、白磁、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、埴	8~9世紀の土器・瓦類が主体であるが、12世紀頃の白磁を含む。一層で埋まり、括縫繋ぎされた状況を呈するため12世紀頃に施業されたものとみられる。
S K 09	方形	2.6×3	0.1	~9世紀	土師器(杯皿)、須恵器(杯A、杯皿、壺、淨瓶)、瓦器類、丸瓦、平瓦	機能不明。瓦類碎片は上層の混入とみられる。
S E 10	不整形	2.2×2	0.9以上	9~11世紀	土師器(椀、皿、羽釜)、須恵器(壺)、丸瓦、平瓦	方形板組構造で板の厚さは約5cm。ほとんどが瓦類の出土。

遺構番号	棟方向	規模		桁行全長 (m)	梁間全長 (m)	桁行柱間寸法 (m)	梁間柱間寸法 (m)	備考
		桁行 × 梁間 (間)	(間)					
S B 11	南北?	4 × 1 以上	-	8.2	-	2.0 ~ 2.1	-	9世紀の土器類出土
S B 12	東西?	1 以上 × 1	-	-	2.1	2.1	2.1	



DA第143次調査 土坑SK08出土遺物 (1/4)

らみて2時期に分かれる。SB11の柱穴から9世紀の灰釉陶器が出土した。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で179箱分がある。内訳は、8世紀の土師器(杯、皿、甕、壺、高杯)・須恵器(杯、皿、甕、壺、淨瓶)・宝珠硯・陶硯・奈良三彩小片・軒丸瓦(17点)・軒平瓦(20点)・丸瓦・平瓦・博、9～10世紀の土師器(杯、皿、甕、壺、高杯)・須恵器(杯、皿、甕、壺)・黒色土器A類(椀)・綠釉陶器(椀・皿)・灰釉陶器(椀・皿)、12世紀の瓦器(椀)、16世紀の備前焼(甕)、時期不明の鉄釘である。

最も出土したのが瓦類である。軒丸瓦は、6091型式A種1点、6137型式A種5点、6138型式Cb種3点、6138型式E種1点、6138型式J種3点、6304型式D種2点、型式不明1点、軒平瓦は6702型式H種2点、6712型式A種13点、6712型式C種2点、6716型式C種3点である。大安寺式軒瓦を主とし、とくに6138Cb-6712Aの東塔創建瓦の組み合わせが多いことは、今回の発掘区が東塔北側の塔院北辺に位置することと整合する。

SK08から出土した宝珠硯(1・2)、陶硯(3)、綠釉陶器あるいは奈良三彩の火舎(4)を図示した。宝珠硯(1・2)は同一個体と考えられ、外面に自然釉が付着することから倒置焼成である。内面は綠部を一周立ち上げており、一部に海部をもつ。全面が滑らかであり使用感がある。2の外側には脚部が接合されている。史跡大安寺旧境内での宝珠硯出土は2例目である。陶硯(3)は小片で種類は不明であるが形象硯と考えられる。脚部が残存する。火舎(4)は底部片であり、やや足長の脚部が接合する。全体に摩滅しているが、胎土が綠釉陶器椀に類似することから、施釉品であると考えられる。

#### V 調査所見

本調査では、六条大路および塔院北辺の利用について重要な成果を得ることができた。

##### (i) 六条大路と塔の造営について

SD02・03はDA第139次調査で確認した六条大路南側溝に推定される溝とその築地雨落溝の延長上にあたることから、SD02を南側溝、SD03を築地雨落溝と考えることができる。今回の発掘区でこの付近の瓦類出土量が多いことは築地の存在を裏付ける。

次に、約15m北で検出したSD01は、幅がSD02と類似し北側溝である可能性がある。仮にこれを北側溝とした場合、道路心は $X=-147,800.45m$ ,  $Y=-17,066.50m$ となり、国第252次調査で検出した六条大路道路心( $X=$

$-147,799.03m$ ,  $Y=-18,359.17m$ )とほぼ一致する。

また、今回求めた道路心は南に位置する東西両塔とも興味深い相関性をもつ。つまり、両塔心(西塔心： $X=-147,935.50m$ ,  $Y=-17,176.00m$ 、東塔心： $X=-147,936.28m$ ,  $Y=-17,041.07m$ )の距離は134.93m≒380大尺であるが、塔心から北へ380大尺≒135.05mで今回想定した道路心に一致する。

以上の点から、検出したSD01を北側溝、SD02を南側溝とする六条大路が復原できる。さらに東西両塔は、この道路心を基準に施工された可能性がある。

##### (ii) 塔院北辺の利用について

大安寺旧境内の伽藍や院については『大安寺伽藍縦起并流記資財帳』とともに発掘調査成果を加味して復原されてきた。しかし、塔院については4町であること以外の記載はなく、資財帳作成段階では塔の造営が行われていなかつたと考えられている<sup>1)</sup>。よって、塔院に関する情報は史料からほとんど得ることができない。

本調査では、9世紀以前の整地土上面で9～10世紀末にかけての掘立柱建物と井戸を検出した。井戸は最終埋没時期が10世紀末以降であり、枠内未掘削のため使用開始期は不明確であるが、9世紀の土器が出土した掘立柱建物との位置関係から同時期に使用されたものと考える。また、整地についても正確な時期は不明であるが、DA第139次調査の成果から塔の造営に伴い行われたものと考えられる。

以上より塔院北辺の変遷をまとめると、まず塔の造営に伴い整地する。8世紀の遺構は築地塀のみで、DA第139次調査でも整地土上面で遺構はなかったことから、奈良時代には空闊地であったと考えられる。9世紀になると、掘立柱建物や井戸が構築され、塔院北辺部の利用が始まる。これら一連の遺構は、10世紀末には廃絶する。また、12世紀以降に再度整地が行われるが、DA第139次調査ではこの整地ではなく、塔院北東部に限られる可能性がある。これについては、現在も残る八幡神社との関連を想定できる可能性がある。

(村瀬 陸)

#### 註

1) 太田博太郎が指摘し、近年では上原真人もこれを支持している（太田博太郎 1979『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、上原真人 2014『古代寺院の資産と經營 寺院資財帳の考古学』すいれん舎）。

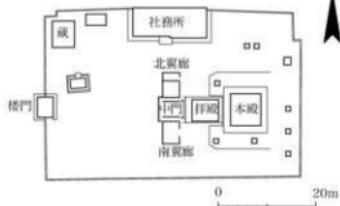
## (2) 塔院地区の調査 DA 第 144 次

### I はじめに

本調査は奈良市指定文化財八幡神社中門附翼廊2棟の解体修理に伴う現状変更等許可申請に係る発掘調査である。八幡神社は、大安寺の伽藍復元では「塔院」にあたり、東塔の北側に位置する。社伝では、行教和尚が入唐後帰朝の際、宇佐八幡宮に参籠して八幡神を遷座し、大安寺の鎮守としたことに始まるという。本殿は三間社流造で、文久3年(1863)の棟札があったと伝える。

中門は本殿の西側に位置し、桁行一間、梁行2間の四脚門で、建立年代は不明だが、建築様式から室町時代後期に建てられたものが、江戸時代初頭に改造を受けて現在の形になったと考えられており、「大乘院寺社雜事記」にみえる永正元年(1504)の八幡宮炎上後の建立とみられている。翼廊は南翼廊および北翼廊の2棟からなる。建立年代がやはり不明だが、建築様式から明治時代以降のものとみられている。いずれも桁行3間、梁行2間、床張りの開放的な建物であるが、北翼廊北端の1間は神饌所で柱間は漆喰壁等となっている。

八幡神社境内では境内北西で平成18年にDA第115次調査を行い、地山直上に平安時代後期以降の整地土B



八幡神社 社殿配置図 (1/1,000)



八幡神社 中門・翼廊全景 (解体前 西から)

(厚さ0.4～0.5m)が堆積し、その上に時期不明の整地土A(厚さ0.7m)が堆積することを確認している。

申請の工事は中門附翼廊の保存修理に伴い、建物基礎の新設、排水路改修などのためGL-0.48mまで掘削するもので、本掘削が史跡に影響を及ぼすかどうかを判断するため、発掘区を現在の中門・翼廊の基礎周辺に設定し、計画基礎底までの範囲で発掘調査を行った。

### II 基本層序

中門は上からコンクリート土間の下地である漆喰、中門整地である灰色粘土・黄白色粘土ブロックおよび花崗岩の碎片混じりの暗褐色細粒砂(厚さ約0.1m)、にぶい黄褐色極細粒砂(厚さ約0.15m)、灰黄色粘土混極細粒砂(厚さ約0.15m)、小礫・中礫混明赤褐色粘土混細粒砂(厚さ約0.2～0.3m)、暗褐色細粒砂混粘土(厚さ約0.1m)の順に堆積し、GL-0.75m(標高60.6m)で明赤褐色砂礫の地山に至る。翼廊部分にはにぶい黄褐色極細粒砂の上が三和土となる。翼廊床下と軒下部分には異なる土が入れられて叩き締められていた。

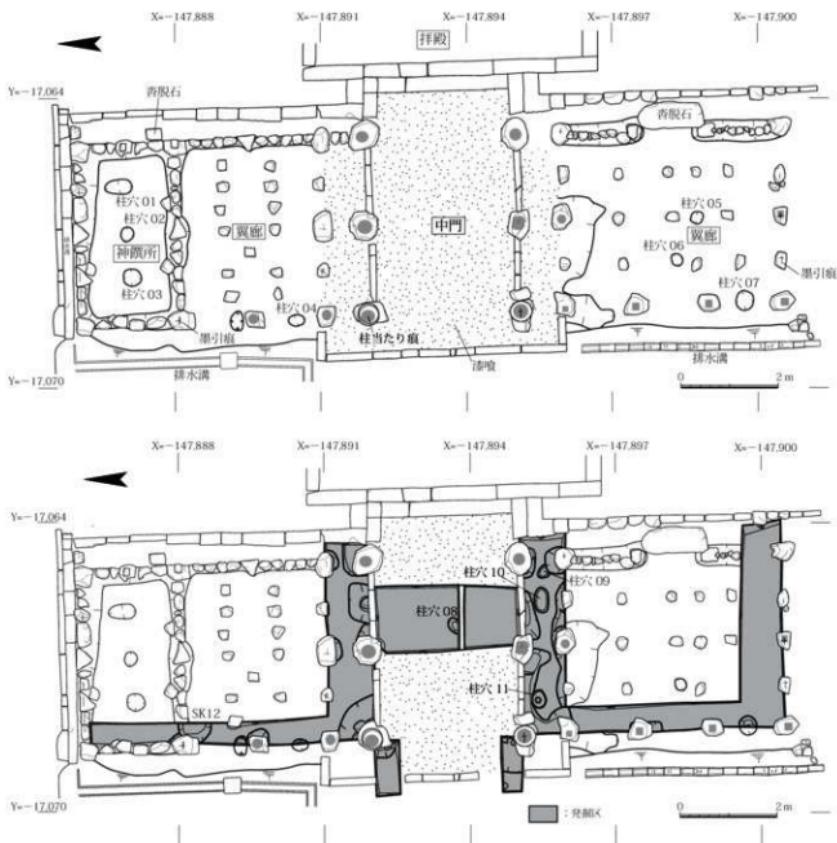
土質からみて、にぶい黄褐色極細粒砂から灰黄色粘土混極細粒砂までがDA115次調査の整地土A、小礫・中礫混明赤褐色粘土混細粒砂および暗褐色細粒砂混粘土が整地土Bに対応するものとみられる。整地土Bの下層(41)からは黒色土器A類碗片が1点出土しており、その上面は14世紀の遺構面となる。整地土Aは詳細な年代を特定できないが、鎌倉後期の軒丸瓦(174A)、室町時代前期の軒平瓦(248A)、室町後期の軒平瓦(247A)、中世の丸瓦・平瓦片、鬼瓦片などが出土している。

### III 検出遺構

柱穴11基(01～11)、土坑1基(SK12)、礎石の可能



八幡神社 中門・翼廊 (解体後北東から)



上：中門および翼廊解体後平面図、下：発掘区（中門漆喰下面および翼廊三和土下面）遺構平面図（1/100）

性がある石4つを検出した。

柱穴01～03は神龕所下の三和土上面で検出した柱穴で、床東の抜き取り穴と考える。埋土は縮まりのない黒褐色極細粒砂である。

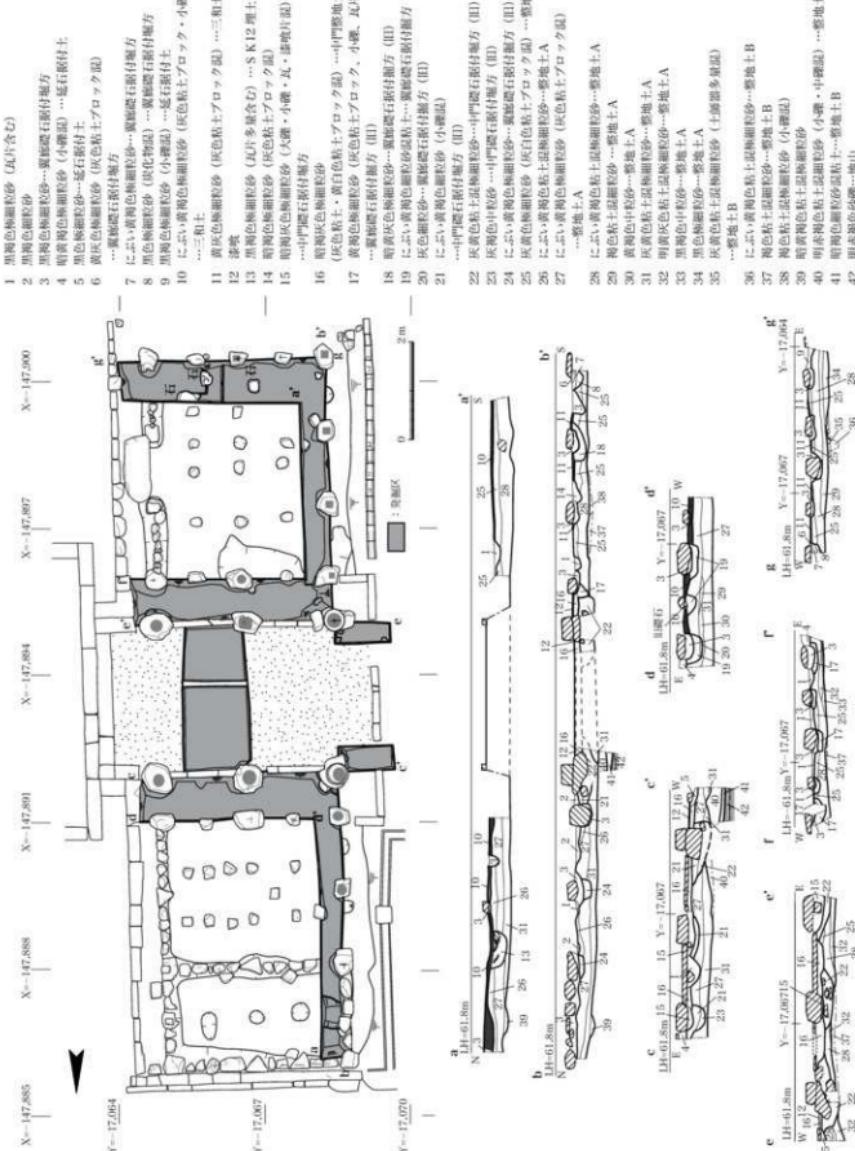
柱穴04は北翼廊下の三和土上面で、柱穴07は南翼廊の三和土上面で検出した柱穴で、礎石の抜き取り穴と考える。埋土は縮まりのない黒褐色極細粒砂である。

柱穴05・06は南翼廊下の三和土上面で検出した柱穴である。東西南北ともに他の床東と柱筋が揃っており、床東の抜き取り穴と考える。埋土は縮まりのない黒褐色

極細粒砂である。

柱穴08～11は中門漆喰直下で検出した柱穴である。柱穴08・10・11埋土には焼土が含まれており、柱穴11は壁面が熱焼していた。柱穴11埋土中から幕末の土師器皿片が出土した。

SK12は北翼廊西側の三和土下面で検出した土坑で、重複関係から神龕所の礎石据付穴より古い。幅は南北0.8m、検出面からの深さは0.3mである。埋土は縮まりのない黒褐色極細粒砂である。19世紀の陶磁器、瓦が多量に出土した。



DA第144次調査 整地土B上面平面図および土質図 (1/100)

南翼廊南端の整地土A下面で径0.3～0.5m大的石を3個検出した。明確な掘方は確認できなかつたが、平坦面を上にして据えられたものと考える。調査面積が狭く、その性格等は不明だが、石の周囲からは14世紀前半の土師器皿片が出土しているので、この時期に一体の整地を行って建物の造営等がなされた可能性がある。なお、遺構の詳細が明らかではなく、石が礎石である可能性もあることから、掘削はこの14世紀の整地層上面で留めることとした。この遺構面の深さは最高でGL-0.4mであるため、この面を保護すべく基礎の設計変更を行つた。

#### IV 出土遺物

出土した遺物は、8～9世紀の黒色土器A類片、13～14世紀の土師器・瓦器・丸瓦・平瓦、室町時代の軒丸瓦(174A)・軒平瓦(205B・247A・248A)・鬼瓦・丸瓦・平瓦、18～19世紀の土師器・陶磁器・巴紋軒丸瓦・橘紋軒平瓦・丸瓦・平瓦で、遺物整理箱11箱分がある。

#### V 調査所見

中門 西側控柱の礎石は2石が上下に重なつており、調査前から下段の石が露出していた。下段の石は中門漆喰下の整地土A上面から掘り込まれており、建立当初に据えられて以降、動いていないものと考える。礎石下には根石が入れられていた。礎石据付坑埋土からは時期のわかる遺物の出土はなかつたが、柱穴が掘り込まれている整地土Aからは室町時代後期I(1430～1490)に位置づけられている軒平瓦247Aや中世の丸瓦・平瓦が出土しているので、当初想定されていた永正元年(1504)の火災後の建立との見方と齟齬はない。一方、親柱および東側控柱の礎石は、上面レベルが西側控柱下段の石より約0.2m高く、西側控柱上に別の石が乗せられたのと同時に据え直されたものである。親柱および東側控柱の礎石据付穴は、埋土が縮まりのない暗褐色極細粒砂(15)で、中門漆喰下の整地土(16)上面から掘り込まれている。中門漆喰下の整地土(16)からは19世紀の国産青磁の細片が出土しているので、礎石の嵩上げは19世紀以降である。

ところで、八幡神社は文久3年(1863)に本殿の建て替えが行われている。遺物の総量が少ないので明確ではないが、中門周辺からは19世紀前半～中頃の土師器皿や京・信楽系陶器の破片が出土しているものの、確実に19世紀後半以降とみられる遺物は出土していない。このことから、中門は幕末に本殿建て替えに伴う周辺整備

に合わせて礎石の嵩上げがなされ、それ以降には礎石を据え直すような改修はなされていないものと考える。中門下で検出された柱穴08～11も幕末の改修時のものであろう。親柱および東側控柱の礎石据付坑直下には、建立当初のものとみられる礎石壊方(21～23)が確認できたが、時期のわかる遺物の出土はなかつた。

翼廊 翼廊下の三和土(10・11)は近代の土坑SK12上面に施されていたので、三和土が当初からなされていたものと考えるならば、翼廊の建立は近代以降である。ただし、北翼廊南妻柱列・西側柱列・南翼廊北妻柱列では中門同様に現在の礎石据付穴の下に重複する柱穴掘方(17～20・24)があり、北翼廊南妻柱列の東から2つ目の礎石直下には一段階前の礎石が残存していた。この礎石は整地土A上面に据えられていた。旧の柱穴埋土は、現礎石掘方理土よりも縮まりのあるにぶい黄褐色極細粒砂である。三和土との重複関係や埋土の縮まり具合などからみて、江戸時代以前のものである可能性が高いが、南翼廊の南側発掘区では下に重複する柱穴がなく、現翼廊とは異なる柱配置の建物が建っていたと考える。さらに、神饌所下部では三和土の上面で床東の抜き取り穴(柱穴01～03)を検出した。これらは現在の床東と異なる位置にあるので、神饌所部分については近代の造営後、床の構造が変わるような改修が行われていると考える。

中門建立以前 今回の調査では室町後期以降の整地土Aと14世紀前半以前の整地土Bを確認した。DA第115次調査では整地土Bの上面は60.7～60.8m、地山の検出レベルは60.3～60.4mである。両レベルとも今回の検出レベルより0.2から0.3m程低いが、土質からみて両調査の整地土A・Bは対応するものと考える。整地土B上面で14世紀前半の礎石の可能性がある石を3個検出した。調査面積が狭く、遺構の性格や広がりについては不明であるが、DA第115次調査でも整地土B上面で石列が確認されており、この時期に八幡神社境内で建物の造営がなされた可能性がある。14世紀以前の状況は、今回の調査でも明らかにすることができなかつた。

(永野 智子)

#### 【参考文献】

- 奈良国立文化財研究所 1985『奈良県の近世社寺建築』奈良県教育委員会文化財保存課
- 平安時代以降の軒瓦の型式は下記文献による。
- 原田進二郎 2006『大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦』『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成18(2006)年度』奈良市教育委員会

DA 第 141 次調査  
北翼廊 柱穴 01 ~ 03 検出状況（西から）



DA 第 141 次調査  
中門西側控柱 碓石および根石（北東から）



DA 第 141 次調査  
南翼廊 発掘区南側完掘状況（西から）



### (3) 西小子房推定地の調査 DA 第 145 次

#### I はじめに

調査地は、大安寺の伽藍復原によると西面中房の西側に推定されている西小子房の位置にある。現状の西小子房推定地は、隣接する西側の土地より一段高い高まりとして南北に続いている。

調査地内では、昭和 51 年度に奈良県立橿原考古学研究所が現状変更に伴う発掘調査(76-1、76-4)を行なっており、奈良時代の瓦を多量に含んだ焼土層を確認しているが、大安寺に関わる遺構は見つかっていない。

今回の調査は、建物建設部分での遺構の有無確認を目的とし、さらに奈良県発掘区の正確な場所の確認も視野にいれて発掘調査を行った。

#### II 基本層序

発掘区内の層序は、発掘区東側で表土層の黒褐色土(0.2 m)、明茶褐色土(0.2 m)、暗灰褐色砂質土(0.4 m)、灰褐色砂質土(0.1 m)とつづき現地表下 0.9 m で淡灰褐色砂礫の地山となる。なお最下層の灰褐色砂質土は発掘区西側では存在しない。地山上面の標高は約 60.05 m である。遺構面は上下 2 面あり、発掘調査は平安時代の遺構面である明茶褐色土層上面(上層遺構面・標高約 60.8 m)で遺構検出を行い、発掘区南端の試掘部分で地山面(下層遺構面)を確認した。

#### III 検出遺構

時期不明の素掘小溝 2 条・小柱穴 1、現代の土坑を検出したが、西小子房に関わる遺構は確認できなかった。

発掘区中央南側にある、平面長方形の現代の土坑(東西 1.1 m、南北 2 m 以上)は、平面・断面形状から、奈良県調査(76-1)の発掘区と考えられる。

#### IV 出土遺物

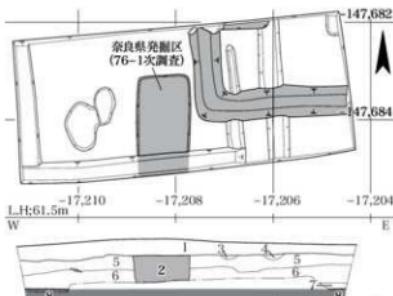
遺物整理箱 4 箱分の土器類・瓦類が出土した。多くは明茶褐色土と暗灰褐色砂質土からの出土で、古代の瓦類が主体を占める。またこれらの層からは、9世紀頃の土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。

#### V 調査所見

調査の結果、西小子房の遺構は確認できなかつたが、9世紀代と考えられる遺物包含層(明茶褐色土層以下)を確認した。調査地北側の道路部分での発掘調査(DA 第 68 次調査)では、現地表下 0.5 ~ 0.7 m の標高約 61.1 m で凝灰岩粉末を上面に散布した堆積土層と、この層上面から 10 世紀前半の遺構を確認している。



DA 第 145 次調査 発掘区全景 (北西から)



DA 第 145 次調査 遺構平面図・発掘区南壁土層図  
(1/100 土層図は南壁を反転 淡い網掛け部分は現代の搅乱)

また、調査地南約 60 m の発掘調査(DA 第 28 次調査)では、西小子房を検出している。西小子房は現地表下 0.4 m の標高約 60.7 m の基壇盛土層上面に築かれており、さらにその下 0.3 m の地山上面で柱穴が確認された。西小子房の築造時期は 10 世紀前半以前と考えられ、基壇盛土の年代もそれ以前となろう。

調査地南北で行われた 2 件の発掘調査では、いずれも地山上面と 10 世紀前半以前の土層上面の 2 面の遺構面を確認している。今回の発掘区でも 2 面の遺構面を確認し、上層遺構面の形成時期も 9 ~ 10 世紀頃とほぼ同じ頃である。これらの土層が一連のものと考えると、西面中房の西側部分では、この頃に大きな造成が行われ、調査地から南につづく現在の高まりが形成されたものと考えられる。この盛土上の南側には西小子房が建築されているが、残念ながら西小子房が当調査地まで続いているかは不明である。

(中島 和彦)

### 3. 新薬師寺旧境内・奈良町遺跡の調査 SY 第 11 次

事業名	店舗付住宅	調査期間	平成 30 年 2 月 26 日～3 月 2 日
届出者名	個人	調査面積	92m <sup>2</sup>
調査地	高畠町 1350 番 1 他 2 筆	調査担当者	中島 和彦

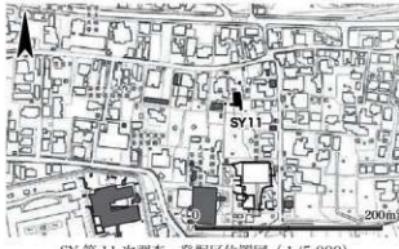
#### Iはじめに

調査地は、新薬師寺旧境内の北東隅にあたり、南側約 70m には現在の新薬師寺本堂がある。調査地と本堂の間を最高所として、北へ下がる緩斜面地に調査地がある。また調査地北側には東西にはしる柳生街道が隣接しており、この街道沿いに高畠町の街区が形成されている。

調査地周辺では過去に数回の発掘調査が行われているが、古代の新薬師寺に関わる遺構は確認されず、中近世の遺構が確認されている。

今回の発掘調査地は、柳生街道の南に面する南北に長い敷地で、周辺一帯は東から西へ下降する斜面地を雛壇状に造成して宅地化しており、街道に面する調査地北端は高さ約 2.5m の石垣となっていて。道路に面する敷地北側部分を幅約 5m にわたって道路路面まで切り下げ駐車場をつくり、敷地奥側に建物を建築する計画であり、宅地内の遺構の有無を確認するために事前の試掘調査（試掘 2017-01）を実施した。

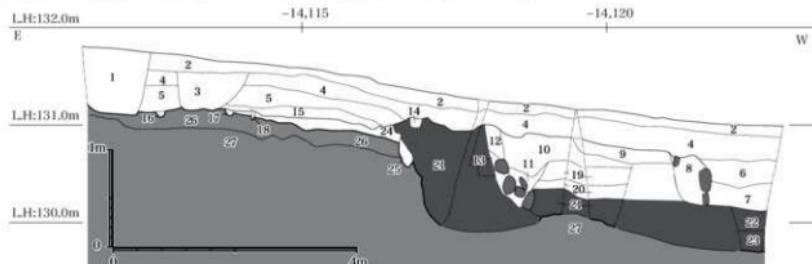
試掘調査の結果、中近世の遺構が確認され、敷地奥の一帯高まった部分に中世以前の遺構が存在することが判明した。発掘調査はこの部分で実施したが、調査前の家屋解体時に遺構面が一部削平されてしまった。発掘調

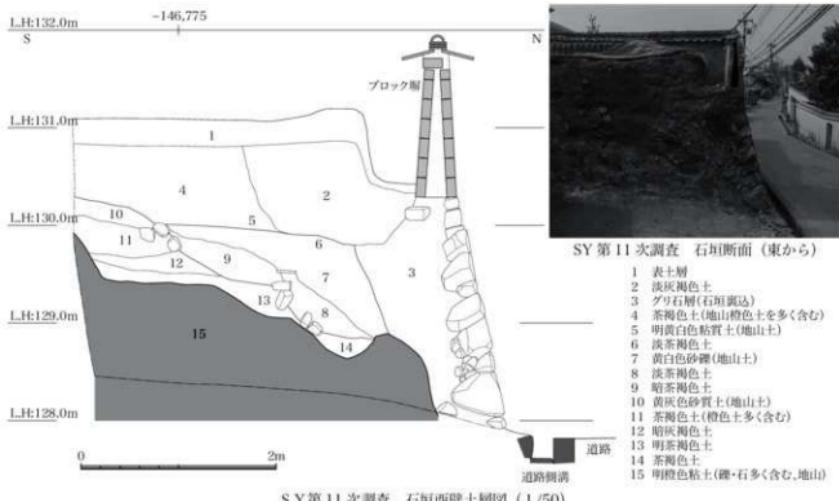


査は基礎掘削深度までの掘削とし、発掘区北西部では遺構面まで掘削が達しないため近現代の堆積層上面で調査を止め、また遺構も底まで掘削したものは一部に止まつた。道路側の石垣部分は、工事の工法上発掘調査が難しく立会調査とし、土層断面を記録した。

#### II 基本層序

発掘区内の層序は、発掘区南東部で上から表土層(0.2m)、暗褐色土(0.15m)、灰褐色土(0.25m)で、地表下約 0.6m で暗黄褐色粘土の地山となる。地山の標高は南西隅の 131.2m が最高所で、北西方向に向かって下降していく。





柳生街道沿の石垣の土層断面調査では、南から北へ下降する地山と、その上に法面を成形する盛土を確認するとともに、石垣の裏込めの状態が判明した。盛土の層界には石が重なってある部分があり、一部簡易な石垣があったことが想定される。盛土の11層からは、16世紀頃の信楽産鉢が出土したが、盛土の正確な時期を確定するには至らなかった。

### III 検出遺構

室町～江戸時代の土坑4基、小柱穴1基、埋葬構造1基があり、この他発掘区北半で近現代の土坑を確認した。

発掘区内西側は壠壇状に切り下げられており(SX01)、3回にわたって埋立てが行われている(SX01-1～3)。また、SX01-1と-2の法面には石垣が築かれている。SX01-1からは14世紀前半頃、SX01-2からは15世紀後半頃と18世紀頃、SX01-3からは18世紀以降の土器が出土した。SX01-2の石垣西側からは、15世紀後半頃の土器がまとめて出土し、室町時代後期に形成され江戸時代まで機能していたことがわかる。東西の宅地境界を示す段差と考えられる。

SK03は東西1.4m以上、南北1.6mの平面楕円形の土坑で、15世紀頃の土器が出土した。

SK04は石組土坑と考えられ、東西約1.3m、南北約2.1mの平面楕円形掘形の中に、石組みの一部が1段分残る。16世紀頃の土器が出土した。

SK05は東西約1.3m、南北約1.7mの平面楕円形の土

坑で、18世紀頃の土器が出土した。

SX02は瓦質土器深鉢1個を埋設した埋葬構造で、瓦質深鉢は径約55cmあり、底部から約30cm分が残存する。16～17世紀頃と考えられる。

また発掘区外東に、開口した井戸が1基ある。内法が径約0.9mの円形で、深さ8m以上ある。上から約0.5mまでが石組みで、以下約3.0mまで素掘り、その下から石組みで、それ以下は水が溜まり確認できなかつた。奈良町遺跡の素掘りの井戸の一例として報告する。

### IV 出土遺物

遺物整理箱8箱分の土器類・瓦類が出土した。以下、SX01出土遺物を報告する。

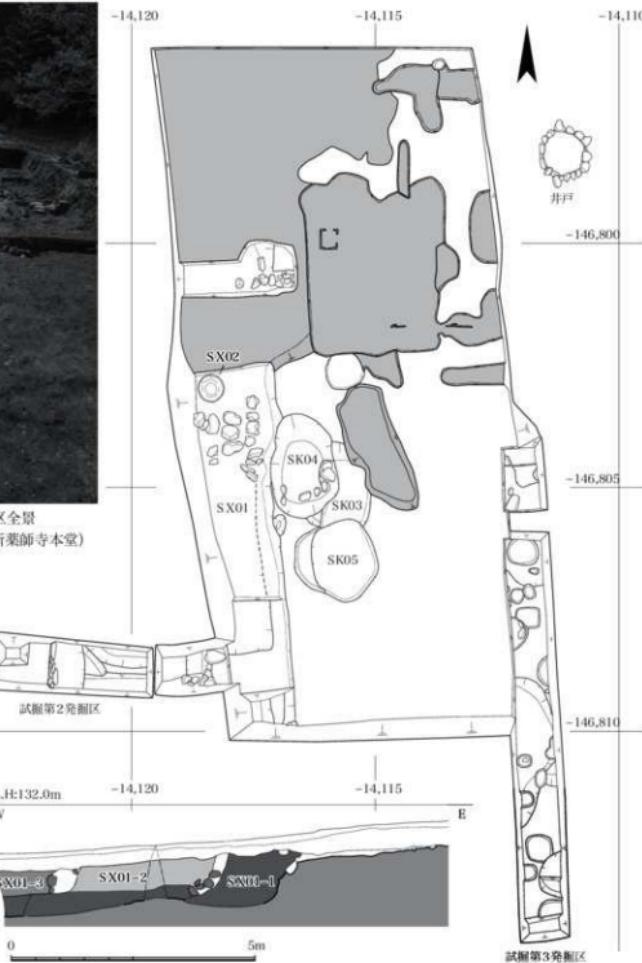
SX01からは、440点の土器類と少量の丸瓦・平瓦が出土し、その内訳を一覧表に記す。SX01-1出土の土器(1～8)は14世紀前半、SX01-2のもの(9～28)は15世紀後半頃のものと考えられる。

SX01-1出土の土師器皿には、胎土が赤褐色系のもの(1～5)と、白色系の胎土のもの(6・7)がある。前者は口径8cm台の小皿と11cm台の大皿が主体となるが、やや型式的に古いものも若干ある。土師器羽釜(8)は口幅が短いのが特徴である。

SX01-2出土の土師器皿には、胎土が赤褐色系のもの(10～15)と、灰色系の胎土のもの(15・22)、その他(9)がある。褐色系の皿は口径が6～7cm台のものが多く、8



SY 第11次調査 発掘区全景  
(北から、奥の瓦葺き屋根が、新薬師寺本堂)



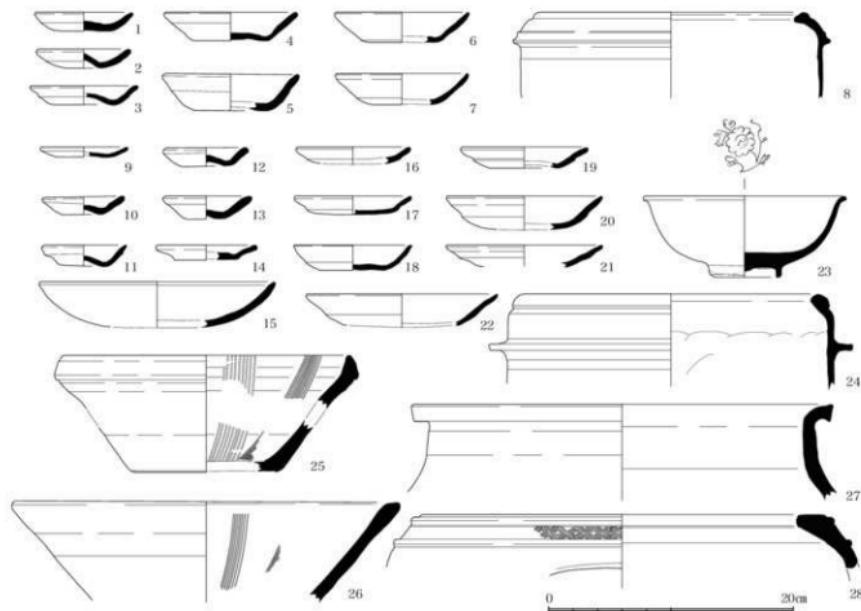
SY 第11次調査  
発掘区外井戸 (西から)



試掘調査 第2発掘区 (南西から)



試掘調査 第3発掘区 (南西から)



SY 第11次調査 出土土器 (1/4)

SY 第11次調査 SX01 出土土器点数表

種類	产地等	器種	SX01-1		SX01-2		
			点数	出土比率	点数	出土比率	
土師器	褐色系 (a) 群	皿	62	67.39%	48	13.79%	
	白色系 (b) 群	皿	14	15.22%	3	0.86%	
	灰色系 (c) 群	皿	0	0.00%	71	20.40%	
	他	皿	0	0.00%	2	0.57%	
		羽釜	10	10.87%	177	50.86%	
		小計	86	93.48%	301	86.49%	
瓦質土器	埴林	桶鉢	0	0.00%	15	4.31%	
		浅鉢	0	0.00%	4	1.15%	
		深鉢	0	0.00%	2	0.57%	
		鉢類	0	0.00%	11	3.16%	
		羽釜	0	0.00%	1	0.29%	
	火消壺	火消壺	0	0.00%	1	0.29%	
		風呂	0	0.00%	1	0.29%	
		不明	0	0.00%	1	0.29%	
		小計	0	0.00%	36	10.34%	
		鉢	2	2.17%	0	0.00%	
須恵器	東播系	甕	0	0.00%	1	0.29%	
		小計	2	2.17%	1	0.29%	
	常滑・渥美	甕	4	4.35%	1	0.29%	
	瀬戸・美濃	甕	0	0.00%	1	0.29%	
国産陶器	備前	桶鉢	0	0.00%	2	0.57%	
		小計	4	4.35%	4	1.15%	
	輸入陶磁器	青磁	碗	0	0.00%	6	1.72%
		合計	92	100.00%	348	100.00%	

cm台の14はやや型式的に新しいものと考えられる。15は復原口径19.2cmで出土例は少ない。灰色系の皿は口径6~16cm台まで各種あり、9~12cm台のものが多い。9は、粘土円盤端部を少し立ち上げ口縁部とした浅い皿で、類例は奈良町遺跡内では聞かない。

26と28は瓦質土器である。28の風呂は、口縁部外面に2条の凸帶を貼付け、凸帶間に連続したスタンプ文を施す。

23は龍泉窯系の青磁碗、25は備前産陶器の桶鉢、27は常滑潜産陶器の甕である。これら陶磁器類は大和産の土師器・瓦質土器に比べ年代的にやや古いものである。

#### V 調査所見

調査の結果、新薬師寺に関する遺構は今回も確認できなかった。調査地内では、14世紀前半頃には宅地が東西に分割され、以後江戸時代まで改変を加えながら存続したことが判明した。明治時代初頭の高畠町の絵図には、調査地が東西2筆の宅地として描かれており、明治時代中期の地籍図には調査地は1筆となっていることから、この間に東西2つの土地を1筆に合わせて現在の敷地が形成されたことがわかる。

(中島 和彦)

#### 4. 平城京跡（左京五条四坊）の調査

本調査は、奈良市が進めるJR奈良駅南特定土地区画整理事業（総面積14.6万m<sup>2</sup>）に係り、実施したものである。当事業地は、平城京の左京五条四坊の北半分8坪分に相当し、奈良市教育委員会では、平成13年度から当事業地内での発掘調査を順次進めており、平成28年度までに約43,760m<sup>2</sup>の発掘調査を実施している。

平成29年度は、社会資本整備結合交付金事業として、平城京の条坊復元で左京五条四坊二坪にあたる箇所で、1件の発掘調査を実施した（第713次調査）。二坪内では、4回目の調査である。

本報告は、第713次調査に加えて、平成23年度に実施した第649次調査、平成28年度に実施した第701次調査とを合わせて報告する。第649次・第701次調査は、いずれも左京五条四坊八坪の北西部部分にあたり、発掘区が隣接しているため、一括して報告する。なお、八坪内の調査報告例としては、これが初となる。

報告に際しては、古墳時代以前の遺構には2桁、奈良時代以降の遺構には3桁以上の遺構番号を付している。これらは、当事業に係る調査で設定している遺構番号であり、条坊遺構、坪ごとに設定した通し番号である。

JR奈良駅南特定土地区画整理事業地 発掘調査一覧（本書掲載分）

調査年度	調査次数	事業名	遺跡名	調査面積	調査期間	調査地	調査担当者
平成23年度	HJ第649次	都市再生整備事業 (平成22年度継続)	平城京跡 (左京五条四坊八坪)	804m <sup>2</sup>	H23.6.29～11.4	大森西町172-1	大原 錠
平成28年度	HJ第701次	社会資本整備結合 交付金事業	平城京跡 (左京五条四坊八坪)	538m <sup>2</sup>	H28.6.1～8.30	大森西町167-1、167-6	池田 裕美 永野 哲子
平成29年度	HJ第713次	社会資本整備結合 交付金事業	平城京跡 (左京五条四坊二坪)	577.4m <sup>2</sup>	H29.8.3～10.31	大安寺七丁目653-1、ほか	吉田 利朋



JR奈良駅南特定土地区画整理事業地内 発掘調査位置図（1/4,000）  
(黒塗表示、太文字：本書掲載、数字は調査次数、太線枠が事業地内)

# (1) 平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査 第649次・第701次

## I はじめに

調査地は平城京の条坊復元によると五条四坊八坪の北西隅に位置する。敷地西辺には東四坊坊間西小路が想定される。同坪内での調査は今回報告する市HJ第649・701次調査が初めてである。

これらの調査は、八坪の土地利用の様相確認と東四坊坊間西小路東側溝の確認を主目的として行った。

なお、耕土置き場確保のため、市HJ第649次調査は南北2回に分けて、市HJ第701次調査は4回に分けて調査を行った。

## II 基本層序

発掘区内の基本層序は、上から耕土（厚さ約0.2m）、床土（厚さ約0.1m）、茶灰色土（厚さ約0.1m）、灰黄色粘質土（厚さ約0.1m）と続く。市HJ第701次発掘区では、耕土の上に造成土が約1.3m堆積する。市HJ第649次調査発掘区では現地表下約0.3～0.6mで、市HJ第701次調査発掘区では現地表下約1.8mで、黄灰色シルトの地山と、古墳時代以前の河川堆積土である灰色粗砂に至る。河川は市HJ第649次調査発掘区を南北に蛇行して走り、発掘区南端で、市HJ第701次調査発掘区を横切る東西方向の河川と合流する。河川堆積土からは弥生時代前期～後期の土器が出土した。奈良時代の遺構検出はこの灰色粗砂と黄灰色シルトの地山上面で行った。遺構面の標高は概ね61.6mである。

## III 検出遺構

検出した遺構は、東四坊坊間西小路東側溝（SD1006）、素掘り溝6条（SD101～104）、門3棟（SB202～204）、

掘立柱建物11棟（SB205～207・209～211・214・217～219・221）、掘立柱脚8条（SA201・208・212・213・215・220・222・223）、土坑2基（SK601・602）、橋1基（SX801）がある。各遺構の概要は一覧表にまとめた。以下、主要な遺構について述べる。

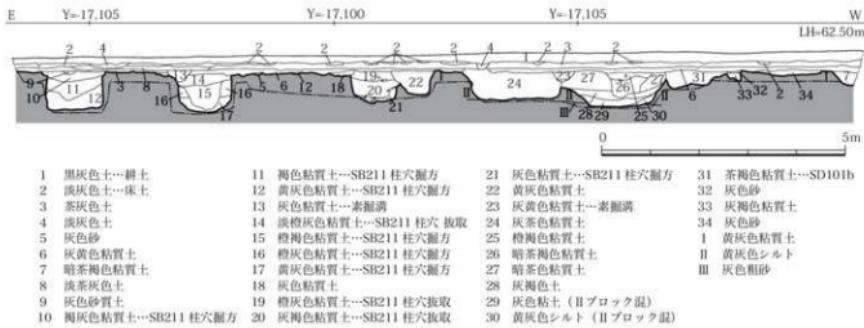
SD1006は、幅0.4m以上、深さ0.3m以上の南北溝で、溝の東肩部分を検出した。位置関係や、後述する南北溝SD101・八坪西面築地塀SA201の存在から、東四坊坊間西小路東側溝と判断できる。埋土は暗茶褐色粘質土である。

このSD1006とその東側にある南北溝SD101に挟まれた約2.5mの空閑地には、築地塀成土などの痕跡はなかったものの、八坪西面築地塀SA201を想定できる。この空閑地には、他に門SB202～204、暗渠SD102がある。

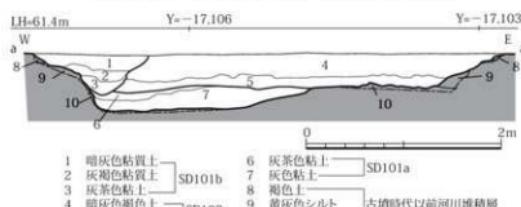
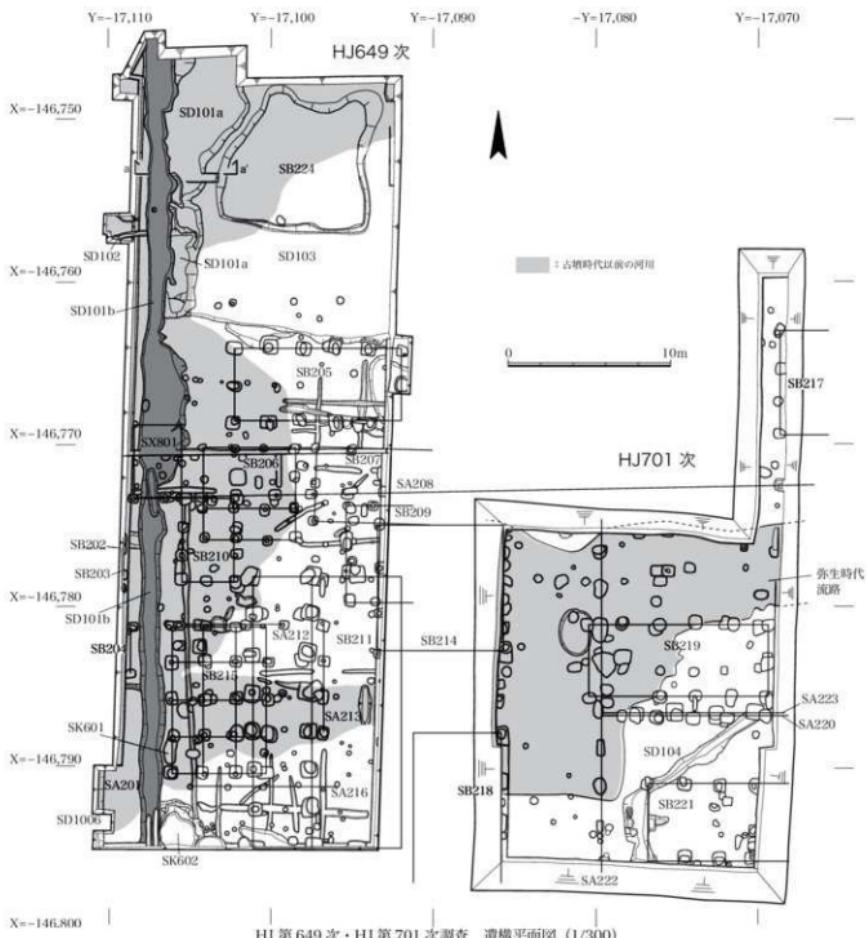
門SB202・203は、柱掘方の検出が東半部にとどまるが、空閑地内の東西中央に位置することから、八坪の出入口となる門と考える。近接する位置で南から北へ建て替えており（SB203→SB202）、柱間はいずれも南北1間（2.7m）である。

門SB204は、柱掘方が宅地寄りに位置する。築地構築時の腰板留めの可能性もあるが、これらに統く柱穴がないことや、坪南北1/3ライン付近に位置することから、八坪の出入口となる門と考えた。柱間は南北1間（2.7m）である。

暗渠SD102は、溝底の標高が東から西へ向けた下り勾配であることや、位置関係から後述するSD101から



HJ第649次調査 発掘区南壁土層図(1/100)



HJ 第649次調査 SD101a・101b・103断面土層図 (1/50)



HJ 第649次調査 北側発掘区全景（南西から）



HJ 第649次調査 南側発掘区全景（北から）



HJ 第701次調査 東側発掘区全景（南から）



HJ 第701次調査 北西側発掘区全景（南東から）



HJ 第701次調査 南側発掘区全景（北東から）



HJ 第701次調査  
溝 SD104 石・瓦出土状態（北東から）

遺構（建物）一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）		桁行全長（m）	柱間寸法（m）		廻の出	柱穴の深さ（m）	備考
		桁行×梁行	桁行		梁行	柱行			
SA201	南北	—	—	—	—	—	—	—	八坪西面築地解説
SB202	南北	1	2.7	—	2.7	—	—	0.5	道路心の北から1/3ラインに位置することから、門の可能性がある。重複関係からSB203より新しい。
SB203	南北	1	2.7	—	2.7	—	—	0.4	道路心の北から1/3ラインに位置することから、門の可能性がある。重複関係からSB202より古い。
SB204	南北	1	2.7	—	2.7	—	—	0.2～0.3	坪内の北から1/3ラインに位置することから、門の可能性がある。
SB205	東西	5×2	10.5	4.8	2.1等間	2.4等間	—	0.5～0.7	
SB206	東西	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	1.8	0.1～0.5	南面付。重複関係からSB210より新しい。
SB207	東西	2以上×2	4.0以上	4.8	2.4	2.4等間	—	0.3～0.6	発掘区外東へ続く。
SA208	東西	7以上	15.3	—	西から2.1-2.1-2.1-2.4-2.1-2.1	—	—	0.4	重複関係からSB206・210より古い。
SB209	南北	3×1以上	5.4	1.8以上	1.8等間	1.8等間	—	0.3～0.5	重複関係からSB211より古い。発掘区外東へ続く。
SB210	南北	3×2	5.1	3.6	北から1.8-1.8-1.5	1.8等間	—	0.3～0.4	重複関係からSA208より新しく、SB206より古い。
SB211	南北	7×2	16.8	6.3	2.4等間	2.7	3.6	0.6～0.9	西面付。重複関係からSB210より古く、SB209・215より新しい。発掘区外東へ続く。
SA212	東西	4	6.3	—	西から1.5-2.4-2.4	—	—	0.4～0.5	重複関係からSB215より新しい。
SA213	南北	4	3	—	2.1等間	—	—	0.3～0.5	重複関係からSB211より新しい。
SB214	東西？	3×3	—	8.1	—	2.7	—	0.5～0.6	鰐柱建物か、東西にずれかに瘤がつく。
SB215	南北	4×3	9.6	6.3	2.4等間	2.1等間	—	0.3～0.5	鰐柱建物。重複関係からSB211・SA212より古い。
SA216	東西	4	9.6	—	2.4等間	—	—	0.3～0.5	
SX801	南北	2×1	4.8	2.7	2.4等間	2.7	—	0.1～0.3	坪内の1/4ラインに位置することから、八坪西面の南北溝SD101に架かる橋。
SB217	南北？	3×1以上	6.6	—	北から2.4-2.1-2.1	—	—	0.2～0.4	発掘区外東へ続く。
SB218	南北	2以上×1以上	5.4以上	—	2.7	—	—	0.2～0.4	
SB219	東西	5×2	12	4.8	2.4等間	2.4等間	—	0.2～0.5	抜き取り穴より丸瓦I・II類、平瓦I～VII類、熨斗瓦出土。
SA220	東西	4以上	8.4	—	2.1等間	—	—	0.4	重複関係からSD104・SA223より新しい。丸瓦I・II類出土。
SB221	東西	3以上×2	6.3	4.8	2.1等間	2.4等間	—	0.5～0.9	重複関係からSD104より新しい。
SA222	南北	8以上	19.2	—	2.4等間	—	—	0.6～1.0	
SA223	東西	3以上	7.2	—	2.4等間	—	—	0.7～0.8	重複関係からSA220より古く、SD104より新しい。
SB224	—	—	—	—	—	—	—	—	礎石建物が存在した可能性。

東四坊坊間西小路東側溝SD1006へ排水する築地暗渠と考える。暗渠SD102は幅0.3～0.4m、深さ0.2mで、溝方向は西で南にやや振れている。溝は垂直に掘り込まれており、底面は平らな形状を呈する。溝内に木樋などは遺存していなかった。埋土は茶褐色粘質土である。重複関係からSD101bより古い。

八坪西面築地SA201の宅地側には、東四坊坊間西小路東側溝SD1006と平行する南北溝SD101がある。位置関係から八坪西辺を限る築地塀SA201の雨落溝と判断した。八坪西辺を限る南北溝SD101は、重複関係から新旧2時期があり、古い順からSD101a、SD101bとする。SD101aはY=-146,772.0m以北で検出し、後述する区画溝SD103と合流する。幅は1.6～5.8m、深さは

0.2～0.8mである。溝北端部の東岸では、浸食によって溝幅が約6.0mと広くなる。そして、区画溝SD103との合流部分では、溝底を土坑状に掘り込んでおり、後述する区画溝SD103の溝底よりも約0.6m深くなっていた。埋土は4層に大別でき、上から暗灰褐色土、暗灰褐色粘質土、灰茶色粘土、灰色粘土である。灰茶色粘土と灰色粘土は区画溝SD103との合流部から北側の低いところ一帯にかけて堆積している。

南北溝SD101aおよび後述のSD103埋没後、SD101bが溝心より西側に位置をずらして掘り直されている。溝幅は1.1～1.7m、深さは0.15～0.3mである、SD101aに比して溝幅が狭く、深さも浅い。埋土は上から橙灰色粘質土、灰褐色粘質土、灰茶色粘質土である。8世紀後半～

遺構（溝・土坑）一覧表

遺構番号	剖面等			時期	主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）			
SD1006	南北溝	長さ3.3以上、幅0.4以上	0.3以上	8世紀	土師器杯か皿・甕、須恵器杯B蓋・甕	東西坊坊間西小路東側調
SD101a	南北溝	長さ27.5以上、幅1.6～5.8	0.2～0.8	8世紀後半	土師器杯A・皿A・皿B・甕・高杯・壺A、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・甕・甌、新丸瓦6012Aa・古大内式軒丸瓦I型・軒平瓦6572D・平瓦・丸瓦	
SD101b	南北溝	長さ49.6以上、幅1.1～1.7	0.15～0.3 ～未	8世紀後半 ～未	土師器杯A・皿A・高杯・甕・須恵器杯A・杯B蓋・皿C・壺・高杯・壺・甌・新丸瓦6012Aa・古大内式軒丸瓦I型・軒平瓦6572D・平瓦・丸瓦・壠	
SD102	東西溝	長さ2.7以上、幅0.3～0.4	0.2	—	土師器盤片	重複関係からSD101bより古い。
SD103	方形	南辺部長さ12.0以上、幅6.0～7.6	0.2～0.4	8世紀後半	土師器杯A・皿A・皿B・皿C・壺A・壺C・甕・須恵器杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿B蓋・壺・環状紐付盤・杯L・壺M・壺・鋤・高杯・壺・奈良三彩小壺蓋・墨書き器「形」・錐刺土器・軒用磚・軒丸瓦6012Aa・古大内式軒丸瓦I型・軒平瓦6572D・古大内式軒平瓦・丸瓦・播磨國府系鬼瓦II類・壠	
SD104	南北溝	幅0.7～1.6	0.15～0.6	8世紀後半	土師器甌・須恵器皿A・甌・新丸瓦6012Aa・古大内式軒丸瓦I型・丸瓦I a類・I b類・平瓦I類・IV類・V類・VI類・熨斗瓦	
SK601	不整形	南北1.6以上、東西0.7	0.15	8世紀中頃	土師器杯A・皿A・壺C・甕・大型蓋・須恵器杯A・杯B・甕・鋤・甌・壺	
SK602	不整形	南北3.0以上、東西2.8	0.7	8世紀	土師器杯A・皿A・甕・盤・杯F・須恵器皿A・甕	

末の土師器・須恵器などが出土した。

SD101の両岸には、坪南北1/4ラインに位置する柱穴がある。坪内に橋脚や橋桁などの痕跡はなかったものの、SD101上に架かる橋SX801と判断した。規模は東西1間(2.7m)、南北2間(4.8m)である。

区画溝SD103は、幅4.8m以上～7.6m、深さ0.2～0.4mで、八坪北西隅を方形に区画する溝である。西辺と南辺でそれぞれ溝幅を確認した。北辺および東辺は発掘区外へ続く。埋土は上から橙灰褐色土、暗灰褐色土であり、溝の東辺では下層の下にさらに灰色砂質土が約0.1mの厚さをもって部分的に堆積していた。埋土中からは瓦類が集中して出土している。

区画溝SD103に囲まれた部分では、南端中央にピットを1個検出したのみであり、建物などの痕跡はなかった。しかし、SD103が方形に巡っていることや、溝埋土中から瓦類が集中して出土する点から、SD103で囲まれた部分には礎石建物があったと考える(SB224)。この部分の堆積状況を確認するため断削を実施したが、古墳時代以前の河川堆積層を確認したのみであり、掘込地業や版築などの築成土はなかった。埋土からは8世紀後半の土師器・須恵器・古大内式軒丸瓦I型・古大内式軒平瓦・播磨國府系鬼瓦II類などが出土した。

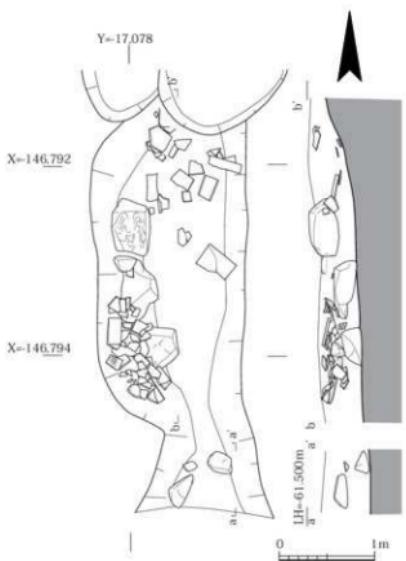
SD104は北東から南西に延び、南へ折れる溝である。北東部分は幅約0.7m、深さ0.15m、南側は規模が大き



HJ 第649次調査 SD103 完掘状況（北東から）

くなり幅約1.6m、深さ約0.6mで、底面のレベルは南へ向かって下がる。埋土は上層が暗灰色砂質土、中層が灰褐色粘土、下層が灰褐色粘土である。南側の西肩部からは、幅0.4m、長さ0.6m大の石が6つと瓦がまとまって出土した。石の材質には花崗岩と流紋岩があり、加工痕などは確認できなかった。石のいくつかは溝底邊で出土したが、その下部からも瓦片が出土したことから、石は据えられたものではなく埋没時に廃棄されたものと考える。埋土中からは、軒丸瓦6012Aa、丸瓦I a類・I b類、平瓦I類・IV類・V類・VI類・VII類、熨斗瓦などが出土した。

南北棟西廄付建物SB211は、桁行7間、梁行2間で、柱間寸法は桁行2.4m等間、梁行2.7mである。廄の出は3.6mで広廄となる。重複関係から總柱建物SB215より



HJ第701次調査 SD104石および瓦出土状態図(1/50)

新しく、SB210・SB209・SA213より古い。

SB205は、桁行5間、梁行2間の東西棟建物である。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁行2.1m等間である。妻柱の柱筋は、先述のSB211の身舎東側柱列の柱筋とほぼ揃えている。

SB219は桁行5間、梁行2間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行・梁行とも2.4m等間である。重複関係からSA222より新しい。柱抜き取り穴からは丸瓦I a類・II類、平瓦I～VII類、熨斗瓦が出土した。

SA208は坪南北1/2分割ラインにある東西方向の掘立柱塀で、方位は東で北にやや振れている。重複関係からSB206・210より古い。

SA222は坪東西1/4分割ラインにある南北方向の掘立柱塀である。柱間寸法は2.1m等間、柱穴の深さは0.6～1.0mである。重複関係からSB219より古い。

SA220・223は東西方向の掘立柱塀で、坪南北3/8付近にある。西端はSA222に接続する。重複関係からSA223のほうが古く、近接する位置に建て替えられている。

(大原 瞳・永野 智子)

#### IV 出土遺物

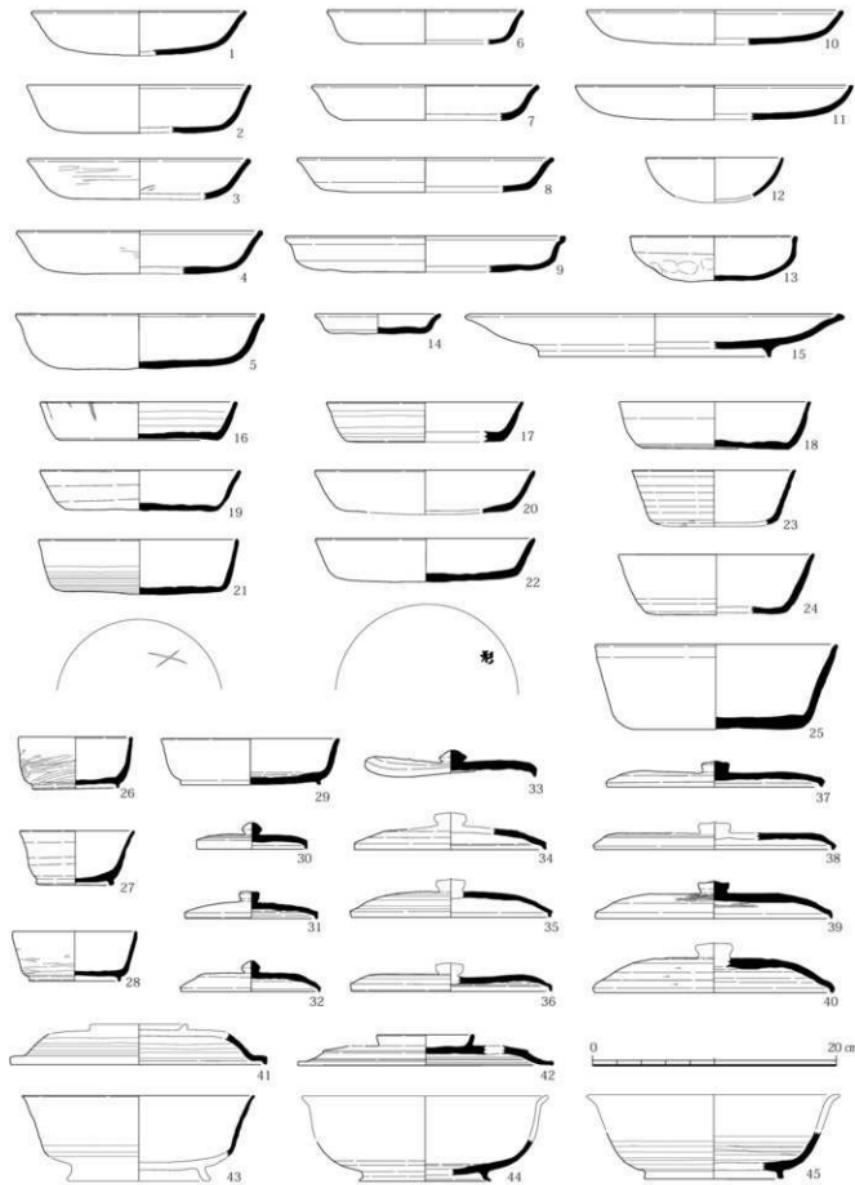
弥生土器、弥生時代の石包丁・紡錘車・敲石、奈良時代の土師器、須恵器、黒色土器、奈良三彩、墨書き土器、線刻土器、転用鏡・壺・製塙土器・羽口・碁石・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鬼瓦・埠が遺物整理箱124箱分ある。以下、遺物がまとまって出土したSD103およびSD104出土土器、主要な瓦について報告する。

SD103出土土器(1～70) 遺物整理箱15箱分の土器が出土している。土師器と須恵器の個体数の比率は、土師器が46%、須恵器が54%と、須恵器のほうがやや多い。土師器は杯A(1～5)、皿A(6～11)・椀A(12)・椀C(13)・皿C(14)・皿B(15)・長脚の高杯・甕などがある。土師器は全体的に器表面が摩耗しており、調整痕を留めるものはひじょうに少ない。杯Aは口径17.6～18.8cmのもの(1～3)と20.2～20.4cm(4・5)の大小がある。3、4は口縁部外面にヘラミガキを施す。皿Aは口径16.2～18.7cmのもの(6・7)と21.1～23.0cm(8～11)の大小がある。杯A・皿Aとともに体部が外方へゆるやかに開くものが多い。椀Aは口径11.2cm、器壁は薄く口縁部は内湾する。皿C(14)は口縁部に煤が付着する。

須恵器は杯A(16～25)、杯B(26～29)、蓋(30～40)、環状紐包蓋(41・42)、杯L(43～45)、皿A(46～51)、皿B蓋(52)・皿B(53・54)、高杯(55～60)、壺M(61)・壺(62)・壺L(63)・壺E(64)・椀B(65)・盤A(66)・甕(67～69)がある。

杯Aは、口径13.4cm(23)、16.0～16.5cm(16～19・21・22)、18cm以上(20・24・25)の3群があり、後二者は器高の高低でそれぞれ2群に分けられる。16～18・21・22は底部外面から体部にかけて回転ヘラケズリを施した後、回転ヘラミガキで調整する。内面の調整は不明瞭なものが多いが、16は内面を回転ナデ調整した後、口縁部内面にヘラミガキを施すのに対し、18・22は内面全体を回転ナデ、21は回転ナデの後底部内面をさらにナデで平滑にしている。16は口縁部に火襷痕がある。21は底部外面に線刻が、22は底部外面に「形」の墨書きがある。19・20は口縁部および底部内面を回転ナデ調整しており、19は底部外面をヘラ切り後、一方向にナデで調整している。23は口縁部に回転ナデ、体部外間に回転ヘラケズリを施す。25は軟質焼成で、器壁はやや厚い。内外面ともヘラミガキは施さない。

杯Bは、口径9.3～10.2cm(26～28)と14.6cm(29)の大小2群がある。26、28は外面に手持ちでヘラミガキ



HJ 第649次 SD103 出土土器 (1/4)

を施す。27・29は回転ナデ調整である。29は軟質焼成で、胎土に石英・長石・クサリ礫などの砂粒が多く含む。

蓋は扁平で口縁部は屈曲せずに延び、端部は「く」字状に折れる。口径は9.0～11.5cm（30～32）・14.0～16.5cm（33～36）・17.0～19.9cm（37～40）の三群に大別できる。外面は回転ヘラミガキを施すものがあり（30・35・36・38）、39は内外面とも手持ちでヘラミガキを施す。33は焼き歪みが大きく、外面外縁には黄緑色の自然釉がかかる。31・36・39は転用観である。37はつまみが梯形を呈する。40は器高が高く、暗灰色を呈し、胎土中の黒色粒および長石粒が他のものより多い。外面は回転ヘラケズリで調整する。内面は使用時の擦れでつるつるになっており、観として転用されていたものと思われる。

環状紐杯蓋には器高が高く口縁部が屈曲するもの（41）と、やや扁平で天井部と屈曲部の境が稜をなすもの（42）がある。いずれも内外面に密に回転ヘラミガキを施す。

杯Lのいわゆる棱椀は、腰折れで口縁部が直線気味に立ち上がり、ゆるやかに外反するもの（43）と、腰部がまるみをもって立ち上がるものの（44・45）がある。43は外面に、45は内外面に回転ヘラミガキを施す。

皿Aは、口径22.4～22.7cm（46・47）、25.0～25.3cm（48・49）、26.8～27.2cm（50・51）の3群がある。体部外面はいずれも回転ヘラミガキ。底部外面は回転ヘラケズリの後、ミガキが施されるが、底部外面は手持ちでヘラミガキが施されるもの（46・48）と回転ヘラミガキ（46・47・49・50）が施されるものがある。体部と底部の境は回転ヘラケズリによって稜をもつもの（47・48）とまるく仕上げるもの（46・49～51）がある。底部内面の調整はいずれも不明瞭だが平滑に仕上げており、ミガキが施されているものと思われる。46・48は転用観である。

皿B蓋（52）は扁平で、体部は直線的に延び、口縁部は「く」字状に折れる。外面は回転ヘラミガキを密に施す。

皿B（53・54）は体部外面を回転ヘラミガキで調整する。口縁部内面は回転ナデ調整だが、53の底部内面はヘラミガキを施している。53には火摺痕がある。

高杯は口径18.2cm（55）、24.8～26.2cm（56・57）、口径34.2cm（58）の3群がある。55は杯部内面に青海波の当て具痕と重ね焼きの痕跡がある。いずれも外面は回転ヘラケズリの後、回転ヘラミガキ調整を施すが57の

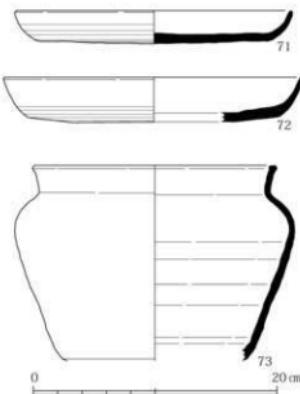
ミガキは口縁部のみである。56には外面に火摺痕がある。内面はいずれも摩耗しており調整が不明瞭だが、平滑である。脚部は高さ13.5cm（59）と16.7cm（60）の2群がある。

壺M（61）の底部はヘラ切りである。壺L（63）は体部と頸部を三段構成で接合する。壺E（64）は器壁がひじょうに薄く、内外面を平滑に仕上げている。椀B（65）は、内外面ともロクロナデ調整である。体部から口縁部内外面に漆が付着する。盤A（66）は、底部外面から体部外面をヘラケズリした後、回転ナデで調整している。盤は口径20.8cm（67）、32.4cm（68）、39.2cm（69）のものがある。

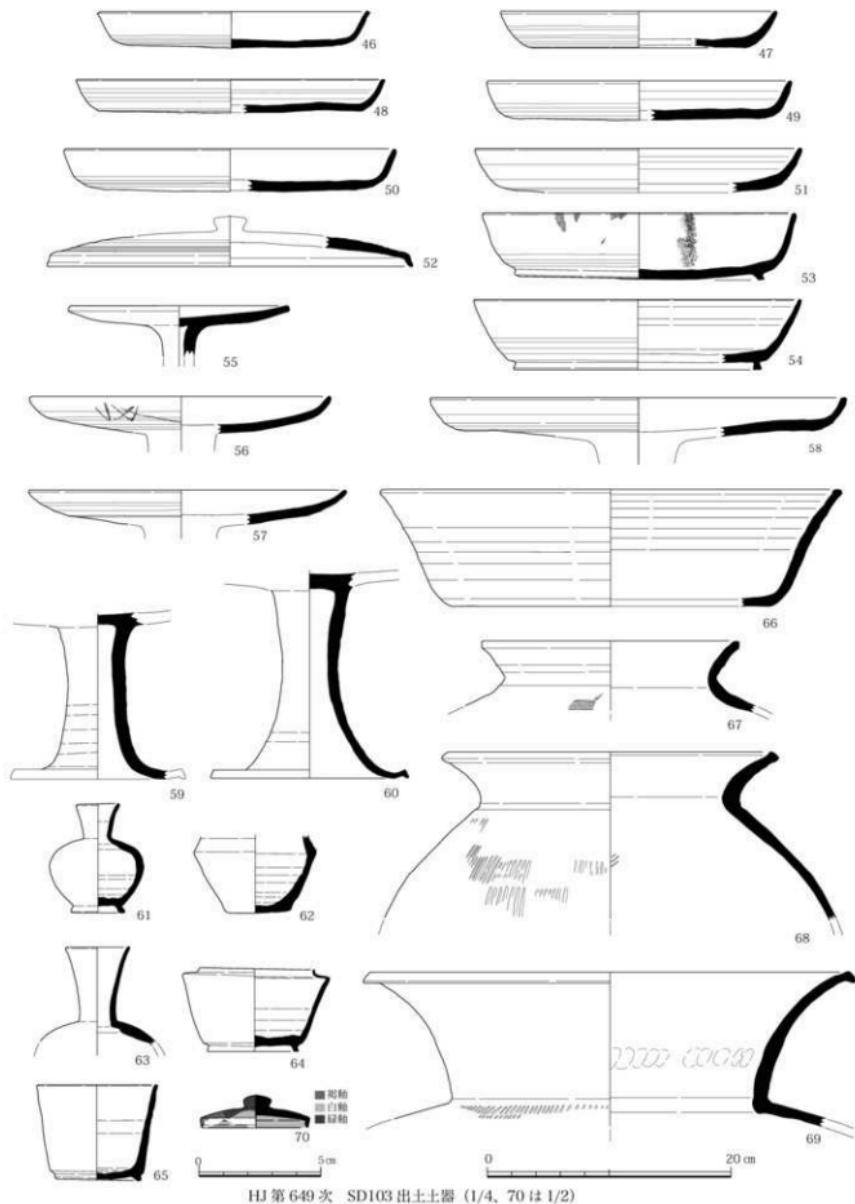
これらSD103出土の須恵器は、外面が青灰色～灰白色を呈し、硬質で焼き締まるものと、軟質なものがある。前者の多くは底部から体部との境にかけて丁寧に回転ヘラケズリで調整した後、内外面にヘラミガキを施し、表面を平滑に仕上げている。胎土は微細な長石粒および黒色粒を含むものが多く、断面は淡灰白色を呈する。これらの須恵器の大半は、調整や胎土の特徴が共通しており、ある一定の产地からもたらされた一群の須恵器として捉えられるものと考える。

奈良三彩は1点のみ出土している。70は小壺の蓋である。淡黃白色の胎土を有し、外面には綠・褐・白の釉が掛かる。

SD104出土土器（71～73） 実測が可能な土器は須恵器皿Aが2点（71・72）と、壺1点（73）のみで、土師



HJ第701次 SD104出土土器（1/4）



HJ 第649次 SD103 出土土器 (1/4, 70は1/2)

器は細片しか出土していない。須恵器皿Aは、口径24.0～24.4cm。71は歪みがあり、底部内面には直径約9cmの円形の重ね焼きの痕跡が残る。いずれも外面は底部から体部との境目にかけて丁寧に回転ヘラケズリを施した後、回転ヘラミガキを施す。底部内面はナデ調整である。形態や調整、胎土などはSD103出土の須恵器と大差なく、同一産地のものである可能性が高い。（永野・智子）

瓦塼類 瓦塼類は、HJ第649次調査で遺物整理箱で25箱分、HJ第701次調査で62箱分出土した。

両調査により出土した瓦塼類の内訳は、軒丸瓦15点、軒平瓦14点、丸瓦1,356点、平瓦2,966点、熨斗瓦29点、鬼瓦1点、埠5点で、その他に小片のため、いずれか不明の瓦類が1,071点ある。

軒丸瓦の内訳は6012型式Aa種6点、古大内式軒丸瓦I型6点、型式不明3点である。なお、型式不明とした3点は全て重團紋の小片である。

1・2は中央に珠点のある三重團紋を飾る6012型式Aa種である。Aa種は團線の断面形状・團線幅・高さから、さらにAa種（細）とAa種（太）に細分でき（原田2014A）、今回出土したAa種の内訳は、Aa種（細）が1点、Aa種（太）が5点である。

1はAa種（細）である。團線幅が0.2cm程度と細く、團線断面形状は三角形に近い。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。接合される丸瓦広端部は凸面側をカットしている。瓦当側面下半部はヨコケズリ。胎土は粗く、焼成はやや軟質、色調は表面黒灰色、内部白灰色である。

2はAa種（太）である。團線幅は0.5cm程度と太く、團線断面形状は半円形。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。接合される丸瓦広端部は凸面側をカットしている。接合部内面から瓦当裏面の上半部には、縱方向の指ナデを施す。瓦当裏面下半部はヨコナデを施すが、布目痕を残すものが1点ある。また瓦当裏面下半部周縁に沿って幅1.0cm程度のヘラケズリを施していることから、瓦筋に粘土を詰める際、瓦当裏面に布をあてた上に板を置き、押さえつけて瓦当を成型する「布目押圧技法」（毛利光・花谷1991）による製作で、瓦当裏面下半部周縁に沿うヘラケズリは、押圧の際の粘土の盛り上がりをカットした際の痕跡とみられる。凸面はタテケズリ。瓦当側面下半部はヨコケズリ。胎土は粗く、焼成はやや軟質、色調は表面黒灰色、内部白灰色である。

3・4は兵庫県加古川市の古大内遺跡出土品を標式名とする古大内式軒丸瓦のI型である。単弁13弁蓮華紋

を飾る。中房の蓮子配置は1+6で、中心蓮子は周囲の蓮子より一回り大きい。蓮弁は輪郭線で囲まれた子葉からなる。外線は素紋の直立線である。範傷は弁端と外線の間に1箇所、さらにその弁の2つ右の弁では、弁輪郭線と子葉を繋ぐ範傷が確認できる（写真）。瓦当裏面に接合溝を設け、先端部が無加工の丸瓦を接合する。接合部内面から瓦当裏面の上半部には、縱方向の指ナデを施す。瓦当裏面下半部はヨコケズリを施した後、部分的にナデで調整する。凸面と瓦当側面下半部はタテケズリ。瓦当側面下半部の一部には、外線頂部から1.2cm幅でめぐる面があり、範端痕とみられる。丸瓦側面の瓦当部付近には、乾燥時に付いたとみられる横方向の棒状圧痕が認められる。胎土は密で白灰色の砂粒を含む。焼成はやや軟質、色調は白色である。古大内式軒丸瓦I型は平城京内では他に、八坪の西に隣接する一坪（市HJ第666次）から1点、左京五条四坊九坪南側の五条条間北小路（市HJ第608-F次）で1点、興福寺（奈文研553次）で1点が出土している<sup>1)</sup>。

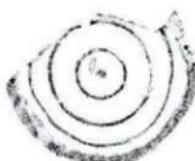
軒平瓦の内訳は6572型式D種7点、6671型式B種1点、古大内式軒平瓦1点、型式不明5点である。なお、型式不明とした5点は全て重郭紋の小片である。

5は二重郭紋を飾る6572型式D種である。郭線断面形状は半円形で、郭線間の断面形はV字形を呈し、郭線間の間隔がほとんど無い。6572型式D種は、頸の断面形状から段顎・直線顎・曲線顎の3種あることが知られるが、今回出土した資料で頸の断面形状の判るものはすべて直線顎である。凸面はタテケズリ。凹面は瓦当面から約5.0cmまではヨコケズリ、以下狭端部に向かって、タテケズリを施すが、部分的に布目痕を残す。胎土は粗く、焼成は硬質のものと、やや軟質のものがある。色調は表面黒灰色、内部白灰色である。

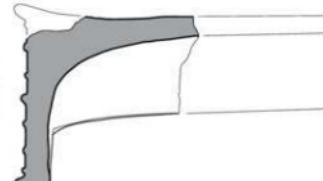
6は6671型式B種で右下隅の小片である。6671型式は鋸錐形の小葉を、下向きの中心葉が囲んだ中心飾りをもつ3回反転均整唐草紋を内区に飾る。B種は唐草1単位が第1・2支葉の3葉構成。外区は内区より一段高い。梢円形の珠紋を上外区に14、左右両脇区に3配する。下外区には線鋸歯紋を配する。本資料は瓦当部の粘土が層状に剥離したもので、平瓦凸面側接合面には継ぎ甌叩き目が残ることから、平瓦広端部に2枚以上の顎用粘土板を貼り重ね、顎部を削り出して成形した「粘土板貼り重ね技法」（原田2014a・2014b）による製作であるとわかる。胎土は密で、焼成はやや軟質、色調は白色。



1 軒丸瓦 (6012A a細)



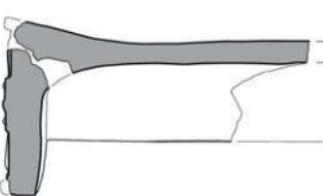
2 軒丸瓦 (6012A a太)



3 軒丸瓦 (古大内式軒丸瓦 I型)



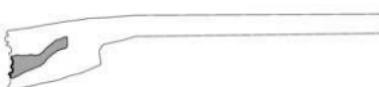
4 軒丸瓦 (古大内式軒丸瓦 II型)



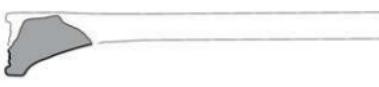
5 軒平瓦 (6572D)



6 軒平瓦 (6671B)



7 軒平瓦 (古大内式軒平瓦)



出土瓦類 I (軒瓦、1/4)

7は古大内式軒平瓦で、右第3単位の山形の第2支葉と下外区筋紋の部分である。古大内式軒平瓦は内区に樹状の中心飾りを置く5回反転均整唐草紋である。頸断面形状は顎面をもつ曲線顎IIである。凸面はタケグリ、顎面はヨコケグリ。胎土は密で白灰色の砂粒を含み、焼成はやや軟質、色調は白色である。古大内式軒平瓦は平城京内では他に、左京五条四坊九坪南側の五条条間北小路（市HJ第459-2次）で1点出土している。

出土した丸瓦1,356点の重量は174.167kgある。このうち狭端部が確認できるものは、全て玉縁部を有する有段式丸瓦である。小片が多いため、以下では、型式分類が可能な、ほぼ完形品の6点について述べる。これらは形状・調整技法から2つに分類できる。

8はI類としたもので、凹面に糸切痕・粘土板合せ目が確認でき、粘土板を素材とした粘土板巻きつけ技法によるものとわかる。凸面は丁寧なヨコケグリを施す。胎土は密、焼成はやや軟質。色調は白色のものと、表面が黒灰色、内部が白色のものの2種がある。前者をIa、後者をIbと呼称する。Iaは3点、Ibは1点出土。

9はII類。I類と同様、凹面に糸切痕が確認でき、粘土板巻きつけ技法によるもの。凸面はヨコケグリを施すが、部分的に縦方向の縫口目が残る点、玉縁先端部凹凸両側ともにヨコケグリを加え、面取りする点がI類と大きく異なる。胎土はやや密、焼成はやや硬質、色調は灰白色である。2点出土。

出土した平瓦2,966点(442.817kg)の大半は小片であるが、凸面の叩き目に着目すれば、凸面に縫口目を残すもの2,240点(310.858kg)、線刻した叩き板による叩き目を残すもの450点(125.025kg)、叩き目が不明のもの276点(6.934kg)に大別できる。

また、HJ第701次調査出土資料には、概ね半分以上残存する個体が51点あり、これらを主に凸面調整方法から、以下のI～VI類の7種に分類した。

I類は凸面にタテ方向の縫口目を残すが、狭端側の叩き目はヨコケグリを加え、擦り消すもの。擦り消しの幅は、2.5～18cmと差がある。大半のものに凸面広端側に指圧痕が確認できる。凹面には布目痕とともに、糸切痕・模骨痕・粘土板合せ目・布の綴じ合せ目が確認できるものがあり、粘土板巻き作りによって製作されたものとわかる。凹面両側縫付近はタケグリを施す。I類は28点あるが、焼成・色調からa～cの3つに細分可能である。Ia類は表面黒色、内部灰色で軟質、15点ある。

Ib類は灰色で硬質、10点ある。Ic類は白色でやや軟質、3点ある。10はIa類で、模骨への密着が弱かった為であろう、凹面の糸切痕が明瞭に残ることに対し、模骨痕は凹面右側縫付近にしかみえない。11はIb類。凹面狭端側の、擦り消しの幅は約2.5cmと狭い。凹面広端側に指圧痕が確認できる。凹面の模骨痕が明瞭。12はIc類。凹面狭端側に指圧痕が確認できるのはI類の中では、12のみである。凹面は模骨痕・糸切痕が明瞭で、中央狭端側に粘土板の合せ目が確認できる。

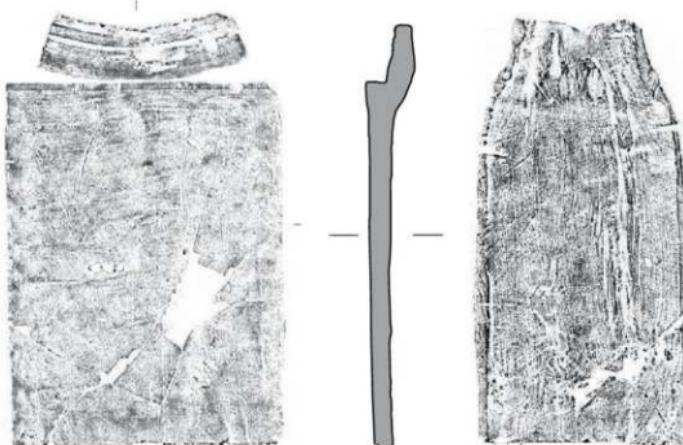
II類は凸面にタテ方向の縫口目を施した後、狭端側を擦り消すこと、凹面には糸切痕・模骨痕・粘土板合せ目が確認でき、粘土板巻き作りであることはI類と同じであるが、I類にみられる凹面両側縫付近のタケグリは無い。表面黒色、内部灰色で軟質、2点ある。13は広端面に藁状圧痕（写真）が残る<sup>2)</sup>。

III類は凸面にタテ方向の縫口目を行なうがI・II類のように、狭端側の擦り消しは加えない。凹面には模骨痕・粘土板合せ目・布の綴じ合せ目が確認できず、一枚作りと考える。凹面両側縫付近はタケグリを施す。焼成は軟質で黒灰色、4点ある。14は凹面右側縫付近の一部に布端痕とみられる幅0.4cmのくぼみが残る。

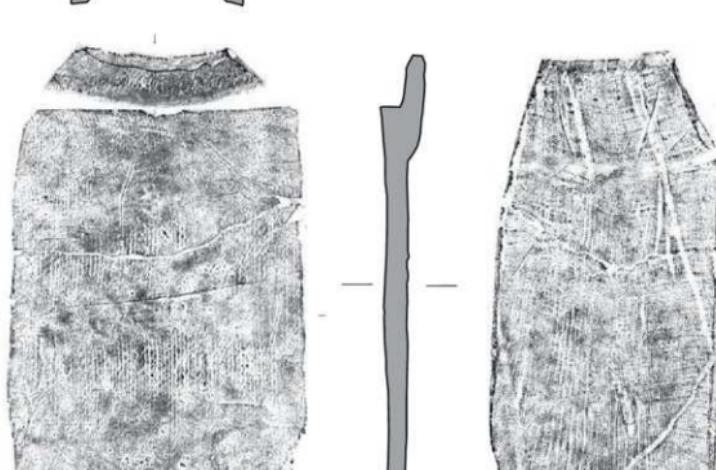
IV類は凸面に縦位に並行する突線の間に、「>」字状の突線を配した叩き目を残す。ただし、叩きの後、タテナデを加え、部分的に叩き目を消す。凹面はタテナデで、大半の布目痕を消す。凹面側縫付近に布端痕が確認でき、一枚作りと考える。焼成はやや軟質で白色、3点ある。15は凸面の大半にタテナデ調整を行うが、狭端側と側縫付近に布端痕が確認できる。狭端面には藁の圧痕が確認でき、これが乾燥時に付いたものとすれば、狭端部を下にし、平瓦を立てて乾燥したと考えられる。なお、広端面には藁の圧痕は無い。

V類は凸面に横長の格子目叩きを残す。凹面はタテナデで大半の布目痕を消すこと、凹面側縫付近に布端痕が確認でき、一枚作りであることはIV類と同じ。焼成はやや軟質で白色であることもIV類と同じである。10点ある。16は広端面と狭端面（写真）の両面に、藁の圧痕が確認できることから、一方の面を下にしてある程度乾燥させた後、天地逆転させ、もう一方の面を下にし、さらに乾燥させたことが考えられる。17は凸面と凹面の両面で糸切痕が確認でき、V類が粘土板を素材としていることがわかる。広端面に藁の圧痕が残る。

VI類は凸面に縦位に密に並行する突線の叩き目を残



8 丸瓦 (I a類)

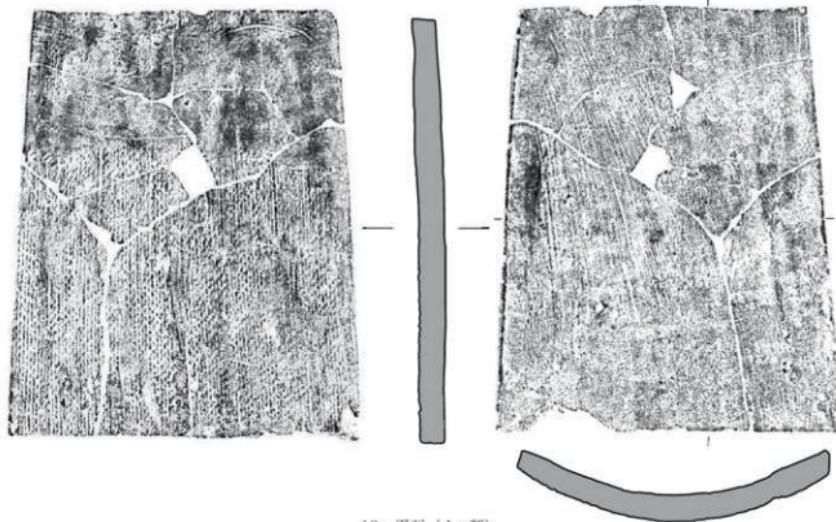


9 丸瓦 (II類)

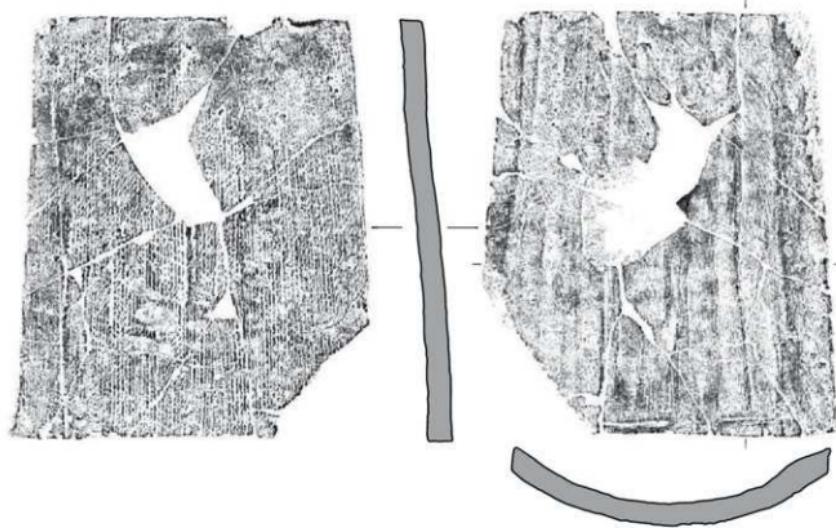


出土瓦類2 (丸瓦、1/4)





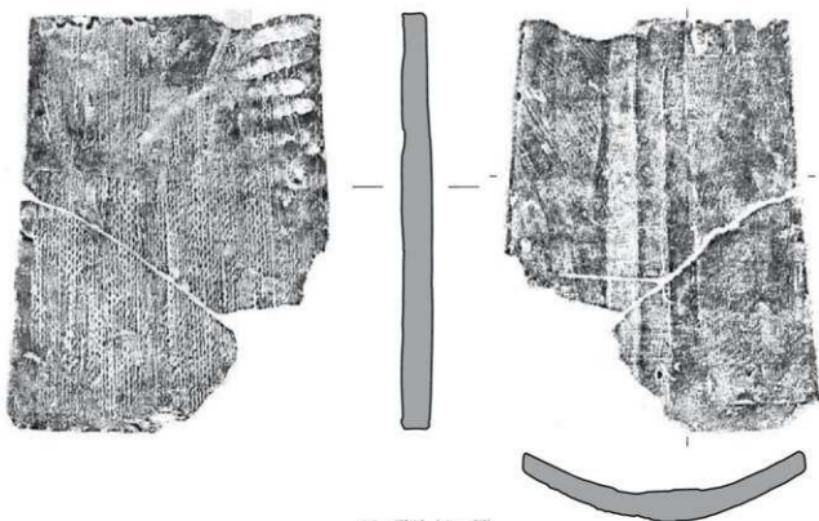
10 平瓦（Ia類）



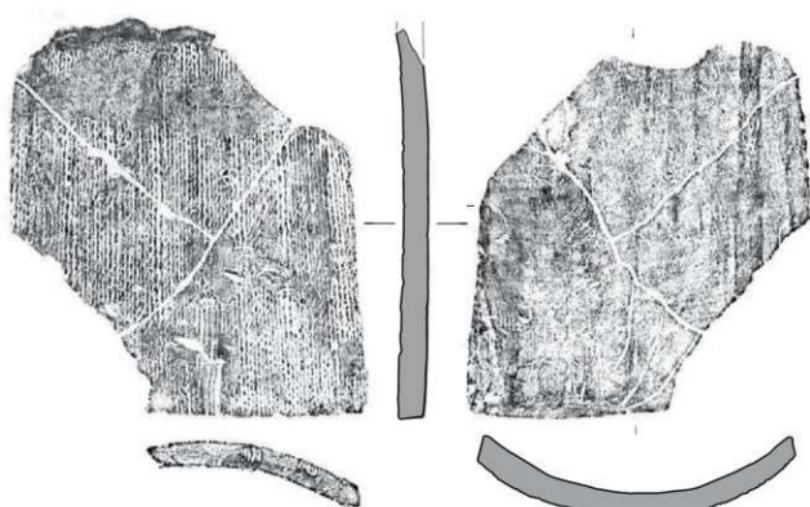
11 平瓦（Ib類）

出土瓦類3（平瓦、1/4）

0 20cm



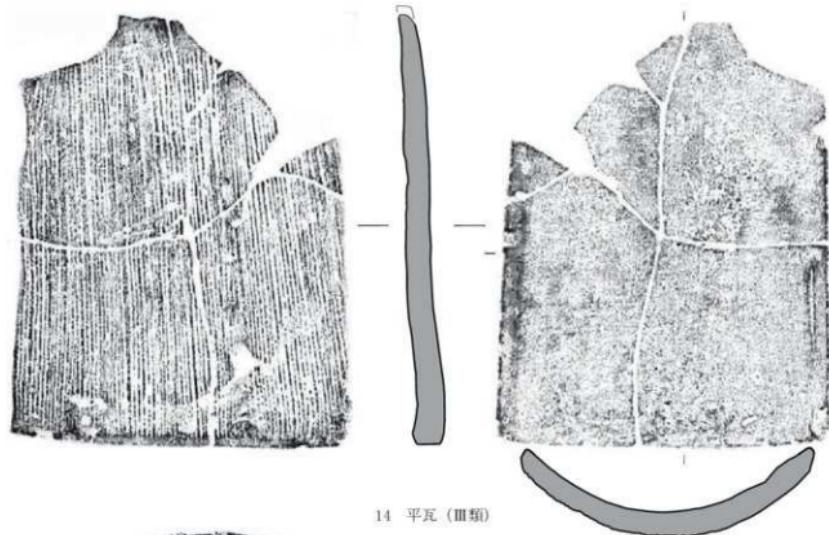
12 平瓦（I c類）



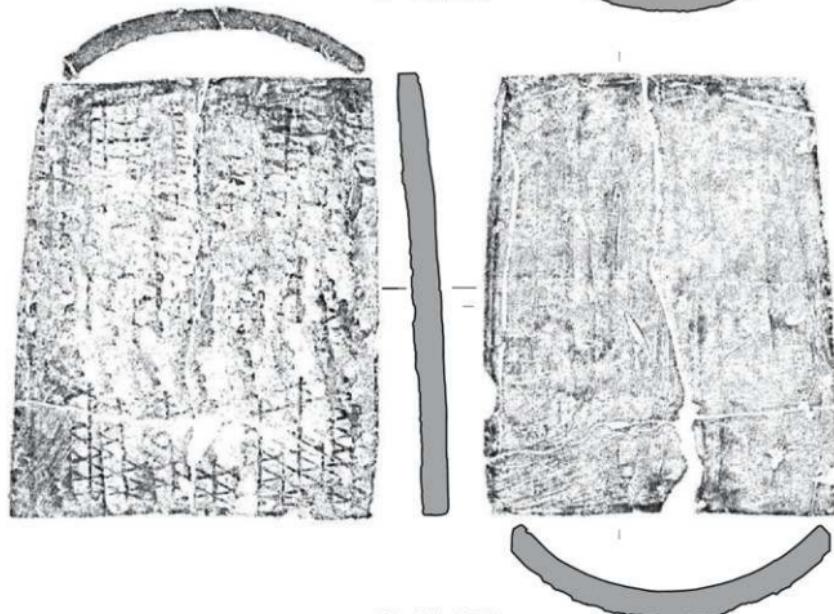
13 平瓦（II類）

出土瓦類4（平瓦、1/4）

0 20cm



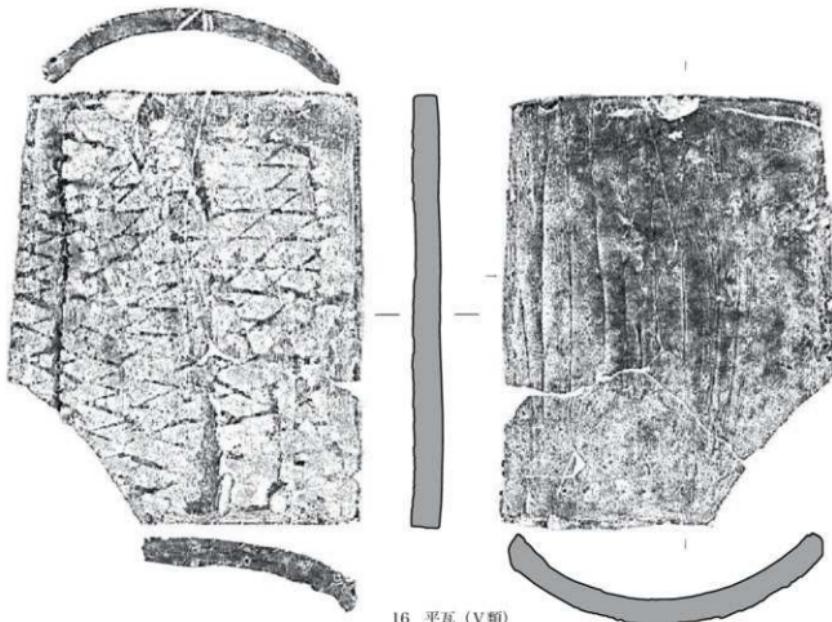
14 平瓦（III類）



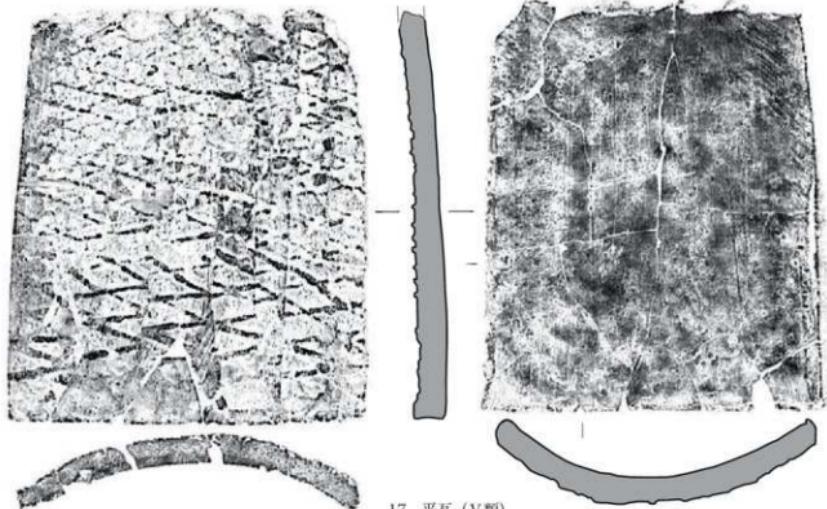
15 平瓦（IV類）

出土瓦類5（平瓦、1/4）

0 20cm



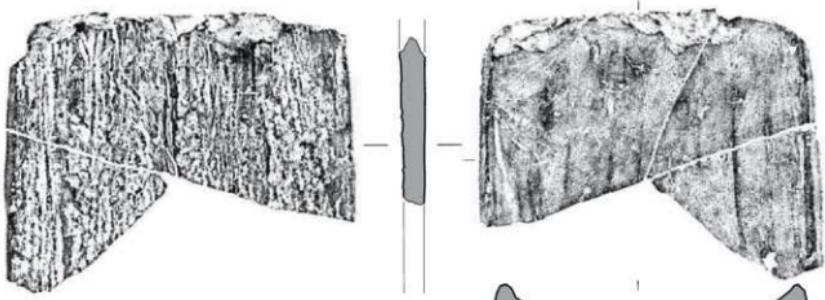
16 平瓦（V類）



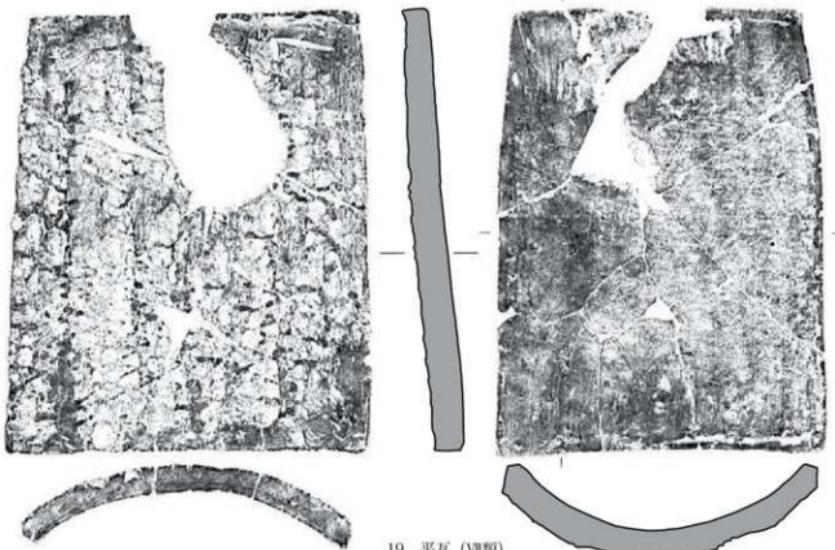
17 平瓦（V類）

出土瓦類6（平瓦、1/4）

0 20cm



18 平瓦 (VI類)



19 平瓦 (VII類)

出土瓦類7 (平瓦、1/4)

0 20cm

す。図示した18の1点のみ出土。凹面にタテナデを施すが、凹面側縁付近には布端痕が確認でき、一枚作りとわかる。焼成はやや軟質、表面は黒灰色、内部が白色。

VII類は凸面がI～III類のような縄叩き目ではないことはわかるが、叩きの後のナデ調整などにより、叩き目の詳細が不明瞭なもので、3点ある。19は凸面の叩き目の大半

が潰れたようになっており、平瓦V類の叩き目にもみえるが、断定できない。また凹面にタテナデを施さず、布目痕が明瞭に見える点もV類とは異なる。広端面には薙痕が確認できる。焼成はやや軟質で白色を呈する。

熨斗瓦29点は、すべて平瓦を、焼成前に長軸に沿って半裁し、裁断面をケズリで平滑に仕上げた切熨斗である。



20 翫斗瓦



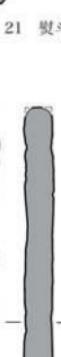
20 翫斗瓦



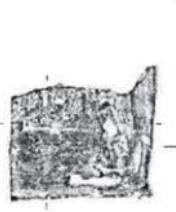
21 翫斗瓦



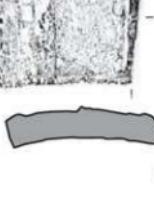
22 翫斗瓦



22 翫斗瓦



23 翫斗瓦



23 翫斗瓦



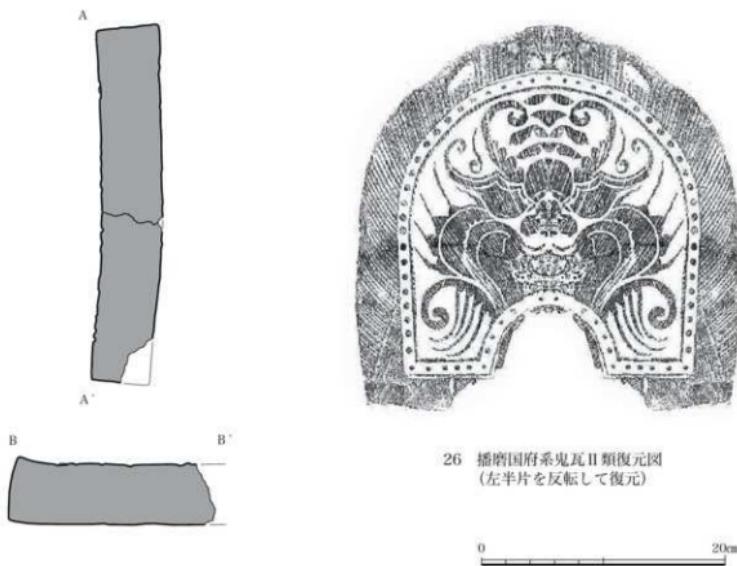
24 翫斗瓦



出土瓦類8 (竪斗瓦, 1/4)



25 鬼瓦（播磨国府系鬼瓦II類）



26 播磨国府系鬼瓦II類復元図  
(左半片を反転して復元)

0 20cm

出土瓦類9（鬼瓦、1/4）



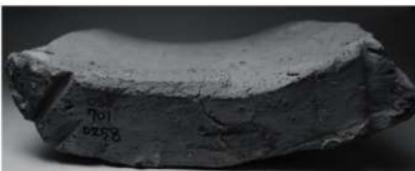
古大内式軒平瓦I型の範傷(4)



平瓦II類広端面の藁座状圧痕(13)



平瓦V類狭端面の藁の圧痕(16)



熨斗瓦端面の藁の圧痕(21)



熨斗瓦端面の藁の圧痕



播磨国府系鬼瓦II類の範傷(25)

20・21は凸面の叩き目から、IV類の平瓦を半裁したとみられる。21の端面には藁の圧痕が残る(写真)。22・23・24の凸面は線刻した叩き板によるものとみられるが、叩きの後のナデ調整などにより、叩き目は不明瞭である。23・24の端面には藁の圧痕が確認できる。20・21・24は焼成がやや軟質で表面は白色、22・23は焼成がやや軟質で表面は黒灰色、内部は白色である。

25は獸面を飾った鬼瓦で、兵庫県姫路市辻井庵寺や播磨国分寺で確認される播磨國府系鬼瓦II類(今里2010)と同範である。向かって左上牙の右側、歯茎と唇の間に範傷がある(写真)。本例の拓本を左右反転復元した結果、大きさや紋様の全貌が明らかとなった(26)。

高さ・復元幅とともに約25cmであるが、本例は外縁を幅広く残しており、外縁を含んだ高さは約32cm、復元幅は約35cmである。厚さは約5cm。外形はアーチ形に成形し、下辺には、丸瓦を嵌め込む半円形の抉りを設ける。

獸面紋は眉間に弧状のシワを入れ、上瞼を波状に曲げた眼の上から、角状突起が上方に伸び、先端は巻き込む。眉毛は左右に伸びて上方に跳ね上がり、その先端は巻き

込む。目尻はつり上がる。鼻は鼻翼を丸め小さめである。口は両端にシワを寄せ、口の上半部左右には放射状の罫を上向きに、口の下半部左右には放射状の罫を下向きに配し、上方の1本は下向きの巻き毛で表現する。外区には、小粒な珠紋をめぐらす。

裏面に固定装置は無い。表裏面ともに、粘土塊から切り出した際の糸切痕跡を明瞭に残しており、切り出し後未調整の粘土板を、範に押し付けて施紋している。ただし紋様は低く、加压すべき裏面側にも糸切痕跡が明瞭に残っていることから、範には強く押し付けず、むしろ範の上に粘土板を載せただけのようだっただらしい。断面形の観察では、外区珠文帯の外側、すなわち範の外側である外縁部分が、紋様面側にやや垂れていることも、その施紋状況を示唆する。

側面はヨコケズリによって成形し、裏面の外縁付近は縁に沿って幅4cm程度のケズリを施す。胎土は密で白灰色の砂粒を含み、焼成はやや軟質、色調は白色である。

なお、平城京内から出土する鬼瓦は大きく2種類に分類されている。ひとつは平城宮内で主に出土する、獸毛

の表現が特徴的な平城宮式鬼瓦、いまひとつは京内の官寺で主に出土する、獸面の外側に珠紋をめぐらす特徴を持つ南都七大寺式鬼瓦である（毛利光1980）。眼の形や獸毛の表現は平城宮式鬼瓦と共通する要素であるが、本例は平城宮式鬼瓦には無い、珠紋を飾る。珠紋帯を飾る点は南都七大寺式鬼瓦と共通する要素であるが、南都七大寺式鬼瓦のようなドングリ眼でもない。この鬼瓦にみられるような角状突起は平城宮式・南都七大寺式とともにみられず、これらの鬼瓦とは紋様の系譜が異なるものと思われ、むしろ、統一新羅の雁鴨池出土鬼瓦<sup>3)</sup>などに類似を見出すことができる。

（原田 憲二郎）

#### V 調査所見

##### 1. 検出した遺構について

検出した遺構は、重複関係などから以下の4時期の変遷がある。

A期 坪の南北1/2分割ラインの北側、西側に桁行4間、梁行3間の總柱建物SB215が建つ。その北西にはSB209が建つ。坪の北西部には、方形の区画溝SD103があり、その区画内には礎石建物SB224が建っていたものと考える。このSD103は、南北溝SD101aと接続する。坪中央部には北東から南に屈折する溝SD104がある。

重複関係からSB215より古いSK601からは8世紀中頃の遺物が出土していることから、A期の年代は8世紀中頃以降である。

B期 坪南北1/4分割ラインに東西塀SA208があり、坪東西1/4分割ラインには南北塀SA222がある。両者の接点は調査区外であるものの接続している可能性が高い。坪南北3/8分割ラインにはさらに東西塀SA223が接続する。SA222の西側には桁行7間、梁行2間以上の南北棟廂付建物SB211が建つ。SA208を挟んで北側には桁行5間、梁行2間の東西棟建物SB205が、SB211と東側の柱列を揃えて建つ。SA223の南側には桁行3間以上、梁行2間の東西棟建物SB221が建つ。坪南北1/3分割ラインにあった門SB204が新たに建て替えられる（SB203）。

SB211およびSB205の柱穴出土遺物の年代から、B期は8世紀中頃～後半である。

C期 B期の東西塀SA223と同じ位置で建て替えられる（SA220）。南北棟建物SB211が廃され、桁行3間、梁行2間の南北棟建物SB210と桁行1間以上、梁行2間の東西棟建物SB207が建つ。坪南北3/8分割ラインには門SB202が建つ。

この時期に埋没するSD103出土遺物の年代から、C期は8世紀後半である。

D期 八坪西端を限る築地塀SA201の雨落ち溝SD101bが掘削され、坪南北1/4ラインには橋SX801が架かる。坪東西1/4分割ラインの東側には東西棟掘立柱建物SB219が建つ。SB219の柱抜き取り穴からは、丸瓦および平瓦、熨斗瓦がまとまって出土しているので、本建物は瓦葺き建物であった可能性が高い。

SD104出土遺物の年代から、D期は8世紀後半～末である。

（永野 智子）

##### 2. 出土瓦について

瓦類のうち、播磨に同範品がある古大内式軒丸瓦I型と古大内式軒平瓦、播磨国府系鬼瓦II類は、製作技法・胎土・焼成・色調が播磨出土品と大きな違いが認められず<sup>4)</sup>、これらは、播磨で製作され、平城京内に持ち込まれたとみてよい。

また、平城京では繩叩き目を施した平瓦が一般的であるが、播磨では線刻した叩き板による叩き目を残す一枚作り平瓦が目立つことから、IV～VII類の平瓦は播磨産の可能性が高い<sup>5)</sup>。さらには、このような平瓦を焼成前に半裁し、半裁面を平滑に仕上げた熨斗瓦も、播磨産の可能性が高いと考える。これらの平瓦・熨斗瓦には、狹端面や広端面に藁の圧痕が残ることが多い。これらも播磨産瓦の特徴といえるかもしれない。

いまひとつ、播磨産軒瓦・鬼瓦や播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦は、色調が白色のものが目立つという特徴も挙げができる。この点に注目すれば、丸瓦Ia類も播磨産の可能性が高いとみられる。（原田 憲二郎）

##### 3. SD103およびSD104出土土器について

SD103およびSD104から出土した須恵器は、①底面部を回転ヘラケグリした後に外面に回転ヘラミガキを施すものが多い、②青灰色～灰白色を呈し、胎土には微細な長石粒および黒色粒が含まれる、③杯B蓋は口縁部が屈曲せず平坦で、端部は「く」字形に屈曲し、梯形のつまみをもつものがある、④高杯は杯部が皿形もしくは口縁部が直線的に聞く形状をなし、杯部内面には青海波文のタキ痕があるなどの特徴がある。これらの特徴のいくつかは、奈良文化財研究所の分類によれば、播磨産の可能性があるとされるIII群土器の特徴（奈良文化財研究所1991、翼1992）に当てはまる。

さらに、稜碗などの金属製品写しの器形のみならず杯・皿類まで内外面にヘラミガキを施す点や、形態的な

特徴が類似する資料を既報の資料に求めるならば、加古川市志方窯跡群の中谷4号窯跡出土資料に近い。ただし、中谷4号窯跡出土の須恵器は、その製品が平城宮SD1500から出土していることを根拠として平城宮Ⅲ古段階並行(740年頃)の土器群と位置付けられている(兵庫県教育委員会2000)。しかしながら、平城京跡左京五条四坊八坪の利用開始は、先述のとおり8世紀中頃以降と考えられ、SD103出土の須恵器は8世紀後半の土師器と共に併存している。

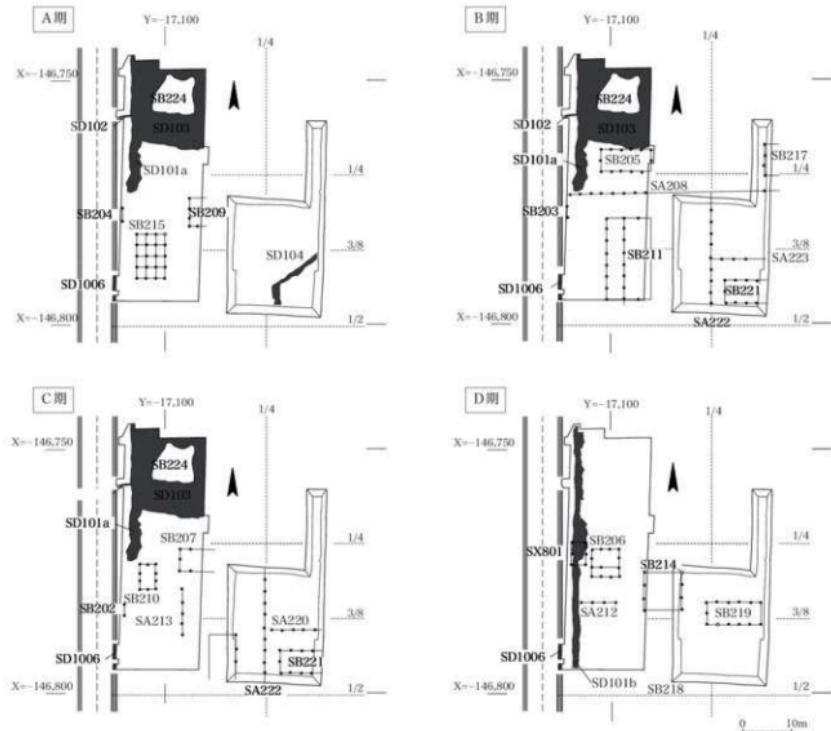
今回出土した須恵器が中谷4号窯の製品であるか否かはさらなる検討が必要であるが、今回の調査で播磨産の瓦とともに播磨産の可能性がある須恵器がまとまって出土したことは注目される。

(永野 智子)

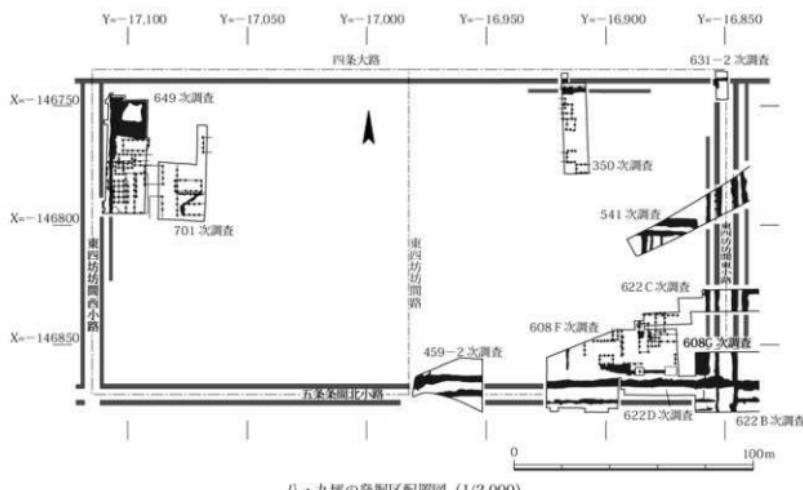
#### 4. 八・九坪の性格について

以上のように、今回の調査では八坪で播磨産の軒瓦・鬼瓦や、播磨産とみられる丸瓦・平瓦・熨斗瓦・須恵器がまとまって出土することを確認したが、これは八坪の東、九坪と同じである。九坪ではその出土遺物の様相から、播磨國の調廬(諸国から運ばれてきた調物を一時保管する施設)の存在を指摘した(奈良市2012)。両坪の出土遺物の様相が同じことから、播磨國調廬が八・九坪の2町占地であった可能性が考えられる。

唯一史料に表れる相模調廬は、一町を占めていた<sup>6)</sup>。『延喜式』によれば相模國は上国、播磨國は大国である<sup>7)</sup>。このことから、国のランク毎に、調廬の敷地の広さが決まっていた可能性も考えられる。



遺構変遷図 (1/1,000)



## 5. 検出した遺構と調査について

今回の調査で、SD103内部に想定される礎石建物SB224については注意すべきである。

瓦葺きの平面形正方形の礎石建物を推定できることから、これは調査を一時的に収納していた倉庫の可能性もある。そうであれば、一棟のみというは考え難く、その東側の発掘区外である八坪北辺には倉庫群が並ぶ空間も想定される。そうであれば、八坪は調査でも実務的な空間で、九坪は調査を運んだ運転、さらにはそれらを率いた都司の宿舎の存在を想定することも可能ではあるまいか。いずれにせよ、今後もそのような視点をもって調査を行う必要があろう。

(原田憲二郎)

## 【参考文献】

- 今里幾次2010「5官衛と寺の時代」『姫路市史 第七巻下 資料編 考古』姫路市市史編集専門委員会
- 異序一郎1992「平城宮・京出土須恵器の分類と産地同定」奈良市教育委員会2012「平城京跡(左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条系南北小路・東四坊坊間東小路)の調査第608次・622次」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成21(2009)年度
- 奈良文化財研究所1991「平城宮発掘調査報告書 XIII 原田憲二郎2013「平城京における播磨産瓦出土の背景について」『帝塚山大学考古学研究所研究報告XV』帝塚山大学考古学研究所原田憲二郎2014a「平城京の重圓系軒瓦」『古代瓦研究VI』奈良文化財研究所
- 原田憲二郎2014b「平城京内出土の興福寺式軒瓦」『古代瓦研究VI』奈良文化財研究所

兵庫県教育委員会1987「小丸遺跡I」

兵庫県教育委員会2000「志方窯跡I・中谷支群I」

兵庫県教育委員会2013「兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書II」

毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦・8世紀を中心として」『研究論集IV』奈良国立文化財研究所

毛利光俊彦・花谷浩1991「第VI章考察 1屋瓦 A 平城宮・京出土瓦軒轅年の再検討」『平城宮発掘調査報告 XIII』奈良国立文化財研究所

## 【註】

- 1) 奈良文化財研究所2016「興福寺境内の調査 第553次・第559次」図235の2の真。2016年12月、奈良文化財研究所の林正憲氏と実物照合をおこない、同道と判定した。
- 2) 山田寺の平瓦4類Aや、平瓦6類Bに同様の例がある。(奈良文化財研究所2002「山田寺発掘調査報告」)
- 3) 例えば「雁鴨池発掘調査報告書(本文)」文化公報部文化財管理局1989の16頁16-407や図18-423の鬼瓦。
- 4) なお、姫路市本郷遺跡では、平城京例と同様に表裏とも系切痕を明瞭に残す播磨府国系鬼瓦II類が採集されている(今里2010)。
- 5) 特にV類平瓦は長坂寺遺跡のH15類(兵庫県教委2013)、小丸遺跡の平瓦A II c(兵庫県教委1987)によく似る。
- 6) 「大日本古文書」4卷「相模國司牌」58 ~ 59頁、「相模國司牌」83頁、「東西市庄解」109 ~ 110頁、「相模國朝集使解」114 ~ 115頁。
- 7) 「延喜式」(卷二十二 民部上)、国史大系編修會・黒板勝美編1989『(新訂増補)国史大系 延喜式 中篇』

## (2) 平城京跡（左京五条四坊二坪）の調査 第713次

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京五条四坊二坪の南東部にある。二坪内ではこれまで3回の発掘調査(HJ第468-3・608-2・630次)を行い、奈良～平安時代の掘立柱建物・東西溝・井戸・土坑などが検出され、坪内を分割し中小規模の宅地として利用されていたことが明らかになっている。また、HJ第630次では平城京造営に伴って削平された東西13m、南北12mの方墳(5世紀後半頃)が検出されている。

今回の調査は、JR大和路線を挟んだ南側で行い、二坪南東部の様相の解明を目的として行った。

### II 基本層序

発掘区内の層序は上から造成土、黒褐色砂質土(耕土、厚さ約0.3m)、褐色砂質土(床土、厚さ約0.1m)、褐灰色砂質土(旧耕作土、約0.2m)、褐色砂質土(旧耕作土床土、約0.1m)の順に堆積し、地表下約0.6mで地山に至る。遺構検出面の標高は南端で約61.8m、北端で約61.7mと北へ緩やかに傾斜している。

### III 検出遺構

古墳時代前期の円墳1基(ST02・SD16)、奈良時代の掘立柱建物6棟(SB216～221)、掘立柱解5条(SA222～226)、溝2条(SD107・108)、井戸2基(SE10・11)等がある。

各遺構の詳細は一覧表に記し、ここでは主要遺構の概要と変遷について述べる。

### 古墳時代の遺構

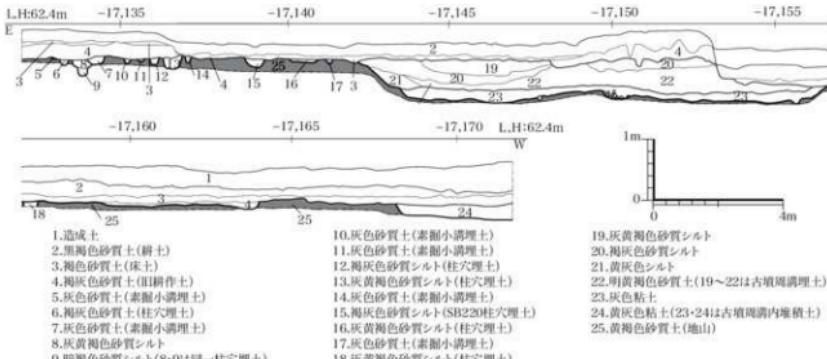
古墳は直径約21mの円墳(ST02)で、墳丘は削平され、埋葬施設・葺石・段築は確認できなかったが、周溝(SD16・17)の一部を検出した。周溝は幅約4.5mで墳丘を巡り、墳丘南東側で幅約14m、長さ約8mの規模で張出し、周溝平面形は帆立貝形をしている。張出し部には前方部が築かれておらず、一部石敷をした低い島状の高まり(SX19)がある。墳丘東側の周溝内には幅約1.0m、高さ約0.3mの陸橋状の高まり(SX20)があり、また、周溝の東側底面では周溝外縁に沿って周溝を掘削時に掘られた幅約0.3mの小溝(SD18)がある。周溝の埋土は、上層が明黄褐色砂質土と灰黃褐色砂質シルト等の埋土、下層が灰色粘土で周溝機動時の堆積である。

埴輪は、主に墳丘裾に近い周溝部から出土したが、原位置を保つものはなかった。

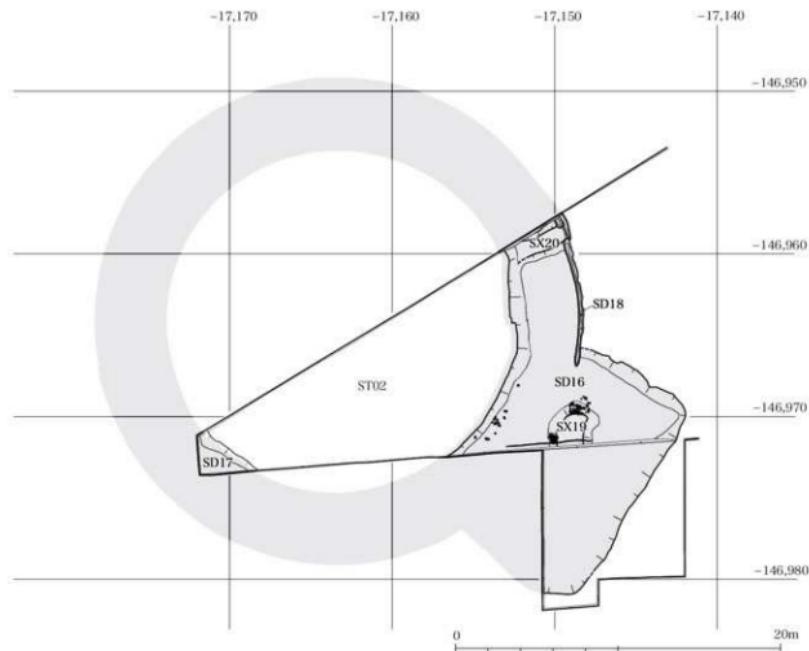
### 奈良時代の遺構

建物 SB216は、桁行4間(11.8m)、梁行1間以上(2.7m以上)の西庇付南北棟建物である。発掘区北東側で検出し東側は発掘区外へ続く。桁行の柱間は2.9～3.0m、梁行の柱間は2.7m等間、庇の出は西に3.0mである。検出面からの柱穴の深さは0.2～0.6m。直径0.3mの柱根が残存していた。重複関係から、SD107・108より新しい。

SB217は、桁行、梁行ともに1間以上の建物で、発掘区南東側で検出し発掘区外東側及び南側に続く。北庇付



HJ第713次調査 発掘区南壁土層図(横1/150・縦1/80)



HJ 第713次調査 古墳 ST02 平面図 (1/300)

東西棟建物もしくは総柱建物の可能性がある。柱間は南北3.6m、東西2.7mで、柱穴の深さは0.3～0.7mである。重複関係からSB219より新しい。

SB218は、桁行4間以上(12.0m以上)、梁行2間(5.4m)の東庇付南北棟建物で、北側は発掘区外へ続く。桁行柱間は3.0m等間、梁行2.7m等間、庇の出は東に3.9m、柱穴の深さは、0.1～0.6mである。一部の柱穴で直径0.1～0.2mの柱根が残存していた。妻側柱列はSA222と揃っている。

SB219は、桁行2間以上(3.6m以上)、梁行2間(4.6m)の東西棟建物で東側は発掘区外へ続く。桁行柱間は1.8m等間、梁行2.3m等間で、柱穴の深さは0.4～0.6mである。北側柱列の西から3つ目の柱穴には、直径0.2mの柱根が残存していた。重複関係から、SB217より古い。

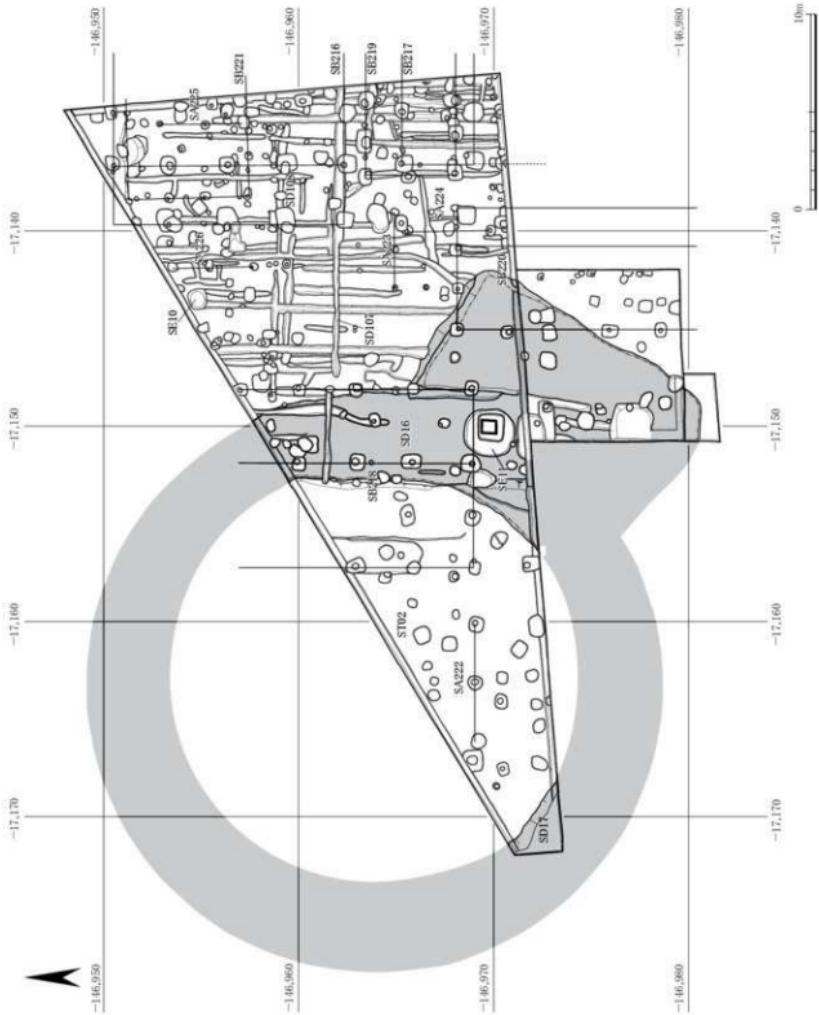
SB220は、桁行4間以上(10.5m以上)、梁行2間(6.3m)の東庇付南北棟建物で、南側は発掘区外へ続く。

桁行柱間は2.1～2.7m、梁行柱間2.1m等間、柱穴の深さは0.2～0.3mである。近接するSB219南側柱列と柱筋が揃っており、L字型の建物配置となる。

SB221は、南北3間(6.1m)、東西2間以上(4.2m以上)の建物で、発掘区北東部で検出し東側は発掘区外へ続く。棟方向は不明。南北の柱間は1.8～2.3m、東西2.1m等間、庇の出は東へ2.1mで、柱穴の深さは0.1～0.3mである。

井戸 SE10は、掘方が東西・南北1.0mの隅丸方形で、素掘りの井戸となる可能性の高い井戸である。出土遺物より、8世紀前半頃に埋没した井戸と考えられる。

SE11は、掘方が二段掘りで、上段が東西2.7m、南北2.4mの楕円形、下段が南北1.4m、東西1.5mの隅丸方形、深さ2.1mである。最下層から横棧が検出され、枠内埋土より一部縦板片が出土していることから方形縦板組横桟留の井戸と考えられる。なお、横桟は転用部材で、1つの部材を2分割している。出土遺物より8世紀中頃以





HJ 第713次調査 発掘区 全景（垂直）



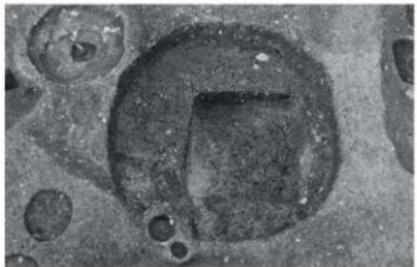
HJ 第713次調査 発掘区 全景（垂直）



HJ 第713次調査 井戸 SE10（南から）



HJ 第713次調査 井戸 SE10 遺物出土状態（北から）



HJ 第713次調査 井戸 SE11 検出状態（南から）



HJ 第713次調査 井戸 SE11（南から）



HJ 第713次調査 古墳 ST02 及び周溝 SD16・17（東から）



HJ 第713次調査 古墳周溝 SD16（東から）



HJ 第713次調査 古墳周溝 SD16 内 島状の高まり



HJ 第713次調査 古墳周溝 SD16 内 遺物出土状態（南東から）

H J 第713次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁行全長	柱間( m )		庇の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
					桁行	梁行			
SB216	南北	4×1以上	11.8	2.7以上	北から 2.9-2.9-3.0-3.0	2.7等間	西に3.0	0.2~0.6	中央に床東あり SD107・108より新しい。
SB217	不明	1以上×1以上	2.7以上	3.6以上	2.7	3.6		0.3~0.7	SB219より新しい。
SB218	南北	4以上×2	12.0以上	5.4	3.0等間	2.7等間	東に3.9	0.1~0.6	
SB219	東西	2以上×2	3.6以上	4.6	1.8等間	2.3等間		0.4~0.6	SB217より古い。
SB220	南北	4以上×2	10.5以上	6.3	北から 2.7-2.1-3.0-2.7	2.1等間	東に2.1	0.2~0.3	
SB221	不明	3×2以上	6.1	4.2以上	北から 2.0-1.8-2.3	2.1等間		0.1~0.3	
SA222	東西	2以上		全長6.0	3.0等間			0.3~0.4	
SA223	東西	2		全長3.9	1.95			0.1~0.2	
SA224	南北	2以上		全長4.2	2.1等間			0.3~0.4	
SA225	南北	2		全長4.3	北から 2.2-2.1			0.2~0.3	柱間は不揃い。
SA226	南北	2以上		全長4.0以上	北から 1.9-2.1			0.3~0.4	柱間は不揃い。
遺構番号	掘方	平面	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)	時期	主な出土遺物	備考
		平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)			
SE10	隅丸方形	東西1.0、南北1.0	2.1				8世紀前半	土師器杯A・甕・鍋、須恵器杯B・鉢F	
SE11	楕円形	東西2.7、南北2.4	2.1		方形縱板組横棟留	東西0.6、南北0.7	8世紀中頃	七輪杯A・甕・平鉢、須恵器平甕・蓋A・蓋・杯B・鉢A・壺・鋤鉗	掘方は二段掘り
遺構番号	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物			備考	
ST02	円形	直径21		4世紀後半				古墳墳丘部は削平。	
SD16		幅4.5	0.5	4世紀後半	円筒埴輪、家形埴輪			南東部で、幅約14m、長さ約8m張り出す。 周溝張り出し部上層より鉄造圓錐遺物出土。	
SD17		復元幅4.5	0.2	4世紀後半	円筒埴輪				

降に埋没したと考えられる。

溝 SD107は、幅0.6m、深さ0.2mの東西方向に断続的に続く溝である。重複関係よりSB216より古い。溝心はX=-146,962.5m、Y=-17,140.0mである。

SD108は、幅0.5m、深さ0.1mの東西方向に断続的に続く溝である。重複関係よりSB216より古い。溝心は-146,959.0m、Y=-17,140.0mである。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で50箱分が出土した。4世紀後半の円筒埴輪・家形埴輪、8世紀の土師器・須恵器・瓦類・鉄造圓錐遺物が出土した。

(吉田朋史)

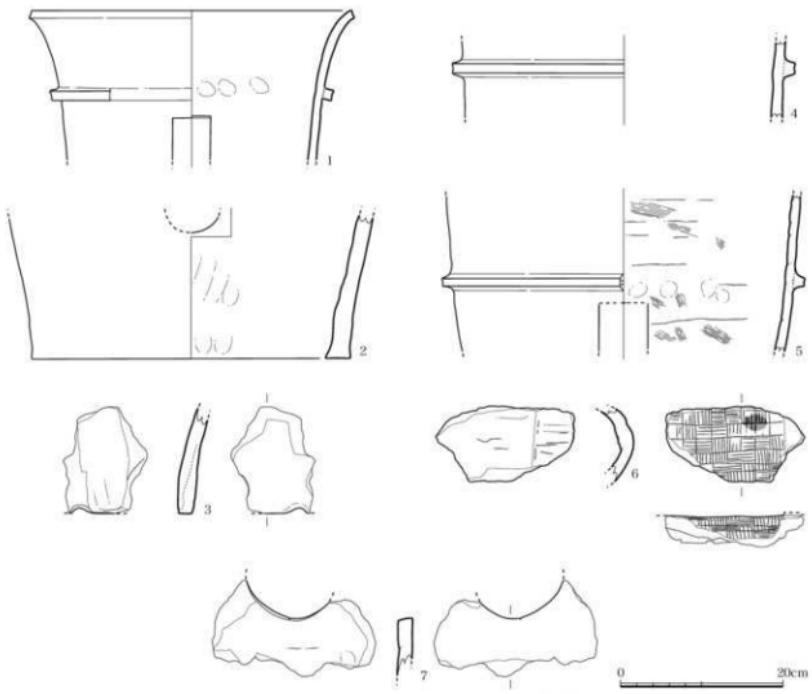
#### 古墳時代の遺物

埴輪 遺物整理箱1箱分の円筒埴輪(1~5)と形象埴輪(6~7)がある。いずれも周溝の下層で出土したものである。5以外は表面に黒斑が認められないが、いずれも断面が黒褐色であり、野焼きであると考えられる。

円筒埴輪は口縁部片(1)、底部片(2~3)、胴部片(4~5)があるが、図示したものは胴土や焼成の違いからいずれも別個体である。1は復元口径39.4cmで口縁部高は約10cmである。口縁部は緩やかに外反する。突帯の一部は剥

離しているが設定技法の痕跡は認められない。突帯の下約2cmの位置に方形透孔がある。内外面ともに摩滅し調整は不明瞭である。2は復元底径39.2cmで残高17.6cmである。半円または円形透孔の痕跡がある。器壁は2~3cmと比較的厚い。内外面ともに摩滅し調整は不明瞭である。3は底部に半円状の凹みがある。断面には粘土板を2枚合わせて底部とした痕跡が観察できる。4は復元径40.0cmであり、突帯は比較的太い断面M字状を呈する。内外面ともに摩滅し調整は不明瞭である。5は復元最大径43.6cmであり断面台形状の突帯をもつ。突帯剥離部分に突帯間隔設定技法の凹線が観察できる。突帯下約1.5cmの位置に方形透孔がある。外面は摩滅しているが、内面は粘土組接合痕が比較的確認でき、短いストロークでの斜めから横方向のハケ調整が施される。突帯部分の内面は連続する指オサエが観察できる。

形象埴輪は、家形埴輪(6)と器材埴輪の基部片(7)がある。6は家形埴輪の屋根部で、網代を線刻で表現する。剥離部分には押縁突帯が貼り付けられていたと考えられる。わずかに赤色顔料が観察できる。内面にも剥離痕跡があり刻みが施される。位置的にみて桿木が剥離したと



HJ第713次調査 古墳周溝 SD16出土埴輪(1/6)

考えられる。残存部での閉塞痕跡は確認できない。7は  
外表面ともに摩滅しているが、通常の円筒埴輪に比べて  
径が大きく復元できる透孔(円形?)がある。

(村瀬 陸)

#### 奈良時代の遺物

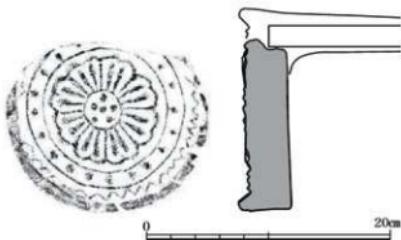
奈良時代の土器は大半が小片である。

SE10からは8世紀前半の二段放射暗文を施す土師器  
杯A・甕・鍋、須恵器杯B・鉢Fが出土している。

SE11の枠内からは8世紀前半～中頃の土師器杯A・  
平鉢・甕、須恵器杯B・平瓶・壺A蓋・斎申・銅鎗が出土  
した。また、底部に「乙」と墨書きされた須恵器杯Bが出土  
している。

古墳周溝上層からは、8世紀前半頃の土師器杯A、須  
恵器杯B・壺・皿Bとともに羽口・津などの鋳造関連遺物、  
軒丸瓦(6316C、6316S)が出土した。(吉田 明史)

瓦塼類 遺物整理箱で12箱分出土した。その大半は  
丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦3点を含む。



HJ第713次調査 出土軒丸瓦6316S(1/4)

軒丸瓦の内訳は6316型式C種1点、6316型式S種2  
点である<sup>11)</sup>。6316型式は間弁の無い複弁蓮華紋を飾り、  
子葉を分かつ弁中央の凸線が無いもので、A～I・M～  
Uの18種が知られる。S種は中房蓮子配置1+5である点  
が特徴的である。蓮弁は隣り合う弁が互いに接する。外  
区外縁に珠紋を、外区外縁には線鋸齒紋を巡らす。外縁  
頂部から約1cm離れた箇所に端端痕が確認できる。瓦当

裏面に接合溝を設け、先端無加工の丸瓦を接合する。瓦当裏面はナデで平坦にする。瓦下半部側面はナデ。胎土はやや粗く、焼成は軟質で橙灰白色を呈する。

これまで6316型式S種は木津川市瀬後谷瓦窯5号窯灰原出土品1点がみつかっていただけであり（京都府埋文研1999）、今回の出土品は供給地である平城京内で初めて確認された資料となる<sup>2)</sup>。（原田憲二郎）

#### V. 調査所見

今回の調査成果は次の2点である。

##### 1. 新たに4世紀後半の古墳を確認した。

古墳（STO2）は直径約21mの円墳であるが、周溝は帆立貝形をしている点が特徴である。また、埴輪は出土しているが掘削面積に対し、出土量が比較的少なく、埴輪上の要所に配置していた可能性がある。

##### 2. 二坪南東部の宅地利用が判明した。

遺構の重複関係と建物の配置関係からSB219・220・SD107・108の（A期）、SB216・SB217・SA224の（B期）、SB218・SA222の（C期）の3時期に分類できる。

A期は、坪内南北1/4分割ライン上に東西方向の坪内通路を設置し、坪南東部を分割利用する。通路南側は中規模の南北棟建物SB220を中心に配し、北側に掘立柱塀で仕切られた住建物SB221が配される。

B期は、坪内南北1/4分割ラインを挟んでSB216とSB217があり、さらにSB216西側桁行とSB217西側柱列が柱筋を揃えており、南北方向に長い1/8坪以上の宅地があったと推定できる。

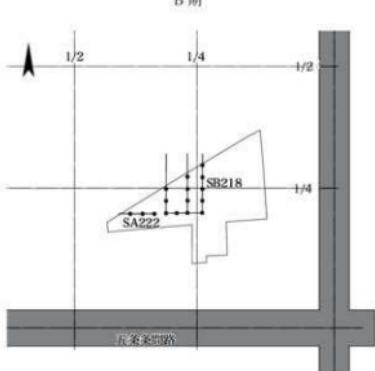
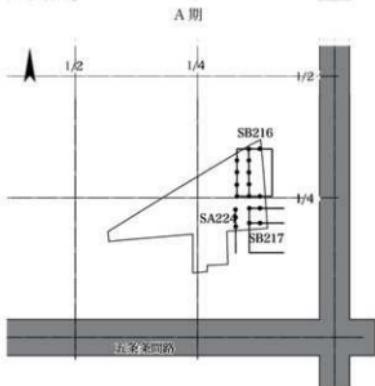
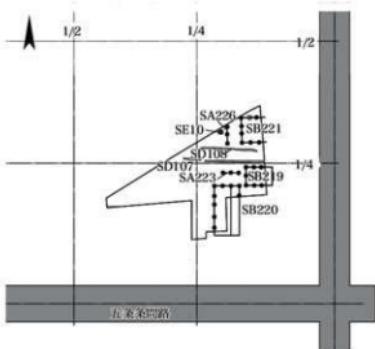
C期は、坪内東西南北1/4分割ライン上にSB218があり、SB218を中心とした二坪南東部の1/4坪規模の宅地が推定できる。

以上のことから奈良時代を通して南東部では大きく3時期の変遷があり、いずれも坪内を分割利用している。発掘面積が小さく分割宅地の詳細は不明であるが、1/16～1/4坪規模の宅地が推定できる。二坪西部と北東部で行われた調査でも分割利用していることが判明しており、当坪内には分割した中小規模の宅地利用が行われていたことが明らかになった。（吉田朋史）

#### 註

1) 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999『京都府遺跡報告書 第27冊 奈良山瓦窯跡群』

2) 木津川市教育委員会保管の瀬谷窓谷瓦窯出土6316Sは現在所在不明であるため、実物照合は行えていないが、瀬谷窓谷瓦窯出土6116Sの写真と照合した結果、外区段紋と内外区を分かつ圓線との2か所の範囲は、一致し同窯とみられる。



C期  
遺構変遷図（1/1,200）

## 5. 平城京跡（左京八条二坊三坪）の調査 第715次

事業名（仮称）辰市こども園建設事業	調査期間 平成29年9月11日～平成30年1月11日
通知者名 奈良市長	調査面積 990m <sup>2</sup>
調査地 杏町414番4他8筆	調査担当者 安井 宣也

### Iはじめに

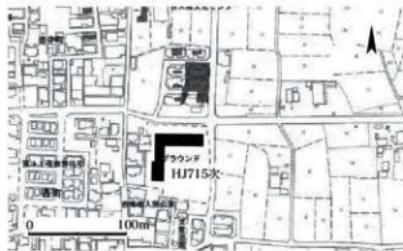
調査地は、平城京の条坊復元では左京八条二坊三坪の北西部にあたり、地形的には岩井川が形成した扇状地の扇端付近に位置する。現状はグラウンドである。

三坪内では、平成8年度に南東隣接地で市HJ第362次調査を実施し、水田面下0.6m（標高51.9～52.1m）で室町時代に埋没する旧河道を検出した。北隣の二坪内では、平成7年度に市HJ第337・340次調査を実施し、水田面下0.6m（標高52.4m）の地山上面で弥生時代前期末～中期初頭の溝・土坑、古墳時代後期前半の方墳3基と奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物・掘立柱列・井戸・土坑を検出した。

今回の調査は、主として三坪北西部の宅地利用、加えてその前後の時代における土地利用の様相を確認するため、建物予定地である敷地北辺に東西に長い北発掘区と、西辺に南北に長い西発掘区を設定した。

### II 基本層序

グラウンドの造成土（厚さ0.8～1.1m）の下に旧水田の耕土層（土層1層、厚さ0.2m）・床土層（同2～8層、厚さ0.1～0.3m）、後述する水路SD60の氾濫堆積層（同10～12層、厚さ0.3m）、SD60の掘削時～埋没前の水田床土層（同13～15層、厚さ0.2～0.4m）があり、その下で奈良時代の宅地に伴う整地土層（同16層、厚さ



HJ第715次調査 発掘区位置図(1/5,000)

0.1～0.3m）となる。その下は、北発掘区の中央北寄りと西辺、西発掘区の北寄りと南寄りでは地山となり、その他の部分は旧河道の埋土（同17～21層）となる。

水田床土の各層（同2～8・14層）及び奈良時代の整地土層の上面には乾田に特有の斑鐵がみられる。水路SD60の氾濫堆積層（同10～12層）は沼沢地に近い様相を示すが、わずかな段差を伴う平坦面が層界から読み取れ、上面で湿田が営まれたことがうかがえる。旧水田床土層の最下層（同8層）は17世紀の陶器片、奈良時代の整地土層は8世紀の土器片を含む。

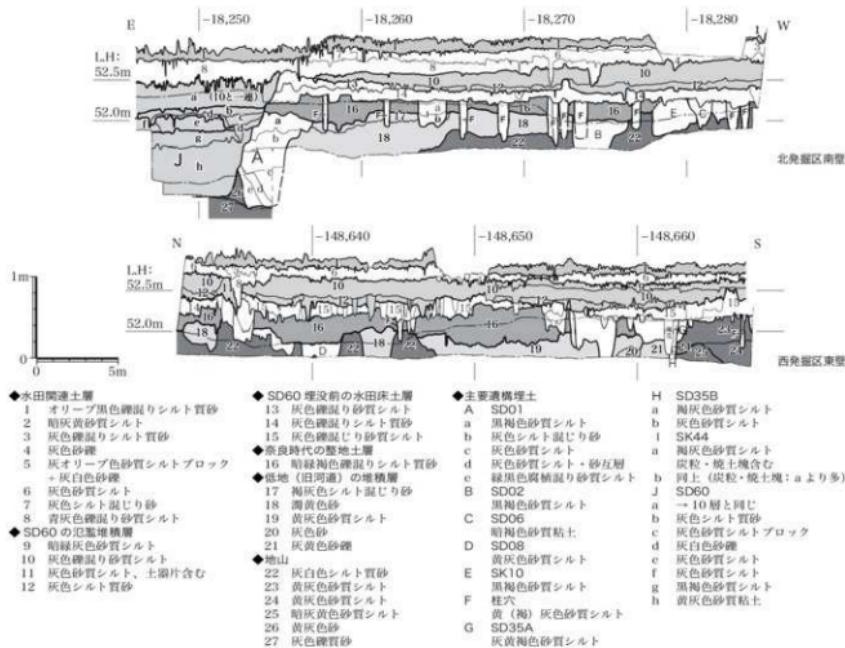
奈良時代の整地土層上面（標高52.2m）は奈良～鎌倉時代の遺構面、その直下の面（標高51.8～52.1m）は飛鳥時代以前の遺構面である。



HJ第715次調査 北発掘区遠景（南西から）



HJ第715次調査 西発掘区遠景（南西から）



### III 検出遺構

奈良時代の遺構の検出は、整地土層（土層計16層）上面で行ったが、遺構の識別が困難であったため、北発掘区中央部と西発掘区南西部で鎌倉時代以降の遺構検出を行った。

行った後に地山及び旧河道埋土上面まで掘り下げ、飛鳥時代以前の遺構検出と合わせて行った。

その結果、弥生～飛鳥、奈良、鎌倉～室町の各時代の遺構を検出した。時代ごとに概要を記す。



HJ 第715次調査  
北発掘区 全景  
(西から)



HJ 第715次調査  
北発掘区 西部分  
(東南から)

HJ 第715次調査  
北発掘区 西寄り  
(南から)



HJ 第715次調査  
西発掘区 全景  
(南から)



HJ 第715次調査  
西発掘区 全景  
(北から)



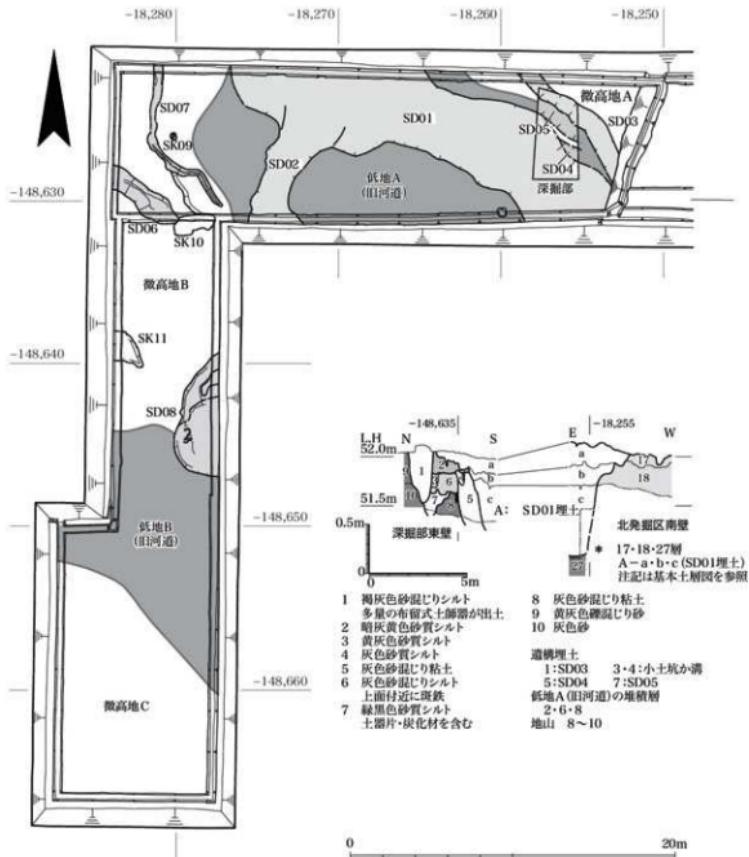
## 1. 弥生・古墳・飛鳥時代

遺構面は、地山で形成された微高地（北発掘区中央北寄り：A、北発掘区西辺及び西発掘区北寄り：B、西発掘区南寄り：C）とその間の旧河道が埋没して生じた低地（北発掘区：A、西発掘区：B）からなり、微高地A・Bと低地Aで溝8条（SD01～08）、土坑3基（SK09～11）を検出した。概略は一覧表に示す通り。

SD01・02・08 SD01は低地A内に掘削された溝で、底部は地山の砂礫層上部に及ぶ。埋土は主に灰色のシルトで、潛水していた様相を示す。

SD02・08は低地Aの東縁に掘削されており、位置関係から一連の可能性がある。SD02は埋土の先後関係からSD01より新しい。埋土は下部が灰色の砂、上部が黒褐色のシルト。SD08の埋土は灰色のシルト。

SD03 微高地Aの南縁に掘削された溝で、埋土は褐灰色の粘土質シルト。古墳時代中期の小型丸底壺と高杯が集積しており、遺物整理箱1箱分出土した。SD01との先後関係は確認できなかった。



HJ 第715次調査 弥生・古墳・飛鳥時代遺構平面図（1/300）、深掘部断面土層図（縦:1/50、横:1/250）

## 弥生・古墳・飛鳥時代 遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SD01	北西から南東	幅4～6	1.0	古墳後期～飛鳥		SD04より新しい。
SD02	北東から南西	幅2～3	0.5	古墳後期～飛鳥		SD01より新しい。
SD03	北西から南東	幅1.3	0.6	古墳中期	土師器小型丸底壺・高杯 (布留式新相)	SD04・05より新しい。 小型丸底壺・高杯が集積。
SD04	北西から南東	幅1.2以上	0.5以上	古墳中期		SD05より新しい。
SD05	北西から南東	幅1.0以上	0.2以上	古墳前末～中期	土師器甕（布留式古相）、 炭化材	
SD06	北西から南東	幅1.3	0.3	古墳～飛鳥の可能性		
SD07	北西から南東	幅0.5	0.3	古墳～飛鳥の可能性		
SD08	北から東に屈曲	幅2.0以上	0.5	古墳後期～飛鳥か		SD02の南延長部の可能性あり。
SK09	楕円形	東西0.3×南北0.4	0.2	弥生末～古墳初頭	土師器短頭壺（庄内式）	
SK10	不整形	東西2.5×南北1.0	0.5	古墳～飛鳥の可能性		SD06・07より新しい。
SK11	不整形	東西1.5以上×南北2.0	0.3	弥生末～古墳初頭	土師器短頭壺（庄内式）	

SD04・05 ともに低地Aの北縁に掘削された溝で、  
微高地A南側を深掘りした際に確認した。

SD04は旧河道内の上から2番目の埋土（深掘部上層  
図6層）から掘削されており、層序からSD01より古い。  
なお、この層の上面には乾田に特有の斑鉄がみられる。  
埋土は灰色粘土で、出土遺物はない。

SD05はその下の地山上面から掘削されており、層序  
からSD04より古い。埋土は黒褐色の粘土で、古墳時代  
前末～中期の甕と炭化材（板材）が出土した。

SD06・07 ともに微高地Bの東辺に掘削された溝で、  
埋土は黒褐色の粘土。出土遺物はなく、時期不明。

SK09 微高地Bの東辺で検出した小土坑で、弥生時  
代後期末～古墳時代初頭の短頭壺が出土した。

SK10・11 SK10は重複関係からSD06より古い。  
SK11からはSK09と同時期の短頭壺が出土。

## 2. 奈良時代

掘立柱列15条（SA12～26）、掘立柱建物7棟（SB27  
～33）、溝8条（SD34～40）、井戸2基（SE40・41）、土  
坑17基（SK42～58）、土器集積遺構1基（SX59）と小  
溝群を検出した。形状・規模の概略は表に記す通り。

掘立柱列・掘立柱建物 建物は、西発掘区中央付近の  
東西柱列SA26より北で多くみられ、南は1棟のみである。  
柱筋の方針については、下記のように分類できる。

a. ほぼ正方位のもの

柱列：SA12・13・15・16・20・22～26

建物：SB27・30・31・33

b. 北に対しやや東、またはその直交方向のもの

建物：SB28・29

c. 北に対しやや西、またはその直交方向のもの

柱列：SA14・15・17・18・21



古墳時代遺構面 低地A深掘部（南西から）



溝 SD03 古墳時代土師器出土状態（南から）

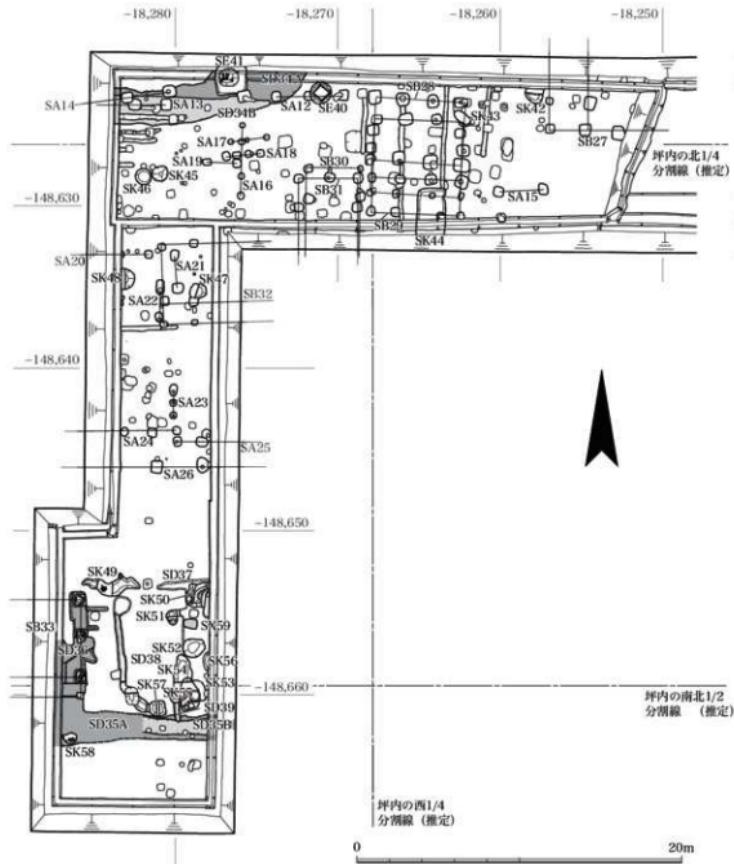


溝 SD05 炭化材出土状態（南から）

掘立柱建物のうち、北発掘区の北辺西寄りにあるSA12～14は、柱穴の大きさや規模からみて建物の一部の可能性がある。その他は小規模なもので、塀などとみられる。

掘立柱建物には廁付のものが5棟あり、SB27以外は小型の建物である。SB28・29とSB30・31はともに構造・規模がほぼ同じである。SB33の全ての柱穴の柱抜取穴から土師器壺Bやミニチュア炊飯具が出土した。

溝 北発掘区の北辺西寄りにあるSD34Aと西発掘区の南寄りにあるSD35Aはともに幅2m前後の東西方向の溝で、ブロック土で埋められた後に一部が掘り直されている(SD34B・35B)。SD34Aの底面南寄りには木桶が残っていた。SD36はSD35A、SD39はSD35Bとそれぞれ接続し、同じ埋土で埋まる。SD35BとSD36からは土馬が出土した。



HJ 第715次調査 奈良時代 遺構平面図 (1/300)

奈良時代遺構一覧表①

遺構番号	柱筋 棟方向	規模（間）		全長（m）		柱間寸法（m）		幅の出 (m)	備考
		<身合> 柱行 × 梁行		柱行	梁行	柱行	梁行		
SA12	東西	2		3.9		1.95	等間		SD34A・Bより新しく、SE40より古い。
SA13	東西	1以上		1.95以上		1.95			SD34A・Bより新しい。
SA14	東西	1以上		2.7以上		2.7			SA13より新しい。
SA15	東西	1		2.7		2.7			
SA16	南北	4		4.2		北から 1.05-2.1-1.05			
SA17	東西	2		2.1		1.05	等間		SA16と柱筋が交差。
SA18	東西	2		2.25		0.75	等間		SA16と柱筋が交差。
SA19	東西	1		1.8		1.8			
SA20	東西	1以上		1.8以上		1.8			
SA21	南北	1		2.1		2.1			
SA22	南北	1		1.8		1.8			
SA23	南北	2		1.5		0.75	等間		
SA24	東西	2以上		3.0以上		1.5	等間		
SA25	東西	1以上		1.5以上		1.5			
SA26	東西	1以上		2.7以上		2.7			
SB27	南北	1以上 × 1以上		1.8以上	2.1以上	1.8	2.1	西2.1	
SB28	東西	3×2		5.7	3.6	西から 1.8-2.1-1.8	1.8 等間	南2.1	
SB29	東西	3×2		5.7	3.6	西から 1.8-2.1-1.8	1.8 等間	南2.1	SB28と位置が重複。
SB30	南北	1以上 × 1		1.8以上	3.0	1.8	3.0		妻柱を欠く。
SB31	南北	1以上 × 2		1.8以上	3.6	1.8	1.8 等間	南1.5	SB30と位置が重複。
SB32	東西	1以上 × 1		1.8以上	3.6	1.8	1.8 等間	南1.5	妻柱を欠く。SA21と位置が重複。西柱列がSA22の柱高と重複。SK47より古い。
SB33	東西	1以上 × 2		—	6.0	—	2.4 等間	南1.2	全柱穴の柱抜取穴に土師器壺B、一部にミニチュア陶器が埋納。SD36より新しい。

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物		備考
					土師器壺・皿 A・皿 C・高杯、須恵器壺・杯 A・杯蓋、製塙土器、平瓦	東から西へ下る。底面で本舗を検出。	
SD34A	東西方向	幅 2.3	(0.7 ~ 1.1)	8世紀			SD34Aの掘り直し。
SD34B	東西方向	幅 1.6	(0.4)	8世紀	土師器壺、須恵器壺・杯 A、製塙土器		
SD35A	東西方向	幅 1.5	(0.6)	8世紀	土師器壺、須恵器壺・杯 A	西から東へ下る。	
SD35B	東西方向	幅 0.9	(0.8)	8世紀後半	土師器壺・壺 B・杯 A (B形壺合む)・杯蓋・皿 A・皿 C、須恵器壺・平瓶・杯 A・杯 B・杯蓋・皿 A、製塙土器、ミニチュア壺、土馬、丸瓦・平瓦	SD35Aの掘り直し。SD36までは達しない。	
SD36	南北方向	幅 1.0以上、長さ 7.5	(0.5)	8世紀	土師器壺・高杯、須恵器壺・杯 A・杯 B、土馬	SD35Aと一連、北半は幅が狭い。	
SD37	東西方向	幅 0.5	(0.4)	8世紀			SK50より古い。
SD38	南北方向	幅 0.4	(0.4)	8世紀			SD35Aと接続する可能性あり。
SD39	南北方向	幅 0.3	(0.4)	8世紀後半	土師器壺・壺 B		SD35Bと接続。

遺構番号	掘方等			井戸枠		時期	主な出土遺物	備考
	平面形態	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法（m）			
SE40	円形	径 L3	(1.2)	方形縦板 組横枝留	0.7	なし	8世紀 後半	柱抜取穴；土師器壺・壺 B・皿 A・皿 C・椀 A・椀 C・高杯、須恵器壺・杯 A・杯 B・杯 C・杯蓋・皿 C・高杯、製塙土器、平瓦
SE41	隅丸方形	一辺 1.9	(1.8)	方形縦板 組横枝留	0.75	なし	8世紀末 ~9世紀 初頭	掘方埋土；土師器壺・杯蓋・皿 A・椀 A・須恵器壺・椀 A・椀 C・高杯・平瓦、土師器壺・壺 B・皿 A・椀 A・椀 C・高杯・須恵器壺・壺 N・杯 A・杯 B・杯蓋・皿 C・高杯、製塙土器、丸瓦・平瓦

奈良時代遺構一覧表②

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備考
SK42	円形	径1.2	(0.3)	8世紀後半	土師器甕・壺B・皿A(B形態含む)・椀A・須恵器甕・杯B・杯蓋・皿A・平瓦	
SK43	楕円形	東西0.6×南北1.2	(1.0)	8世紀	土師器・須恵器細片	SB29より新しい。水溜か。
SK44	隅丸方形	東西1.8×南北2.8以上	(0.3)	8世紀後半	土師器甕・壺B・杯A・杯B・皿C・椀C・須恵器甕・壺A・蓋・杯A・杯蓋・丸瓦	SB28・29と重複。
SK45	円形	径1.0	(0.6)	8世紀	土師器細片	
SK46	円形	径1.0	(0.6)	8世紀	須恵器細片	
SK47	円形	径0.9	(0.7)	8世紀	須恵器細片	SB32より新しい。
SK48	円形	径1.2	(0.5)	8世紀	土師器細片・須恵器杯B	
SK49	不整形	東西3.6×南北1.0	(0.6)	8世紀後半	土師器甕・壺B・杯B・杯蓋・皿A・皿C・須恵器甕・杯A・杯B・杯蓋・製埴土器・丸瓦	
SK50	円形	径1.5	(1.0)	8世紀後半	土師器甕・壺B・皿A・皿C・須恵器甕・杯A・杯B・杯蓋・製埴土器・ミニチュア壺・瓶・土馬	SD37より新しい。壺Bと皿A・Cが主体。
SK51	楕円形	東西0.6×南北0.9	(0.6)	8世紀後半	土師器甕・壺B・杯A・皿A・梅A・高杯・須恵器甕・杯A・杯B・製埴土器	
SK52	円形	径1.2	(0.9)	8世紀後半	土師器甕・壺B・皿C・椀A(c手法)・高杯・須恵器杯B・製埴土器・ミニチュア壺・瓶・土馬・平瓦	
SK53	隅丸方形	東西1.0×南北1.2	(0.8)	8世紀後半	土師器甕・壺B・皿A・皿C・高杯・須恵器杯B・製埴土器・土馬	
SK54	楕円形	東西1.0×南北3.0	(0.4)	8世紀後半	土師器甕・壺B・杯A・皿A・椀A(c手法)・高杯・須恵器甕・壺C・壺E・壺H・杯A・杯B・杯蓋・製埴土器・ミニチュア壺・瓶・土馬・平瓦	SK53より新しい。
SK55	楕円形	東西1.2×南北2.0	(0.7)	8世紀後半	土師器甕・壺B・皿A・皿C・須恵器甕・杯B・杯蓋・皿A・高杯・鉢A・ミニチュア壺・瓶	SK54より新しい。
SK56	隅丸方形	東西0.8以上×南北2.6	(0.5以上)	8世紀後半	土師器甕・壺B・皿C・須恵器甕・ミニチュア壺・土馬	
SK57	隅丸方形	東西1.0×南北0.9	(0.5)	8世紀後半	土師器甕・壺B・杯蓋・皿A・高杯・土馬・平瓦	SD38より新しい。
SK58	楕円形	東西0.9×南北0.7	(0.5)	8世紀後半	土師器甕・壺B・杯蓋・皿C・高杯・須恵器甕・杯A・杯B・杯蓋・皿C・ミニチュア壺・土馬・平瓦	SD35Aより新しい。
SX59	隅丸方形	東西0.9×南北0.6	(0.6)	8世紀後半	土師器甕B・皿A・皿C・須恵器杯A・ミニチュア壺	土溜片を底面全体に散く。

※ 一覧表①・②の深さの( )の数値は、整地層上面から求めたもの



HJ第175次調査 建物SB33(西北から)



同左 柱抜取穴 左:北端柱穴(西から)右:南端柱穴(北西から)



HJ第175次調査 清SD34A(西から)



HJ第175次調査 清SD35(西から)

井戸 北発掘区の北辺西寄りに2基ある。いずれも方形縦板組横棟留構造。SE40の掘方底部は湧水層である旧河道内の砂礫層に達する。井戸枠は四隅を正方位に合わせて据えており、下から0.2mほどが残る。SE41の掘方底部は湧水層である地山の砂礫層に達する。井戸枠は下から1mほどが残る。

土坑 挖立柱列・建物が多い西発掘区中央付近より北ではSK42～48が散在する。同南寄りのSD36の東側でSD35A・Bの7.5m北までの範囲にはSK49～57が群在し、いずれも土師器壺B・皿C・土馬・ミニチュア炊飯具のいずれかが出土した。

SX59 SD35A・Bの6m北のSK50・52の間に位置する。土器片を底面全体に敷き広げており、中央部は須恵器杯片、その周囲は土師器壺B片を用いている。

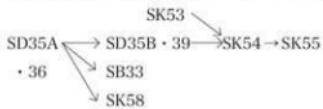
小溝群 幅0.2m、遺構面からの深さ0.2～0.3mの小溝群が北発掘区の中央部と西寄りでみられる。前者は南北方向、後者は東西方向である。

先後・重複関係と変遷 遺構が重複するもの、さらに先後関係がわかるものは、下記の通りで、少なくとも5時期の変遷がある。

a. 先後関係（旧→新）



小溝群（南北）→SK44、SB28・29 SB32→SK47



SD37→SK50 SD38→SK56・57

b. 重複関係（新・旧不明）

SA16—SA17—SA18

SB28—SB29 SB30—SB31

bのうち、SB28・29とSB30・31はいずれも構造・規模がほぼ同じ建物が柱筋を合わせて重複することから、建替えとみることができる。

位置関係 SB28・29の西柱列とSB30・31の東柱列の位置は、約800m東方の市TI第25次調査地で確認した東三坊間路の路面心を基準に算出した三坪の西1/4分割線の位置とほぼ合致する。

SB28・29は、約800m東方の市TI第6次調査地で確認した八条条間路の路面心を基準に算出した坪内の



井戸 SE40（南東から）



井戸 SE41（南から）



土器集積遺構 SX59（東から）

北1/4分割線上に位置し、SA17～19、SB27南柱列・SB30北柱列、SD34A・Bもその近くに位置する。また、SD35A・Bは同様にして求めた坪内の南北2分割線のやや南に位置する。

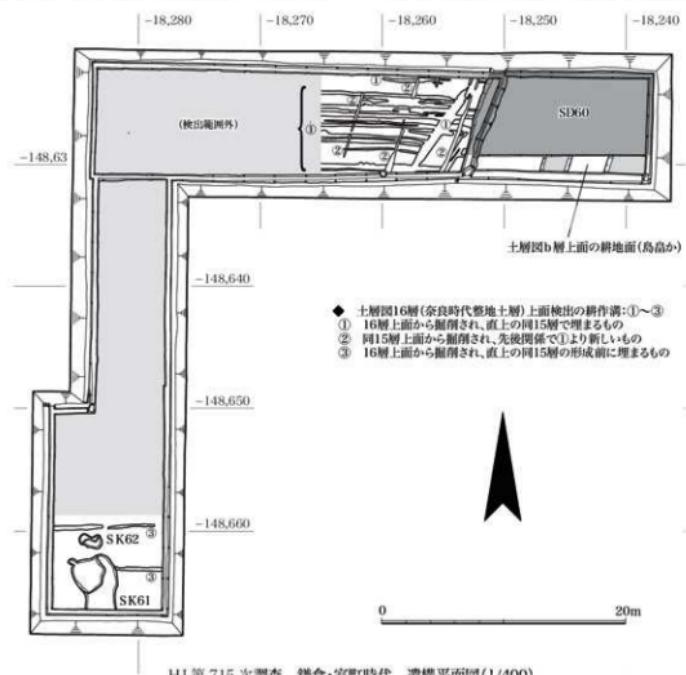
また、掘立柱列・建物の分布の違いの境界となる東西

柱列SA26は、SD35A北肩の15m北に位置する。

### 3. 鎌倉・室町時代

水路1条（SD60）、土坑2基（SK61・62）と耕作溝を検出した。形状・規模の概略は表に記す通り。

SD60 北発掘区東寄りで検出した北東から南西方向



HJ 第715次調査 鎌倉・室町時代 遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SD60	北東から南西	幅16以上	13層上面から1.4	14～16世紀の可能性	(8世紀の土師器・須恵器細片)	埋土は沼沢地の根組、内部は埋没が進んだ段階で耕地化。
SK61	不規円形	東西4.0×南北4.5以上	0.4	12世紀末～13世紀前半	土師器羽釜（大和B）・皿、瓦器 檻（大和皿A）、白磁碗（IV類）	耕作溝③より古い。
SK62	楕円形	東西2.0×南北1.0	0.4	12世紀末～13世紀前半	(8世紀の土師器・須恵器細片)	SK61と同じ埋土。



水路 SD60 内 島畠状の高まりと足跡（南から）



水路 SD60 西側の耕作溝（北から）

の水路で、東肩は発掘区外である。後述する耕作溝や土層との関連から、奈良時代の整地土層の直上に堆積する水田床土の灰色シルト層（土層図13層）上面から掘削され、後に西肩沿いに堤防状の高まり（同14層）を付加したことなどが読み取れる。

埋土は最下層（同A-h層）と最上層（同A-a層）が沼沢地と似た様相を示す灰色のシルト・粘土層で、その間に灰色の砂・礫層（同A-b・d）を挟む。最上層は肩から溢れて西側に広く堆積する（同10層）。

中位の灰色や黒褐色のシルト層（同A-e・g層）は湿田の耕土で、わずかな段差を伴う平坦面や耕作溝が上面の層界から読み取れる。その上に堆積する前述の灰色の砂・礫層は鳥糞状に変更されており、その上を被う耕土の灰色のシルト質砂層（同A-b層）と埋土最上層の上面には多数の人の足跡が残る。

SK61・62ともに西発掘区南辺部で検出した。埋土は灰色のシルト。SK61からは12世紀末～13世紀前半の瓦器椀・土師器皿・羽釜等が出土した。

耕作溝 北発掘区中央部では、①奈良時代整地土層上面（土層図16層）から掘削され、直上の灰色のシルト層（同15層）で埋まる溝と、②前述の①を埋める灰色のシルト層上面から掘削される溝を検出した。①の大半は南北方向である。先後関係からSD60より古い。埋土から13世紀頃の瓦器片が出土した。②は先後関係から①よりも新しく、すべてSD60の西肩に沿う。

西発掘区南辺部では、奈良時代の整地土層上面から掘削され、直上の灰色のシルト層の形成前に埋まる東西方向の溝を検出した。発掘区南壁土層断面での先後関係から、前述のSK61よりも新しい。埋土から13世紀頃の瓦器片が出土した。

#### IV 出土遺物

土器類・土製品、瓦類と木製品が遺物整理箱で51箱分出土した。ほとんどが土器類・土製品である。

##### 1. 土器類・土製品

弥生時代後期末・古墳時代前～中期・奈良～平安時代初頭・鎌倉時代・江戸時代のものがある。

弥生時代後期末 SK09・11から出土した短頸壺がある。前者は口縁へ頸部内面に縱方向のミガキ調整が施され、体部外面上にはタタキ目が残る。大和VI-4様式。

古墳時代前～中期 SD03から出土した小型丸底壺・高杯の器表はナデ調整のみで仕上げており、布留式新相。SD05から出土した壺の口縁端部内面は丸く肥厚す

る。布留式古相。

奈良～平安時代初頭 主にSD35A・同B・36、SE40・41、SK42・44・49～55・58、土器集積遺構SX59の埋土や整地土層（土層図16層）から出土している。主なものは、土師器甕・壺・杯・高杯・皿・碗、須恵器甕・壺・杯・皿と土馬・ミニチュア炊飯具で、遺構から出土したほとんどは8世紀後半のものである。

特に土師器壺B・皿Cと土馬・ミニチュア炊飯具は西発掘区南寄りのSD35Bとその北側のSD36・SB33の柱抜取穴、土坑群で多く出土している。

鎌倉時代 SK61から出土した瓦器椀は大和III-A型式、土師器羽釜は大和B類である。12世紀末～13世紀前半。

江戸時代 旧水田床土の最下層（土層図8層）から出土した17世紀の肥前系陶器椀片は、体部の下部から高台までが露胎である。

##### 2. 瓦類・木製品

瓦類の大半は8世紀の丸・平瓦で、SD35B、SE40・41、SK42・44・54・57の埋土や奈良時代の整地土層から出土している。

奈良時代のSD34Aの底面から出土した木楕は、長さ2.0m、幅1.4m、高さ0.1mの角材を割り貫いて成形している。

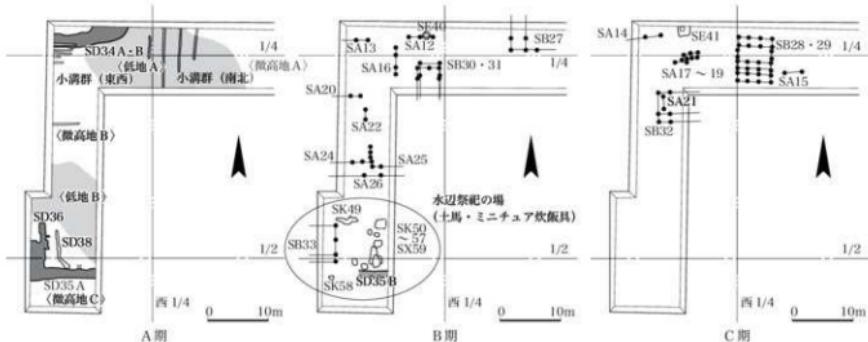
このほか、奈良時代の遺構埋土や整地土層から鉄造に関連する軸の羽口片や砥石も出土している。

##### V 調査所見

今回の調査では、左京八条二坊三坪の宅地に関連する遺構とともに弥生時代後期末・古墳時代前期～中期・鎌倉～室町時代の遺構を検出した。これらの遺構と発掘区壁面の土層断面の調査成果を総合して考察した結果、調査地及びその周辺の弥生時代後期末～江戸時代の土地利用と環境の変遷について、以下のことがわかった。

飛鳥時代以前 調査地内は北西から南東方向の旧河道が埋没して形成された低地と微高地からなる地形で、弥生時代後期末と古墳時代前期～中期に開発されている。

遺構の様相から、いずれの時期も微高地上にある集落の縁辺部であったと考えられるが、古墳時代前期～中期には微高地の縁辺だけでなく低地にも溝を掘削し、低地の水田化も推察できることから、弥生時代後期末に比べて開発規模は大きいとみる。北隣の市HJ第337・340次調査地で古墳時代後期前半の方墳が確認されていることから、前期末～中期に成立した集落が変容しながら同



後期前半まで継続した可能性がある。

奈良～平安時代初頭 三坪北西部では、起伏のある旧地形を埋め立てて平坦な宅地を造成している。遺構の変遷は大きく3時期あり、A期の溝が埋められた後にB・C期の建物・堀・井戸・土坑が形成される。建物・堀は先後関係や二坪の調査成果から柱筋が方位にのるB期が古く、振れるC期が新しい。

A期のSD34Aは坪内の北1/4分割線、同35Aは南北2分割線の位置に近いことから区画溝の性格がうかがえるが、旧地形を考慮すれば湿润な低地部分の地盤の乾燥も意図した排水路の可能性も考えられる。

B・C期の宅地溝については、南北2分割線の位置に近い東西方向の溝SD35A・Bを境に遺構の分布が変わることや、北1/4及び西1/4分割線の交点付近に掘立柱建物SB28～31があることを踏まえれば、1/4坪あるいは1/2坪利用の可能性がある。

特筆すべき点として、B期には西区中央部の東西方向の堀とみられるSA26を境に、北側では生活空間の様相を示すのに対し、南側の東西方向の溝SD35A・B・北肩までの空間は様相が大きく異なる。建物がSB33の1棟のみで、その東側の土坑群やSD35A・B、同36から土師器壺B・皿C・土馬・ミニチュア炊飯具が多く出土する。これらの遺物が水辺祭祀に伴うことや旧地形を勘案すれば、湿润で生活空間に適さないために水辺祭祀の場として活用したものと考える。

出土遺物から、A・B期が8世紀後半、C期が8世紀末～9世紀初頭に比定できる。

鎌倉時代 鎌倉時代には調査地一帯で水田開発が行わ

れた。鎌倉時代の耕作溝を検出した奈良時代の整地土層上面には平安時代の堆積層がなく、乾田に特有の斑鉄もみられることから、近隣を流れる河川の河床が当時は低く、地下水位もやや低かったようである。

室町時代 鎌倉時代から継続して水田が営まれるが、北区東寄りで検出したSD60の埋没後は沼澤地に近い状態になり、乾田から湿田へと変化する。

南東隣接地の市HJ第362次調査地では14世紀頃に埋没する旧河道を検出している。埋土上面と奈良～鎌倉時代の遺構面の標高がほぼ一致することから、この旧河道の埋没が湿润化の一因と考える。

SD60は、埋土が主にシルト・粘土層で砂礫層がほとんどないことから、その下流側でのみ河川と接続するものと推察する。掘削面である灰色のシルト層（土層図14層）の上面には乾田に特有の斑鉄がみられることから、付近の水田の水はけを良くして湿润化を防ぐための排水路であった可能性が高い。

江戸時代 新たに水田開発が行われ、グラウンド造成前の水田の原形が形成される。

なお、調査地付近は旧岩井川の下流で旧佐保川との合流点に近いため、旧河道・沖積層と遺跡の形成の仕組みが複雑に関係している。この地域の遺跡の発掘調査にあたっては、自然地理学等の関連科学の調査方法の援用と研究者の協力も望まれる。

（安井 宜也）

## 6. 平城京跡（左京九条四坊八坪）の調査 第714次

事業名	宅地造成	調査期間	平成29年9月4日～9月15日
届出者名	株式会社オースハウジング	調査面積	112m <sup>2</sup>
調査地	東九条町282-4番地ほか	調査担当者	永野 智子

### Iはじめに

調査地は平城京の条坊復元によると、左京九条四坊八坪の北東部分に位置し、北側は八条大路に相当する。

同坪内で過去の調査例はないが、九条四坊では二・七坪で市HJ第181次調査を、十坪で市HJ第201次調査を実施しており、奈良時代の掘立柱建物のほか、弥生時代～古墳時代の土坑などを検出している。また、北西の八条四坊三坪では、市HJ第648次調査で奈良時代後半～平安時代前半の掘立柱建物・掘立柱列と弥生時代中期後半～古墳時代中期末の河川・溝を、市HJ第709次調査で弥生時代中期後半～後期の溝・土坑を検出している。八条大路については、市HJ第104次調査および県1999年度調査で八条大路の側溝を踏襲する中世の流路を確認している。

今回の調査は南北2カ所の発掘区を設定し、南側の1区では八坪内における宅地利用状況と弥生～古墳時代の遺構の確認、北側の2区では八条大路南側溝の確認を目的として実施した。

### II 基本層序

1区は上から造成土（厚さ約0.4m）、耕土（厚さ約0.1m）、床土（厚さ約0.1m）、明褐色灰色細粒砂（厚さ約0.1m）の順に堆積する。南西部ではこの下に古墳時代の整地層である褐灰色極細粒砂が約0.1m程堆積し、地表下約0.7mで黄灰色シルトもしくは暗褐色粗粒砂の地山に至る。地山の標高は60.0mである。

2区は、上から造成土（厚さ約0.4m）、耕土（厚さ約0.1m）、床土（厚さ約0.1m）、灰黄色細粒砂（厚さ約



HJ714次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

0.2m)、黄灰色中粒砂（厚さ約0.2m）の順に堆積し、地表下約1.0mで茶灰色粘土の地山に至る。地山の標高は59.5mで1区より約0.5m低い。

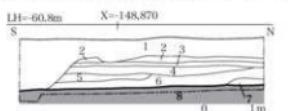
### III 検出遺構

#### 1. 1区

##### 古墳時代以前の遺構

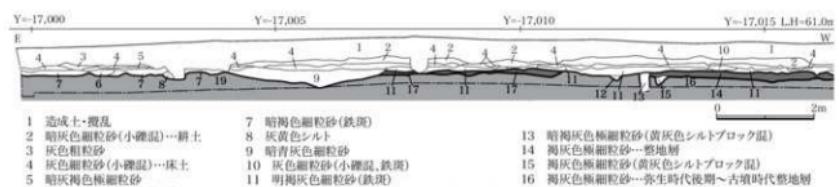
弥生時代後期後半の土坑2基（SK01・02）があるほか、時期不明の掘立柱建物SB01がある。

SK01 長辺約1.0m、短辺約0.5m、深さ約0.3mの平面梢円形の土坑で、埋土は黄灰色シルトブロックを含む



- |                   |            |
|-------------------|------------|
| 1 造成土             | 5 青灰色粗粒砂   |
| 2 暗褐色粘土・混細粒砂…耕土   | 6 黄灰色中粒砂   |
| 3 灰黄色細粒砂…床土       | 7 黄灰色細粒砂   |
| 4 灰黄色細粒砂（粗粒砂・小礫混） | 8 茶灰色粘土…地山 |

HJ714次調査 2区 西壁土層図 (1/100)



HJ714次調査 1区 南壁土層図 (1/100)

暗褐色極細粒砂である。弥生時代後期後半の甕・高杯などが出土した。

**SK02** 発掘区中央で検出した平面隅丸方形の土坑である。東西約3.5m、南北2.5m以上で発掘区外北へ続く。深さは約0.7m。埋土は上層が黄灰色シルト、下層が黒褐色粘土である。弥生時代後期後半の土器小片が出土した。

**SAO1** 東西方向の柱列で、2間分(3m)を検出した。発掘区外南側に延びる建物の可能性がある。柱間寸法は1.5m等間。柱穴の深さは約0.3~0.4m。

#### 奈良時代の遺構

**SB02** 桁行1間以上、梁行1間以上の純柱建物である。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.5m等間。柱穴の深さは約0.6mである。

**SB03** 桁行1間以上(1.8m)、梁行2間(3.9m)の南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が1.8m、梁行が西から2.1~1.8mである。柱穴の深さは0.15~0.2m。重複関係からSB05より新しい。

**SA04** 東西方向の柱列で2間分を検出した。国土方眼方位より東で北に振れる。柱間寸法は1.8m等間である。

**SB05** 桁行3間、梁行1間以上の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行・梁行とも1.8m等間である。柱穴

の深さは約0.1mである。重複関係からSB03より古い。

#### 2.2区

地山上面で遺構は検出されなかった。

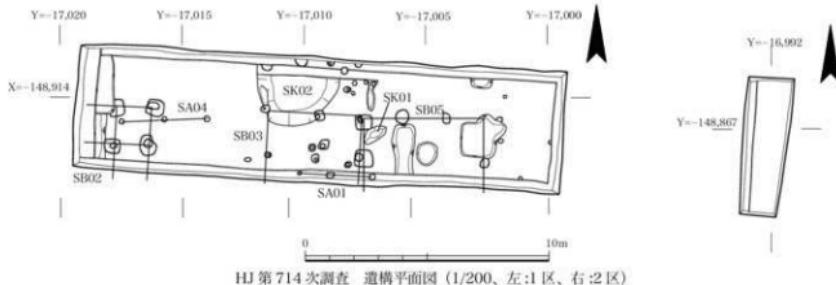
#### IV 出土遺物

遺物整理箱で3箱分がある。弥生時代後期後半の土器、5世紀後半の土師器および須恵器、8世紀の土師器・須恵器で、8世紀の遺物はいずれも細片のため詳細な時期がわかるものはない。

#### V 調査所見

当初想定していた八条大路については、発掘区内で関連する遺構を確認できなかった。遺構が削平されている可能性が高いと考えるが、調査面積が狭く不明である。奈良時代の遺構は、出土遺物が小片で詳細な時期を特定できなかったが、SB03とSB05は重複関係にあり、宅地内で建て替えが行われている。また、弥生時代後期後半の土坑を検出し、周辺にこの時期の集落が広がっていることを確認した。発掘区から250~300m北西で行ったHJ648次調査とHJ709次調査でも弥生時代中期~後期にかけての溝や土坑を検出しており、今回検出した土坑はこの時期の遺跡の広がりを考える上で注目される。

(永野智子)



HJ第714次調査 1区 全景(西から)



HJ第714次調査 2区 全景(南から)

## 7. 平城京跡（左京六条四坊十四坪）の調査 第711次

事業名	工場・事務所新築	調査期間	平成29年6月1日～7月21日
届出者名	奈交自動車整備株式会社	調査面積	640m <sup>2</sup>
調査地	大安寺一丁目1177番5、1184番1	調査担当者	安井 宣也・吉田 朋史

### Iはじめに

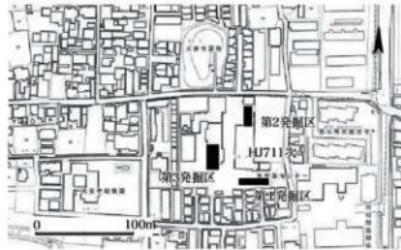
調査地は、平城京の条坊復元では左京六条四坊十四坪の北東隅から西・南に約100mの範囲を占め、東西四坊大路と六条大路間に面する。

十四坪内の調査は今回が初めてである。周辺では、約100m南方の十三坪内で本市教委が実施した市HJ第179次調査（平成元年度）で奈良時代の掘立柱建物を検出しておらず、約100m北方の十五坪内で奈良県立橿原考古学研究所が実施した県996071調査（平成11年度）では、墓山古墳の後円部東側の周濠が奈良時代の宅地化に際して埋められたことを確認した。

今回の調査は十四坪内の様相確認を主な目的として、建物予定地に第1～3発掘区を設定して実施した。

### II 基本層序

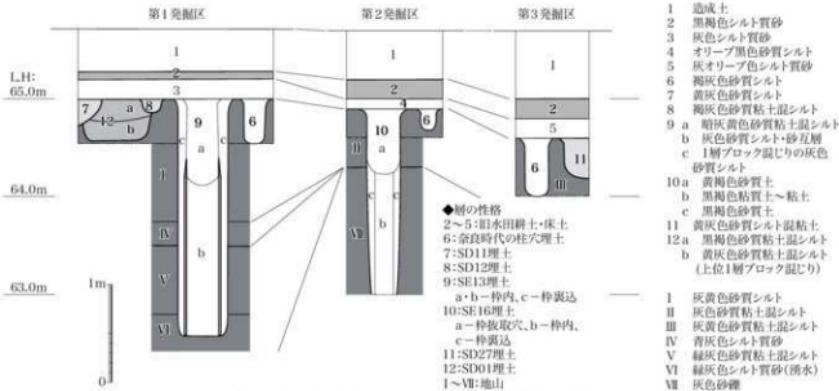
第1発掘区 造成土（厚さ0.4m）、黒褐色シルト質砂の旧水田耕土層（同0.1m）、灰色や灰オリーブ色のシルト質砂の同床土層（同0.3m）の下で、灰色や灰黄色のシルト質粘土の層状地盤層（以下、地山）上面となる。旧水田床土層と地山の上面には乾田に特徴的な斑鉄がみられる。地山上面が古墳～奈良時代の遺構面で、その標高は64.8～65.0mである。



HJ第711次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

第2発掘区 造成土（厚さ0.5m）、黒褐色シルト質砂の旧水田耕土層（同0.2m）、灰色や灰オリーブ色のシルト質砂の同床土層（同0.1m）の下で、灰色や灰黄色のシルト質粘土の地山上面となる。地山上面が奈良時代の遺構面で、その標高は64.9mである。

第3発掘区 造成土（厚さ0.7m）、黒褐色シルト質砂の旧水田耕土層（同0.2m）、灰色や灰オリーブ色のシルト質砂の同床土層（同0.2m）の下で、灰色や灰黄色のシルト質粘土の地山上面となる。旧水田床土層と地山の上面には乾田に特徴的な斑鉄がみられる。地山上面が奈良時代の遺構面で、その標高は64.6mである。



HJ第711次調査 第1～3発掘区 土層柱状模式図 (縮尺1/50)

### III 検出遺構

各発掘区とも、地山上面で遺構検出作業を行った。検出遺構の概要は、下記及び表の通りである。

#### 1. 第1発掘区

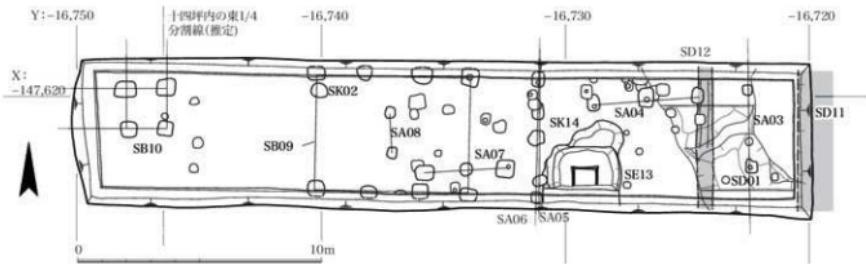
古墳時代の溝1条(SD01)・土坑1基(SK02)と奈良・平安時代の掘立柱列6条(SA03~08)・掘立柱建物2棟(SB09・10)・溝2条(SD11・12)・井戸1基(SE13)・土坑1基(SK14)を検出した。

SD01 溝を横断する盛土で築かれた陸橋(幅1.3m、底面からの高さ0.3m)を伴う。埋土は上層が黒褐色の砂

質シルト、下層が黄灰色の砂質シルトで、上層から布留式の土師器片が出土した。形状から、小規模な古墳の周溝あるいは集落の区画溝の一部と考える。

SK02 内部に古墳時代中期の布留式新相の特徴がある土師器2個体が据えられていた。

SA03~08 SA03・05・06は南北方向の堀で、発掘区外南北に続く。SA03は、後述するSD11・12と位置関係から坪の東辺を画する堀の可能性がある。SA08は小規模な堀。SA04・07は発掘区の縁辺で検出したことから、堀か建物の側柱列の可能性がある。



HJ第711次調査 第1発掘区 遺構平面図(1/200)

HJ第711次調査 第1発掘区 遺構一覧表

遺構番号	柱筋 棟方向	規格(間)	全長(m)		柱間寸法(m)		柱穴の深さ (m)	備考
			桁行	梁行	桁行	梁行		
SA03	南北	1以上	3.0以上		3.0		0.1	十四坪東縁の区画溝の可能性。
SA04	東西	2	4.2		2.1等間		0.2~0.5	SD11より古い。
SA05	南北	1以上	2.7以上		2.7		0.2	
SA06	南北	2以上	4.8以上		2.4等間		0.2	SA05と位置が重複。
SA07	東西	2	3.6		1.8等間		0.1~0.3	
SA08	南北	1	1.65		1.65		0.2~0.3	
SB09	東西	3×1	6.3 (東西)	4.8 (南北)	2.1等間 (東西)	4.8 (南北)	0.3~0.5	SA07・08と位置が重複、妻柱欠く。
SB10	不明	1以上×1以上	1.65以上	1.65以上	1.65	1.65	0.2~0.3	総柱建物。

遺構番号	平面形等		平面規模(m)		深さ(m)	時期	主要出土遺物	備考
	平面形態	平面規模	幅	長さ				
SD01	北西～南東	幅2.9~3.8、長さ5以上	0.5	古墳時代中期か	土師器小型壺、須恵器甕小片		古墳の周溝か集落の区画溝の可能性。隣接する。	
SK02	楕円形	径0.6~0.7	0.2	古墳時代中期	土師器甕(布留式新相)		甕が2個体埋納。	
SD11	南北	幅0.4以上、長さ6以上	0.3以上	8世紀	土器小片		東四坊大路西側溝の西端付近。	
SD12	南北	幅0.5、長さ6以上	0.2	8世紀	土師器甕・壺、須恵器甕・壺・杯 A・杯B・蓋、製瓶土器、平瓦		十四坪の宅地東縁を画する溝の可能性。SA04より新しい。	
SK14	不整形	東西2.1、南北1.4	0.2	8世紀	須恵器甕・杯		SE13より古い。	

遺構番号	掘方等			井戸枠			時期	主な出土遺物
	平面形態	平面規模	深さ	構造	内法(m)	水槽・灌漑施設等		
SE13	隅丸方形	東西3.3 北2.0以上	2.3	方形縦板組 横棟留	一辺1.0	-	9世紀前半～ 10世紀初頭	枠内：土師器甕・杯A・皿A、須恵器甕・壺M・杯A・ 杯B、縫釉陶器、灰釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦6702 G 掘方：土師器甕・杯A・杯B、須恵器甕・壺・蓋、黒色土器A類杯、壺



HJ 第 711 次調査 第 1 発掘区



全景（左：北東から、右：西から）



HJ 第 711 次調査 第 1 発掘区 中央部（北東から）



HJ 第 711 次調査 第 1 発掘区 SDD01 及び陸橋（南から）



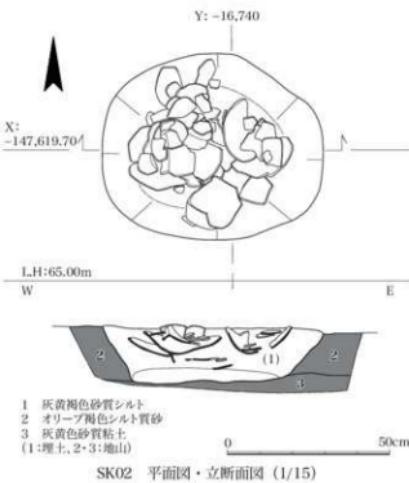
HJ 第 711 次調査 第 1 発掘区 SK02（南から）

SB09・10 SB09は東西棟建物で、妻柱を欠く。

SB10は柱間寸法が等しく、総柱建物の可能性がある。東側柱列の位置は、約700m北の市HJ第486次調査地（平成14年度）の東四坊大路の路面心を基準に求めた坪内の東1/4分割線の推定位置とほぼ合致する。

SD11 発掘区東辺部で西脇部分を確認した南北方向の溝、西脇の位置が市HJ第486次調査地を基準に推定した東四坊大路の路面心の8.5m西で、市HJ第486次調査地より約1m東寄りになるが、溝に重複する建物・柱列がないことから、東四坊大路の西側溝の可能性が高い。埋土は灰色系の砂質シルトで、8世紀の土器片が出土した。

SD12 SD11の3.5m西で検出した南北方向の溝で、



坪内の宅地の東縁を画する溝の可能性が高い。埋土は灰色系の砂質シルトで、8世紀の土器片が出土した。

SE13 挖方の底面は湧水層である地山の砂層内である。井戸枠は方形縦板組横桟留で、残存高は約1.8m。北側板は縦板4枚で構成される。枠内埋土は灰色のシルト・砂互層で、9世紀の土器片が出土した。

掘方埋土は灰色の砂質シルトで、8世紀の土器片を含む。

先後・重複関係と変遷 奈良～平安時代初頭の遺構に



HJ 第711次調査 第1発掘区 SE13 (北から)

ついては下記の通りで、少なくとも3時期の変遷がある。

a. 先後関係(旧→新)

1) SA04→SD12

2) SK14→SE13

b. 重複関係(新・旧不明分)

a) SA05→SA06

b) SA07→SA08→SB09

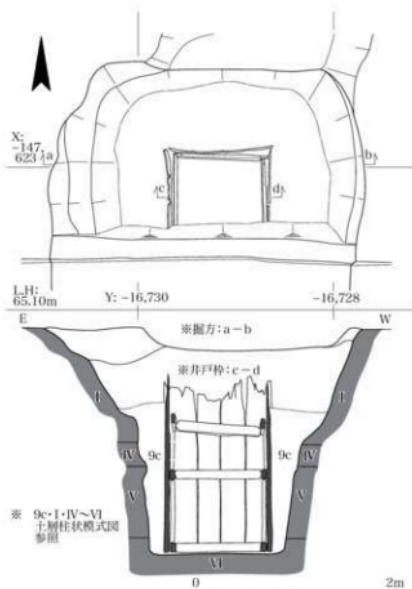
a) は、柱筋がほぼ同じ位置で重なることから、建替えの可能性がある。

## 2. 第2発掘区

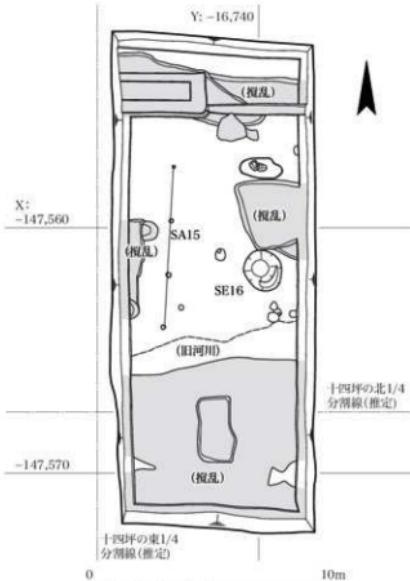
奈良時代の掘立柱列1条(SA15)・井戸1基(SE16)を検出した。

SA15 柱間3間(6.6m)の南北方向の堀。柱間寸法は北から2.25m-2.25m-2.1m。柱掘方は径0.2mの平面円形で深さ0.1m。簡易な構造の堀とみる。

SE16 挖方は径1.5mの平面円形で、深さ1.7m以上。埋土は上層が黄褐色砂質土、下層が黒褐色粘質土で、枠はなかった。8世紀中頃の土師器壺・壺・杯・皿・高杯、須恵器壺・杯・蓋と斎串・曲物底板等が出土した。土師



井戸 SE13 平面図・立断面図(1/50、反転して作図)



HJ 第711次調査 第2発掘区 遺構平面図(1/200)



HJ第711次調査 第2発掘区 全景（南東から）

器甕は釣瓶に用いたもので、頸部に繩が残る。

### 3. 第3発掘区

奈良～平安時代初頭の掘立柱列4条（SA17～19）、不明遺構（SX20）、掘立柱建物6棟（SB21～26）、溝2条（SD27・28）を検出した。

SA17～19 SA17は発掘区の北辺で検出したことから、塀か建物の側柱列の可能性がある。SA18・19は塀。SA17・19は擾乱部分、SA18は発掘区外西に続く可能性がある。

SX20 布掘りの掘方内に柱を3本据えている。

SB21～26 SB21・22は規模・構造がほぼ同じである。SB23は東廂付、SB25・26は北廂付の建物で、SB25・26は発掘区外東に続く。SB26の柱穴は他の2者に比べて小さい。

SD27・28 SD27は東西方向の溝で、発掘区外東西に続く。約700m北の市HJ第506次調査地（平成15年度）の五条筋間北小路の路面心を基準に求めた坪内の南北2分割線のすぐ北に位置することから、坪内を南北に区分する区画溝とみる。

SD28は深さ0.05mの浅い南北溝で、北端で西に屈曲する。南北溝の位置は前述した東四坊大路の路面心を基準に推定した坪内の東西2分割線の1～2m東である。埋土は暗黄灰色の砂質粘土で、8世紀の土器・瓦と炭粒を含む。

先後・重複関係と変遷 下記の通りで、少なくとも4時期の変遷がある。

#### a. 先後関係（旧→新）

- 1) SB21→SB22→SA19
- 2) SB23→SB24→SB25→SB26

1)のSB21・22については、規模・構造や柱筋の位置がほぼ同じであることから、建替えと考える。

#### b. 重複関係（新・旧不明）

- a) SA18—SA19, SB21・22
- b) SD28—SSA20, SB23・24

b)は、遺構検出作業時に先後関係が識別できなかったことによる。

柱筋の位置関係 建物・塀・柱列等で柱筋が描うものは、以下の通りである。

- i) SX20—SB23西側柱列
- ii) SB21—SB23（ともに東側柱列）
- iii) SB22—SB24（ともに西側柱列）
- iv) SB24—SB25—SB26（いずれも南側柱列）

i)～iv)はそれぞれ同時並存を示し、柱筋は前述した東四坊大路の路面心を基準に推定した坪内の東西2分割線の1～2m東である。iv)については、先後関係をもつことから、建物配置の規制を示すと考える。

### IV 出土遺物

遺物整理箱で11箱分出土した。その内訳は、古墳時代の土器類・埴輪、奈良～平安時代初頭の土器類・土製品、瓦壇類、木製品で、奈良～平安時代初頭の土器類が大半を占める。以下に主なものを記す。

#### 1. 土器類・埴輪・土製品

古墳時代 溝SD01の埋土上層から、布留式の土師器直口壺の口縁部片と須恵器甕の細片が出土した。土坑SK02から出土した土師器甕は、器壁が厚めで頸部外面に強いナデを施しており、布留式新相の特徴を示す。

奈良時代の井戸SE16の埋土からは、磨耗が激しいが外面ヨコハケ調整を施す円筒埴輪が出土した。墓山古墳に伴う可能性がある。

奈良～平安時代 井戸SE13では、井戸枠裏込めの埋土から土師器碗A（c手法）・皿A（a・c手法）・皿C・高杯、須恵器甕・壺B・杯B・杯蓋・皿Aと黒色土器A類杯E、井戸枠内埋土の上位から土師器甕・杯A（e手法）・杯蓋・皿A（c手法）・高杯、須恵器甕・壺M（底部糸切り）・杯A・杯B・杯蓋と灰釉陶器・綠釉陶器片が出土した。前者は8世紀後半頃、後者は9世紀前半～中頃の特徴がある。

井戸SE16では、埋土から土師器甕・壺B・杯E・皿A（b手法・斜放射暗文）・皿C、須恵器甕・杯Bが出土した。土師器甕は、頸部に繩が巻き付き釣瓶に便われたとみられる。8世紀中頃～後半頃のものとみられる。

#### 2. 瓦壇類 他

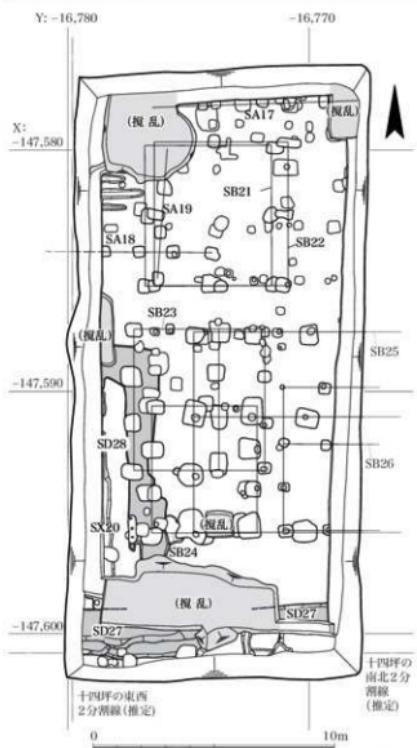
瓦壇類の大半が丸瓦・平瓦片で、軒丸瓦・軒平瓦と博の破片が井戸SE13の埋土から出土している。

HJ第711次調査 第3発掘区遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)		全長(m)		柱間寸法(m)		廻の出(m)	柱穴の深さ(m)	備考
		(身合) 棟行 × 棟行	柱行	梁行	柱行	梁行				
SA17	東西	2以上	4.8以上		2.4等間		—	0.1		
SA18	東西	3か	4.5以上		1.5等間		—	0.1～0.3	SB21・22、SA19と重複関係。 SA18と重複関係。SH21・22より新しい。	
SA19	南北	2以上	3.9以上		1.95等間		—	0.2～0.3		
SX20	南北	2	0.9		0.45等間		—	0.1	柱頭方は布施り、SD28より新しい。	
SB21	南北	2×2	5.7	5.4	2.85等間	2.7等間	—	0.2～0.6	SB22より古い。	
SB22	南北	2×2	5.7	5.4	2.85等間	2.7等間	—	0.3～0.7	SB21の後身建物の可能性。	
SB23	南北	3×2	5.7	3.6	北から 1.8-2.1-1.8	1.8等間	東2.1	0.3～0.6	SD28より新しい。SH24・25より古い。	
SB24	南北	3×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間	—	0.3～0.6	SD28より新しい。	
SB25	東西	2以上×2	4.5以上	4.8	西から 2.4-2.1	2.4等間	北3.6	0.1～0.4	SB23・24より新しい。	
SB26	東西	1以上×2	1.8以上	3.6	1.8	1.8等間	北2.4	0.1～0.3	SB25より新しい。	

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備考
SD27	東西	幅1.9前後、長さ10以上	0.3	8世紀	土師器甕・杯B、須恵器甕・杯B、 製壺土器、土瓦、平瓦	十四坪内を南北2分割する区画溝の可能性。
SD28	南北・東西	幅1.1m前後、長さ9以上	0.05	8世紀	土師器・瓦小片	SX20、SH22・23より古い。



HJ第711次調査 第3発掘区 遺構平面図(1/200)



HJ第711次調査 第3発掘区 全景(南から)



HJ第711次調査 第3発掘区 北部(東から)



HJ第711次調査 第3発掘区 南部(東から)

また、井戸SE16の井戸枠内埋土から斎串と漆椀片が出土している。

#### V 調査所見

今回の調査では、古墳時代の遺構と奈良～平安時代初頭の十四坪の宅地に関連する遺構を検出した。

古墳時代の土地利用については、第1発掘区で同中期の古墳の周溝の一部とみられる溝と土坑を検出したが、分布が希薄なことから、調査地南東にある集落の縁辺部に設けられた墓域に小古墳が築かれたものと推察できる。

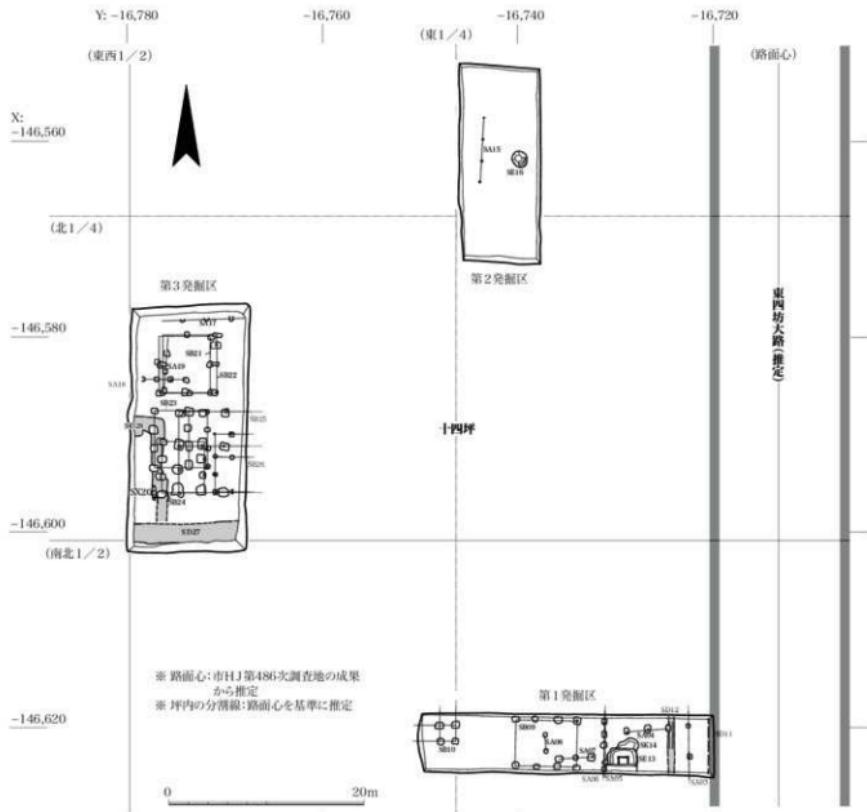
奈良～平安時代初頭の十四坪の宅地については、遺構

の先後・重複関係から少なくとも4時期の変遷があり、坪内を南北2分割して利用し、建物・塀を東西2分割線及び1/4分割線を基準に配置する様相がうかがえる。

第1発掘区を設定した坪内の南東部北寄りでは、主に雑舎や小規模な倉庫が建てられる。東四坊大路に面する坪東縁の遮蔽施設が掘立柱廬の時期がある。

第2発掘区を設定した坪内の東辺部北寄りでは、空閑地に近い状態が続く。

第3発掘区を設定した坪内中心のすぐ北東では、まず雑舎とみられる建物が建てられ、次に北廂付の東西棟建物が建てられる2時期の変遷がある。 (安井 宜也)



HJ第711次調査 遺構配置図(1/500) \*遺構配置と条坊・分割線との位置関係を示す。

## 8. 平城京跡（左京六条二坊五坪）の調査 第710次

事業名	宅地造成	調査期間	平成29年4月27日
届出者名	株式会社吉川商事	調査面積	36m <sup>2</sup>
調査地	八条五丁目335-1の一部他	調査担当者	安井 宣也

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京六条二坊五坪の北西部にあたり、すぐ東に佐保川の現河道がある。旧状は平城京の遺存地割がみられる水田であったが、1980年代前半に盛土造成が行われている。

五坪内の調査は、今回が初めてである。今回の調査は、奈良時代の遺構面の確認を主な目的とし、道路予定地に発掘区を設定して実施した。

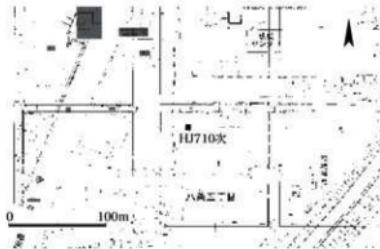
### II 調査の概要

現地表下3.7m（標高55.0m）まで掘り下げた。

基本層序は、造成土（厚さ3.0m）の下に旧水田耕土層（厚さ0.3m）があり、その下で佐保川の氾濫堆積層である砂礫層やシルト層となる。旧水田面の標高は55.8mである。掘下げ作業を氾濫堆積層内に留めたため、奈良時代の遺構面は確認できなかった。出土遺物もない。

### III 調査成果

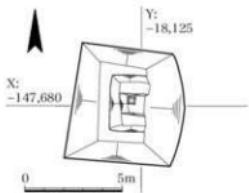
調査地内では奈良時代の遺構面が旧水田面下0.8m（標高55.0m）より低いことを確認した。（安井 宣也）



HJ第710次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



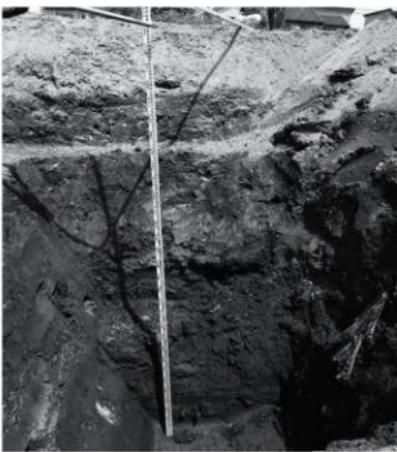
HJ第710次調査 発掘区全景 (西から)



HJ第710次調査 発掘区平面図 (1/250)

標高 (m)	58.0	1-a
	—	1: 農地の造成土
57.0	—	a 砂石
	—	b 暗オリーブ灰色砂質シルト
	—	c 暗オリーブ灰色砂質シルト + 黄色繊維じり砂
56.0	—	2: 旧水田耕土
	—	黒灰色砂質シルト
	—	佐保川の氾濫堆積層
55.0	2	3: 佐保川の氾濫堆積層
	—	a オリーブ灰色繊維砂
	3-a	b オリーブ灰色砂質シルト
	3-b	—

HJ第710次調査 土層柱状図 (1/80)



HJ第710次調査 北壁土層 (南から)

## 9. 平城京跡（左京四条五坊十四坪）の調査 第721次

事業名 共同住宅新築  
届出者名 日本エスリード株式会社  
調査地 杉ヶ町52-2、52-3

調査期間 平成30年3月6日～3月28日  
調査面積 193m<sup>2</sup>  
調査担当者 鐘方 正樹・安井 宣也・池田 裕英

### Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復元によれば左京四条五坊十四坪及び十一坪と十四坪を画する坪境小路に相当する位置にある。この南西側で平成14年度に実施した平城京第476次調査では、奈良時代の掘立柱建物・掘立柱列とともに弥生時代の溝や土坑が多く見つかっている。周辺での調査例からみても、平城京跡と重複して弥生～古墳時代の遺跡が周囲に広がっている可能性が高いと想定された。

発掘調査は、排土置場を確保するために南北半分ずつ2回に分けて発掘区を設定し実施した。

### II 基本層序

発掘区内の層序は、造成土（厚さ0.4m前後）の下に旧耕作土（0.15m）、暗灰褐色土（0.15m）、灰褐色土（0.1m）と続き、現地表下0.8～1.0mで黄灰色粘土の地山となる。遺構検出は地山上面（標高67.8m前後）で行なった。

### III 検出遺構

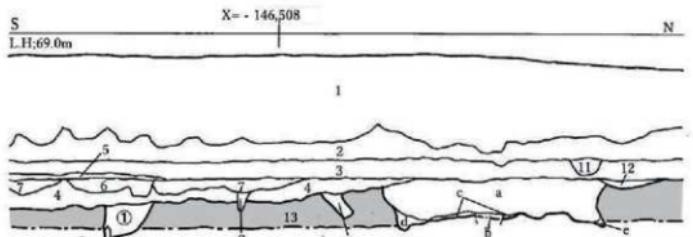
主な遺構には、弥生時代末の方形竪穴建物2棟・掘立柱建物1棟・溝8条・土坑2基、古墳時代前期の溝1条、江戸時代の粘土採掘坑8基以上がある。なお、奈良時代の遺構は確認できなかった。



HJ721次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

### 1 弥生時代末の遺構

竪穴建物SB01 一辺5.15m×6.0mの隅丸方形で、深さは最大0.3mまで残存していた。主軸は北で40度東へ振れる。幅0.2m、深さ0.1mの周壁溝がめぐる。西側の一部で拡張による壁の膨らみと周壁溝の重複が認められるので、一度建て替えられていることがわかる。その際に、床面には厚さ0.05mの整地土（淡灰茶褐色土）を入れていた。江戸時代の粘土採掘坑で北東側が壊されており、柱穴は西側と南側の2つ（柱間2.2m）が残存したのみである。建物中央に直径0.35mの炉があり、その周囲に焼土・炭化物の分布が認められた。



- |            |             |            |                |
|------------|-------------|------------|----------------|
| 1 造成土      | 8 灰色粘質土     | SB01理土:a～c | SD04理土:①～③     |
| 2 黒灰色土（耕土） | 9 暗灰褐色粘質土   | a 暗灰褐色粘質土  | ① 灰褐色土         |
| 3 暗灰褐色土    | 10 暗茶褐色土    | b 灰褐色土     | ② 灰色粘質土        |
| 4 灰褐色土     | 11 黑褐色土（耕土） | c 淡灰茶褐色土   | ③ 黄灰粘土（灰褐色土含む） |
| 5 暗茶灰褐色土   | 12 淡灰褐色土    | d 淡黄灰粘土    |                |
| 6 灰色粘質土    | 13 黄褐色土（地山） | e 灰褐色土     |                |
| 7 灰色粘質土    |             |            |                |

HJ第721次調査 発掘区西壁土層図 (1/40)

堅穴建物SB02 SB01東側の一部と重複する堅穴建物で、発掘区外東へ続く。重複関係からSB01よりも新しい。一辺5m前後の隅丸方形で、深さは0.1mほどしか残っていない。主軸は北で46度ほど西へ振れる。幅0.2m、深さ0.1mの周壁溝がめぐる。江戸時代の粘土探掘坑で壊されている部分が多く、柱穴などは確認できなかつた。

掘立柱建物SB03 梁間2間(3.8m)×桁行3間(5.0m)で、主軸は北で西へ44.5度振れる。柱間は梁間が1.9m等間であるのに対して、桁間は1.4-2.0-1.5m(南北側柱列)と1.5-1.7-1.7m(北東側柱列)で不揃いとなる。柱穴の深さ0.3m前後、柱痕跡は直径0.12m前後である。重複関係からSB01よりも新しい。

溝SD04・05 SB01の周囲を廻る溝が2条あり、南側に廻る溝がSD04、北側を廻る溝がSD05である。SD04は、幅0.2~0.3m、深さ0.2~0.35mで、板をあてていたような痕跡(灰色粘質土)が認められた。SD05は、幅0.3~0.45m、深さ0.1m前後である。両溝はSB01より1.2~1.6m離れた位置にあり、その間に周堤が廻ると推測できる。SB01東側でSD04が途切れており、ここに出入口があった可能性がある。重複関係から、SD05はSB02・SD06よりも古いことがわかる。

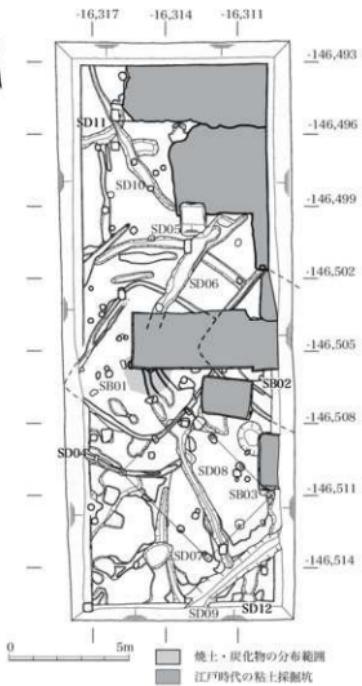
溝SD06 SB02の西側を廻る溝で、SD08と接続して途切れる。幅0.7~0.9m、深さ0.15m前後である。粘土探掘坑で一部が壊されており、それより南側では2条に分岐するように見えるが、時期差なのか、どちらか一方に接続するのか判然としない。SB02と同様にSB01よりも新しく、SD06とSB02の間(1.9~2.0m)に周堤が廻ると推測できる。

溝SD07 SD04-09と接続する溝で、幅0.3~0.4m、深さ0.1mである。SD09へ向かって深くなるので、SD04からの排水路と思われる。

溝SD08 SD06-09と接続する溝で、幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.15mである。SD09へ向かって深くなるので、SD06からの排水路と思われる。

溝SD09 幅0.8~0.9m、深さ0.3mで、確認した溝の中で最も大きく深い。SD07・08が接続するため、幹線排水路を兼ねた区画溝の可能性が想定できる。

溝SD10 発掘区北側で確認した溝で、幅0.2~0.6m、深さ0.1~0.2mである。北端は発掘区外に延び、南端は江戸時代の粘土探掘坑で壊されるが東へ屈曲していくようにみえる。



H J 第721次調査 発掘区平面図 (1/200)

溝SD11 弧状に屈曲する溝で、幅0.3~0.5m、深さ0.15mである。重複関係からSD10よりも古い。

## 2. 古墳時代前期の遺構

溝SD12 南北方向の溝で、長さ1.6m以上、幅0.55m、深さ0.15mである。埋土から布留式土器が出土した。

## 3. 江戸時代の遺構

東西に長い長方形の粘土探掘坑が発掘区北東側に重複して認められた。発掘区北壁と東壁に沿って掘削し、一部の粘土探掘坑の深さを確認したところ、深さ0.5mで底はほぼ平らであった。わずかながら陶磁器・棧瓦等の遺物が埋土から出土しており、18世紀以降に掘削されたと推定できる。この粘土探掘坑埋土の上に水田造成土とみられる暗灰褐色土が堆積しており、調査地周辺の水田が現在のように整備されたのは18世紀以降まで遅れると考えられる。

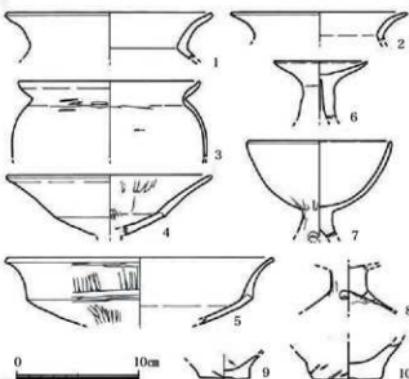
#### IV 出土遺物

弥生時代末の庄内式土器、古墳時代前期の布留式土器、江戸時代（18世紀以降）の土師器・陶器・磁器・棟瓦が遺物整理箱で10箱分出土した。そのほとんどが庄内式期の土器とみられるが、器表面の遺存状態が悪く、細分化したものが多い。その一部について図化した。

甌はV様式系（1・2・9・10）が主体であるが、口縁部を受口状につくる庄内形（3）も一定量存在する。有棱高杯（4・5）は口縁部が大きく外反し縦方向のミガキを行うが、5の口縁部外面の上下には横方向のミガキがみられる。6は直立する中空の脚柱部をもつ小形器台で、口径7.7cm。7・8は脚台付鉢とみられ、外面に縦方向のミガキを行い、脚柱部から脚裾部へ屈曲する付近に3方向の円孔をあける。他に鉢・壺の破片がある。6はSD07、7は整地土上、8はSD08から出土。その他はSD09出土である。

#### V 調査所見

当初想定された平城京跡に関わる遺構は認められず、主に弥生時代末の方形竪穴建物2棟とそれに関わる溝・掘立柱建物1棟・区画溝1条・土坑などを確認した。これらの遺構は、調査地近辺が弥生時代末の集落の中心域であった可能性を示しており、周辺で確認されている同



HJ 第721次調査 出土土器図 (1/4)

時期の遺跡の広がりを考えるうえで重要な資料となった。

また、江戸時代には調査地近辺で粘土採掘が行われておらず、現在の水田は18世紀以降に整備されたものと想定できることも判明した。

(鐘方 正樹)



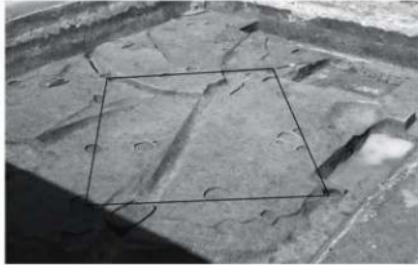
HJ 第721次調査 発掘区北半部全景 (南から)



HJ 第721次調査 発掘区南半部全景 (東から)



HJ 第721次調査 竪穴建物 SB01 (北西から)



HJ 第721次調査 掘立柱建物 SB03 (南東から)

## 10. 平城京跡（左京四条二坪五坪）の調査 第717次

事業名	宅地造成	調査期間	平成29年10月30日～11月1日
届出者名	個人	調査面積	114m <sup>2</sup>
調査地	尼辻町1028-1、457-1	調査担当者	中島 和彦

### Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条二坊五坪にあたり、発掘区は五坪の中央部付近にあたる。今回の調査地は、東側に菰川が南流していることもあります、奈良時代の遺構が河川により削平されずに残存しているかの確認と、五坪内の利用状況の把握を目的として行った。

### II 基本層序

発掘区の層序は、上から造成土(1)、耕土(2)、淡オリーブ灰色粘土(3)、灰色粘土(4)、淡灰色粘土(6)、奈良時代の整地土である暗茶褐色粘土(7)で、現地表下約2.1～2.2mで奈良時代以前の河川堆積層である灰白色粘土以下となる。河川堆積層は、深さ約0.6m以上あり、出土遺物がなく時期は不明。また整地土は西に向かい徐々に薄くなり西側でなくなる。

### III 検出遺構

東西方向の柱列(SB01)を1条確認した。柱列は柱



間4間(7.2m)以上、柱間は2.4m等間で、発掘区東側につづく。柱掘方は深さ約0.5～0.7mである。

東西棟建物の北西隅部と考えられる。

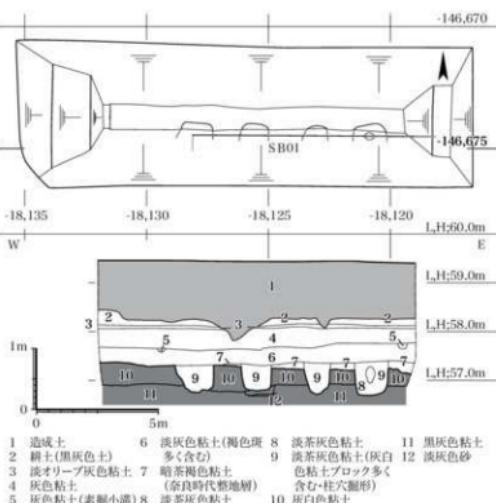
### IV 出土遺物

奈良時代の土師器・須恵器・瓦類が遺物整理箱1箱分出土した。柱穴から出土した土師器壺片を除き、他は包含層の淡灰色粘土層からの出土である。

### V 調査所見

調査の結果、調査地周辺では菰川に隣接するものの、河川による削平をうけることなく奈良時代の遺構面が残存し、遺構も存在することが明らかになった。調査範囲が狭く構造の詳細については不明である。

(中島 和彦)



HJ第717次調査 上：発掘区平面図 (1/200)・下：土層図  
(横1/200・縦1/80、発掘区北壁に南壁の柱穴部分を反転して合成)



HJ第717次調査 発掘区全景 (東から)

## 11. 平城京跡（左京四条四坊十坪）の調査 第718次

事業名 共同住宅新築	調査期間 平成29年11月8日～11月13日
届出者 赤坂巖	調査面積 50m <sup>2</sup>
調査地 奈良市三条宮前町285-1	調査担当者 吉田朋史

### Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京四条四坊十坪の北東部にあたる。十坪内では、調査地南西側で市HJ第616次調査（平成20年度）が行われ、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱列、中世の粘土探査土坑群を確認している。

今回の調査は、十坪の宅地の様相解明を目的として、南北10m、東西5mの発掘区を設定し調査を実施した。

### II 基本層序

発掘区内の層序は、上から現代の造成土（厚さ約0.9m）、黒褐色粘質土（耕土）、灰色砂質土（床土）、黄灰色粘質土の順に堆積し、現地表下約1.2mで明黄橙色粘土の地山となる。なお、発掘区西半分は灰色粘土で整地されており、この整地層上面から遺構が掘り込まれている。遺構面の標高は概ね62.4mである。遺構検出は基本的に地山上面及び整地層上面で行った。

### III 検出遺構

奈良時代以降の掘立柱列2条、柱穴3基を検出した。

以下、主な遺構について述べる。

SAO1 南北2間以上の掘立柱列である。柱間は1.8m等間、柱穴の深さは0.2～0.3mである。確認した柱痕跡は直径約0.3mである。

SAO2 東西1間以上の掘立柱列である。整地層上面から掘り込まれており、柱間は3.0m、柱穴の深さは0.3～0.5mである。確認した柱痕跡は直径約0.2mである。

### IV 出土遺物

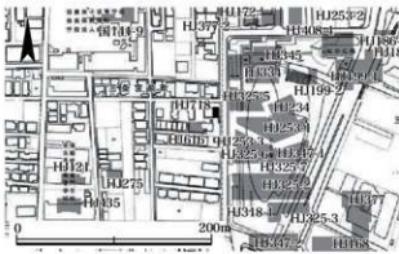
8世紀後半～9世紀初頭の土師器甕、須恵器杯・蓋・甕、平瓦が遺物整理箱で1箱出土したが、土器の多くは小片で大部分が整地土からの出土である。

### V 調査所見

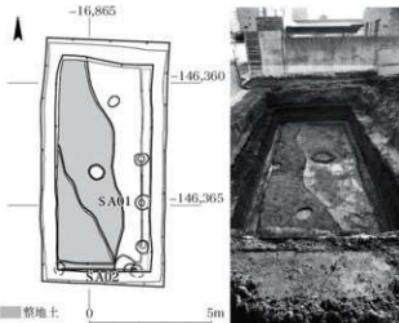
今回の発掘調査では、南北方向の掘立柱列（SAO1）、東西方向の掘立柱列（SAO2）と発掘区西半分で奈良時代の整地層を確認した。

奈良～平安時代の宅地の様相は、発掘区が狭く、詳細は明らかではないが、少なくとも、発掘区より西側に傾斜地があり8世紀後半から9世紀初頭頃に宅地化に伴って整地されたと考えられる。

（吉田朋史）



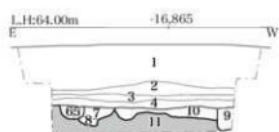
HJ第718次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



遺構平面図 (1/200)

発掘区全景 (南から)

HJ第718次調査



1.明黄橙色砂質土(造成土)

2.黒褐色粘質土(耕土)

3.灰色砂質土(床土)

4.黄褐色粘質土

5.茶褐色砂質土

6.黄色粘土(=SAO2柱穴埋土)

7.灰色粘土シルト

8.淡灰黃褐色粘質シルト(柱穴埋土)

9.茶褐色シルト(SAO2柱穴埋土)

10.灰色粘土(整地土)

11.明黄橙色粘土(堆山)

0 1m

HJ第718次調査 発掘区南壁土層図 (1/100)

## 12. 平城京跡（左京二条五坊十六坪）の調査 第716次

事業名	こども園改築	調査期間	平成29年10月10日～10月13日
届出者名	奈良愛の園福祉会	調査面積	52m <sup>2</sup>
調査地	法蓮町985-7、986-80の一部他	調査担当者	永野 智子

### Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復元によれば左京二条五坊十六坪の中央東よりにある。十六坪内の調査は今回が初めてであるが、発掘区のすぐ北側（法蓮町985-6番地）で、平成6年度に住宅新築工事に伴う立会を行っており、古墳時代の流路を検出している。流路は北西から南東に傾斜している可能性が高く、深さは約0.8mである。流路からは5世紀末～6世紀前半の土器が遺物整理箱10箱分出土している。

近隣では、発掘区から西へ約200mの地点で平成4年度に行なった市HJ第264次調査で、古墳時代中期～後期の掘立柱建物や溝を検出している。また、北へ約230mの地点で昭和63年度に行なった市HJ第165次調査では、弥生～古墳時代の流路を確認している。

今回の調査は、古墳時代の土地利用状況および十六坪の宅地利用状況の把握を目的として実施した。

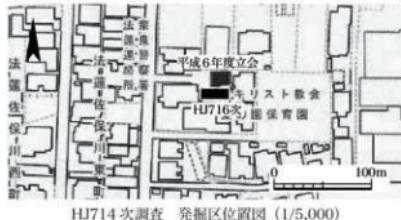
### II 基本層序

旧建物建設による掘削が地表下約0.5mまで及んでおり、発掘区西半では造成土直下で黄灰色シルトおよび茶灰色粗粒砂の地山となる。東半では造成土直下に古墳時代後期前半の整地層である茶灰色シルトが約0.1m堆積し、その下が地山となる。地山面の標高は73.6mである。

### III 検出遺構

地山上面で土坑SK01を、5世紀末～6世紀前半の整地層上面で奈良時代の掘立柱列SA02を検出した。

古墳時代の遺構 SK01は5世紀末～6世紀前半の整地層下で検出した土坑である。検出規模は東西約0.3m、南北約0.25m以上、深さ約0.4m。埋土は上層が暗灰褐色中粒砂、下層が黄灰色粗粒砂である。このほか、建物



HJ716次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

としてはまとまらないが、柱穴を4基を確認し、柱穴03からは古墳時代の土師器が出土した。

奈良時代の遺構 SA02は東西方向の柱列で、4間分(12.5m)を検出した。柱間寸法は3.0mと規模が大きく、大型建物になる可能性もある。柱穴の深さは0.4～0.5mである。東から二つめの柱穴では、柱根下に0.2m大的礫を4つ据えて礎板としていた。柱穴掘方埋土からは、奈良時代の土器片とともに5世紀末～6世紀前半の土師器および須恵器片が出土した。

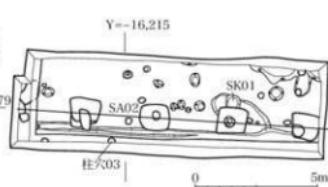
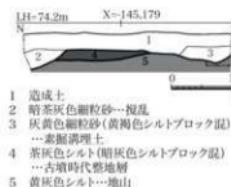
### IV 出土遺物

出土遺物は、5世紀後半～6世紀前半の土師器・須恵器、8世紀の土師器・須恵器で、遺物整理箱2箱分ある。

### V 調査所見

今回は左京二条五坊十六坪の中央部付近で、奈良時代の大規模な掘立柱列を検出することができ、同坪の宅地利用状況を解明する上で貴重な成果となった。周辺では大規模宅地が多く見つかっており、十六坪も大規模宅地として利用されていた可能性がある。また、古墳時代後期の土坑や柱穴を検出し、近隣に当該期の集落が広がっていたことを改めて確認した。

(永野 智子)



HJ第716次調査 左：東壁土層図 (1/80)、中：遺構平面図 (1/200)、右：発掘区全景 (西から)

### 13. 平城京跡（左京三条四坊十三坪）の調査 第719次

事業名 貸賃住宅	調査期間 平成29年11月27日～12月19日
届出者 川本美保	調査面積 208m <sup>2</sup>
調査地 奈良市大宮町二丁目82番11	調査担当者 吉田朋史

#### Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条四坊十三坪の北辺中央付近からやや西寄りにある。調査地周辺では、市HJ第465次調査（平成13年度）、市HJ第544次調査（平成17年度）が行われており、調査時代の土坑、弥生～古墳時代初頭の溝、奈良～平安時代の掘立柱建物・塀・井戸・条坊側溝などの遺構が検出されている。

今回の調査は、調査地北側の三条条間南小路と十三坪の宅地の様相解明を目的として、南北約26m、東西8mの発掘区を設定し、排土置き場の関係から南と北の2回に分けて調査を実施した。

#### II 基本層序

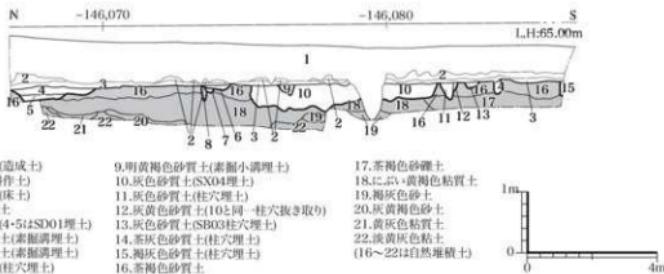
発掘区内の層序は上から順に造成土（厚さ0.6m）、灰色砂質土（耕作土、厚さ約0.2m）、灰黄色砂質土（床土、厚さ約0.1m）、茶褐色砂質土（厚さ約0.2m）の順に堆積し、現地表下約1.0mで茶褐色粘質土の地山上面（標高63.8m）に至る。

#### III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、奈良時代の掘立柱建物2棟（SB02・SB03）、東西方向の素掘溝（SD01）、鎌倉時代以降の粘土探査坑5基、素掘溝を検出した。なお、地山上面では、明確な遺構は確認できなかった。以下、主な遺構について述べる。

##### 1. 奈良時代の遺構

###### SD01 発掘区北側で検出した東西方向の溝である



HJ第719次調査 発掘区東壁土層図 (縦1/80、横1/150)

## 2. 鎌倉時代以降の遺構

SX04～08 粘土探査土坑である。平面形状は、不整形(SX05)、隅丸長方形(SX06)、不明(SX04・07・08)と多様で、掘形の底面は概ねでこぼこしている。SX06・08からは鎌倉・室町時代の国産陶器が出土しており、室町時代以降の粘土探査土坑と考えられる。

## IV 出土遺物

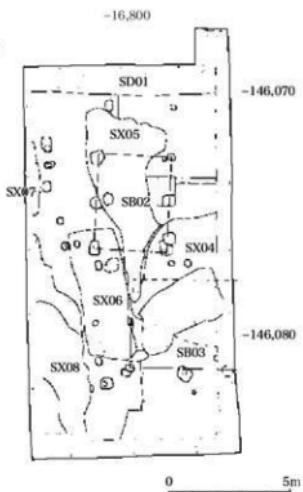
遺物整理箱で5箱分が出土し、8世紀後半の土師器・須恵器・軒丸瓦(6133Db)・軒平瓦(6732C)・平瓦・磚、13～15世紀の国産陶器が出土した。SX06からは「理」と刻印された平瓦2点が出土した。

## V 調査所見

今回の調査で検出したSD01は、三条条間南小路南側溝と推定され、市HJ第54次調査(昭和58年)で検出された三条条間南小路南側溝SD02(溝心X=-146069.20m, Y=-16691.00m)の延長上にある。

また、室町時代以降には今回の調査地周辺でも粘土探査がおこなわれていたことが明らかになった。

(吉田 朋史)



HJ第719次調査 遺構平面図 (1/200)



HJ第719次調査 発掘区南半(西から)



HJ第719次調査 発掘区北半(西から)

## HJ第719次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)		柱行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間(m)		柱穴の深さ (m)	備考
		桁行	梁行			桁行	梁行		
SB02	南北	2×1	3.9	3.0	北から 1.8-2.1	3.0	0.1～0.3	SX04・05・06より古い	
SB03	不明	2以上×1以上	4.2以上	1.8以上	2.1m等間	1.8	0.1～0.5	SX06より古い	

遺構番号	平面形等	規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
SX04	不明	南北5.7、3.8以上	0.4	不明	土師器壺、須恵器壺・皿B	SB02・SX05より新しい
SX05	不整形	南北7.5、東西3.3	0.4	不明	土師器、須恵器壺、軒平瓦(6732C)	SB02より新しく、SX04より古い
SX06	隅丸長方形	南北5.3、東西2.0	0.5	13～15世紀	土師器、須恵器壺・皿B・蓋、刻印瓦、国産陶器	SB02より新しい
SX07	不明	南北3.1、東西0.3以上	0.2	不明	土師器、須恵器片	
SX08	不明	南北6.1以上、東西1.9以上	0.8	13～15世紀	土師器壺・皿B・蓋・高杯A、須恵器壺、軒皿類、軒丸瓦(6133D b)・丸瓦、磚、国産陶器	

## 14. 平城京跡（左京三条五坊五・六坪）の調査 第720次

事業名	店舗新築	調査期間	平成30年1月17日～1月31日
届出者名	正起土地合資会社	調査面積	307.2m <sup>2</sup>
調査地	大宮町一丁目45番、44番の一部	調査担当者	吉田朋史

### Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京三条五坊五坪の北辺西寄りと同六坪の南辺西寄りにわたり、三条条間南北路が推定される部分にあたる。また、すぐ西側は東五坊坊間西小路が推定される。

五坪内ではこれまでに3次（市HJ第125・429-4・452-3次）の発掘調査を実施している。このうち、調査地のすぐ南で実施した市HJ第429-4次調査（平成11年度）では、旧水田面下0.2～0.3m（標高65.4m）で、東五坊坊間西小路に沿う奈良時代のものとみられる堤防遺構の東部分（高さ0.4～0.7m）を検出し、東側にはしがらみ護岸が施される。その東側は奈良時代の土器片を含む厚さ約1mの砂・シルト層の下で地山上面となる。また、調査地の南東で実施した市HJ452-3次調査（平成11年度）では、市HJ第429-4次調査地と同様の砂・シルト層（厚さ0.6m）の下に奈良時代の遺物を含む褐色シルト層（厚さ0.2m）があり、その下が弥生時代の遺物を含む灰色砂質シルト層（厚さ0.1m）を挟んで無遺物の淡灰色シルト層となることを確認し、褐色シルト層上面（標高65.6m）から柱穴が掘削される掘立柱建物1棟を検出した。

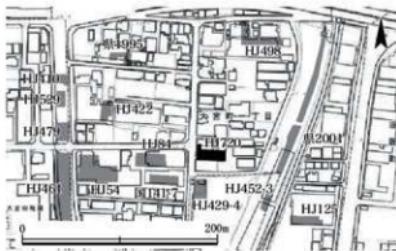
六坪内では、調査地の北100mの場所で市HJ第498次調査（平成15年度）を実施し、表土層下0.3～0.4m（標高67.1m）より下が河川堆積層であることを確認した。2.5m下までの層序は、上から砂・粘土互層（厚さ1.5m）、粘土層（厚さ1m以上）となる。

なお、四坪の北東隅にあたる調査地のすぐ西側で実施した市HJ第84次調査（昭和59年度）では、旧水田面下0.3m（標高64.7m）で奈良時代の整地土層上面となり、この面で三条条間南北路側溝と掘立柱建物を検出している。

今回の調査は、調査地南寄りの建物予定地に発掘区を設定し、五坪北西部と三条条間南北路の様相の確認を主な目的として実施した。

### II 基本層序

発掘区の東部分では、造成土（厚さ約0.2m、大別層：I層）、水田底土（厚さ約0.2m、同II層）の下に沼沢地の堆積層の様相を示す水平な灰黄色の細砂層やシルト層



HJ第720次調査 発掘区位置図(1/5,000)

（厚さ約0.7m、同IV層）と湿地の堆積層の様相を示す黒色粘土層（厚さ約0.2m、同VII層）があり、その下で青灰色シルトを主とする地山となる。

同西部分では、大別層I・II層の下に堤防遺構SX05・06があり、その東側では同IV層上面から掘削された溝SD02（同III層）と、直下の同VII層上面から掘削されたSD03（同V層）が上下に重複する。地山上面は西へ緩やかに下っており、その標高は発掘区の東端で約65.0m、西端で約64.8mである。

### III 検出遺構

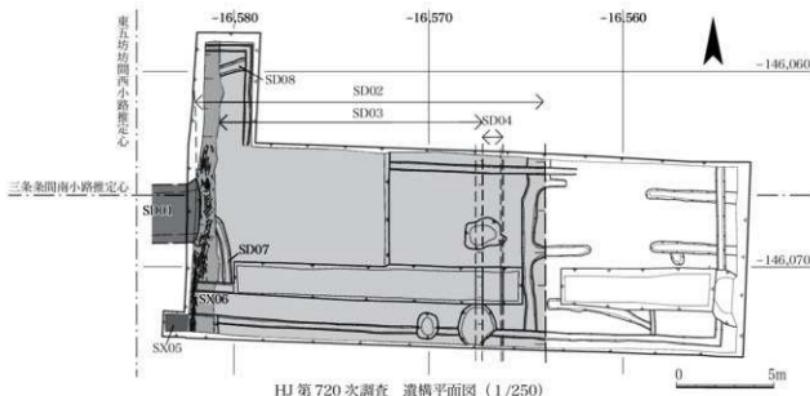
遺構検出は、沼沢地の様相を示す大別層IV層の上面で行い、地山上面とその上を被う土層の様相を確認するため東西に長い調査区を南北に沿って設けるとともに発掘区西側を地山上面まで掘り下げ、同西壁と合わせて土層の堆積状態の確認を行った。

その結果、溝6条・堤防遺構2基を検出した。

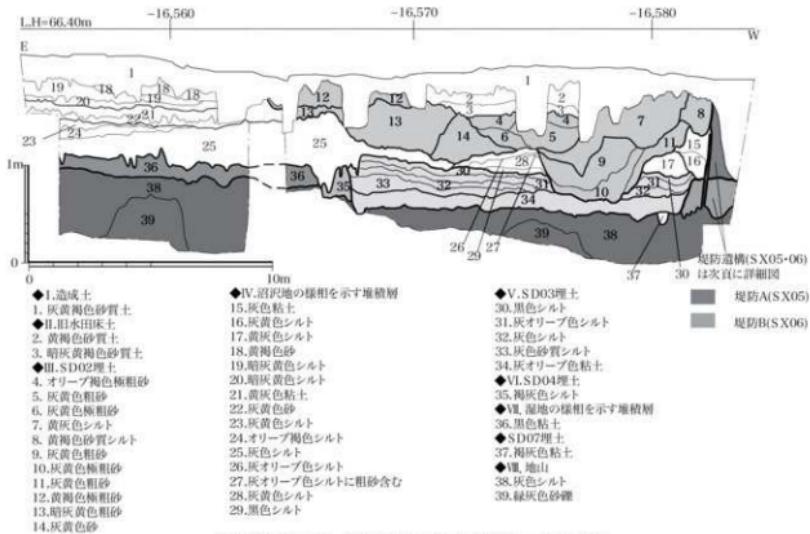
#### 奈良時代以降の遺構

SD01 発掘区西壁において三条条間南北路の想定位置南側で検出した東西方向の溝で、後述する南北方向の溝SD02から西に分岐し、発掘区外の西側へ続く。幅4.0m、深さ1.0mで、後述する堤防遺構SX05・06より新しい。埋土は灰色の粗砂や砂礫で、河川堆積の様相を示す。

SD02 後述する堤防遺構SX05の東側に沿う南北方向の溝で、幅が最大18.3m、深さが最も深い場所で1.2mある。埋土は灰色の粗砂や砂礫で、堆積状態から少なくとも5回は掘り直されたことがわかる。8世紀の土器片



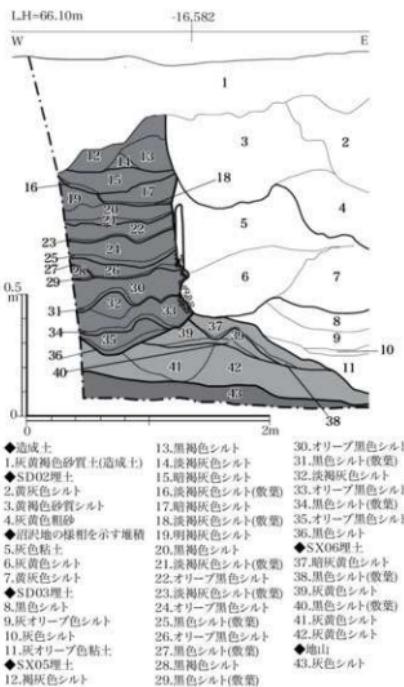
HJ第720次調査 遺構平面図 (1/250)



HJ第720次調査 発掘区南壁上層図(縦1/50、横1/200)



HJ第720次調査 発掘区西壁土層図(縦1/50、横1/80)



発掘区北西拡張部土層図(縦1/20・横1/40)

がわざかに出土している。

SD03・04 SD03は幅14.1m、深さ0.5mの南北方向の溝で、底面の標高は、64.5m前後である。西肩の座標はX=-146070.0m、Y=-16581.5mで、市HJ第377-1次調査地の東四坊大路の路面心を基準に想定した東五坊間東小路の路面心の約4.3m東にあたる。埋土は最上層が黒色シルト、その下が灰色、灰オリーブ色シルトで、層理は水平である。

SD04は前述のSD03に先行する南北方向の溝の東縁1.5mが残存する。深さ0.4m、埋土は黄褐色シルトである。

ともに堆積状態から溝内は滲水していたと推察される。

SX05・06 ともに南北方向の堤防構築、発掘区西壁に沿って堤防東辺を長さ14.6m分検出した。SX06の上にSX05が築かれている。

SX05は幅1m以上、高さ約0.9m、上面の標高65.6mで、前述の溝SD01・02の埋土及び後者が掘り込まれる大別層IV層の各上面と揃っている。断削部の断面では、

厚さ0.1mの褐灰色・黒褐色・オリーブ色のシルト層が積み重なっており、1~2層おきに敷葉の薄層を挟んでいる。基底部の構築に際し、SX06の上面を0.2m程度掘りくぼめ、東側にはしがらみ護岸が残っていた。しがらみ護岸は直径0.1m、長さ0.9m以上の丸太杭を約0.5m前後の間隔で打ち込み、枝を千鳥状に渡して組み上げている。残存高は0.2m程度である。

SX06は幅2m以上、高さ約0.2m、上面は標高64.9mで、東側に沿う溝SD03・04の埋土及び後者が掘り込まれる大別層VII層の各上面と揃っている。また、基底面は前述の溝SD03の底面と一連である。発掘区北西拡張部の断面では、灰黄色シルトと敷葉の薄層の互層を確認した。古墳時代以前の遺構

SD07・08 ともに地山上面で検出した溝である。

SD07は幅0.5m、深さ0.1mで、埋土は褐灰色粘土である。弥生時代後期後半の弥生土器裏片が出土した。

SD08は幅0.6m、深さ0.1mで、埋土は褐灰色粘土である。出土遺物はなかった。

#### 先後関係と時期・変遷

主な遺構と関連する土層の先後関係(旧→新)は、下記の通りである。

VII層(湿地) → SD04 → SD03・SX06  
→ SX05 → IV層(沼沢地) → SD01・02

溝SD01~04と堤防遺構SX05・06は、南北正方向に掘削・構築されており、東五坊間東小路の想定位置に近いこと、SD02の埋土から8世紀の土器が出土していることを踏まえれば、奈良時代の遺構の可能性が高い。SD03とSX06は、前者の底面と後者の基底面が一連であることから、同時に形成された可能性がある。

SD07・08は南北正方位より掘れることから古墳時代以前の遺構と考えられ、前者は弥生時代後期後半の可能性がある。

#### IV 出土遺物

遺物整理箱で1箱分出土した。弥生時代後期後半の弥生土器甕口縁部・底部・脚部付ミニチュア土器、8世紀の土師器甕・高杯、須恵器杯B・蓋があるが大半が小片である。

#### V 調査所見

今回の調査の結果、以下のことが明らかになった。

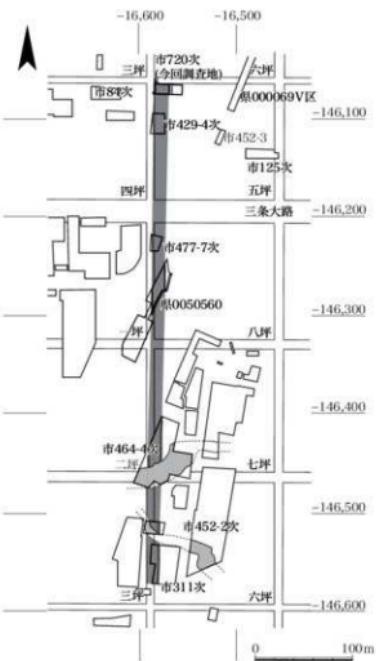
1. 溝SD02~04と堤防遺構SX05・06は、東五坊間西小路推定ラインに沿って構築していることやSD02の埋土から8世紀の土器が出土していることから、奈良時代の遺構と考えられる。

2. 発掘区西壁沿いで検出したしがらみ護岸を伴う堤防遺構SX05と前身の堤防遺構SX06は、位置関係から市HJ第429-4次調査で検出した堤防遺構と一連のものと考られる。また、SX05の最上部は四坪内の市HJ第84次調査地の奈良時代の整地上層上面より約1.0m高く、SX05の東裾は東五坊坊間西小路の路面心の約4m東にあたり、三条大路以南では検出されていない。このことから東側の堆積層の様相を踏まえれば、五・六坪の西寄りが次第に沼沢地に近い状態へと変化していく過程で、治水のために三条大路以北で東五坊坊間西小路の東側に沿って構築された可能性がある。
3. 溝SD03・04は、これまでの東五坊坊間西小路の推定地の調査（市HJ第429-4次・477-7次・464-4次・452-2次・311次・県0050560）で検出されている南北方向の溝と埋土が同様で、幅13.0～14.1m・底面の標高64.4～64.6mと近似していることから一連の可能性がある。
4. 五・六坪間の三条条間南小路に関連する遺構は確認できなかった。

(吉田 朋史)



SX05 堤防遺構のしがらみ護岸検出状態（南東から）



東五坊坊間西小路沿いの遺構の位置（1/5,000）



HJ 第720次調査 発掘区全景（北西から）

## 15. 平城京跡（左京三条三坊十二坪）の調査 第712次

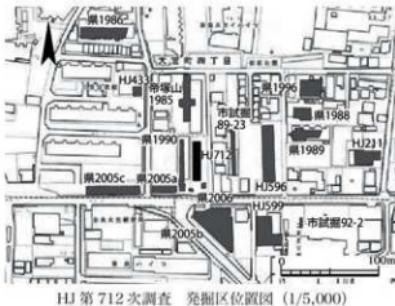
事業名 共同住宅新築	調査期間 平成29年6月20日～7月28日
届出者名 合弁会社新大宮開発	調査面積 320m <sup>2</sup>
調査地 大宮町四丁目259番1・259番4	調査担当者 永野 智子

### I はじめに

調査地は平城京左京三条三坊十二坪の南辺中央やや西寄りに位置する。敷地南辺には三条大路が、東側には東堀河が想定される。同坪内東側で行われた市HJ第596次調査では、東三坊間東小路を検出し、坪内南東部は南北1/4に分割して宅地利用されていた可能性が想定されている。同坪内西側では県1990年度調査が行われ、掘立柱建物3棟を確認している。

今回の調査は十二坪西半部の宅地利用状況の確認を目的に実施した。調査は排土置き場確保のため南北1/3ずつ3回に分けて行った。

なお、今回の発掘区のすぐ北側では、1985年度に帝塚山大学により集合住宅建設に伴い発掘調査が行われているが（届出者名：共立不動産株式会社、調査地：大宮町四丁目260-1、調査期間：1985年12月～1986年5月、調査面積：約378m<sup>2</sup>）、調査成果は長らく未報告となっていた。この調査の図面および写真資料は市で現在保管していることから、今回、その調査概要も合わせて報告する。遺構番号は県1999年度調査との混乱を避けるため、SB31から連番で付した。



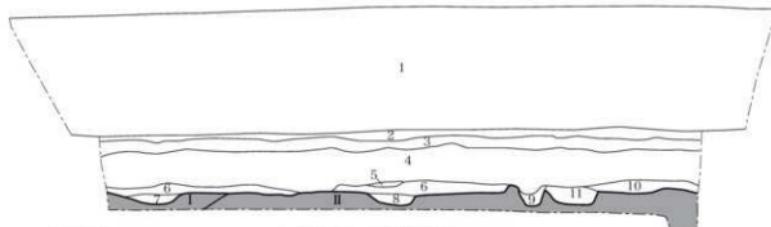
HJ第712次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

### II HJ第712次調査

#### 1. 基本層序

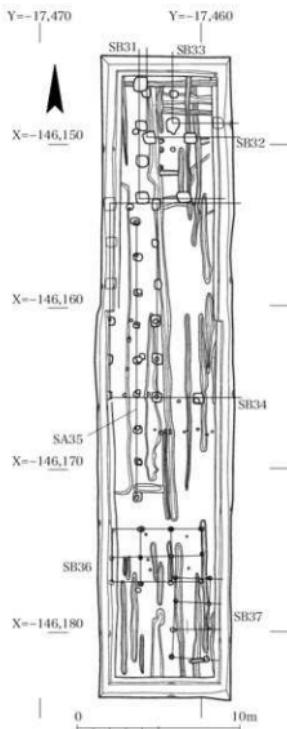
発掘区の基本層序は、造成土（厚さ約1.2m）、耕土（厚さ約0.1m）、床土である暗灰褐色粘土（厚さ約0.15m）、暗灰色粘土（厚さ約0.4m）が続く。北辺および南辺では暗灰色粘土ブロックを含む灰色粘土が約0.1m程堆積し、地表下約1.9mで黄褐色シルトを主とする地山に至る。遺構検出作業は地山上面で行った。地山面の標高は61.0mである。

H=63.300m Y=-17,463 W E Y=-17,460

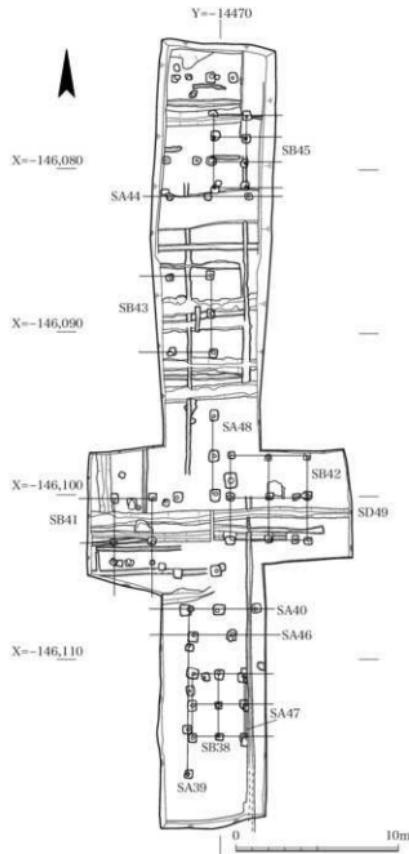


1 造成土  
2 耕土  
3 暗灰褐色粘土…床土  
4 暗灰色粘土  
5 黑色極細粒砂  
6 灰色粘土(暗灰褐色粘土ブロック)  
7 黄褐色極細粒砂  
8 暗褐色シルト混細粒砂(炭化物混)  
9 床白色粘土  
10 暗灰色粘土混細粒砂(土器片・炭化物混)  
11 暗褐色極細粒砂(炭化物混)  
I 黄褐色シルト(暗色シルト漬状に入る)  
II 暗褐色細粒砂

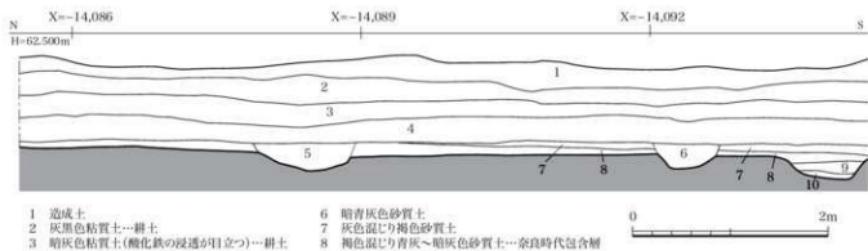
HJ第712次調査 発掘区北壁土層図 (1/50)



HJ 第712次調査 遺構平面図 (1/300)



1985年度調査 遺構平面図 (1/300)



1985年度調査 発掘区東壁平面図 (1/50)

## 2. 検出遺構

8世紀の掘立柱建物4棟（SB31～34）、10世紀前半の柱列1条（SA35）、掘立柱建物2棟（SB36・37）を確認した。

SB31 桁行3間（7.2m）以上、梁行1間（2.4m）以上の南北棟掘立柱建物で、発掘区外北および東へ続く。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁行2.7mである。柱穴の深さは約0.3～0.4mである。

SB32 桁行1間（2.4m）以上、梁行1間（2.4m）以上の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁行ともに2.4m等間。柱穴の深さは約0.3～0.4mである。

SB33 桁行1間（2.1m）以上、梁行1間（2.7m）以上の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.1m、梁行2.7m。柱穴の深さは約0.2mである。

SB34 桁行5間（12m）の西廂付南北棟掘立柱建物で、発掘区外東へ続く。柱間寸法は桁行、梁行ともに2.4m等間、廂の出は3.0m。柱穴の深さは約0.2mである。

SA35 南北8間（16.8m）の掘立柱廻である。ただし、南北棟建物の東側柱列の可能性も考えられる。柱間寸法は2.1m等間。北端から3つ目の柱抜き取り坑より10世紀前半の土師器皿、黒色土器B類椀、綠釉陶器椀などが出土

した。また、北端の柱穴底部には礎板石が置かれていた。

SB36 桁行3間（5.4m）、梁行2間（3.6m）の東西棟総柱建物である。柱間寸法は桁行、梁行とともに1.8m等間。柱穴の深さは0.15～0.35mと差がある。北側柱列の西から3つ目の柱抜き取り坑より黑色土器B類椀の口縁部片が出土した。

SB37 桁行3間（4.8m）、梁行1間（2.1m）以上の南北棟総柱建物である。柱間寸法は桁行が1.5-1.8-1.5m、梁行2.1m。柱穴の深さは0.2～0.3mである。側柱と床東の柱穴を比較すると規模や根入れで大差はない。

## III 1985年度調査

## 1. 基本層序

上から造成土（厚さ約0.2m）、耕土である灰黒色粘質土（厚さ約0.2m）、暗灰色粘質土（厚さ約0.4m）、灰色混じり褐色砂質土（厚さ約0.1m）、褐色混じり青灰～暗灰色砂質土（厚さ約0.1m）の順に堆積し、地表下約1.0mで地山に至る。地山面の標高は61.4mで、HJ712次調査発掘区よりも約0.3m高い。

## 2. 検出遺構

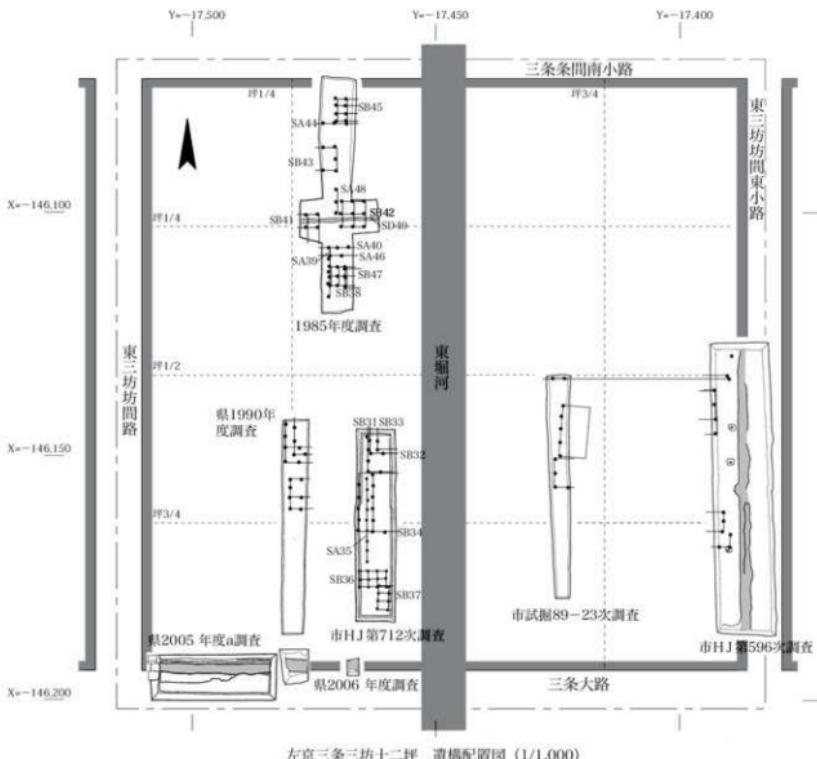
8世紀後半～9世紀初頭の掘立柱建物5棟（SB38・

遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	桁行柱間寸法	梁行柱間寸法	廂の出	柱穴の深さ	備考
		（桁行×梁行）	m	m	m	m	m	m	
SB31	南北	3以上×1以上	7.2以上	2.7以上	2.4等間	2.7等間	—	0.3～0.4	SB32より新しい。
SB32	南北？	1以上×1以上	2.4以上	2.4以上	2.4等間	2.4等間	—	0.3～0.4	SB31より古い。
SB33	南北？	1以上×1以上	2.1以上	2.7以上	2.1等間	2.7等間	—	0.2	
SB34	南北	5以上×2以上	12	5.4以上	2.4等間	2.4等間	3.0	0.2	
SA35	南北	8×？	16.8	—	2.1等間	—	—	0.3～0.4	
SB36	東西	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	—	0.15～0.35	鰐柱建物。
SB37	南北	3×1以上	4.8	2.1以上	1.5-1.8-1.5	2.1等間	—	0.2～0.3	鰐柱建物。
SB38	東西？	2以上×2以上	3.0以上	4.2	1.5等間	2.1等間	—	0.1～0.2	鰐柱建物。SA47より古い。
SA49	南北	4	10.2	—	2.4-2.7-2.4-2.7	—	—	0.15	SA40より新しい。
SA40	東西	2以上	4.5	—	西から2.1-2.4	—	—	0.1～0.3	SA39より古い。
SB41	東西？	1以上×1以上	2.4以上	2.7以上	2.4	2.7	—	0.4	鰐柱建物か。
SB42	東西？	2×2	2.4	5.1	2.4	北より2.4-2.7	—	0.2～0.3	鰐柱建物。
SB43	東西	1以上×2	2.4以上	4.8	2.4	2.4等間	—	0.2～0.3	
SA44	東西	2以上	—	4.8	—	2.4等間	—	不明	
SB45	南北？	3×1以上	4.5	2.1以上	1.5等間	2.1	—	不明	鰐柱建物。
SA46	東西	1以上	2.4以上	—	2.4	—	—	0.2	
SA47	南北	—	2	—	2.1	—	—	不明	東西棟建物の妻柱か。 SA38より新しい。
SA48	南北	2	6.0	—	3.0	—	—	0.3～0.35	

遺構番号	平面形等	平面規概（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
SD49	東西方向	幅0.5～1.0、長さ15.9	0.35	9世紀前半	土師器杯A・盤A・杯B・椀A・須器器 壺M・灰釉陶器椀・黒色土器椀	



41・42・43・45)・掘立柱塀6条(SA39・40・44・46・47・48)、8世紀末～9世紀初頭の溝1条(SD49)、素掘溝を検出している。

#### IV 出土遺物

HJ第712次調査で遺物整理箱8箱分、1985年度調査で遺物整理箱25箱分が出土している。遺物には8～10世紀前半の土師器、須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・黒色土器、宝珠観、軒丸瓦、丸瓦・平瓦がある。HJ712次調査の奈良時代の柱穴からは詳細な時期のわかる遺物の出土はなかった。

#### V 調査所見

HJ第712次調査で検出した奈良時代の建物は重複関係からSB32→SB31であることがわかり、SB33も前2棟と併存し得ないことから3時期の変遷があることがわかる。

10世紀前半の遺構は、掘立柱建物SB36・37と柱列SA35があり、SB36とSB37は併存できることから2時期の変遷がある。

1985年度調査発掘区では、坪南北1/4分割ラインに区画溝とみられる東西溝SD49があり、時期が不明ながら倉庫とみられる総柱建物が4棟検出されている。遺構は重複関係から2時期の変遷があったことがわかる。掘立柱建物や掘立柱塀の柱穴からは、土器の細片しか出土しておらず、詳細な時期は不明だが、素掘溝やまとめられない柱穴から出土している遺物の大半は8世紀末～9世紀初頭以降のものである。坪内の利用状況は不明な点が多いが、HJ712次調査よりも1985年度調査で検出された建物のほうが小規模なものが多く、また、確実に10世紀まで下る建物は三条大路に近い部分でしか検出されていないことが指摘できる。

(永野 智子)



HJ 第712次調査 発掘区中央部全景（北から）



1985年度調査 発掘区全景（南東から）



1985年度調査 発掘区全景（南から）

## 16. 南紀寺遺跡の調査 MK第7次

事業名	宅地造成	調査期間	平成29年7月24日～7月28日
届出者名	リアルアセット株式会社	調査面積	150m <sup>2</sup>
調査地	南紀寺町三丁目818番の一部	調査担当者	安井 宣也

### Iはじめに

調査地は、古墳時代中～後期の集落遺跡である南紀寺遺跡の中央付近にある。現状は県営紀寺職員住宅の跡地で、かつては水田であった。

調査地の南西約150mで実施した第3次調査では古墳時代中期～飛鳥時代の建物・溝を検出した。

今回の調査は、古墳時代の遺構の遺存状態の確認を目的として道路予定地に発掘区を設定して実施した。

### II 基本層序

造成土(厚さ1.2～1.5m)の下に、旧水田耕土・床土層(厚さ0.4～0.5m)があり、その下で黄灰色砂質粘土や灰黄色砂礫の地山となる。東から西に下る地山上面(標高102.1～102.6m)が古墳時代の遺構面である。

### III 検出遺構

地山上面で古墳時代の小土坑1・2を検出した。ともに径0.6mの平面円形で、深さ0.4m。埋土は褐灰色砂質シルトで、小土坑1から中期末～後期の土師器片が出土した。位置と形状から柱列の一部の可能性もある。

### IV 出土遺物

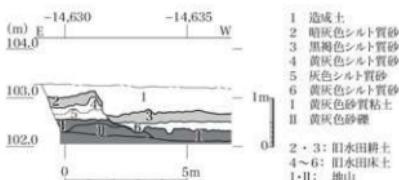
遺物整理箱で1箱ある。時期のわかるものは古墳時代の小土坑1から出土した同中期末～後期の土師器杯片1点で、他に耕作溝や水田床土層等から出土した時期不明の土師器細片がある。

### V 調査所見

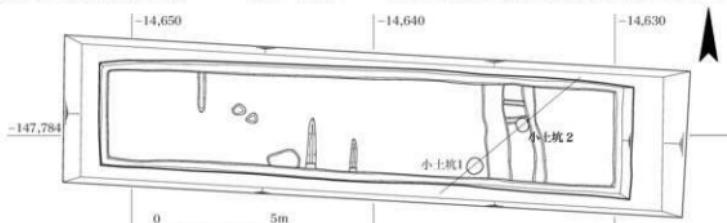
調査地内は古墳時代中期末～後期の集落の一画にあるが、第3次調査地に比べて遺構の分布密度が低いので、空閑地の多い場所と推察する。  
(安井 宣也)



MK第7次調査 発掘区全景 (東北から)



MK第7次調査 発掘区南壁土層図 (縦: 1/100, 横: 1/200)



MK第7次調査 遺構平面図 (1/200)

## 17. 平成 29 年度実施 工事立会一覧

平成 29 年度に土木工事等に関わって 233 件の立会を実施した。

№	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
1	H28.3400	右京北辺三坊六坪・西 三坊坊間路	西大寺北町一丁目386-6, 7, 10	個人	共同住宅新築	宅地	H29.4.3	GL-1.7 mまで掘削、盛土0.4 m、黒灰色土(耕作土)0.3 m、灰褐色土0.4 m、以下黄灰色粘土0.2 m、灰色シルト0.4 m
2	H28.3431	新蓮部寺	高畠町345-2, 357-1, 359-2 番地の一部	奈良市長	道路工事	学校用地	H29.4.4	GL-1.0 ~ 1.6 mまで掘削、現地表下で地山
3	H28.3448	左京五条六坊七坪・奈 良町道跡	西木辻町298番地の9	個人	個人住宅新築	宅地	H29.4.6	GL-1.0 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.6 m、黄褐色土(地山)0.4 m以上堆積
4	H28.3450	遺物散布地	秋篠町1181-10	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H29.4.7	GL-1.9 mまで掘削、盛土1.1 m、暗灰色土質0.1 m、貴灰白色土(地山)0.7 m以上
5	H28.3477	左京五条六坊六坪・奈 良町道跡	西木辻町200番地59	(株)西商店	共同住宅新築	宅地	H29.4.10	GL-0.3 ~ 0.7 mまで掘削、盛土0.7 m以上
6	H28.3495	右京三条二坊十二坪・ 西二坊坊間四小路	尼辻北町 277番4, 278番, 279番4, 280番2	プレステ(株)	賃貸住宅新築	宅地	H29.4.10	GL-0.4 mまで掘削、盛土0.4 m以上
7	H29.3014	西大寺	若葉台一丁目1864-5, 1836-6, 2658	個人	個人住宅新築	宅地	H29.4.12	GL-0.2 mまで掘削、盛土0.2 m以上
8	H28.3525	右京六条一坊十五坪	六条町126-1, 127, 128-1, 130, 131, 138	(株)新日本コンサルティング	青空駐車場造成	水田	H29.4.12	GL-0.2 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.2 m以上
9	H28.3500	左京三条五坊九坪・奈 良町道跡	芝辻町11番92	個人	個人住宅新築	宅地	H29.4.13	GL-0.4 mまで掘削、盛土0.3 m、黄褐色土(地山)0.1 m以上
10	H28.3496	左京四条六坊九坪・奈 良町道跡	角振町5	(株) 芝田衣料店	店舗新築	宅地	H29.4.17	GL-0.7 mまで掘削、コンクリート0.1 m, 砕石0.2 m, 盆土0.05 m, 黄褐色土(土頭砂利片)0.35 m以上
11	H28.3420	右京七条四坊四坪	七条二丁目655	(株) 京良電力(株)	設置拡新設	道路	H29.4.18	GL-0.8 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2 m、灰褐色土0.6 m以上
12	H28.3401	左京五条六坊七坪・奈 良町道跡	西木辻町346番4	個人	個人住宅新築	宅地	H29.4.18	GL-0.1 ~ 0.2 mまで掘削、盛土0.1 ~ 0.2 m以上
13	H28.3371	曾原寺	宝来二丁目854番1	(株) NTT デコモ	携帯基地局電力 設備設置	宅地	H29.4.18	GL-0.2 mまで掘削、盛土0.2 m以上
14	H28.3509	左京八条四坊六坪・東 四坊坊間路	東九条町625-6, 625-8	関西電力(株) 京 良電力部	電柱新設	宅地	H29.4.19	GL-1.1 mまで掘削、盛土0.8 m、黒灰色土0.3 m以上
15	H28.3502	左京三条四坊九坪・二 条大路	芝辻町二丁目172番5	個人	宅地造成	畠地	H29.4.20	GL-0.65 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.1 m、褐褐色土0.35 m、黒褐色土0.2 m以上
16	H28.3542	左京八条四坊六坪	東九条町625-9, 625-11, 625-13, 625-15	(株) アーネスト ワン	分譲住宅新築	宅地	H29.4.21	GL-0.15 ~ 0.25 mまで掘削、盛土0.15 ~ 0.25 m、黒褐色土(耕作土)0.05 m以上堆積
17	H28.3037	右京七条四坊八坪	六条三丁目1182番12	ファースト住建	分譲住宅新築	水田	H29.4.26	GL-1.3 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.3 m、褐褐色土1.0 m以上
18	H28.3536	右京四条三坊二坪・ 西二坊大路	半幅一丁目103-8, 103-10, 98-5	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H29.4.27	GL-0.3 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.3 m以上
19	H28.3447	佐伯院跡・奈良町道跡	京終地方西側町15-5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.4.28	GL-0.25 mまで掘削、盛土0.25 m以上
20	H29.3011	左京四条四坊五坪	人森西町12番3号	中谷電気(株)	自家用看板設置	宅地	H29.5.1	GL-0.7 mまで掘削、砕石0.3 m、盛土0.4 m以上
21	H29.3036	右京四条一坊十坪・西 一坊坊間路	四条大路四丁目2-60	大阪ガス(株) 導管部・東北東部導管部	ガス管理設 置	道路	H29.5.1	GL-0.75 mまで掘削、コンクリート0.05 m、盛土0.5 m、黒褐色土(耕作土)0.2 m以上
22	H29.3031	東九条平城跡	北之庄町2番1, 3番1, 東九条町18番2の一部, 182番, 183番3	(株) ローソン運 営本部近畿エリ アサポート部	サインボール 設置	宅地	H29.5.8	GL-1.2 ~ 1.6 mまで掘削、盛土1.2 ~ 1.6 m以上
23	H29.3476	興福寺・奈良町道跡	東向中町17-1・2・18	(株) 鈴木	店舗新築	宅地	H29.5.8	GL-0.5 ~ 0.7 mまで掘削、盛土0.5 m、黒褐色土0.2 m以上
24	H29.3030	右京六条六坊一坪	六条一丁目976-2	(株) アイビー ホーム	個人住宅新築	宅地	H29.5.10	GL-0.3 mまで掘削、盛土0.2 m、黒褐色土(耕作土)0.1 m以上
25	H28.3254	左京四条五坊五・十二 条大路	奈良市杉ヶ西町20-4 ~ 大森町301-2	大阪ガス(株) 導 管事業部 東北部 導管部	ガス管敷設撤去	道路	H29.5.10	GL-0.05 m、盛土0.2 m、盛土1.05 m以上
26	H28.3540	左京八条三坊一坪・七 条大路	奈良市八条町859-1 の 一部	共同住宅新築	宅地	H29.5.10	GL-1.0 mまで掘削、盛土1.0 m、以下 黒褐色土	
27	H28.3041	左京五条七坊三坪・東 六坊大路・奈良町道跡	京終地方西側町19-2, 19-5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.5.11	GL-0.1 ~ 0.15 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.1 m
28	H29.3016	藥師寺・八条大路	西ノ町174番の一部 (B棟)	個人	賃貸住宅新築	宅地	H29.5.11	GL-0.4 mまで掘削、淡灰褐色沙(河川 堆積物)0.4 m以上
29	H29.3043	南紀寺道跡	白毫寺町784番35	個人	個人住宅新築	宅地	H29.5.15	GL-0.3 mまで掘削、盛土0.2 m、黒褐色土(耕作土)0.1 m以上
30	H29.3013	左京三条四坊十四坪・ 油阪道路	大宮町2丁目127番44	個人	個人住宅新築	宅地	H29.5.15	GL-0.3 mまで掘削、盛土0.2 m、黒褐色土(耕作土)0.1 m以上

No	受理番号	地籍	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
31	H29.3511	西大寺	西大寺電王町一丁目 1620番1	アイディー ホーム(株)	分譲住宅新築	宅地	H29.5.15	GL-0.1 ~ 1.6mまで掘削、敷地北側 盛土0.1m、敷地南側盛土1.6m
32	H29.3017	東郷寺、八条大路	西ノ京町174番の一部 (B棟)	個人	賃貸住宅新築	宅地	H29.5.16	GL-0.4mまで掘削、(河川堆積) 0.4m 以上
33	H29.3018	東郷寺、八条大路	西ノ京町174番の一部 (C棟)	個人	賃貸住宅新築	宅地	H29.5.16	GL-0.4mまで掘削、(河川堆積) 0.4m 以上
34	H29.3027	佐伯院、奈良町遺跡	西木辻町 200-1	関西電力(株) 奈 良電力部	電柱・支線・ 桟橋	道路	H29.5.24	GL-2.5mまで掘削、盛土0.7m、黒灰 色±0.2m
35	H29.3007	元興寺、奈良町遺跡	納院町10番	個人	個人住宅新築	宅地	H29.5.26	GL-1.3mまで掘削、盛土1.3m以上
36	H28.3489	左京四条四坊十四坪・ 十五坪	三条本町1102, 1103	個人	共同住宅新築	宅地	H29.5.24	GL-0.5mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.5m以上
							H29.6.1	GL-1.3mまで掘削、盛土1.1m、暗灰 色±0.2m以上
37	H28.3510	右京六条三坊十五坪、 西院坊大路	六条一丁目 880番 18, 880番 19, 931番 6, 931 番 11, 2461番 7, 2461 番 8	個人	個人住宅新築	宅地	H29.5.29	GL-0.7mまで掘削、暗褐色土0.1m、 黄褐色粘土質土(地山) 0.6m以上
38	H29.3048	右京四条四坊五坪・五 条四坊八坪、四条人路	平松三丁目 482番 1, 482番 2, 483番 1, 483番 9	ウイルエステー ト(株)	宅地造成	池	H29.5.29	GL-0.45 ~ 0.95mまで掘削、A区池 北で、暗褐色±0.1m、以下黄褐色粘 土及び砂層を確認、B区池底東で、 褐色±0.4m、暗褐色±0.3m、灰色 粘土±0.17m、以下灰褐色粘土(上面化 学) 約0.4m
39	H28.3543	西大寺	西大寺南町2436-3	関西電力(株) 奈 良電力部	電柱及び支線新 設	宅地	H29.5.30	GL-2.7mまで掘削、盛土0.6m、暗灰 色粘土±0.4m
40	H28.3489	左京四条四坊十四坪・ 十五坪	三条本町1102, 1103	個人	共同住宅新築	宅地	H29.6.1	GL-1.3mまで掘削、盛土1.1m、暗灰 色±0.2m以上
41	H29.3051	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 134番 15, 134番 16, 134番 17	個人	個人住宅新築	宅地	H29.6.5	GL-0.25mまで掘削、盛土0.05m、暗 褐色土±0.2m以上
42	H28.3544	右京六条三坊十五坪	六条一丁目 825番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H29.6.8	GL-0.3mまで掘削、盛土0.3m以上
43	H29.3076	左京四条三坊十三坪	三条松町401番 1の一部	個人	倉庫新築	宅地	H29.6.8	GL-0.5mまで掘削、盛土±0.15m、黑 灰色土(耕作土) 0.2m、黄褐色粘土質 土±0.15m以上
44	H29.3008	左京二条五坊十六坪、 二条条間北小路	法蓮町986番地 57	個人	共同住宅新築	宅地	H29.6.8	GL-0.3mまで掘削、盛土±0.2m、黃 褐色土(地山) 0.1m以上
45	H29.1021	史跡人安寺境内附石 築瓦尾跡	人安寺町 他	奈良市長	道路灌漑及び付 随する排水施設 の補修工事	道路	H29.6.10	GL-0.75mまで掘削、アスファルト 0.05m、暗褐色土±0.4m、黄褐色砂±0.3 m以上
46	H28.3541	右京五条三坊十坪	平松二丁目 264番 15	個人	個人住宅新築	宅地	H29.6.14	GL-0.35mまで掘削、盛土±0.3m、黃 褐色粘土質土(地山) 0.05m以上
47	H29.3034	遺物散布地	横井二丁目 304 地先	西日本電信電話 (株) 今良店舗	電話局下設備の 支障移転工事	道路	H29.6.16	GL-1.0mまで掘削、アスファルト 0.1 m、碎石 0.3m、盛土 0.6m以上
48	H28.1004・ 1090	史跡平城京朱雀大路跡	二条大路南四丁目	国土交通省 近畿地方整備局 奈良県史跡 公園事務所	公園施設整備 (U字削溝)	公有地	H29.6.23	既にコンクリート構造物があり、地面 が壊滅され、施工はこの範囲内
49	H29.3010	久田原遺跡	久田原町 1735-1	個人	個人住宅新築	宅地	H29.6.26	GL-0.1mまで掘削、盛土±0.1m以上
50	H29.3109	左京五条四坊十五坪	大安寺七丁目 15-7	個人	賃貸住宅新築	宅地	H29.6.28	GL-0.1 ~ ±0.5mまで掘削、盛土±0.15 ~ 0.5m以上
51	H29.3054	右京五条四坊六坪	平松四丁目 396番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H29.6.28	GL-0.2mまで掘削、黃褐色土(地山) 0.2m以上
52	H29.3140	左京五条一坊十五 ・十六坪、第一坊大路	柏木町 585番 4	(株) ホンダネック トナラ	店舗・工場新築	宅地	H29.7.4 ~ H29.9.20 延々8日	16地点で立会検査実施：II地点で黃 褐色粘土(耕作土) 0.2m、黄褐色土±0.3m、 灰褐色±0.2m、以下地山の黄褐色粘 土±0.1m、暗灰色粘土±0.1m、淡灰色粘 土±0.3m以上
53	H29.3009	左京四条六坊三坪、奈 良町道跡	杉ヶ町92番 2, 92番 3	個人	個人住宅新築	青空 駐車場	H29.7.6	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.3m以上
54	H29.3004	左京四条六坊三坪、奈 良町道跡	杉ヶ町92番 4, 92番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.7.6	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.3m以上
55	H29.3131	左京三条一坊十五 ・十六坪、第一坊大路	三条大路三丁目 490番 1 の一部	オーステハウジ ング(株)	宅地造成	水田	H29.7.7	GL-1.6mまで掘削、盛土±0.4m、黒 褐色土(耕作土) 0.2m、褐灰色±0.3m、 灰褐色±0.2m、以下地山の黄褐色粘 土±0.1m、暗灰色粘土±0.1m、淡灰色粘 土±0.3m以上
56	H29.3024	左京二条五坊十六坪、 二条条間北小路	法蓮町986番地 30	個人	個人住宅新築	宅地	H29.7.7	GL-0.25mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.25m以上
57	H29.3378	朱雀大路	三条大路四丁目地先～三 条大路三丁目地先	関西電力(株) 奈 良電力部	電気工事(地中化 工事)	道路	H29.7.10	GL-1.3mまで掘削、アスファルト 0.1 m、盛土±0.6m、以下地山の黄褐色土 ±0.2m、暗褐色±0.3m以上
58	H28.3378	朱雀大路	三条大路四丁目地先～三 条大路三丁目地先	関西電力(株) 奈 良電力部	電気工事(地中化 工事)	道路	H29.7.10	GL-1.3mまで掘削、アスファルト 0.1 m、盛土±0.6m、以下地山の黄褐色土 ±0.2m、暗褐色±0.3m以上
59	H29.3146	左京四条六坊五坪、奈 良町道跡	小太郎町 15番 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.7.10	GL-0.2mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.2m以上
60	H29.3085	左京四条四坊十 ・十一坪	三条宮前町 244番 2	個人	共同住宅新築	青空 駐車場	H29.7.10	GL-0.3mまで掘削、盛土±0.3m以上

No	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
61	H29.3107	新蓮御寺	高畠町177-5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.7.13	GL-0.3 ~ 0.4 mまで掘削、盛土0.3 ~ 0.4 m
62	H29.3052	左京五条六坊十六坪 奈良町道路	鴨川町36番の一部	個人	鴨居宿泊所新築	宅地	H29.7.13	GL-1.5 mまで掘削、盛土1.4 m、黒灰色土0.1 m以上
63	H28.3339	五条大路 東七坊大路、 東紀寺道路	東紀寺町一丁目701-1 他5筆	(公)地域医療振興協会市立奈良県 病院	医療施設(リニアク株) 増築	病院内敷地	H29.7.13	GL-1.1 mまで掘削、盛土0.7 m、黄灰色土(地山)0.4 m以上
64	H28.3081	古市道路	古市町1519-2	関西電力(株)奈良電力部	電柱新設	宅地	H29.7.18	GL-0.5 ~ 1.1 mまで掘削、東端の振形で、盛土0.3 m、褐色砂質土(地山)0.2 m以上
65	H29.3068	紀寺跡	紀寺町767-8	個人	賃貸住宅新築	宅地	H29.7.18	GL-0.45 mまで掘削、盛土0.45 m、以下、黄褐色粘土(地山)
66	H29.3032	西四坊大路、西大寺	若葉台三丁目1896番17 及び21の一部(1号地)	ファースト 住建(株)	分譲住宅新築	青空駐車場	H29.7.18	GL-0.4 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2 m、青褐色粘土(地山)0.2 m以上
67	H29.3033	西四坊大路、西大寺	若葉台三丁目1896番17 及び21の一部(2号地)	ファースト 住建(株)	分譲住宅新築	青空駐車場	H29.7.18	GL-0.4 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2 m、青褐色粘土(地山)0.2 m以上
68	H29.3146	西大寺	西大寺新田町562	個人	個人住宅新築	宅地	H29.7.18	GL-0.4 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.3 m、黄褐色砂質土(地山)0.1 m以上
69	H29.3373	栗原寺	西ノ京町174	関西電力(株)奈良電力部	電柱支線新設	宅地	H29.7.20	GL-0.8 ~ 1.1 mまで掘削、盛土0.4 m、黒褐色土(表土)0.4 m以上
70	H29.3042	左京三条五坊九坪	三条町529-1	個人、共同住宅 新築	個人、共同住宅 新築	宅地	H29.7.20	GL-0.1 ~ 0.2 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.1 ~ 0.2 m以上
71	H29.3127	左京二条七坊十坪	東臣鉾町42番の一部	東臣鉾町自治会 会館	自治会集会所新築	宅地	H29.7.20	GL-0.6 mまで掘削、盛土0.2 m、黒褐色土(表土)0.3 m以上
72	H28.3325	左京一条五坊五坪	法華寺町1260-2、 1266-1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.7.24	GL-0.2 mまで掘削、盛土0.2 m以上
73	H28.3523	池田道路	池田町16-4	(特非)アンダン チ農園	宅地造成・道路工事	水田	H29.7.24	GL-2 mまで掘削、黒灰色土(耕作土)0.25 m、褐色砂質土0.25 ~ 0.6 m、以下地の黄褐色粘土0.15 ~ 0.5 m、青灰色砂質土0.4 m、青褐色細砂0.3 m以上
74	H29.3072	西大寺	西大寺新田町500-7	個人	個人住宅新築	宅地	H29.7.26	GL-0.3 mまで掘削、盛土0.2 m、黒褐色土(耕作土)0.1 m以上
75	H29.3015	左京三条五坊五 十二坪	大宮町一丁目27-12、27- 13、27-15、27-17の一部	個人	共同住宅新築	青空駐車場	H29.7.27	GL-2.1 mまで掘削、盛土1.0 m、黒褐色土(表土)0.1 m、褐灰色土0.4 m、黃褐色土(地山)0.6 m以上
76	H29.3079	右京二条五坊十六坪	法蓮町986-64	(福)奈良愛の園 福祉会	こども園舎建設 物販室	宅地	H29.7.28	GL-0.5 mまで掘削、盛土0.2 m、黒褐色土(表土)0.2 m、淡褐色砂質土(地山)0.1 m以上
77	H29.3075	右京六条一坊六坪	西ノ京町69-1	さくらガーデン (株)	店舗新築	宅地	H29.7.31	GL-0.5 mまで掘削、茶褐色土0.4 m、黒褐色土0.1 m以上
79	H29.3194	古市道路	古市町1512番1の一部	(株) アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H29.8.8	GL-0.4 mまで掘削、暗褐色土(表土)0.2 m、褐土0.2 m以上
78	H29.3029	左京五条七坊五 六坪、奈良町道路	紀寺町630番1の一部、 630番2の一部、631番 1、631番2、632番1、 632番2	マサキ不動産 販売(株)	店舗新築	宅地	H29.7.31	GL-0.5 mまで掘削、茶褐色土0.4 m、黒褐色土(表土)0.1 m以上
80	H29.3172	七条三条四 八条三条四	六条西四丁目8-10 ~ 四 丁目6	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.8.8	GL-1.5 mまで掘削、アスファルト0.1 m、盛土1.0 m、船灰色粘土(地山)0.4 m以上
81	H29.3137	左京八条二坊十四坪、 八条三条四	吉町510番1の一部	個人	農業用倉庫新築	水田	H29.8.10	GL-0.8 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.2 m、灰色0.25 m、褐色砂質土0.25 m、黃褐色粘土(地山)0.1 m以上
82	H29.3077	左京六条四坊十四坪	大安寺一丁目3-1	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.8.16	GL-1.5 mまで掘削、アスファルト0.1 m、碎石0.15 m、透水0.95 m、船灰色粘土(地山)0.3 m以上
83	H29.3028	左京八条一坊三・四坪	吉町175-1	(ダイシ)化工 (株)	自社倉庫新築	宅地	H29.8.17	GL-1.2 ~ 1.4 mまで掘削、盛土1.0 ~ 1.2 m、黒褐色土(表土)0.1 m、淡褐色土0.1 m以上
84	H29.3392	左京五条一坊九・ 十六坪	柏木町585-1	(株) 南都銀行	倉庫新築	荒蕪地	H29.8.17・ 22	GL-0.5 ~ 0.8 mまで掘削、盛土0.5 ~ 0.8 m
85	H29.3141	森本庄ノ庄道路	齊之庄町49番1・5、50 番1、51番1、52番1-3、 53番1-3、54番1、55番 1-4、56番1	(株) PINE	店舗用地・資材 貯蔵用地造成	水田、畑地	H29.8.18	GL-0.75 ~ 1.3 mまで掘削、黒灰色土(耕作土)0.2 m、淡黃褐色砂質土0.15 m、以下地の黄褐色土0.6 m、暗灰褐色砂質土0.2 m以上
86	H29.3124	奈良町道路	財源町15-12、15-16、 15-17、15-21	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	宅地	H29.8.21	GL-0.6 ~ 0.9 mまで掘削、盛土0.2 ~ 0.5 m以上

№	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
87	H29.3058	西大寺	西大寺本町～西大寺小坊町地内	奈良市企業局	水道管入替に伴う試掘調査	道路	H29.8.24	GL-1.11～1.45mまで掘削、アスファルト0.1～0.2m、盛土0.91～1.35m以上
88	H29.3149	右京六条四坊四坪	六条三丁目1170-67	個人	個人住宅新築	宅地	H29.8.28	GL-0.4mまで掘削、盛土0.4m以上
89	H29.3118	右京三条三坊十六坪	宝来二丁目134-5, 134-18	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線の建替	宅地	H29.8.29	GL-0.8mまで掘削、盛土0.75m、黄灰色粘土(地山)0.05m以上
90	H29.3155	左京三条五坊十三・十四坪	西之坂町30番地	奈良市長	樹木の伐採	宅地	H29.8.29	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土)0.3m以上
91	H29.3173	遺物散布地	佐保台三丁目902番地の341	奈良市長	放課後児童クラブ新築	学校用地	H29.8.29	GL-0.4mまで掘削、盛土0.4m以上
92	H29.3158	右京二条四坊八・九坪	西大寺芝町地内	(株)クリアジャパン	宅地造成及び下水工事	道路	H29.8.30	GL-1.5mまで掘削、アスファルト0.05m、砂石0.2m、盛土1.25m以上
93	H29.3229	右京三条一坊五坪	三条大路二丁目490-1	関西電力(株) 奈良電力部	本柱・支柱新設	宅地	H29.8.30	GL-0.8mまで掘削、盛土0.8m以上
94	H29.3035	左京三条一坊十四坪・三条三条間南小路	三条大路二丁目575番7	(有)TMO	共同住宅新築	宅地	H29.8.31	GL-1.5mまで掘削、盛土1.1m、灰褐色土0.1m、黄灰色粘土(地山)0.3m以上
95	H29.3120	右京二条四坊八坪、一条南人路	西大寺芝町二丁目11	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.8.31	GL-0.7～0.85mまで掘削、アスファルト0.05m、盛土0.5m、黄褐色砂質土(地山)0.3m以上
96	H29.3226	右京四条三坊十五・十六坪	平松一丁目18-16, 宝来二丁目21-35	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.9.1	GL-0.85mまで掘削、盛土0.35m、黒褐色土(耕作土)0.25m、黄灰色粘土(地山)0.25m以上
97	H29.3209	左京五条四坊十坪	奈良市大森町1	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管敷設撤去	道路	H29.9.1	GL-1.7mまで掘削、アスファルト0.05m、砂石0.1m、盛土1.35m、黄褐色土(地山)0.2m以上
98	H29.3213	右京四条四坊十一坪	平松五丁目679-1他(1号棟)	(建設)(株) 代表取締役	分譲住宅新築	宅地	H29.9.1	GL-0.2mまで掘削、盛土0.2m以上
99	H29.3214	右京四条四坊十一坪	平松五丁目679-1他(2号棟)	(建設)(株) 代表取締役	分譲住宅新築	宅地	H29.9.1	GL-0.2mまで掘削、黒褐色土(耕作)0.2m以上
100	H29.3215	右京四条四坊十一坪	平松五丁目679-1他(3号棟)	(建設)(株) 代表取締役	分譲住宅新築	宅地	H29.9.1	GL-0.2mまで掘削、黒褐色土(耕作)0.2m以上
101	H29.3192	左京九条三坊十一坪	東九条町4-1	uriaタキヤサービス	倉庫新築	宅地	H29.9.5	GL-1.3mまで掘削、盛土1.1m、黒褐色土(耕作土)0.2m以上
102	H29.3199	右京七条四坊十坪	七条西町875番5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.9.6	GL-0.5mまで掘削、盛土0.5m以上
103	H29.3152	右京五条二坊六坪	大安寺町505番37	個人	事務所新築	宅地	H29.9.11	GL-0.2mまで掘削、盛土0.2m以上
104	H29.3256	右京二条五坊五坪	法蓮町46番4及び46番11の一部	(株)モリタ住建	分譲住宅新築	宅地	H29.9.11	GL-0.15mまで掘削、黒褐色土0.15m以上
105	H29.3258	奈良町遺跡	財原町174-5, 174-9	個人	個人住宅新築	宅地	H29.9.13	GL-0.2mまで掘削、盛土0.2m以上
106	H29.3228	右京二条四坊十五坪	若葉台四丁目286-10, 286-9の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.9.13	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2m、黄褐色砂質土(地山)0.1m
107	H29.3221	池田遺跡	池田町16-4	(特非)アンダンテ農園	農業福社施設等新築	宅地	H29.9.19	GL-0.85mまで掘削、黒褐色土(表土)0.75m、以下黄褐色粘土(地山)0.1m以上
108	H29.3253	左京四条六坊十三坪、奈良町遺跡	高御門町36-37-1番地の各一部、37-2番地	個人	個人住宅新築	宅地	H29.9.19	GL-0.25m～0.35mまで掘削、黒褐色砂質土(表土)0.25～0.35m
109	H29.3231	奈良町遺跡	高畑町1143-5	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	宅地	H29.9.21	GL-0.45mまで掘削、黒褐色土(表土)0.45m、以下黄褐色粘土(地山)
110	H29.3182	奈良町遺跡	今在家町15番1～北御門町22番地	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管入替	道路	H29.9.21	GL-0.6mまで掘削、盛土0.35m、以下黒褐色粘土(表土)0.25以上
111	H29.3217	右京二条三坊四坪、菅原東遺跡	西大寺国見町二丁目16番45号	ブランク・フィールド(株)	共同住宅新築	宅地	H29.9.25	GL-0.9mまで掘削、盛土0.9m以上
112	H29.3288	右京六条三坊十坪	六条一丁目797番1	(株)神名 代表取締役	分譲住宅新築	宅地	H29.9.26	GL-0.5mまで掘削、盛土0.2m、黄褐色土(地山)0.3m以上
113	H29.1065	史跡西大寺境内	西大寺芝町、西大寺前町	奈良市長	西大寺駒込土地区 整理事業に伴う 公園整備工事	街路	H29.9.26	GL-1.12mまで掘削、アスファルト0.07m、砂石0.3m、盛土(黒褐色砂質土)0.3m、灰色粘土0.15m、淡灰褐色砂0.1m、黄褐色及び青灰色粘土0.2m以上
114	H29.3198	二条三条間北小路	法蓮町1175番	個人	個人住宅新築	宅地	H29.10.3	GL-1.07mまで掘削、アスファルト0.07m、砂石0.3m、盛土(黒褐色砂質土)0.3m、灰色粘土0.1m、淡灰褐色砂0.05m、黄褐色及び青灰色粘土0.1m以上
115	H29.3167	奈良町遺跡	紀寺町869番2	個人	個人住宅新築	宅地	H29.10.3	GL-1.5mまで掘削、盛土1.3m、灰色砂質土(地山)0.2m以上
116	H29.3257	右京二条三坊十四坪	菅原町291-4の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H29.10.4	GL-0.5mまで掘削、盛土0.4m、黒褐色土(耕作土)0.1m以上

No	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
117	H29.3271	左京六条二坊三・六坪、六条三条間兩小路	八条五丁目417-4 五丁目335-1	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.10.5	GL~L3 mまで掘削、アスファルト0.5m、碎石0.1m、地盤改良土1m以上堆積する。
							H29.10.16	GL~L5 mまで掘削、アスファルト0.05m、碎石0.1m、盛土1.35m以上
118	H29.3274	右京四条三坊三坪	平野一丁目17番5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.10.5	GL~0.15 mまで掘削、盛土0.15m、下層黒褐色土(表土)
119	H29.3221	左京三条一坊三坪	三条大路三丁目1-17他	関西電力(株) 奈良電力部	電気工事	道路	H29.10.10	GL~0.7 mまで掘削、アスファルト0.1、碎石0.3、褐色土0.3 m以上
120	H29.3171	左京四条六坊十五坪、奈良町道路跡	東城町58	個人	個人住宅新築	宅地	H29.10.17	GL~0.3 mで掘削、黒褐色土(表土)0.2 m、黄褐色粘土0.1 m以上
121	H29.3268	右京八条三坊八坪	七条一丁目33-27 ~ 34-15	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.10.19	GL~0.67 mまで掘削、アスファルト0.07 m、碎石0.25 m、盛土0.35 m以上
122	H29.3216	右京七条四坊五・六坪	七条西町一丁目1041番6-7	アディ・ヨーム (株) 大阪店	分譲住宅新築	宅地	H29.10.19	GL~0.4 mまで掘削、盛土0.25 m(淡褐色砂質土、地山)0.15 m以上
123	H29.3293	西大寺	西大寺小町361-6の一つ(有)	碧水エステート	店舗新築	宅地	H29.10.19	GL~0.2 mまで掘削、盛土0.2 m以上
124	H29.3216	右京七条四坊五・六坪	七条西町一丁目1041番6-7	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.10.20	GL~0.3 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2 m、黄褐色粘土0.1 m以上
125	H29.3219	左京四条四坊十一坪	三条宮前町279-1 ~ 244-2	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.10.20	GL~0.95 mまで掘削、アスファルト0.05 m、碎石0.5 m、盛土0.4 m以上
126	H29.3174	元興寺、奈良町道路	西寺林町6-2、勝南院町17-4	個人	店舗新築	宅地	H29.10.20	GL~0.4 mまで掘削、碎石0.15 m、黒褐色土0.2 m、黄褐色土0.05 m以上
127	H29.3241	左京二条六坊五坪・六坪、奈良奉行所	北魚屋西町	(大)奈良女子大学	水道工事、消防栓配管工事	学校用地	H29.10.29 H30.2.19 ~ (延べ4日)	46地点で社会調査実測: 9地点で黄褐色土(地山)を確認(GL~0.2 ~ 0.9 m)、11地点で鉛物合含確認(GL~0.3 ~ 0.9 m)、他26地点は掘削範囲(盛土内)に収まる(GL~0.4 ~ 0.8 m)、1地点で砂合基盤確認
128	H29.3203	新薬師寺	高畠町	(大)奈良教育大学	連絡通路設置及び敷設支障設	学校用地	H29.10.24 H29.10.26	GL~0.8 mまで掘削、黒褐色土0.15 m、0.65 m以上 GL~1.2 ~ 4 mまで掘削、盛土1.2 ~ 4 m以上
129	H29.3297	奈良町道路	紀寺町1041 ~ 1033	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.10.25	GL~0.75 mまで掘削、アスファルト0.1 m、碎石0.1 m、黒褐色土0.55 m以上
130	H29.3292	右京一条二坊十二坪	西大寺国見町一丁目2196番1 ~ 2304番1の各一部	近畿日本鉄道(株) 鉄道本部	事務所建替	宅地	H29.10.26	GL~3.8 mまで掘削、盛土3.5 m、黄灰色土(地山)0.3 m以上
131	H29.3251	奈良町道路	高畠町700番	個人	個人住宅新築	宅地	H29.10.30	GL~0.75 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.6 m、黄灰色土(地山)0.15 m以上
132	H29.3336	右京五条四坊九・十六坪	平松五丁目560番19	個人	個人住宅新築	宅地	H29.10.31	GL~0.4 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2 m、黄褐色土(地山)0.2 m以上
133	H29.3323	左京五条六坊十坪、奈良町道路	西木辻町274-3 ~ 274-1	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.10.31	GL~0.7 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.7 m以上
134	H29.3308	奈良町道路	紀寺町1033番及び1034番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.6	GL~0.4 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.4 m以上
135	H29.3157	右京五条二坊十二坪	五条町344-345-340	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支柱新設	宅地	H29.11.7	GL~0.8 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.2 m、黄褐色土0.4 m、黄灰色土0.2 m以上
136	H29.3227	右京二条三坊十三坪・西三坊四間兩小路	普原町250-1 ~ 248-1	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.11.13	GL~0.65 mまで掘削、アスファルト0.1 m、盛土0.4 m、黒褐色土0.15 m以上
137	H29.3166	右京二条四坊十三坪、法界寺跡	普原町674-1、674-2、675、676、677-1、677-2、677-3	(福)健仁会	保育園新築	水田	H29.11.10 H29.11.29	GL~0.8 ~ 1.0 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.3 m、黄褐色粘土0.5 ~ 0.55 m、黄灰色粘土(地山)0.15 m以上 GL~0.7 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.3 m、淡黃褐色粘土0.3 m、黃褐色粘土(地山)0.2 m以上
138	H29.3223	左京四条六坊十二坪、奈良町道路	南風呂町10の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.13	GL~0.7 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.7 m以上
139	H29.3262	右京二条四坊五坪・西四坊四間路	普原町370番地	奈良市長	伏見バンビホール新築	道路	H29.11.13	GL~0.5 mまで掘削、マサチ(グラウンドセメント)0.2 m、盛土0.1 m、黄褐色砂質土(地山)0.2 m以上
140	H29.3154	左京二条六坊六坪、奈良町道路	西新在家町20番1の一部	個人	店舗新築	宅地	H29.11.14	GL~0.2 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2 m以上
141	H29.3232	左京二条三坊八坪	法華寺町338番	ミサワホーム 近畿(株)	宅地造成・青空 資材置場造成	水田	H29.11.14	GL~0.6 mまで掘削、黒褐色土(耕作土)0.2 m、黄褐色土0.2 m、灰褐色土0.2 m以上
142	H29.3319	奈良町道路	紀寺町1033番1	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.14	GL~0.3 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.3 m以上

№	受理番号	道跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
143	H29.3202	奈良町道跡	高畠町1252-1, 1252-3	(大) 奈良教育大学	駐輪場設置	寄宿舎	H29.11.17	北棟: GL-0.7mまで掘削、アスファルト0.05m、砂石0.2m、黒褐色土0.3m、淡褐色土0.15m以上、南棟: GL-0.7mまで掘削、アスファルト0.08m、砂石0.32m、黒褐色土0.35m以上
144	H29.3309	奈良町道跡	紀寺町1033番及び1034番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.17	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土)0.3m以上
145	H29.3345	左京九条四坊八坪	東九条町282-4	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	電柱	H29.11.22	GL-0.4mまで掘削、盛土0.3m、青灰土色砂0.1m以上
							H29.11.22	GL-1.0~1.2mまで掘削、盛土0.6m、黒褐色土0.4~0.6m以上
146	H29.3327	二条条間北小路	法蓮町365-1, 363-1	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	宅地	H29.11.24	GL-0.6mまで掘削、黒褐色土(表土)0.3m、灰褐色土0.3m以上
147	H29.3313	右京五条四坊九坪	平松四丁目14-1	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.24	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土)0.3m、黄灰色砂質土(地山)0.3m以上
148	H29.3204	新樂善寺	高畠町	奈良教育大学	道路施設設置及び設備支障移設	学校用地	H29.11.17	GL-2.8mまで掘削、コクリート平版0.05m、盛土1.55m、以下地山灰色砂礫0.5m、黄色粘土0.7m以上
149	H29.3295	右京三条四坊十坪	宝来町957地先	近鉄ケーブル ネットワーク (株)	CATV地下管路及び電柱新設	道路	H29.11.28	GL-1.2mまで掘削、アスファルト0.2m、盛土0.8m、黒褐色土(耕作土)0.2m以上
150	H29.1092	史跡大安寺境内附石 橋瓦室跡	大安寺二丁目1290番1	(京) 大安寺	倉庫新築	宅地	H29.11.28	GL-0.2~0.4mまで掘削、盛土0.2~0.4m以上
151	H29.3305	奈良町道跡	高畠町1020-1	関西電力(株) 奈良電力部	電柱建設・支線新設	電柱	H29.11.29	GL-0.8mまで掘削、アスファルト0.07m、盛土0.2m、黒褐色土0.53m以上
152	H29.3338	右京五条三坊十坪	平松二丁目264番48	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.30	GL-0.5mまで掘削、黒褐色土(表土)0.3m、黃灰色粘土(地山)0.2m以上
153	H29.3330	右京三条三坊七坪、菅原町道跡	菅原町99番1, 99番5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.30	GL-0.4mまで掘削、盛土0.4m、以下黒褐色土(耕作土)
154	H29.3311	左京八条四坊六・七坪	東九条町913番地2~612番地6	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.11.30	GL-0.7mまで掘削、アスファルト0.07m、盛土0.63m以上
155	H29.3362	右京二条四坊九坪 西 内坊功間路	西大寺芝町二丁目1994番1, 1995番3の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.30	GL-0.5mまで掘削、盛土0.5m以上
156	H29.3359	右京二条四坊八坪、一 条南大路、西院坊功間 路	西大寺芝町二丁目1994番3, 1995番3, 2554番3の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.11.30	GL-0.7mまで掘削、盛土0.7m以上
157	H29.3225	木間道跡	木間町1130番地1	個人	社会福祉施設 (グループホーム) 新築	宅地	H29.11.30	GL-0.3~1.3mまで掘削、茶褐色土0.2~1.3m、赤褐色土(地山)0.1以上
158	H29.3234	西二坊功間西小路	菅原町248-1~248-3の各一部	個人	共同住宅新築	宅地	H29.12.1	GL-0.4mまで掘削、盛土0.4m以上
159	H29.3377	右京五条四坊五坪	五条三丁目1868番18	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.4	GL-0.2mまで掘削、盛土0.2m以上
160	H29.3265	一条南大路	西大寺芝町一丁目2500-1, 2496-4	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.4	GL-1.4mまで掘削、アスファルト0.07m、盛土1.25m、灰色粘土(地山)0.08m以上
							H29.12.15	GL-0.15mまで掘削、盛土0.15m以上
161	H29.1013	史跡平城京朱雀大路跡	二条大路南三丁目	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管撤去	道路	H29.12.8	GL-1.3mまで掘削、アスファルト0.1m、砂石0.1m、盛土1.1m以上
162	H29.3339	左京四条六坊六坪、奈 良町道跡	柳町7番	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.6	GL-0.25mまで掘削、黒褐色土(表土)0.25m以上
163	H29.3351	秋道古墳群	山陵町587-5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.8	GL-0.55mまで掘削、盛土0.5m、黃褐色土(地山)0.05m以上
164	H29.3356	一条南大路	東包永町4番地1	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.12.9	GL-1.3mまで掘削、アスファルト0.07m、盛土1.23m以上
165	H29.3374	奈良町道跡	紀寺町1016-1	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.11	GL-0.2mまで掘削、黒褐色土(表土)0.2m以上
166	H29.3321	古市城跡	古市町1846番40	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.15	GL-1.8mまで掘削、盛土0.25m、赤褐色土1.2m、黃褐色粘土(地山)0.35m以上
167	H29.3522	右京六条三坊五坪	六条一丁目889番15	ファースト住建 (株)	分譲住宅新築	宅地	H29.12.15	GL-0.2mまで掘削、盛土0.2m以上
							H29.12.18	GL-1.8mまで掘削、アスファルト0.05m、砂石0.15m、黃褐色砂質土(盛土)1.6m以上
168	H29.3318	元興寺、奈良町道跡	高畠町1096	(株) 奈良ホテル	排水管工事	宅地	H30.2.6	GL-1.8mまで掘削、アスファルト0.05m、砂石0.15m、黃褐色砂質土(盛土)1.6m以上
169	H29.3404	左京四条二坊六坪	四条大路一丁目4, 774-1, 775-1	個人	青空駐車場造	宅地	H29.12.20	GL-0.65mまで掘削、黒灰色土(耕作土)0.25m、淡黃褐色土(未土)0.15m、灰色土0.25m、以下黃褐色粘土(地山)

No	受理番号	道路	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
170	H29.3407	右京六条四坊十一坪	六条二丁目1125番1、1125番8	プレステ(株)	分譲住宅新築	宅地	H29.12.21	GL-0.25 mまで掘削、盛土0.25 m以上
171	H29.3406	興福寺、奈良町道路	中筋町24番地1	三井不動産リアルティ(株)	時間貸駐車場管理機器設置	宅地	H29.12.21	GL-0.8 mまで掘削、アスファルト0.05 m、碎石0.15 m、黒褐色土0.6 m以上
172	H29.3354	左京五条五坊九坪	大森町10-3(10-2) ~ 20-3(20-3)	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H29.12.21	GL-1.0 mまで掘削、アスファルト0.07 m、碎石0.25 m、盛土0.2 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、灰褐色土0.28 m以上
173	H29.3435	左京二条六坊十六坪	法選町1206-4	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.22	GL-0.25 mまで掘削、盛土0.25 m以上
174	H29.3264	奈良町道路	附塚町178-4 ~ 209-4	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管入替	道路	H29.12.20	A地: GL-0.8 mまで掘削、アスファルト0.07 m、盛土0.5 m、灰褐色土0.23 m以上
							H29.12.21	B地: GL-1.12 mまで掘削、アスファルト0.07 m、盛土0.84 m、黒褐色土0.21 m以上
							H29.12.22	C地: GL-0.9 mまで掘削、アスファルト0.07 m、盛土0.3 m、灰褐色土0.3 m、黒灰色土0.23 m以上
							H29.1.23	D地: GL-0.6 mまで掘削、アスファルト0.05 m、盛土0.53 m、以下黄褐色土
								GL-0.5 mまで掘削、黒灰色土(表土)0.5 m以上
175	H29.3422	左京六条三坊十四坪	大安寺町2丁目1-13	京西電力(株) 京良電力部	電柱・支線新設	宅地	H29.12.25	GL-0.3 mまで掘削、盛土0.3 m以上
176	H29.3144	左京二条七坊十六坪	東包永町4番1、5番地	個人	賃貸住宅新築	宅地	H29.12.25	GL-0.4 mまで掘削、盛土0.2 m、黄褐色土0.2 m以上
177	H29.3373	右京二条六坊北郊	法選町1227番1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.12.25	GL-0.6 mまで掘削、盛土0.6 m以上
178	H29.3322	右京七条二坊十五坪 西二坊大路	七条一丁目355番2	個人	共同住宅新築	宅地	H29.12.28	GL-0.8 mまで掘削、盛土0.6 m以上
179	H29.3360	平城京南方道路	北之庄西町一丁目12番7	個人	倉庫新築	宅地	H30.1.10	GL-0.8 mまで掘削、盛土0.6 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m以上
180	H29.3376	興福寺	高畠町1118-1、2、3、4、5	個人	ホテル新築	宅地	H30.1.11	GL-1.7 mまで掘削、盛土1.1 m、黃灰色土(地山)0.6 m以上
181	H29.3350	右京七条四坊十二坪	七条西町一丁目627-174	個人	個人住宅新築	宅地	H30.1.12	GL-0.3 mまで掘削、盛土0.3 m、以下黄褐色土(耕作土)0.2 m以上
182	H29.3453	右京四条四坊七坪	平松一丁目786番4	(有) クリエイト	診療所新築	宅地	H30.1.12	GL-0.65 mまで掘削、盛土0.4 m、黃灰色土質(地山)0.25 m以上
183	H29.3368	右京七条四坊十一坪	七条西町一丁目627番142	個人	個人住宅新築	宅地	H30.1.15	GL-0.55 mまで掘削、黒褐色土(表土)0.35 m、黃褐色土(地山)0.2 m以上
184	H29.3315	古市道路	古市町1552番地の2	奈良市長	擁壁設置	宅地	H30.1.15	GL-1.0 mまで掘削、盛土0.5 m、黒褐色土(耕作土)0.2 m、海灰土0.2 m、灰褐色土0.1 m以上
185	H29.1039	史跡平城京朱雀大路跡	二条大路南三丁目100番9	国土交通省近畿 地方整備局 奈良飛鳥歴史公園事務所	公頃施設整備	公園	H30.1.17	GL-0.08 ~ 0.1 mまで掘削、盛土内
186	H29.3365	渡國神社前池中古墳	古市町1848番1	ウェーブ エネルギー(株)	太陽光発電所設置	池	H30.1.17	GL-0.4 ~ 0.7 mまで掘削、池南側で、 暗灰色土(埋土)0.4 m以上、池北側で、 暗灰色土(埋土)0.1 m以上、以下黃褐色砂 礫(地山)0.6 m以上
							H30.3.29	古墳周辺・南面において、GL + 0.1 ~ 0.2 m鉄筋を人、この上に円柱状型枠 を置き、内部にコンクリートを流込な るものであった。
187	H29.3397	左京九条三坊三坪	西九条町四丁目2番地の2	大和ハウス工業 (株)	汚染土壤の掘削 除去、擁壁根入試 掘調査	工場 用地	H30.1.23	第1地点: GL-1.78 mまで掘削、盛土 1.15 m、暗灰色土0.1 m、暗灰色粗 粒土0.4 m以上
							H30.1.29	第3地点: GL-1.6 mまで掘削、盛土 1.2 m、暗灰色土0.4 m以上
							H30.1.31	第4地点: GL-1.3 mまで掘削、盛土 0.5 m、暗灰色土0.15 m、黒褐色 0.25 m、灰色細砂0.3 m、灰色粗砂0.1 m以上
188	H29.3302	左京四条五坊十三坪	杉ヶ町7-1	個人	個人住宅新築	宅地	H30.1.22	GL-0.1 mまで掘削、黒褐色土0.1 m以上
189	H29.3399	左京二条六坊十六坪	法選町1205番7、1205番8	個人	個人住宅新築	宅地	H30.1.24	GL-0.25 mまで掘削、 盛土0.25 m以上
190	H29.3304	左京五条七坊十六坪、 奈良町道路	福智院町37-2、38-3	個人	倉庫新築	宅地	H30.1.24	GL-1.4 mまで掘削、黒褐色土0.8 m、 灰褐色土0.3 m、黃褐色砂礫(地山) 0.3 m以上
191	H29.3314	旧大乗院跡	高畠町1083-1	(公財) 日本 ショナナルトラスト	標識設置	宅地	H30.1.26	GL-0.5 mまで掘削、盛土0.2 m、黑褐色 土(土被り含む)0.3 m以上
192	H29.3300	左京四条四坊十六坪	三条宮町1187の一部	個人	共同住宅新築	駐車場	H30.1.26	GL-1.7 mまで掘削、盛土0.7 m、黒 褐色土0.8 m、黃褐色砂礫(河川堆積物) 0.2 m以上
193	H29.3145	左京三条五坊十二坪	大宮町一丁目1	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H30.1.29	GL-1.5 mまで掘削、アスファルト0.1 m、盛土0.9 m、黒褐色土0.5 m以上

№	受理番号	地籍	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
194	H29.3421	西四坊大路	七条西町一丁目 1108番12	(有)アイディホーム (株)	分譲住宅新築	宅地	H30.1.30	GL-0.8 ~ 1.2 mまで掘削、盛土0.8 ~ 1.2 m以上
195	H29.3456	左京三条五坊十坪	芝辻町18-8	マスダカレント (同)	店舗新築	宅地	H30.1.31	GL-0.6 mまで掘削、盛土0.5 m、黄褐色砂礫(地山)0.1 m以上
196	H28.3481	左京八条四坊三坪	東九条町577番、 577番3	(有) You and I コーポレーション	宅地造成	水田	H30.2.2	GL-1.9 mまで掘削、盛土0.3 m、黒灰色土(耕作土)0.25 m、灰色土0.15 m、褐灰色土0.1 m、黒褐色0.3 m、黑色粘土0.25 ~ 0.4 m(耕土上)、灰色砂0.25 m、灰色粗砂0.1 m、灰色シルト0.2 m以上
197	H29.1082	史跡大安寺境内附石 橋瓦室跡	大安寺二丁目1310番5	個人	住宅の除去・新築及び地盤調査	宅地	H30.2.6 H30.2.13	GL-0.7 mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.7 m以上 GL-0.1 ~ 0.2 mまで掘削、黒褐色土 (表土)0.1 ~ 0.2 m以上
198	H29.3324	左京四条二坊五坪	尼辻町乙457-1	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	宅地	H30.2.7	GL-0.8 ~ 0.9 mまで掘削、盛土0.7 ~ 0.8 m、黒褐色土及び灰白色土0.1 m以上
199	H29.3367	右京七条三坊二坪	七条一丁目362番2、 363番3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.2.9	GL-2.8mまで掘削、盛土1.4 m、黃灰色粘土(地山)1.4 m以上
200	H30.3453	左京五条六坊七坪	西木辻町351番1-352番 1-352番2-353番1-353 番2の各一部	オーエスハウジング(株)	宅地造成	宅地	H30.2.13	GL-0.6 mまで掘削、以下地山の黄灰色砂質シルト
201	H29.3480	左京八条二坊十三坪	奈良市杏町9-1、11-1	個人	共同住宅新築	宅地	H30.2.14	GL-0.3 mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.3 m以上
202	H29.3429	左京二条三坊八坪	法華寺町338-1	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	宅地	H30.2.14	第1地点: GL-1.0 mまで掘削: 盛土 0.7m、黒褐色土(耕作土)0.3 m以上 第2地点: GL-1.0 mまで掘削盛土0.8 m、黒褐色土(耕作土)0.2 m以上
203	H29.3372	元興寺・奈良町道路	西寺林町6-1、勝南院町 17-2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.2.15	GL-0.35 ~ 0.45 mまで掘削、黒褐色 土(表土)0.35 ~ 0.45 m以上
204	H29.3492	右京三条三坊十二坪	宝来二丁目807-3の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.2.17	GL-0.9 mまで掘削、盛土0.49 m、暗 色粘土シルト(耕作土)0.24 m、黄褐色 粘土0.07 m、黄褐色砂土0.03 m、 黄褐色砂質土(地山)0.07 m以上
205	H29.3444	左京四条四坊十五坪	三条町本町1098	奈良県農業 共同組合	店舗新築	宅地	H30.2.21	GL-1.2 mまで掘削、盛土1.2 m以上
206	H29.3496	左京四条三坊十四坪	三条松町383番2	個人	宅地造成	宅地	H30.2.21	GL-1.35 mまで掘削、盛土0.75 m
207	H29.3426	西大寺	西大寺御田町2545番2、 2545番5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.2.23	GL-0.6 mまで掘削、盛土0.6 m以上
208	H29.3509	南紀寺道路	白毫寺町148番21	(株)神名	分譲住宅新築	宅地	H30.2.26	GL-0.7 mまで掘削、盛土0.7 m以上
209	H29.3296	左京三条三坊七・八坪	大宮町六丁目5-1	(株)カイモビル	店舗付共同住宅 新築	宅地	H30.2.26	GL-2.1 mまで掘削、盛土1.4 m、黑 褐色0.2 m、黄褐色土(地山)0.6 m以上
210	H29.3401	西大寺	西大寺北町一丁目283- 1, 283-2, 283-3	(株) ケーイーシー	保育所新築	宅地	H30.2.27	GL-1.7 mまで掘削、盛土0.9 m、 黒褐色0.2 m、以下灰色粘土(河川堆積) 0.5 m以上
211	H29.3488	奈良町道路	高畠町1247番地1	個人	個人住宅新築	宅地	H30.2.27	GL-0.15 mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.15 m以上
212	H29.3442	右京七条四坊八坪	六条三丁目1170番-90	個人	個人住宅新築	宅地	H30.2.28	GL-0.15 mまで掘削、盛土0.15 m以 上
213	H29.3487	左京九条三坊五・六・ 十一・十二坪	西九条町四丁目1番地の 11他2筆	大和ハウス工業 (株)	研修センター創 造	工場 用地	H30.3.1 ~ 3.2	土建地盤状況確認の為、試掘時に、立 会を行った
214	H29.3499	右京四条二坊九坪	尼辻中町187番4	個人	個人住宅新築	宅地	H30.3.5	GL-0.2 mまで掘削、盛土0.2 m以上
215	H29.3483	西大寺	若葉台三丁目1883番7	個人	個人住宅新築	宅地	H30.3.6	GL-1.3 mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.4 m、黄褐色砂質土(地山)0.9 m以上
216	H29.3239	左京七条四坊十三坪	東九条町1102-4	関西電力(株) 奈良電力部	本柱・支線建物	宅地	H30.3.8	GL-0.5 mまで掘削、盛土0.5 m以上
217	H29.3263	東一坊切開路	南側町52番5	(株)森村設備	青空資材置場 造成	資材 置場	H30.3.9	GL-0.45 mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.25 m、灰白色土0.1 m、淡黃褐色土0.1 m以上
218	H29.3520	左京五条六坊七坪 奈 良町道路	西木辻町352	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H30.3.12	GL-0.3 mまで掘削、黒褐色土(表土) 0.3 m以上
219	H29.3432	右京北邊三坊一坪	西大寺新町一丁目 128番4	個人	共同住宅新築	宅地	H30.3.13	GL-0.5 mまで掘削、黒灰色土(耕 作土)0.3 m、灰白色0.2 m以上
220	H29.3337	佐紀石垣古墳(成務陵) 隣接地	山藏町200-1 ~ 198	大阪ガス(株) 導管事業部 北東部導管部	ガス管理設	道路	H30.3.14	GL-0.7 ~ 0.8 mまで掘削、No.1: ア スファルト0.05 m、盛土0.05 m以上 No.2: アスファルト0.05 m、盛土0.6 m、 黄褐色砂質土(地山)0.15 m以上 No.3: アスファルト0.2 m、盛土0.15 m、 黄褐色砂質土(地山)0.6 m以上
221	H29.3249	左京三条二坊五・ 十一坪	法華寺町地内	奈良市公会下水 道管理者 奈良市 公営企業管理者	下水道工事	道路	H30.3.15 H30.3.16	GL-1.05 ~ 1.5 mまで掘削、No.1: ア スファルト0.1 m、碎石0.2 m、盛土1.2 m以上 No.2: アスファルト0.2 m、碎石 0.25 m、盛土0.6 m以上

No	受理番号	道跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
222	H29.3511	左京二条四坊十六坪	法蓮町350番1, 350番3の各一部(A)	個人	グループホーム 新築	宅地	H30.3.16	GL-0.4mまで掘削、盛土0.25m、黒灰色土(耕作土)0.15m以上
223	H29.3512	左京二条四坊十六坪	法蓮町350番1, 350番3の各一部(B)	個人	グループホーム 新築	宅地	H30.3.16	GL-0.4mまで掘削、盛土0.25m、黒灰色土(耕作土)0.15m以上
222	H29.3273	左京四条三坊十二坪	三条松町408-3	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	宅地	H30.3.16	GL-0.8mまで掘削 コンクリート0.1m、盛土0.7m以上
223	H29.3428	左京四条三坊十四坪	三条松町383-2	関西電力(株) 奈良電力部	電柱・支線新設	宅地	H30.3.20	GL-1.5mまで掘削 盛土0.4m、表土0.25m、黒色土0.45m、黄褐色沙質土(地山)0.4m
224	H29.3411	左京八条三坊三坪	西九条町一丁目4-1の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H30.3.20	GL-0.35mまで掘削 盛土0.2m、耕作土0.15m以上
225	H28.1153	史跡大安寺旧境内附石橋瓦室跡	東九条町1316番地	八幡神社	社殿改築	宅地	H30.3.20	GL-0.4mまで掘削、礎石確認
226	H29.3398	西四坊人大路	宝来町四丁目25-16,-17	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H30.3.22	GL-0.4mまで掘削、盛土0.4m以上
227	H29.3371	左京四条六坊十三坪 坪、奈良町道跡	豊陽町5番	個人	個人住宅新築	宅地	H30.3.22	GL-0.6mまで掘削、黒褐色土(表土)0.6m、以下黄褐色土(地山)
228	H29.3415	右京四条二坊六坪	尼庄南町12番1-12番2、 16番・17番の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.3.22	GL-0.8mまで掘削、盛土0.8m以上
229	H29.3541	-一条南人大路	若葉台三丁目1901番5 の一部(1号棟)	(株) アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.3.22	GL-0.3mまで掘削、盛土0.2m、黄灰色粘土(地山)0.1m以上
230	H29.3542	-一条南人大路	若葉台一丁目1901番5、 1901番6の各一部2号棟	(株) アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.3.22	GL-0.3mまで掘削、盛土0.2m、黄灰色粘土(地山)0.1m以上
231	H29.3543	-一条南人大路	若葉台三丁目1901番6 の各一部3号棟	(株) アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.3.22	GL-0.3mまで掘削、盛土0.2m、黄灰色粘土(地山)0.1m以上
232	H29.3481	西大寺	西大寺小町坊247-7	(株)奈良振興	店舗新築	宅地	H30.3.27	GL-0.3mまで掘削、黒褐色土(表土)0.1m、盛土0.2m以上
233	H29.3451	左京二条五坊十三坪	芝辻町878番1	個人	個人住宅新築	宅地	H30.3.30	GL-0.5mまで掘削、碎石0.15m、黒褐色土(表土)0.08m、黄褐色土(地山)0.31m以上

## 18. 平成 29 年度実施 遺跡有無確認踏査一覧

平成 29 年度の遺跡有無確認踏査は 1 件のみ実施した。

No	踏査地	踏査日	踏査面積 m <sup>2</sup>	担当者	調査原因・事業内容/ 届出者・申請者等	踏査順受理事業 番号	調査結果
1	奈良阪町 571-1	2017.11.09	29,334	中島・秋山・ 池田	太陽光発電事業／奈良森林資 源保全会社	H29:4007	遺構は確認されていない。 瓦小片、土馬小片を採集。

---

---

第2章 平成29(2017年)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

---



# 平成 29（2017）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

## 1. 展示

### A 常設展示

対象：一般

会期：平成 29 年 4 月 3 日（月）～5 月 29 日（月）  
平成 29 年 7 月 3 日（月）～10 月 25 日（水）  
平成 30 年 2 月 5 日（月）～2 月 23 日（金）  
(130 日間)

会場：埋蔵文化財調査センター展示室

趣旨：埋蔵文化財の展示を通じて奈良市の歴史を紹介。  
内容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財  
を遺跡ごとに展示。

観覧者数：1,582 名

### B 秋季特別展「平城の夢Ⅱ」の開催

対象：一般

会期：平成 29 年 11 月 1 日（水）～12 月 28 日（木）  
(43 日間)

会場：埋蔵文化財調査センター展示室・同室前ロビー

趣旨：奈良市教育委員会所蔵瓦のうち、平城京内と  
その周辺寺院の古代の瓦にテーマを絞って、ま  
とまったく形で紹介。あわせて、本年度に寄贈さ  
れた、井上組所蔵瓦の一部を、奈良の瓦葺師  
として活躍した井上組の業績とともに紹介。

観覧者数：1,091 名

その他：・案内を「しみんだより」11 月号及び奈良市  
役所のホームページに掲載。  
・宣伝用のチラシの作成・配布。  
・展示パンフレットの作成。  
・事前に報道機関に資料を配布。

### C ミニ巡回展示「奈良を掘る」の開催

対象：一般

趣旨：奈良新聞に平成 26 年 7 月から平成 28 年 1 月  
に連載した「奈良を掘る」の記事のひとつを  
取り上げ、出土遺物を加えて、夏季と冬季の  
2 回に分けて、3 施設で巡回展示する。

#### ① 夏季展示「第 3 回 宅地の地鎮」

会期・会場：平成 29 年 6 月 1 日（木）～6 月 30 日（金）(22  
日間)・埋蔵文化財調査センター展示室  
前ロビー

平成 29 年 7 月 5 日（水）～7 月 31 日（月）  
(22 日間)・奈良大学博物館  
平成 29 年 8 月 3 日（木）～8 月 31 日（木）  
(20 日間)・奈良市役所ロビー展示ケース

内容：「奈良を掘る」第 9 話「宅地と地鎮」を取り上げ、  
多くの理納遺構が確認された平城京左京五条  
四坊十坪の遺物を中心に、平城京の宅地の地  
鎮とみられる理納遺構を紹介。

その他：・案内を「しみんだより」6 月号と奈良市役  
所のホームページに掲載。  
・宣伝用チラシの作成・配布。  
・展示パンフレットの作成。  
・事前に報道機間に資料を配布。

#### ② 冬季展示「第 4 回 古代と中世の食器－土器の食 器は使い捨てですか？」

会期・会場：平成 30 年 1 月 10 日（水）～1 月 31 日（水）  
(16 日間)・埋蔵文化財調査センター展  
示室前ロビー  
平成 30 年 2 月 5 日（月）～2 月 28 日（水）  
(17 日間)・奈良市役所ロビー展示ケース  
平成 30 年 3 月 3 日（土）～4 月 25 日（水）



秋季特別展「平城の夢Ⅱ」



ミニ巡回展示 奈良を掘る（第3回）

## (45日間)・奈良大学博物館

内 容：奈良を掘る第30話「瓦器と土師皿－使い捨ての伝統－」を取り上げ、発掘調査で出土した奈良時代から南北朝時代までの土器の食器を展示し、土器の食器セットが日常食器ではなく、儀式用の仮器であった可能性を紹介。

その他：・案内を「しみんだより」1月号と奈良市役所のホームページに掲載。

- ・宣伝用チラシの作成・配布。
- ・展示リーフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。

## D 春季発掘調査速報展「東九条町の弥生時代遺跡・埋没した前期古墳（平城京左京五条四坊二坪）・平城京左京二条四坊十坪の調査」

対 象：一般

会 期：平成30年3月1日（水）～3月30日（金）

（22日間）

表1 月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
365	172	233	257	228	129	221	661	430	200	219	319

## 2. 施設見学の受け入れ

## 埋蔵文化財調査センター施設見学

見学者・見学日：(1)日本セカンドライフ協会 20名

平成29年4月6日（木）

(2)京西歴史95 40名

平成29年4月7日（金）

(3)奈良市立大安寺西小学校 100名

平成29年4月25日（火）

(4)郷土歴史クラブ 20名

平成30年3月27日（火）

## 3. 講演会・教室の開催

## A 埋蔵文化財講演会

対 象：一般

日 時：平成29年11月26日（日）13:30～16:25

会 場：埋蔵文化財調査センター講座室

内 容：秋季特別展の理解をより一層深めるため、特別展開催中に市民から聴講者を募集し、専門的な講演会を外部から講師を招いて開催した。

・大脇 潔（元近畿大学教授）

「世界の瓦」

・原田憲二郎（埋蔵文化財調査センター主任）

「奈良市の古代寺院の瓦」

参加者数：69名

その他：・募集案内を「しみんだより」10月号及び奈

良市役所のホームページに掲載。

・秋季特別展チラシに掲載。

・報道機関に募集要項をお知らせ。



埋蔵文化財講演会

**B 埋蔵文化財発掘調査報告会**

対象：一般

日 時：平成30年3月17日（土）13:30～16:30

内 容：春季速報展の理解をより一層深めるため、速報展開催中に市民から聴講者を募集して、平成27・28年度に実施した調査の成果報告を調査担当職員がパワーポイントや資料を使用して報告。

- ・「東九条町弥生時代遺跡の調査一附：奈良時代の銅箸について」
- ・「埋没した前期古墳の調査」
- ・「平城京左京二条四坊十坪の調査」

会場：埋蔵文化財調査センター講座室

参加者数：60名

その他：・募集案内を「しみんだより」2月号と奈良



埋蔵文化財発掘調査報告会

**4. 市民考古学講座**

対象：一般

開催日：平成29年7月5日（水）～平成30年3月7日（水）、毎月1～2回、全13回（表2）

内 容：埋蔵文化財調査センター職員、市民考古学サポート者が講師を務める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。

受講者数：25名

その他：・案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。

市役所のホームページに掲載。

- ・春季速報展チラシに掲載。

- ・報道機関に募集要項をお知らせ。

**C 夏休み親子考古学体験**

対象：小学4年生以上の児童とその保護者

開催日：平成29年7月29日（土）

内 容：夏休みを利用して児童とその保護者を対象に平城京の発掘調査で出土した奈良時代の遺物を使って祭祀について学んだのち、祭祀で使われた土馬や人面墨書き土器を作りました。

会場：埋蔵文化財調査センター洗浄室

参加者数：24名

その他：募集案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。案内チラシの配布・掲示。



夏休み親子考古学体験

表2 市民考古学講座日程一覧表

	日 時	講 座 名
第1回	7月5日	開講式・オリエンテーション・考古学って何？・旧石器・縄文時代の基礎知識
第2回	7月19日	弥生時代の基礎知識
第3回	8月2日	古墳時代の基礎知識
第4回	9月6日	発掘作業の流れ
第5回	9月20日	発掘調査体験（実習）
第6回	10月4日	奈良の都 平城京
第7回	10月25日	平城宮跡をみる（実習）
第8回	11月8日	古代の瓦
第9回	11月29日	古代の土器
第10回	12月6日	舞台裏（内業作業）をみる（実習）
第11回	1月11日	拓本のとり方（実習）
第12回	2月14日	奈良町と中世の土器・陶磁器
第13回	3月7日	土器類の分類整理（実習）・閉講式

## 5. 市民考古サポーターの活動支援

### A 市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対 象：平成 28 年度の受講修了者

新規登録人員：15 名（登録総人数 106 名）

活動開始：平成 29 年 7 月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。

月平均活動延べ人数：188 名

## 6. 体験学習・実習の受け入れ

### A 市立高校体験学習

対 象：一条高校人文科学科 2 年生 40 名

学習日：平成 29 年 9 月 15 日（金）・22 日（金）

場 所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場（東九条町）

内 容：発掘調査の体験実習

### B 中学校職場体験学習

（1）

対 象：青翔中学校 2 年生 男子 2 名・女子 1 名

学習日：平成 29 年 7 月 6 日（木）～7 日（金）

場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：遺物洗浄・注記・拓本

（2）

対 象：豊美ヶ丘中学校 2 年生 男子 3 名

学習日：平成 29 年 11 月 9 日（木）～10 日（金）

場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：遺物洗浄・注記・拓本

（3）

対 象：京西中学校 2 年生 男子 3 名

学習日：平成 30 年 10 月 17 日（水）～19 日（金）

場 所：埋蔵文化財調査センター

内 容：遺物洗浄・注記・拓本

### C 中学校校外研修

対 象：渋谷教育学園渋谷中学校 3 年生 10 名

学習日：平成 29 年 10 月 11 日（水）

場 所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場（東九条町）

内 容：発掘調査の体験実習

### D 体験学習事業

#### ①発掘調査体験学習

対 象：奈良市内在住・在勤・在学の方

学習日：平成 29 年 9 月 14 日（火）・21 日（木）・23 日

（土）・25（月）～27 日（水）・29 日（金）、10

月 3 日（火）～5 日（木）の 10 日間

事前説明会実施日：平成 29 年 9 月 8 日（金）・11 日（月）

場 所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場

内 容：事前説明会にて発掘調査方法や安全の為の講

習を受講後に、体験を実施。調査を始める前に  
は必ず検出遺構の説明と、仕事の内容を説明し、  
終了時には出土遺物の解説・検出遺構の説明  
を行った。また、体験期間中は調査現場を常時  
公開し、見学者に調査についての説明を行った。

参加者数：約 179 名

その他：・募集案内を「しみんだより」8 月号及び奈



中学校職場体験学習



発掘調査体験学習

良市役所のホームページに掲載

・宣伝用チラシに掲載。

・報道機関に募集要項をお知らせ。

#### ②大安寺遺跡探訪ツアー

対象:一般

開催日:平成29年9月12日(火)~14日(木)・21

日(木)・25日(月)~28日(木)、10月2日  
(月)~6日(金)の13日間

コース: A.史跡大安寺旧境内(塔院-発掘現場-

南大門-経樓-僧房-杉山古墳)

## 7. 職員の派遣(講師など)

### A 一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

派遣日:平成29年9月11日(月)

場所:一条高校(奈良市法華寺町)

派遣人数:1名

内容:発掘調査の流れ

### B 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館主催

#### 「大和を掘る」土曜講座

派遣日:平成29年9月2日(土)

場所:奈良県立橿原考古学研究所 講堂

### B.大安寺古墳群(発掘現場-杉山古墳-

大安寺墓山古墳-野神古墳)

内 容:発掘現場と整備された大安寺の遺構、発掘現場と大安寺古墳群のA・B 2つの見学コースを設定し、大安寺とその周辺遺跡を案内。

参加者数:約95名

その他:・募集案内を「しみんだより」9月号と奈良市役所のホームページに掲載。

・宣伝用チラシに掲載。

・報道機関に募集要項をお知らせ。

## 8. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製の遺物について、化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を図った。

### (保存処理資料)

・平城京跡出土の刀子1点・鉄斧4点

・史跡大安寺旧境内出土の鉄斧1点

・藤尾城出土の鉄斧1点

・奈良町遺跡出土の目貫4点・飾金具1点・不明製品

1点

## 9. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

### A 遺物などの貸出 9件(表3)

### B 写真などの貸出・提供・掲載許可 18件(表4)

### C 学術研究等に関わる資料閲覧 12件(表5)

表3 遺物などの貸出

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 29.4.1 ~ H 30.3.31	平城京跡出土木簡(模造品)10点(鍛造上木簡1点、月削鉄上木簡1点、刃付分岐付札1点、波形御田侍紋画指木簡1点、北宮封緘木簡1点、南府連指木札1点、錆布札1点、櫻花邊上木簡1点、造酒司符1点、瓦邊上木簡1点)、分削(模造品)1点(平城京跡第167次調査出土)
2	柏原市立歴史資料館	夏季企画展「横穴探求」に展示	H 29.6.22 ~ H 29.9.7	赤田横穴墓群5号墓出土玉製品12点・耳環2点・鍍金品8点・土器10点、赤田横穴墓群9号墓出土軒甲形陶器蓋1点・棺身1点
3	大阪商業大学アミューズメント産業研究所	特別展「振れ! 振れ! サイコロ展」に展示	H 29.6.26 ~ H 29.9.11	平城京跡 151次調査出土骨子1点
4	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	連報展「大和を掘る35」に展示	H 29.6.27 ~ H 29.9.15	平松庵出土上軒丸瓦2点・軒平瓦2点・丸瓦1点・平瓦2点、史跡大安寺旧境内第137・140次出土軒丸瓦1点・軒平瓦2点・鬼瓦1点・圓木蓋瓦1点、平城京跡第704次調査出土軒丸瓦1点・軒平瓦2点・鍍金丸瓦2点・埠1点

貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
5 国土交通省近畿地方整備局宮崎飛鳥歴史公園事務所	平城宮跡展示館（仮称）に展示するレプリカの作成のため	H 29.6.28～H 29.9.29	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器レプリカ 1 点、史跡大安寺旧境内第 100 次調査出土鐵錠 1 点、平城京跡第 167 次調査出土鍾（市指定）1 点
6 若草公民館	「多聞城城展示会～よみがえる多聞城～」に展示	H 29.8.2～H 29.8.8	多聞城跡出土軒丸瓦 8 点・軒平瓦 9 点
7 鈴鹿市考古博物館	特別展「道でつながる古代の役所」に展示	H 29.9.5～H 29.12.22	平城京跡第 180 次調査出土土師器杯（甲斐型杯）3 点、平城京跡第 257-1 次調査出土須恵器高杯 1 点、平城京跡第 257-2 次調査出土須恵器蓋 2 点、平城京跡第 276 次調査出土須恵器蓋（烏羅蓋）1 点、平城京跡第 593 次調査出土須恵器杯 1 点、平城京跡第 631 次調査出土須恵器蓋（烏羅蓋）1 点、西大寺跡出土須恵器蓋 1 点
8 山梨県立考古博物館	平成 29 年度特別展「ひつぎのヒミツ・植から読み解く古墳時代」に展示	H 29.9.13～H 29.12.8	赤田横穴墓群 5 号墓出土耳環 2 点、铁製品 5 点。赤田横穴墓 9 号墓出土龟甲形陶蓋 1 点、棺身 1 点・円筒形陶棺蓋 1 点、棺身 1 点・耳環 1 点
9 生駒ふるさとミュージアム	平成 29 年度秋季特別展「水と生きるー畏り・祈り・利用の文化史」に展示	H 29.9.19～H 29.11.17	平城京跡出土人面墨書き土器 2 点・土馬 2 点・人形 1 点、史跡大安寺旧境内出土人形 1 点
10 山口県立美術館・日本経済新聞社	「創建 1250 年記念奈良・西大寺展」山口県立美術館会場に展示	H 29.10.10～H 28.12.26	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器 1 点
11 局国宮崎飛鳥歴史公園事務所	平城宮跡展示館（仮称）に展示	H 30.2.1～H 29.3.31	元興寺旧境内第 7 次調査出土軒丸瓦 1 点、軒平瓦 1 点
12 元興寺文化財研究会	元興寺法輪館春季特別展「法隆・元興・法隆の道徳・元興寺への道程」に展示	H 30.3.22～H 30.6.15	平城京跡第 291 次調査出土軒丸瓦 1 点、軒平瓦 1 点、竹状模骨丸瓦 9 点
13 横原市教育委員会	歴史に想う権原市博物館の平成 30 年度春季特別展「信長・秀吉の天下統一と大和太市氏」における展示及びボスター・チラシ・図録への掲載	H 30.3.27～H 30.7.6	多聞城跡出土軒丸瓦 1 点・軒平瓦 2 点・土師器皿 1 点・青磁碗 1 点・白磁皿 2 点

表 4 写真などの貸出・提供・掲載許可

申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
1 H 29.5.11	柏原市立歴史資料館	夏季企画展「横穴探求」にパネル展示および解説図録・広報資料に掲載	「赤田横穴墓群発掘区全景」、「赤田 5 号墓北陶棺出土玉鏡」、「赤田 5 号墓北陶棺出土耳環・鐵鍔」、「赤田 5 号墓室出土上器」、「赤田 5 号墓室陶棺」、「土器出土状況」、「赤田 5 号墓室全貌」、「赤田 9 号墓玄室龜甲形陶棺・中圓形陶棺 A 出土状態」、「赤田 5 号墓北陶棺」、「赤田 5 号墓南陶棺」、「赤田 5 号墓龜甲形陶棺」、「山脚町孤塚横穴六群」～「3 号横穴」、「歌姫赤井谷第 3 号横穴」調査第 3 次調査六点堂」写真	貸出・掲載許可
2 H 29.5.29	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を刻む 35」にパネル展示および展示図録に掲載	平城京跡第 705 次調査「発掘区全景」、「満 1 断面」、「史跡大安寺旧境内第 137・140 次調査「発掘区全貌」、「講堂北邊断面」、平城京跡第 704 次調査「発掘区全貌」、「柱穴断面」写真	貸出・掲載許可
3 H 29.5.30	桂香房	「古代越中の政治と北陸社会」に掲載	西大寺跡第 25 次調査出土「墨書き土器「草薙東朝」」写真	貸出・掲載許可
4 H 29.6.9	若草公民館	「多聞城展示会～よみがえる多聞城～」にパネル展示およびボスター・チラシに掲載	「多聞城出土軒平瓦と他遺物出土の軒平瓦」図、「多聞城創建軒瓦」、「多聞城跡井戸跡全貌」写真	貸出・掲載許可
5 H 29.7.14	ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所	「文化遺産セミナー 2017」のチラシに掲載	史跡大安寺旧境内第 100 次調査「西塔全貌」写真	貸出・掲載許可
6 H 29.7.18	(株) ジャパン通信情報センター	「文化財免査出上情報」に掲載	史跡大安寺旧境内第 139 次調査現地説明会資料、「免査出上全貌」、「六条大路南側溝を踏査するとみられる溝」と「地雨落溝」写真	貸出・掲載許可
7 H 29.7.28	山梨県立考古博物館	平成 29 年度特別展「ひつぎのヒミツ・植から読み解く古墳時代」にパネル展示および展示図録に掲載	「赤田横穴墓群発掘区全景」、「赤田 5 号墓玄室陶棺・上器出土状態」、「赤田 5 号墓北陶棺」、「赤田 5 号墓北陶棺出土耳環・鐵鍔」、「赤田 9 号墓龜甲形陶棺・円筒形陶棺・出土状態」、「赤田 9 号墓龜甲形陶棺」、「赤田 9 号墓北陶棺」、「赤田 9 号墓耳環」写真	貸出・掲載許可
8 H 29.8.14	鈴鹿市考古博物館	特別展「道でつながる古代の役所」に展示	西大寺旧境内第 25 次調査出土「海道遺、東山道因木舟形（表・裏）」、平城京跡第 180 次調査出土土師器杯（甲斐型杯）、平城京跡第 276 次調査出土「須恵器蓋（烏羅蓋）」、平城京跡第 257-1 次調査出土「須恵器高杯」、平城京跡出土「須恵器蓋」写真	貸出・掲載許可
9 H 29.8.25	生駒ふるさとミュージアム	平成 29 年度秋季特別展「水と生きるー畏り・祈り・利用の文化史」にパネルにして展示、リーフレット・ポスターに掲載	平城京跡出土土馬・人形、大安寺旧境内出土人形写真	貸出・掲載許可
10 H 29.8.29	多聞城ファン俱楽部	多聞城跡の案内冊子に掲載	「多聞城創建軒瓦」写真	貸出・掲載許可
11 H 29.9.6	姫路市教育委員会職員	「奈良歴史研究」第 88 号に掲載	多聞城出土軒平瓦拓本・図・写真	掲載許可
12 H 29.9.19	静学堂	「難波津のウタ」に掲載	「奈良時代中期～平安時代前半の杉山古墳前方部とその周辺」図	掲載許可
13 H 29.10.13	(株) アプロ	「H 29 第4回学校社会学学校力診断調査 2 年生会」に掲載	「平城京左京二条二坊十二坪出土」、「越江國長上郡塙年魚三・・・木舟写真」	貸出・掲載許可

申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
14 H 29.10.28	市原市教育委員会職員	「国分寺の総合研究・遺構編」-「11. 史跡大安寺旧境内第42次調査井戸S E 03写真 井戸」に掲載	史跡大安寺旧境内第42次調査井戸S E 03写真	貸出・掲載許可
15 H 29.11.9	国土交通省近畿地方整備局奈良飛鳥歴史公園事務所	「平城宮跡展示館（仮称）の展示解説図版」に使用	史跡大安寺旧境内第110次調査「西塔基壇全景」・「大安寺塔出土風摩」写真	貸出・掲載許可
16 H 29.11.28	（株）中外日報社	中日日報新聞に掲載	「史跡大安寺旧境内第143次調査推定六条大路」・「圓谷学校の瓦」・「酒蔵院の瓦」写真	貸出・掲載許可
17 H 29.12.19	（有）ジグラット	NHK BSプレミアム「英雄たちの選択」で放映	多聞城跡「出土軒丸瓦・軒平瓦」・「隅軒瓦と轟軒丸瓦」写真	貸出・掲載許可
18 H 29.12.20	（株）ニューサイエンス社	「古瓦の考古学」（考古調査ハンドブックシリーズ）に掲載	奈良町道跡出土両找瓦写真	貸出・掲載許可
19 H 29.12.22	公益財団法人 黒川古文化研究所	第120回展覧「和同開珎と日本古代の銭貨（仮）」でパネルにして展示および図録・ポスター・チラシに掲載	平城京右京二条三坊四坪出土土銀鏡（表・裏）、平城京左京三条四坊一坪出土和同開珎と連軒瓦（表・裏）、平城左京三条二坊十五・十六坪出土神功開寶鏡（表・裏）。市指定文化財 平城京左京第六条一坊十六坪出土神功開寶鏡遺物2点カット写真	貸出・掲載許可
20 H 30.1.11	特定非営利活動法人文化創造アルカ	「奈良開きまつもの古今見洋」として掲載	多聞城跡「出土軒丸瓦・軒平瓦」・「隅軒瓦と轟軒丸瓦」写真	貸出・掲載許可
21 H 30.2.5	奈良県観光局	H P内で、ウォーキングルート上の見どころとして掲載	ウツナベ古墳・コナベ古墳・磐之嶺命古墳・平城天孫古墳・成務天皇陵古墳・神功皇后陵古墳・日麗酢命陵古墳	貸出・掲載許可
22 H 30.2.5	橿原市教育委員会	歴史に應う橿原市博物館の平成30年度春季特別展「信長・秀吉の天下統一と大和十市氏」における展示及びポスター・チラシ・園地への掲載	多聞城跡「出土土器」・「出土軒丸瓦・軒平瓦」写真	貸出・掲載許可
23 H 30.2.9	奈良県	H Pで多聞城を紹介するページに掲載	多聞城跡「昭和53年調査全般」・「出土軒丸瓦・軒平瓦」写真	貸出・掲載許可
24 H 30.2.23	国土交通省近畿地方整備局奈良飛鳥歴史公園事務所	「国宮平城宮跡歴史公園ガイダンス施設」「平城宮いがない館」にて、映像ソフトに使用	平城京東市跡推定地の調査「東極河と木橋」・「第8次南堀塗掘全景」・「平城京市指図」写真	貸出・掲載許可
25 H 30.3.7	国立歴史民俗博物館	総合展示第1展示室テーマVI「古代国家と列島世界」において、グラフィックパネル等に使用	東極河出土人面黒背景土器写真	貸出・掲載許可
26 H 30.3.12	大安寺	大安寺解説冊子『大安寺』に掲載	「平城京における大安寺」・「奈良時代における大安寺伽藍と古墳」・「形柱・瓦當」・「大安寺跡の遺構」・「発掘された大安寺西門」・「大官大寺式瓦」・「平城京奈良軒丸瓦」・「大安寺瓦」・「鎌倉時代の修理瓦」・「瓦丸」・「三彩軒丸瓦」・「水煙管」・「風摩」・「枕三彩陶枕」・「東園・墨書き土器」	貸出・掲載許可
27 H 30.3.15	東京書籍	教師用指導資料『新選日本史B 教師用指導書』に掲載のため	西大寺旧境内第25次調査出土「墨書き土器「皇帝東朝」」写真	掲載許可
28 H 30.3.20	明石市	（仮）『明石市史研究紀要』に掲載のため	平城京左京五条四坊八・九坪出土播磨産軒瓦写真・平城京左京五条四坊八坪出土播磨産鬼瓦（表・裏）写真	貸出・掲載許可

表5 学術研究等に関わる資料閲覧

閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1 H 29.4.16	大手前大学大学院生	修士論文作成	中之庄上ノ山古墳・ヤイ古墳・杉山古墳・史跡大安寺旧境内第107次・曾原東道跡出土人物埴輪の観察・実測・写真撮影
2 H 29.4.16	古墳出現期土器研究会	資料検討会で然然出土古式土器の観察	曾原東道跡・平城京跡第256-257-3次調査・西大寺旧境内（第34次）出土古式土器の観察・写真撮影
3 H 29.7.28	奈良大学学生	卒業論文作成	史跡大安寺跡・平城京跡・奈良寺跡境内・元興寺旧境内・奈良町道跡出土「土器上巻」・瓦皿皿57点の観察・実測・写真撮影
4 H 29.8.21 ~ 25	同志社大学学生	卒業論文作成	多聞城跡出土軒平瓦の観察・実測・拓本・写真撮影
5 H 29.11.7	市民考古サポーター	個人研究	東市跡推定地第12次調査出土軒瓦の観察・実測・写真撮影
6 H 29.11.13	奈良大学大学院生	修士論文作成	奈良町道跡・史跡大安寺旧境内出土土器類・実測・写真撮影・模写
7 H 29.11.15	兵庫県埋蔵調査会会員	個人研究	平城京跡第171次調査出土高丽青瓷6点と铁文不利剪1点・平城京跡第187次調査出土神功開寶1点・平城京跡第325-2次調査出土和同開跡3点・平城京跡第405次調査出土神功開寶剪瓦遺物（市指定文化財）・平城京跡第413次調査出土和同開跡剪瓦1点の観察・写真撮影
8 H 29.12.20	京都府立大学生	卒業論文作成	平城京内出土軒丸瓦（6271 A）・軒平瓦（6671 K）の観察・実測・拓本・写真撮影
9 H 30.1.12	国立歴史民俗博物館教授	個人研究	平城京跡第459-2次調査出土古大式軒平瓦・平瓦・變斗瓦・上師器・須彌器・平城京跡第608-F次調査出土古大式軒丸瓦・平城京跡第649次調査出土櫛型瓦・瓦當・變斗瓦の拓本・写真撮影
10 H 30.2.16	寝屋川市教育委員会職員	個人研究	平城京出土軒丸瓦（6314 A）7点
11 H 30.2.26 ~ 28	同志社大学学生	個人研究	古市城跡出土土器・瓦質土器・軒丸瓦・土管の観察・実測・拓本・写真撮影
12 H 30.3.5	札幌学院大学教授	個人研究	平城京跡第405次調査出土神功開寶剪瓦遺物（市指定文化財）の観察・写真撮影



---

第3章 〈資料紹介〉平城紀寺・葛木寺・海龍王寺前身寺院・済恩院の瓦

---



# 平城紀寺・葛木寺・海龍王寺前身寺院・済恩院の瓦

原田憲二郎

## I はじめに

平成29年の秋、奈良市埋蔵文化財調査センター展示室では、「平城の費II」と題した特別展示を開催した。この展示の大きなテーマのひとつは奈良市が所蔵する、奈良市域の古代寺院の瓦の紹介であった。展示品の中には、採集・寄贈品や、小規模な調査等で未報告の資料もあったため、本稿ではそのような瓦のうち、特に平城京内の4カ寺の瓦について紹介し、若干の考察を加えたい。

## II 平城紀寺の瓦

『続日本紀』天平宝字8年(764)7月丁未の条の記述から、平城京内に紀氏の氏寺、紀寺の存在が指摘される(福山1948・森1988)。紀寺といえば現在では小山庵寺と呼称される、藤原京の「紀寺」もあるため、ここでは平城京の「紀寺」を「平城紀寺」と仮称する。

平城紀寺の位置は、「紀寺」の名を冠する地名と、紀寺の後身と伝える璉城寺の位置関係から、左京五条七坊十一・十二・十三・十四坪の2町四方が紀寺の寺院地と想定される。この場所は平城京外京の東南隅に位置する。

奈良市教育委員会による紀寺の調査はいずれも小規模調査であるが<sup>1)</sup>、1988年に璉城寺の南東の十三坪南西部で実施した88-10次調査では、掘立柱の柱穴2つと、土坑を検出した(奈良市教委1989)。柱穴は一辺長約1.8mと大きい。この調査では軒丸瓦が1点、軒平瓦が1点しか出土していないが、現在までに平城紀寺での発掘調査による出土が確認できる軒瓦はこれらだけである<sup>2)</sup>。

88-10次調査で出土した軒丸瓦(図1-1)は、瓦当面に複弁蓮華紋を飾る6316Uである<sup>3)</sup>。間弁は無い。蓮弁は2子葉を分かつ弁央の突線が無いことや、弁基部が中房輪郭線に接続せず、その間に紋様のない凹部を持つ点が特徴的。外区は珠紋をめぐらす。外縁は約4mmと低く、素紋。瓦当側面には外縁頂部から6mm程度下がった箇所に範端痕が確認できる。接合式で、接合される丸瓦の広端部は無加工。瓦当側面下半部はヨコケズリ。胎土には砂粒と黒色のシャモットが多く、特に後者は径8mm以上の大きいものが目立つ。焼成は硬質で、灰色。丸瓦の取り付け位置が低いことや、6316型式の年代観で外縁が素紋である特徴は後出的とみられることから、平城宮・京軒瓦編年の第IV期(757~770)<sup>4)</sup>の瓦と考える。

注目されるのは、この軒丸瓦と同範とみられる資料が、藤原京の小山庵寺で採集されていること<sup>5)</sup>である。小山庵寺は、寺域内に「キテラ」の字名が残ることから、紀氏の氏寺である紀寺とする見方(保井1932・福山1948・小澤2003)と、天武朝の官寺である高市大寺とする見方(森2005)の大きく2つの考えが出されている。今回判明した同範関係は、小山庵寺が紀寺で、これが平城京に移されたのが、平城紀寺であることを示すものとの見方もできる。しかし、奈良時代後半の軒丸瓦1種に同範関係が見出せただけで、小山庵寺創建瓦である紀寺式軒丸瓦が、平城京から出土したわけではない現段階では、早計と思う。ただし、今後も留意すべき事柄であろう。

88-10次調査で出土した軒平瓦(図1-2)は、右半部の破片。唐草は連続し、唐草先端に三葉紋風の蓄を持つ点、外区が素紋である点は特徴的。頭の断面形態は曲線頭で、頭面の一部が欠けているが、頭面を持つ曲線頭IIとみられる。凸面はタケケズリ。凹面は瓦当面付近をヨコケズリし、以下は布目を残す。胎土・焼成・色調は前述した軒丸瓦と大きな違いは無く、組み合う可能性が考えられる。寝屋川市の高宮庵寺の軒平瓦NH Iと实物照合を行った結果、同範であることが判明し<sup>6)</sup>、全体の紋様構成が明らかとなった。唐草の反転数は異なるが、中心飾りの垂飾りが水滴形である点や、唐草が連続する点と各唐草先端の形状は大安寺式軒平瓦6717Aに似る。6717Aは第III-2期(749~757)の瓦である(中井1997)が、前述した軒丸瓦と組むことを考慮すると、軒丸瓦と同じ第IV期の軒平瓦と考えるのが妥当である。

以上の平城紀寺出土の軒瓦は、今のところ平城京内では同範品は確認されず、平城紀寺の独自の造瓦組織による生産瓦であったと考えられる。また、国を超えた河内高宮庵寺との同範関係は興味深く、今後その背景について、さらに究明する必要がある。

## III 葛木寺の瓦

ここで紹介するのは、1997年に実施した平城京左京五条五坊十三坪の調査(奈良市教委1998)で出土した軒平瓦1点で、これまで間違て平瓦として分類、保管されていたが、近年の再整理の際、見つかったものである。

軒平瓦(図1-3)は、左上端部の小片である。上外区に

先端部が上下の界線に接続しない細かい線鋸歯紋を飾る点や、第2支葉の先端に2つの珠点を配する点は特徴的である。凹面は粗いタテナデを施す。胎土は緻密、焼成は硬質で暗灰色を呈する。

和田庵寺のⅢ型式軒平瓦と実物照合を行った結果、同範と判明した<sup>7)</sup>。和田庵寺Ⅲ型式軒平瓦は、支葉先端の珠点を葡萄の実と捉え、変形葡萄唐草紋と解される(花谷2000)。7世紀末から8世紀初頭とみられる。

平城京左京五条五坊十三坪の調査で出土した多量の瓦類については、以前論述したことがある(原田2002)。十三坪の調査では、葛城尼寺の有力候補である和田庵寺と同範の可能性がある7世紀後半の軒丸瓦が出土していること等から、これらの瓦は調査地東隣に想定される葛木寺の瓦と考えれば、この同範関係は和田庵寺を葛城尼寺とする考えを補強するものでもあるとの見解を示した。

近年の再整理により、新たに平城遷都以前の和田庵寺との同範瓦が、さらに1点見つかった事は、この考えをさらに補強するものである。

#### IV 海龍王寺前身寺院の瓦

平城宮の東、法華寺の東北隅に位置する海龍王寺の周辺では7世紀の瓦が採集され、平城遷都以前から寺院があったことが指摘される(福山1948)。また海龍王寺の寺院地は、おおむね左京一条二坊十四坪と一条三坊三坪にあたるが、東を通る東二坊大路が寺の南で東に寄っており、平城京の条坊に合わないことからも、京の造営以前に寺院が存在したことを示すものと解されてきた(岡田1978)。この平城遷都以前に存在した寺院は海龍王寺前身寺院と呼称される。

ところで1975年に東九条町で実施された、左京八条四坊十五坪の調査(奈文研1976)では、7世紀前半の瓦が出土する寺院遺跡が確認され、姫寺庵寺と名付けられた。

この寺は平城遷都以前から、この地にあったとみる説と、条坊の1町内に伽藍が取まる見込みであることから、平城遷都後に別な場所から移建された寺とみる説の2つの考えが出されている。出土する7世紀前半の無子葉單弁10弁蓮華紋軒丸瓦と、7世紀後半の面違い鋸歯紋綠複弁6弁蓮華紋軒丸瓦は、海龍王寺周辺での出土品と同範であり、姫寺庵寺が平城遷都後の移建寺院とみるならば、移建以前の寺院は海龍王寺前身寺院が有力である。

さて、ここで紹介する瓦は2004年に奈良市教育委員会が実施した平城京跡第520次調査(奈良市教委2007)

の出土品である。出土場所は平城京の条坊復元では、海龍王寺の東限である東二坊大路の東隣で、左京一条三坊四坪と五坪にある。概要報告では紙数の関係から軒瓦の出土を文章で記しただけであったので、7世紀後半の軒瓦について、詳述しておきたい。7世紀後半の軒瓦には、軒丸瓦1点、軒平瓦6点がある。

軒丸瓦(図1-4)は面違い鋸歯紋綠複弁6弁蓮華紋を飾る。姫寺庵寺出土品と同範である。瓦当下半部側面はナデを施す。瓦当裏面は欠損しているが、剥離面には指による押圧でできた凹凸痕が確認できることから、瓦当を下に置き、その上から瓦当用の粘土を指で押圧しながら範につけ、瓦当を成形したとわかる。接合式で、瓦当裏面には指で丸瓦接合位置を示す為の溝を設ける。胎土は緻密、焼成はやや軟質で、灰色を呈する。

軒平瓦は全て重弧紋を飾るものである(図1-5～8、図2-9～10)。

図1-5・6は五重弧紋軒平瓦である。弧線頂部幅は中央が約0.8cm、その他は約0.5cm。弧線の深さは概ね0.4cm。頸部は平瓦とほぼ同じ厚さの頸用粘土を貼り付けた、頸貼り付け式段頸であるが、凸面側の瓦当面から幅約2.5cmの範囲に平坦な頸面をもつ点は特徴的である。側面はタテケズリ。凹面には布目痕と模骨痕を残すが、瓦当面付近は約3.0cm分をヨコケズリ。図1-5には布袋端が確認できる。凸面は丁寧なヨコケズリ・ナデで仕上げる。このため、凸面平瓦部のタタキの痕跡は不明だが、図1-5の瓦当部破面には、平瓦凸面側にタテ網タタキ目が確認できる。胎土は緻密で、黒色のシャモットが目立つ。焼成は硬質で灰色を呈する。

図1-7・8は四重弧紋軒平瓦である。弧線頂部幅はいずれも約0.5cm。弧線の深さは概ね0.4cm。頸部は平瓦とほぼ同じ厚さの頸用粘土を貼り付けた、頸貼り付け式段頸である。側面はタテケズリ。凹面には布目痕と模骨痕を残す。図1-7には、凹面に糸切痕と粘土板合せ目が確認でき、粘土板桶巻き作りとわかる。凹面側の瓦当面付近は約1.2cm分をヨコケズリ。凸面は丁寧なヨコケズリ・ナデで仕上げる。このため、両方とも凸面平瓦部のタタキの痕跡は不明だが、図1-8の平瓦側の破面には、平瓦凸面側に1辺約1.0cmの方形格子タタキ目が確認できる。破面の観察から、頸用粘土を貼り付けた後、頸面に径約1.5cmの円形貫通孔を設け、その穴に円柱状の粘土塊を充填し、接合するという、特殊な瓦当成形法による製作とわかった。胎土は緻密で、図1-7は焼成が硬質で灰白

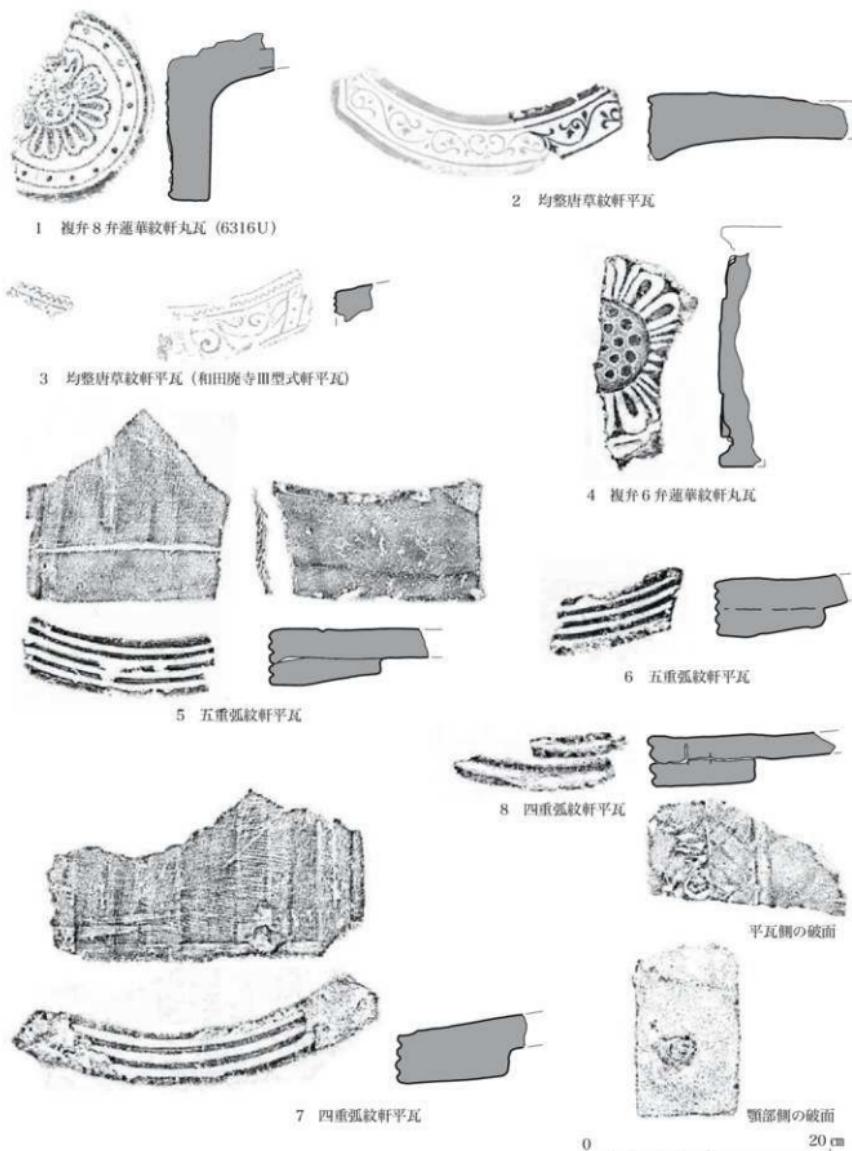
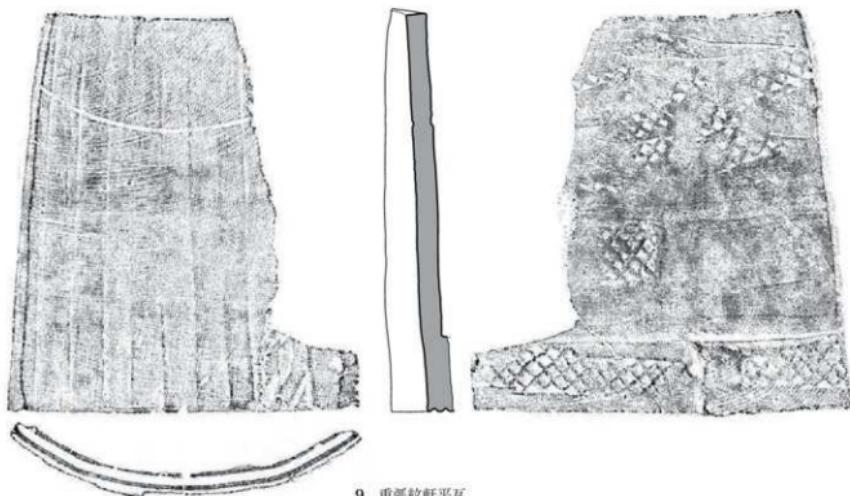
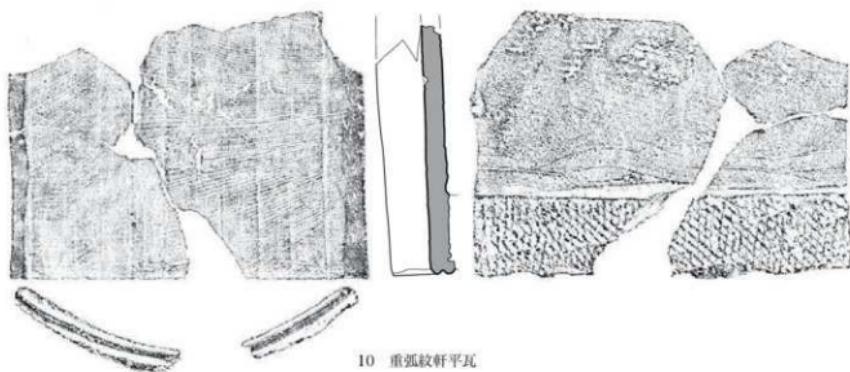


図1 軒瓦 (1/4)



9 重弧紋軒平瓦



10 重弧紋軒平瓦

0 20 cm

図2 軒瓦 (1/5)

色、図1-8は焼成軟質で赤褐色を呈する。

図2-9・10はいずれも顎部が欠失しており、重弧の数は不明。孤線頂部幅は約0.6cm。孤線の深さは概ね0.4cm。顎部は顎貼り付け式段顎。側面はタテケズリ。凹面には布目痕と糸切痕・模骨痕を残す。さらに図2-9には、凹面に布の綴じ合せ目が、図2-10には粘土板合せ目が確認できることから、粘土板桶巻き作りとわかる。図2-9は凹面側瓦当面付近約0.4cm分をヨコケズリするが、

図2-10はこれを施さない。凸面は双方とも格子タタキを行った後、粗いヨコナデを加え、タタキ目の大半を消す。タタキの格子の形状には違いがあり、図2-9は1辺1.0cmの方形格子タタキ目、図2-10は長辺0.7cm、短辺0.4cmの斜格子タタキ目である。図2-9の胎土は緻密、焼成は硬質で、表面黒灰色、内部灰色。図2-10の胎土はやや粗く、焼成は硬質で、灰色。

姫寺庵寺で出土する四重弧紋軒平瓦については、4種

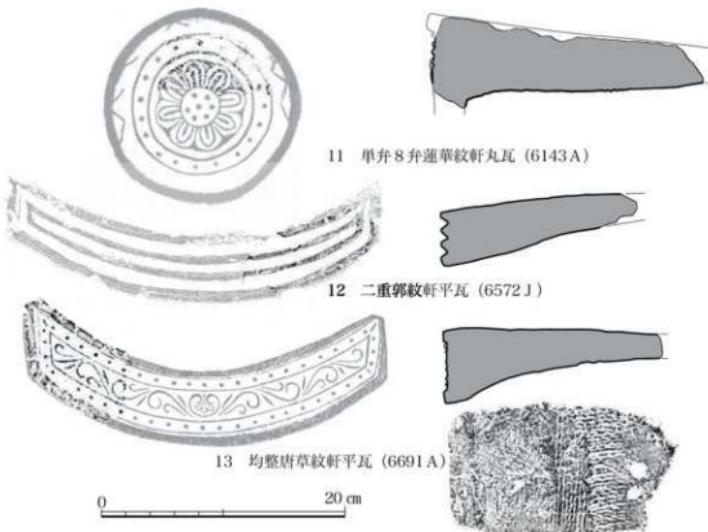


図3 軒瓦(1/4)

分類されている<sup>9)</sup>。このうちII類とされる四重弧紋軒平瓦は、図1-8の軒平瓦と同じ、特徴的な瓦当製作技法であることは注目される。すなわち寺庵寺II類四重弧紋は、桶巻き作りで粘土円筒を製作した後に、顎用粘土を貼り付け、顎部凸面の方から数箇所穴をあけ、針状の粘土を差し込んで、平瓦部と顎部を留めているのである。接合法による効果の程は疑問だが、当時の瓦工が木材同士の接合法を参考に、強固な接合を意図して行ったことは想像に難くない。

海龍王寺前身寺院と姫寺庵寺の同範関係については、從来、7世紀の軒瓦2種の瓦が指摘されてきたところであるが、特殊な製作技法の一致から、四重弧紋軒平瓦にも同じと考えてよいものがあるといえる<sup>10)</sup>。

## V 済恩院の瓦

『頬聚国史』卷180によれば、延暦11年(792)、遣唐大使藤原清河が唐で没したので、その家を捨入して寺としたのが済恩院である。護国寺本『諸寺縁起集』によれば平安時代には興福寺・興福院・福田院とともに藤原氏四門の氏寺と称されたという。その場所は江戸時代の「音寺村」内で、明治43年(1910)に瓦が出土した、唐招提寺の北方の天神社周辺とされる(天沼1917・福山

1948)。この場所は現在の尼辻中町の天神社周辺で、平城京の条坊復元では右京四条二坊十一坪にあたる。ただし、15世紀後半頃の史料ではあるが、「三院院家抄」によれば、「済恩寺」は右京四条二坊五・六坪の2町が寺院地との記述もある<sup>11)</sup>。ここも唐招提寺の北側で、現在の尼辻南町にあたり、音寺村の旧氏神である天満神社がある。このようなことから済恩院の場所に関しては、今後の発掘調査に期待するところが大きいといえる。

ここで紹介する資料は、奈良市史編纂室から文化財課埋蔵文化財調査センターへ移管された瓦で、ラベルには「音寺」の記述しかないが、「奈良市史・社寺編」の「済恩寺」の項では、天神社での瓦の出土が述べられていることから、これらは天神社周辺の採集品とみられる。

図3-11は有子葉單弁8弁蓮華紋軒丸瓦6143Aである。間弁は連続するB系統。外区内線に珠紋を、外線には線緑齒紋をめぐらす。丸瓦部の破面には丸瓦は確認できず、成形台一本造りとみられる。凸面はタテケズリ。丸瓦部凹面は粗いタテナデを施すが、布目痕がわずかに残る。胎土は緻密、焼成は軟質で黄灰色。山田寺・本業師寺・平城業師寺・川原寺の他、平城京内で散発的に出土する。平城宮・京瓦編年第III-2期に比定される。

図3-12は二重郭紋を飾る軒平瓦6572J。郭線断面形

状は台形。郭線間の断面形は「V」字形で、郭線間の間隔はほとんどない。頸の断面形状は直線頸。凸面はタテケズリ。凹面瓦当付近はヨコケズリ。側面はタテケズリ。胎土は緻密、焼成堅密で灰色。6572Jは大安寺・須塔の他、左京一条三坊付近でも出土する。平城宮・京瓦編年の第II期(721~745)に比定(原田2014)。

図3-13は内区に左右4回反転均整唐草紋を、外区には珠紋をめぐらす軒平瓦6691A。頸の断面形状は頸面をもつ曲線頸II。凹面は瓦当面から約3.5cmをヨコケズリし、以下布目痕を残す。凸面は縱縞タキ目のち、頸寄りに横縞繩タキ目を施す。左第3单位第1・2支葉とも主葉に接続する範囲が確認できる。胎土は灰色と灰白色の粘土がマーブル状になっており、焼成はやや軟質。6691Aは供給先および範囲の進行段階、技法上の特徴の変遷の検討から、その製作期間は約20年と、長期間製作が続けられたことが明らかにされている(佐川1993)。この成果から、本資料は6691A製作の最終段階とされる天平宝字年間(757~765)の生産品とわかる。

これらの軒瓦は平城京内で散発的に出土するもので、済恩院独自の軒瓦と言えない。ただし、史料にある済恩院の成立経緯を考えれば、これらの瓦の様相は、むしろ捨宅寺院とみて、ふさわしいことなのかもしれない。

## VI おわりに

以上、平城京内4カ寺の瓦について報告した。これらの寺院は、いずれも広範囲な調査がなされ、伽藍配置などが解明されるどころか、その遺構すら確認できていない。このような現段階では、今回紹介した瓦は、各寺院の性格を考えるうえで、貴重な資料であるといえよう。

## 謝辞

本稿で扱った軒瓦の実物照合にあたっては、奈良文化財研究所の石田由紀子氏と清野陽一氏、寝屋川市教育委員会の丸山香代氏のご協力を得た。記して感謝致します。

## 参考・引用文献(刊行順)

天保後~1917「廢濟恩寺址」『奈良縣史蹟勝跡調査會報告書』第4回、保井芳太郎1932「大和上代寺院志」大和史學會、福山敏男1948「奈良朝寺院の研究」、奈良國立文化財研究所1976「平城京左八条三坊瓦編調査概要・東市周辺東北地域の調査」、岡田英男1978「海龍王寺の歴史」太田博太郎編「大和古大寺觀」5、奈良市史編集審議会編1985「奈良市史」、社寺編、森郁夫1988「紀氏の寺」猪三郎先生古稀記念論集「求真能道」同論集刊行会、奈良市教育委員会1989「III-2. 平城京域・周辺のその他の調査」『奈良市理藏文化財調査概要報告書 昭和63年度』、毛利光彦著、花谷浩1991「第IV章考察 1屋

瓦 A 平城宮・京出土軒瓦の再検討「平城宮発掘調査報告書XIII」奈良國立文化財研究所、山崎信二1993「桶作より軒平瓦の製作工程」「考古論集・潮見浩先生退官記念論文集」同記念事業会のち、山崎信二2003「古代瓦と横穴式石室の研究」に収録、佐川正敏1993「第V章考察 1屋瓦」『平城宮発掘調査報告書 XIV』奈良國立文化財研究所、奈良國立文化財研究所・奈良市教育委員会1996「平城宮・藤原京出土軒瓦型式一覧」、中井公1997「大安寺式」軒瓦の年代」「堅田直先生古稀記念論文集」同論集刊行会、奈良市教育委員会1998「平城京左五条五坊十三坪の調査」第274次「奈良市理藏文化財調査報告書 平成5年度」、花谷浩2000「内宮内四寺について」「研究論集 XI」奈良國立文化財研究所、小澤豊2003「小山廬寺(紀寺)の寺地」「日本古代宮殿構造の研究」、森郁夫2005「東京国立博物館所蔵紀寺跡(小山廬寺)出土軒瓦」『MUSEUM』第594号、奈良市教育委員会2007「法華寺境内古墳・平城京左京(一条三坊四、五坪)の調査第520次」、原田憲二郎2002「平城京左京五条五坊十三坪出土軒瓦について」『奈良市理藏文化財調査センター紀要2001』奈良市教育委員会・佐久間貴士・長谷川伸三・荒武賀一郎2008「曉城寺(紀寺)総合学術調査」『大阪樟蔭女子大学論集』第45号、原田憲二郎2014「平城京の重圓文系軒瓦」「古代瓦研究V1」奈良文化財研究所、寝屋川市教育委員会2018「国史跡高宮庵寺跡発掘調査報告書」

## 註

- なお、紀寺跡では大阪樟蔭女子大学曉城寺(紀寺)総合学術調査班による発掘調査も行われている(佐久間貴士他 2008~2011「曉城寺(紀寺)総合学術調査」1~4「大阪樟蔭女子大学研究紀要」第1号~47号および「大阪樟蔭女子大学研究紀要」第1号)。ただし、軒瓦は報告が無く、出土していないようである。
- なお曉城寺には敷地内で出土したと伝わる軒瓦1点が所蔵される(佐久間樹2008)。この資料は、写真を見限り大安寺式軒瓦丸6091Aで間違いない。6091Aについては大安寺の瓦として製作された後、瓦踏が他所に移り、葛木寺の瓦として製作された(原田2002)。葛木寺は平城紀寺の西側に位置することから、6091Aが平城紀寺の瓦となるには疑問が残る。
- 以下、文中で扱う4桁の数字とアルファベットからなる軒瓦型式番号は、奈文研・奈良市教委 1996 に拠る。なお、6316Uは前掲書刊行以前の、2000年に奈良文化財研究所で行われた軒瓦型式検討会議で設定されたものである。
- 以下に使用する時期区分は、毛利光・花谷 1991 で提示された範囲に拠る。
- 森 2005 の図1-11の瓦。実物照合は行っていないが、報告される拓本と比べると、違いは見受けられず。同范とみられる。
- 2018年2月、奈良市理藏文化財調査センターで、実物照合を行った結果、唐草・蓄の大きさ・位置関係が一致し、同范と判明した。なお双方ともに本当に面前には本目に沿う微細な傷跡が確認できたが、先後関係を特定するには至らなかった。
- 2016年12月、奈良文化財研究所藤原調査部に、平城京出土品を持参し、実物照合を行った結果、鋸齒紋と唐草の大きさ・位置関係が一致し、同范と判明した。
- 1975年の須藤隆氏による分析が、山崎信二1993で紹介されている。
- なお近年の海龍王寺の調査で、同様の重弧紋軒平瓦の出土が報告された(奈良文化財研究所「海龍王寺跡境内の調査第525次」「奈良文化財研究紀要 2015」)。
- 続群書類成会編1984「史料叢集 三箇院家抄第二」の185頁、西山庄の項。

## 図版出典

図1-2の拓本の薄い部分は寝屋川市教委2018より、図1-3の拓本の薄い部分は花谷2000より、図3-1~3拓本の薄い部分は奈文研・奈良市教委1996よりそれぞれ一部修正を加え転載。その他は著者作成。

印刷・製本仕様データ

表紙：アートポストカード220kg/m<sup>2</sup>・マットpp加工  
見返し：白色上質紙110kg/m<sup>2</sup>  
巻頭図版：特アート紙135kg/m<sup>2</sup>  
本文：白色マットコート紙104.7kg/m<sup>2</sup>  
本文フォント：ヒラギノ明朝体  
製本：左開き・糸かがり綴じ

©2020 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

## 奈良市埋蔵文化財調査年報

平成29(2017)年度

ISSN 1882-9775

印 刷 令和2(2020)年3月17日

発 行 令和2(2020)年3月27日

編 集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地

TEL 0742-33-1821

FAX 0742-33-1822

URL <http://www.city.nara.nara.jp/>

E-mail [maizoubunka@city.nara.lg.jp](mailto:maizoubunka@city.nara.lg.jp)

発 行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1

TEL 0742-34-1111 (代)

印 刷 株式会社 JITSUGYO

630-8144 奈良県奈良市東九条町6-6

ANNUAL RESEARCH REPORT  
OF  
ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA  
2017

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN 2017.
- II REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENTIN FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2017
- III THE REPORT OF ANCIENT ROOFING TILES FROM THE TEMPLE RUINS OF KIDERA , KATSURAGIDERA, OLD KAIRYUOJI AND SAIONNNIN IN HEIJOKYO

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION  
2020